

博士論文

論文題目      百回本『西遊記』の成立と展開  
                    ——書坊間の関係を視野に——

氏      名      上原   究一

博士論文

百回本『西遊記』の成立と展開  
——書坊間の関係を視野に——

上原 究一



## 目次

序章	1
第一章 聖僧歴難簿が語るもの	19
第二章 世徳堂本の版本について	55
第三章 金陵唐氏世徳堂主人考——二人の「唐光禄」——	85
第四章 李卓吾批評本系の版本について	107
第五章 周氏万卷楼と周氏大業堂の関係について——周如山をめぐる——	130
第六章 清本諸系統の版本について	188
第七章 明末の商業出版における異姓書坊間の広域的連携の存在について	204
終章	224

## この論文について

・ 本論文は、二〇一六年三月七日に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した課程博士学位請求論文に対して、審査の過程で頂いた指摘を踏まえた加筆・修正を行ったものである。本論文によって二〇一六年十一月十七日付で博士（文学）の学位を取得した。

## 凡例

・ 各章の図表は、それぞれの注の後にまとめて配置する。

・ 本文の版式と字様がいずれも底本と一致する場合に「覆刻」、その片方でも一致しない場合には「翻刻」と称し、「重刊」は覆刻と翻刻の総称として用いるものとする。

・ 版本内に明記されないが他の資料より推定される事項に「」を附して示す。

## 序章

### はじめに

『三国演義』『水滸伝』『金瓶梅』と並んで四大奇書の一角に数えられる白話小説『西遊記』は、唐初の玄奘三蔵（六〇二～六六四）が単身インドに渡り大量の仏典を持ち帰った史実を元にしながら、早くも唐代のうちから伝説化が始まって、神仙・仏菩薩や妖怪變化が入り乱れる奇想天外な物語として發展し、明代後期に百回本の章回小説としてまとめられた作品である<sup>1</sup>。

講唱芸能や演劇なども含めた通俗文芸における定番の題材として長期に渡って数多の無名氏たちにより語り継がれて来た前史を持つため、玄奘三蔵の取経を描く通俗文芸作品は、章回小説としての成立以前にも、様々なジャンルで多くのバリエーションが存在していた。また、ひとたび百回本の章回小説としてまとめられた後にも、大なり小なりテキストの改変を受けた新たな版本が明清両代を通じて数多く出版されていたし、それらの点校整理本や新注本という形で、現代においてもなお新種のテキストが生まれ続けている。もちろん講唱芸能や演劇の場においても今日に至るまで題材となり続け、二十世紀以降は映画やテレビドラマや漫画やアニメのような新しい

メディアの素材ともなって、百回本に忠実なものから大きく筋を違えるものまで、多種多様な作品が日々量産され続けている。これらの点は、『三国演義』や『水滸伝』、或いは四大奇書には数えられない春秋戦国・楚漢戦争・光武帝・唐太宗・五代史・宋太祖・楊家将・岳飛などの題材を描いた諸作品にも当て嵌まる<sup>2</sup>、明代後期に刊行された章回小説の多くに共通の特徴である。

この『西遊記』には、既に非常に多くの先行研究の蓄積がある。その膨大さは、専ら『西遊記』の研究史を論じた竺洪波氏の博士論文が「上海市社会科学博士文庫」の一冊として二〇〇六年に公刊されているように<sup>3</sup>、今や研究史自体が研究の対象として成り立つほどのものとなっている。しかし、それほどまでに多くの先行研究がありながらも、これまで看過されたり過小評価されたりしていた問題はなお存在する。また、膨大な量の研究が公刊されているからこそ、却って定説を得られずに論争の絶えない課題や、公表後に他者による検証を殆ど受けないままとなっている仮説も少なくない。

そのような状況の下、「百回本『西遊記』の成立と展開——書坊間の関係を視野に——」と題した本論文は、百回本『西遊記』がいつ

どのようにして成立し（成立）、それがどのようにに広まっていった多様な版本が出版されるに至ったのか（展開）、という問題の解明を目指すものである。

本来ならば『西遊記』に関するあらゆる先行研究を総括するところから始めるのが理想ではあるが、前述の通り、それだけで立派な単行本たり得る大仕事となってしまう。そのため、そうした作業は竺洪波注3書や、一九六〇半ばまでの研究史の概略を述べた齋藤秋男・伊藤敬一『『西遊記』の研究と資料』<sup>4</sup>、及び一九九〇年代初頭までの研究史を概括した磯部彰『『西遊記』研究小史』<sup>5</sup>といった既存の優れた成果に譲り、この序章においては、本論文の目的と問題意識を述べ、それに直接関わる先行研究を整理する。

## 一、本論文の目的

まずは、何故本論文の正題を単に『西遊記』の成立と展開」とせず、「百回本『西遊記』の成立と展開」としたのかを述べておきたい。それは、単に『西遊記』と言った場合には、どの時点をもって「成立」とすべきかを定め難いためである。

玄奘三蔵（唐僧）の西天取経の顛末を扱う物語は、通俗文芸における定番の題材として長期に渡って数多の無名氏たちにより語り継がれた末に、明代後期に百回本の章回小説『西遊記』を生んだ。百

回本に先行する物語を伝える資料としては、広く知られているものだけでも、早くも南宋には『大唐三蔵取経詩話』三卷（大倉文化財団蔵）と『新雕大唐三蔵法師取経記』三卷（石川武美記念図書館蔵、寶堂文庫蔵）という同内容の原始的な通俗小説が刊行されており<sup>6</sup>、朝鮮李朝肅宗丁巳年（一六七七）序刊『朴通事諺解』三卷（ソウル大学校奎章閣蔵）の記述によって元代に大都の書店で「唐三蔵西遊記」なる「平話」が売られていたことやそのプロット等が知られ<sup>7</sup>、元代には呉昌齡撰の「唐三蔵西天取経」という雜劇も作られており<sup>8</sup>、別に明初にも楊景賢撰の戯曲「西遊記」があつて、万曆四十二年（一六一四）序刊（？）『楊東來先生批評西遊記』六卷二十四齣（宮内庁書陵部蔵『傳奇四十種』所収）は楊景賢の作に基づくと見られ<sup>9</sup>、『永樂大典』卷一万三千一百三十九の嘉靖間内府副録鈔本には『西遊記』なる書物から百回本にも見られる「夢斬涇河龍」の一段が引用されており<sup>10</sup>、民国十八年（一九二九）に寧夏で出土した「明」鈔本『銷釋真空寶卷』<sup>11</sup>や一九八五年に報告された万曆二年鈔本『迎神賽社禮節傳簿四十曲宮調』（潞城県南賈村曹氏家蔵）<sup>12</sup>に百回本に先行するテキストに拠ると思しきプロットが見え、江戸時代の日本語写本『玄奘三蔵渡天由来縁起』存卷上（龍谷大学図書館蔵）も百回本より前のテキストを参照して編まれた可能性が指摘されている<sup>13</sup>、という具合に、数多くの事例が挙げられる。

このうち、南宋の『取経詩話』はまだ「西遊記」という題にはなっていないが、「花果山紫雲洞八万四千銅頭鐵額猢猻王」を自称し「猴行者」と書かれる孫悟空の原型と認められる名無しのサルが玄奘のお供に加わり、沙悟浄に繋がると考えられている深沙神も、お供はしないが登場する。しかし、玄奘のもう一人の弟子たる猪八戒や、玄奘の乗騎となる龍王の太子が変じた龍馬はまだ影も形も見えない。

『朴通事諺解』の引くものは、既に『西遊記』と題し、かつて齊天大聖を名乗り吾空の法名を持つ孫行者・沙和尚・黒猪精朱八戒という三人の弟子が出揃うが、彼らの呼称はなお百回本とは小異あり（傍点部のほか、沙和尚の「悟浄」や八戒の「悟能」という法名が付いていたかどうかが確認出来ない）、百回本の備える話柄のうち幾つかはまだ無く、話柄の排列順も百回本とは異なっていたと推測されている。『永樂大典』の引く『西遊記』なる書物は百回本と文章の細部までかなりの重なりがあるが、『銷釋真空寶卷』や『迎神賽社禮節傳簿四十曲宮調』の伝えるプロットがなお百回本とは些かの隔たりがある点から見て、明代前期の時点で百回本と同じ話柄を完備するテキストがあったとも考え難い。『楊東來先生批評西遊記』も、小説と戯曲という媒体の相違を考慮に入れても、筋や設定が百回本とは大きく異なることは明らかである。『玄奘三蔵渡天由来縁起』も、百回本に非常に接近したプロットを持つものの、全篇を通して龍馬が一

切登場しない（田中注13解題参照）ことなど、間々小さからぬ相違が認められる<sup>14</sup>。

こうなると、『西遊記』の成立と展開を考えようとすると、まずは『西遊記』なるものは何をもって「成立」と看做せるのか、という定義を下すところから議論を始めなくてはならなくなってしまう。右に見たような状況を踏まえると、『西遊記』という書名の登場をもつてか、「もと齊天大聖で悟空の法名を持つ孫行者」というキャラクター設定の確立をもつてか、沙和尚と猪（朱）八戒も含めた三弟子が出揃うのをもつてか、三弟子に加えて龍馬まで登場することも条件とするか、或いは『永樂大典』に引かれているような百回本に直接引き継がれることになる文章が書かれ始めた時点をもつてか、それとも百回本とプロットが完全にまたは概ね一致する時点をもつてか、概ねという場合はどの程度か……等々、その定義自体が極めて困難な作業となるから、現時点では生産的な作業とはならないであろう。

それに対して、「百回本『西遊記』の成立と展開」であれば、初めて百回本の章回小説という形態をとったテキストがいつどのようにして編まれ、それがどのように受け入れられて、現在見られる多様な版本がいかなる経緯で出版されて来たか、という点に議論のピントを絞ることが出来る。勿論、その「初めての百回本の章回小説」



が現存の百回本諸本と同内容であったという保証は無いので、そのテキストと、現存する中で最古のテキストを有する百回本との間にどれだけの距離があるのか、という問題は重要な論点となる。

それならば、「章回小説『西遊記』の成立」という問題設定ではないのか、という疑問があるかもしれない。しかし、章回小説『西遊記』の明刊本には百回本の他に分則本もあって、両者がいかなる関係であるかは、未だに完全な定説を見ない大きな争点となっている。そこで、今回は前述のように明確に定義することが出来る「百回本『西遊記』の成立」に照準を絞って議論を進め、百回本と分則本の関係の考察はその次の課題とすることにした。これが本論文の正題を「百回本『西遊記』の成立と展開」とした所以である。

ところで、「百回本」と「分則本」というのがそれぞれいかなる意味の用語であるかをここで明確にしておこう。まず「百回本」とは、「回」という単位で数えられた百の章からなるテキスト、という意味である。そもそも章回小説とは、全体を複数の章に分ち、それを「回」という単位と数字を使って第何回という風に数えた上で、各回に一句または二句からなる題目を附していることから付けられた分類名称であった<sup>15</sup>。このような形式を完備した章回小説テキストを、特に「分回本」と呼ぶ。また、各回の題目のことは「回目」と呼ぶことが多い。そして、全百回のテキストならば百回本、全百

二十回なら百二十回本、全七十回なら七十回本と呼ばれる。これらは『西遊記』に限らず、どの章回小説についても広く使われている用語である。

中国で古典白話小説の研究が本格的に行われるようになり、長編の古典白話小説が章回小説と呼ばれ始めた清末民初には、四大奇書それぞれの通行本を始めとして、長編の古典白話小説は分回本の形態を取るのが当然となっていた。しかし、章回小説という新興のジャンルが商業出版界を席卷した明末清初の時点では、全体を複数の章に分ち、各章に一句または二句からなる題目が付いてはいるものの、特定の単位と数字を使って第何回などと数えることはしない形式で刊行された章回小説も少なくなかった。この場合、各章を便宜的に「則」という単位で呼ぶことが慣例となっており、章題は「則目」と称することが多い（この場合の章題も「回目」と呼ぶ先行研究もあるが、本論文はその立場は採らない）。こうした形式の章回小説テキストが「分則本」である。もちろんこれも『西遊記』に限った用語ではなく、どの作品にも用いられているものである。分則本の代表的な事例は『三国演義』の初期版本で、嘉靖年間から万暦二十年代にかけて刊行された諸版本は、いずれも全体を二百四十に分ち、各々に七字一句を原則とする章題を付しているものの、各章を特定の単位と数字を使って数える形式は採っていない<sup>16</sup>。

なお、「回」という単位を用いていない分則本を章回小説と称するのは一種の語義矛盾を孕んでいるので、分回本だけを章回小説と称する先行研究も存在する<sup>17)</sup>。しかし、「章回小説」という用語はそもそもが「四大奇書に代表される中国古典小説の一ジャンル」を表すために生じたものであったはずなので、小異に拘泥するあまり四大奇書の中でも代表格たる『三国演义』の初期版本を「章回小説」と呼べなくなってしまうようでは本末転倒であろう。そのため、分回本も分則本も等しく章回小説の範疇に含めて論じるのが主流であり<sup>18)</sup>、本論文でもそのように扱うものとする。

さて、「百回本『西遊記』の成立と展開」という問題設定をしたからには、幾つかの系統に分類されている百回本『西遊記』の諸版本の特徴や相互の関係を把握した上で、百回本『西遊記』（或いは個々の版本）の成立過程を伝える諸資料を検討する、という作業が望まれよう。そこで、まずは版本系統、次いで成立史に関わる資料についての先行研究を概括しておこう。

## 二、版本系統に関する先行研究と問題点

明清代に刊行された百回本『西遊記』の諸版本は、これまで主に以下の三通りの視点から分類されて来た。

一つめは、本文の校訂者や評注者による分類である。

二つめは本文の繁簡に注目した分類で、省略の無い詳細な本文を持つものと、それを元に適宜省略が施された本文を持つものとに区分する。同じ校訂者や評注者の名を掲げている版本の中に、前者と後者がどちらも存在するという事例も珍しくない。前者を「繁本」または「文繁本」、後者を「簡本」または「文簡本」と呼ぶ方式と<sup>19)</sup>、前者を「繁本」、後者を「刪本（刪節本）」と呼ぶ方式<sup>20)</sup>とがあるが、本論文では「文繁本」と「文簡本」という呼び分けに従っておく。

三つめは、所謂「江流和尚故事」——科挙に及第した陳光蕊が地方の任地に赴く途中で殺され、妊娠していた妻の殷氏は脅されてやむなく仇の妻となるが、生まれた赤子を仇に害されぬようやむなく江に流し、成長して金山寺の僧となった赤子即ち玄奘が真相を知って外祖父殷開山の力を借りて仇を討ち、昔の功德のために龍宮で生きていた父とも団円する、という玄奘三蔵の出生譚（版本によって小異あり）——の扱いによる分類である。

### （1）孫楷第氏の分類

さて、章回小説に限らず、古典通俗小説全般の版本研究において絶大な功績を果たした孫楷第氏は、その第一歩たる『日本東京及大連図書館所見中国小説書目提要』（国立北平図書館、一九三一。以下『東京目』と略称）において、『西遊記』について

『西遊記』吾國通行者有三本…一爲乾隆庚子陳士斌『西遊真詮』

本；二爲乾隆己巳張書紳『新説西遊記』本；三爲嘉慶間劉一明『西遊原旨』本。明本概未之見。余在日京所見、有華陽洞天主人校本、書凡三部、内閣文庫帝國圖書館及村口書店俱有之。有袁幔亭序李卓吾評本、内閣文庫及宮内省圖書館各有一部。有汪澹（上原注…正しくは憺）漪評『西遊証道書』此清初刊本唯内閣文庫有一部。有『鼎鏤全像唐三藏西遊傳』爲村口書店書、其書尤世所僅見。保存舊本、如斯之多、頗可驚嘆。今不憚詳細述之。

と述べた上で、「一 華陽洞天主人校本」「二 李卓吾先生批評『西遊記』一百回」「三 汪澹漪マヤ評古本『西遊証道書』一百回」「四 『鼎鏤全像唐三藏西遊釋厄傳』十卷」の四項目を立てている。一には万曆三十一年序の清白堂楊閩齋刊本とする『鼎鏤京本全像西遊記』二十卷一百回（内閣文庫蔵）・それに対する「原刊本」で万曆二十年序の世徳堂刊本とする『新刻出像官板大字西遊記』二十卷一百回（村口書店蔵）・万曆間刊本とする『唐僧西遊記』二十卷一百回（帝國圖書館蔵）という三版各一点を著録する。二には『李卓吾先生批評西遊記』一百回（内閣文庫蔵）と、その「覆本」とするもの（宮内省図書館蔵）という二版各一点を著録する。三には内閣文庫蔵の「清初原刊本」とするもの（後述の蝸寄刊本）の一版一点を、分則本の四には村口書店蔵の一版一点（朱鼎臣編本の劉蓮台刊本）を著録する。孫氏はそれぞれの書誌事項や特徴を詳述し、各版本の干支で記

された序の年次を右に挙げたように考証している。

この項目の立て方は、先に挙げた百回本の分類に際しての三つの視点のうち、本文の校訂者や評注者による分類によるものだが、孫氏は他の二つの視点からも重要な指摘を行っている。

まず、文章の繁簡による分類の視点からは、『鼎鏤京本全像西遊記』について「以袁幔亭序李卓吾評本校此本、此本文字有刪略處」という指摘が見られる。他の百回本については文章の繁簡についての言及は無いが、それはこの二種の版本は内閣文庫蔵本同士を直接並べて対校出来たものの、所蔵元が分かれている他の版本については細かい比較が行えなかったためであろう。

また、「江流和尚故事の扱いによる分類」では、通行本の第九回で語られる江流和尚故事（孫氏はここでは「陳光蕊事」と記す）が一と二には見えず、三には載っていることを早くも指摘している。更に、三の第九回冒頭に附された汪憺漪（象旭）の評<sup>21</sup>に

童時見俗本、竟刪去此回、杳不知唐僧家世履歷、渾疑與花果山山頂石卵相同。而九十九回歷難簿子上、劈頭却又載遭貶・出胎・拋江・報冤四難、令閱者茫然不解其故、殊恨作者疎謬。後得大略堂釋厄傳古本讀之、備載陳光蕊赴官遇難始末、然後暢無憾。

云々とあるのを紹介した上で、通行本の第九回では玄奘を育てた僧の名が法明であるのに、明本では第十一回、通行本では第十二回に

それぞれ見える玄奘の生い立ちを説いた（『江流和尚故事のあらすじを述べた』韻文ではそれが遷安となっていることや、通行本の第九回は貞観十三年から始まり、その時点では生まれていなかった玄奘が第九回の終わりには十八歳になっているのに、玄奘が既に成長している第十回がまた貞観十三年から始まることなどの矛盾を挙げ、明本には無かった第九回が三において汪憺漪によって挿入され、通行本はそれに従ったのだと考証している。第九回の挿入に伴う第十回から第十二回までの区切り方の変更についても孫氏は既に全容を解明しており、通行本と一との回の切れ目と回目について次のような比較表を載せている。

通行本				華陽洞天主人校本			
九回	陳光蕊赴任逢災 江流僧復仇報本						
十回	老龍王拙計犯天條 魏將軍遣書託冥吏	九回	袁守誠妙算無私曲 老龍王拙計犯天條	十回	二將軍宮門鎮鬼 唐太宗地府還魂	十一回	還受生唐王遵善果 度孤魂蕭瑀正空門
十一回	遊地府太宗還魂 進瓜果劉全續配	十一回					
十二回	唐王秉誠建大會 觀音顯聖化金蟬	十二回	玄奘秉誠建大會 觀音顯象化金蟬				

回目は版本ごとに細かな異同が多く、同じ版本の中でも目録と本文で若干異なることが少なくないので、どの版本のどちらに拠るか次第でかなりの違いが出てしまうのだが、それを明記していないこの表でも、江流和尚故事の扱いを示す目的では十分であった。百回本の第九回から第十二回までの状況は、今日知られる明清刊本の全てが、回目の字句に小異はあれど、この表の上段型か下段型かのどちらかに分類出来る。

孫氏は続いて、『中国通俗小説書目』（初版：国立北平図書館、一九三三。改訂版：作家出版社、一九五七。重訂版：人民文学出版社、一九八二。以下『孫目』と略称）の初版において、百回本『西遊記』を六項目に分けて著録した<sup>22</sup>。即ち、①『西遊記』二十卷一百回、②『西遊證道書』一百回、③『西遊真詮』一百回、④『新説西遊記』一百回、⑤『西遊原旨』一百回、⑥『通易西遊正旨』一百回である。更に、唯一明刊本を有する①だけは、①A「華陽洞天主人校本（二十卷一百回）」と①B「李卓吾先生批評西遊記（一百回不分卷）」とに細分している（丸数字とABは便宜上筆者が附した）。

『孫目』も『東京目』に続いて本文の校訂者や評註者による分類を基本とするが、唯一項目内を更に細分する①の終わりに「以上華陽洞天主人校・李卓吾評二本、皆無陳光蕊逢災・江流報仇事」と特記しているので、江流和尚故事の扱いによる分類も併用しての項目

立てだと言えよう。巻数の違いを超えて①Aと①Bを①にまとめているところからすると、むしろ後者をより重視していると言わなければならない。一方で、『東京目』にはあった百回本の中での文章の繁簡についての記述はなくなってしまった。

## (2) 太田辰夫氏による明刊本の版本研究とその問題点

『孫目』の項目の立て方は初版から重訂版まで一貫して変わっておらず、百回本『西遊記』の版本研究は、まずはこれを基本に置きつつ、未載の版本や、所載のものを含めた各版本の文章の繁簡について補いながら整備されて来た。その中で、多くの版本を調査して大系的に整理し、その結果として百回本の分類の際には文章の繁簡を重視すべきことを強く訴えたのが太田辰夫氏であった。

太田氏は一九六〇年代から発表し続けた一連の『西遊記』研究成果を集大成した『西遊記の研究』(研文出版、一九八四)において、分則本も含めた明刊本の系統分類について以下のような所説を述べている(第十四章「明刊本西遊記考」冒頭、二六〇～二六一頁)<sup>23</sup>。

(イ) 明刊本西遊記を華陽洞天主人校本と李卓吾批評本の二系統に分けるのは正しい分類ではない。むしろ繁本および簡本の二系統とすべきものである。

(ロ) 華陽洞天主人校本には『新刻出像官板大字西遊記』(世徳堂

刊)、『唐僧西遊記』(蔡敬吾刊本・朱繼源刊本など)、『鼎鑪京本全像西遊記』(清白堂楊閩齋刊本)の三種がある。これらは陳元之の序を有し、二十巻一百回に分けられるという形式上の共通点をもつとはいえ、いずれも内容を異にするもので、同一人が内容を異にする三種の本を校定したということはありえない。したがって華陽洞天主人校という文字はあまり意味をもっていないから、これを以て版本の称とすることは適当ではない。

(ハ) 繁本としては世徳堂刊本および李卓吾批評本があり、簡本としては『唐僧西遊記』(蔡敬吾刊本・朱繼源刊本)、『鼎鑪京本全像西遊記』(清白堂楊閩齋刊本)および『新刻増補批評全像西遊記』(閩齋堂楊居謙刊)がある。

(ニ) 繁本のうち李卓吾本の本文は世徳堂本とほとんど差がなく、両者は同一のものと見てよい。

(ホ) 簡本のうち『唐僧西遊記』は世徳堂本を省略したもの、楊閩齋本は『唐僧西遊記』を参照しつつ世徳堂本を省略したもの、また閩齋堂本は李卓吾評本を省略したものである。概していえば『唐僧西遊記』の省略がもっとも少く、閩齋堂本がもっとも多く省略されている。

(ヘ) 明刊諸本はいずれも世徳堂本から出ており、したがって西遊記成立史上において独自の価値を有するものではない。ただ

『唐三藏西遊伝』（朱鼎臣本）と『唐三藏出身全伝』（楊致和本）は世本とは別系統というべく、きわめて注目すべき内容を有する。

太田氏はこれに続けて各系統の具体的な伝本の詳細に言及し、李卓吾批評本を甲本・乙本・丙本という三版に分類したり、『唐僧西遊記』の叡山文庫蔵本と日光輪王寺慈眼堂天海蔵蔵本を紹介したり、版種自体が『孫目』未著録の閩齋堂刊本の位置付けを論じたりしている。

さて、『孫目』の①Aに分類される三種の明刊本の間では、確かに本文の繁簡に小さからぬ差がある。してみれば、『唐僧西遊記』と楊閩齋刊本の「華陽洞天主人校」という記載は世徳堂刊本から（或いはその更なる祖本から）引き継いだに過ぎず、それらの本文は華陽洞天主人の校訂を経たものに対して更に別人による省略が施されているはずだから、実態を表すものではない——というのが太田氏の言わんとするところであろう。同一人が内容の異なる三種の本を校定することはありえないという太田氏の言は論理的には問題があり、同一人物が再三再四の校訂を行ってそれがその都度出版されたという可能性は絶無とは言えないはずだが、確かに実情に照らせばその可能性は非常に低いと思われるし、仮に三種全ての文章を同一人物が定めていたとしても、現に本文の繁簡がはっきり異なるのは事実

である。よって、「華陽洞天主人校本」という言い方では指すところの本文を一意に決められないのは確かで、その意味では太田氏が「あまり意味をもっていない」とする通りである。

しかし、個々の版本の性格を明らかにするには、版本間の継承関係を正しく把握することは欠かせまい。一口に明刊百回本の中の文簡本とは言っても、太田氏の指摘通り、世徳堂本を省略したものと李卓吾批評本を省略したものとがある。また、太田氏も認める序文や巻立てなどの本文以外の特徴の一致は、継承関係を把握する上で有用なものに違いない。よって、「どの文繁本を省略した文簡本であるのか」を把握するための分類項目としては、華陽洞天主人校系という言い方も決して無意味ではないはずだ。

また、本当に太田氏の言う通り「繁本のうち李卓吾本の本文は世徳堂本とほとんど差がなく、両者は同一のものと云ってよい」のかどうかも、現在の章回小説の版本研究の水準に照らした再検証が必要であろう。というのも、一九八〇年代末以降に急速に進展した『三国演義』の版本研究においては、『西遊記』で喩えるならば、世徳堂本と李卓吾本の間の細かい字句の相違にまでこだわるところか、李卓吾本の中での覆刻・翻刻・後修などによる本文の異同までもが追及されているからだ<sup>24</sup>。具体的にその成果の実例を挙げれば、『三国演義』にも李卓吾批評本と呼ばれる版本系統があるのだが、清初

に編まれ清代後期に絶対的な通行本となった毛宗崗本が、李卓吾批評本の中のどの版に依拠して編まれたか、というようなことまでが論じられるようになったのである。また、『西遊記』で言う世徳堂本と李卓吾本の間のレベルでの比較においても、従来「内容実在一無差別」とされていた系統間で、十一箇所の挿入説話が見出されるという中川諭氏による大きな発見もあった。こうなってみると、百回本『西遊記』の版本研究においてもその水準の研究が望まれるであらう。もちろん、その結果それでも世徳堂本と李卓吾本は殆ど同一と言って良いと分かれればそれで良い。また、注目すべき相違が認められれば、『三国演義』研究においてそうだったように、そこから多くの問題が見出されて研究の加速度的進展に繋がるはずである。本論文ではその点の検証を試みる。

### (3) 太田辰夫氏による清刊本の版本研究とその問題点

また、清代に編まれたテキストの系統分類についても、太田氏は重要な指摘を多々行っている。

まず、『西遊証道書』考（『神戸外大論叢』第二十一巻第五号、一九七〇）において、『孫目』著録の内閣文庫蔵本の他に、京都大学人文科学研究所蔵本も同版である旨を紹介し、元の虞集のものとす「原序」の真贋を考証したり、評者と刊行者について検討して康

熙初年の刊行と推定したり、評語の性格を論じたり、『東京目』で江流和尚故事の問題を論じるに当たって紹介されている金山寺の僧の名や年数の矛盾が生じているのは新説西遊記系統の版本だけであることを指摘したり、西遊証道書が西遊真詮よりも省略の著しい簡本（文簡本）であることを挙げたり、『孫目』が西遊証道書の坊刻本として紹介している懷徳堂本や懷新樓本などが、本文は確かに「西遊証道書の簡本」であるけれども、実は『西遊真詮』と題する十巻本であり（これは通常不分巻である『孫目』著録の『西遊真詮』とは本文が別系統）、証道書とはどこにも書かれていないため、これを証道書と称すべきではなからうとの旨を述べたりしている。

太田氏はこの坊刻本に対して「十巻本西遊真詮」という呼称を提唱しているのだが、『西遊真詮』と題しながら実は中身は所謂西遊証道書である版本は、現在では更に八巻本や六巻本も見つかっている。また、所謂西遊真詮の方にも、不分巻本に非常に多くの版種がある他に、少数ながら二十巻本も存在するので、十巻本や八巻本や六巻本との区別のために『孫目』の③の系統を「不分巻本西遊真詮」と総称するというのも不適当なやり方であらう。それに、呼称は真詮だが本文は所謂証道書系統である、などというのはいかにも分かりにくい。

そこで、本論文においては、本文と評註が誰の手になるものの系

譜に連なるかという点に着目して、『孫目』の前記②西遊証道書を汪象旭箋評本、③西遊真詮を陳士斌詮解本、④新説西遊記を張書紳註本、⑤西遊原旨を劉一明解本、⑥西遊正旨を張含章註本、そして『孫目』未著録の『西遊記評註』を含晶子評註本と呼称する<sup>25</sup>。

また、太田氏には「清刊本西遊記考」（『神戸外大論叢』第二十二卷第四号、一九七一）もあり、『孫目』の③④⑥、及び含晶子評註本について検討し、そのうち筆者が張書紳註本と称することにした『孫目』の④だけが「世本・李卓吾本系統の」文繁本で、他はいずれも文簡本であることを指摘している。

### 三、百回本成立史に関わる諸資料について

#### （1）秣陵陳元之「刊西遊記序」とその周辺

前述の通り、世徳堂刊本こと北平図書館旧蔵『新刻出像官板大字西遊記』（台湾故宮博物院現蔵）は現存最古の百回本『西遊記』として重視されて来た版本であるが、その巻頭に、秣陵陳元之の撰になる「刊西遊記序」が附されている。「壬辰夏端四日也」と結ばれるこの序は、百回本の成立史に関わる重要な証言を含むものとして早くから注目を集めて来た。多くの先行研究で引用されているが、非常に重要な資料なので、重複を厭わず、以下にその全文を引用する。

#### 刊西遊記序

秣陵陳元之撰

太史公曰、「天道恢恢、豈不大哉。譚言微中、亦可以解紛」。莊子曰、「道在屎溺」、善乎立言。是故道惡乎往而不存、言惡乎存而不可。若必以莊雅之言求之、則幾乎遺。西遊一書、不知其何人所為。或曰出今天潢何侯王之國、或曰出八公之徒、或曰出王自製。余覽其意、近跡滑稽之雄、巨言漫衍之為也。舊有叙、余讀一過、亦不著其姓氏作者之名。豈嫌其丘里之言與？其叙以為、孫、孫也、以為心之神。馬、馬也、以為意之馳。八戒、其所戒八也、以為肝氣之木。沙、流沙、以為腎氣之水。三藏、藏神・藏聲・藏氣之三藏、以為邪郭之主。魔、魔、以為口・耳・鼻・舌・身・意、恐怖顛倒幻想之障。故魔以心生、亦心以攝。是故攝心以攝魔、攝魔以還理、還理以歸之太初、即心無可攝。此其以為道之成耳。此其書直寓言者哉。彼以為大丹之數也、東生西成、故西以為紀。彼以為濁世不可以莊語也、故委蛇以浮世。委蛇不可以為教也。故微言以中道理。道之言不可以入俗也、故浪謔咲虐以恣肆。咲謔不可以見世也、故流連比類以明意。於是其言始參差而諷詭可觀、謬悠荒唐、無端崖涯涘、而譚言微中、有作者之心、傲世之意、夫不可沒已。唐光祿既購是書、竒之、益俾好事者為之訂校、秩其卷目梓之、凡二十卷數十萬言有餘、而充叙於余。余維太史・漆園之意、道之所存、不欲盡廢、況中



慮者哉？故聊為綴其軼叙叙之。不欲其志之盡湮、而使後之人有覽、得其意忘其言也。或曰、「此東野之語、非君子所志。以為史則非信、以為子則非倫、以言道則近誣。吾為吾子之辱」。余曰、「否否、不然。子以為子之史皆信邪？子之子皆倫邪？子之子史皆中道邪？一有非信非倫、則子史之誣均。誣均則去此書非遠、余何從而定之？故以大道觀、皆非所宜有矣。以天地之大觀、何所不有哉？故以彼見非者、非也。以我見非者、非也。人非人之非者、非非人之非。人之非者、又與非者也。是故必兼存之後可。於是兼存焉」。而或者迺亦以為信。屬梓成、遂書冠之。時壬辰夏端四日也。

この陳元之序には、百回本の成立史に関わる議論で必ずと言ってよいほど問題にされるくだりが三箇所ある。

一つは「西遊一書、不知其何人所為。或曰出今天潢何侯王之國、或曰出八公之徒、或曰出王自製」である。『西遊記』の作者の名は当時知られておらず、さる藩王の王府で作られた（出今天潢何侯王之國。原本は「天」から改行）とか、王侯の食客の作品である（出八公之徒）とか、藩王自身の手になる（出王自製。原本は「王」から改行）とかいった噂があったことが読み取れる。いずれにしてもどこかの王府の関与がほのめかされている訳だが、それがどの王府で

あるかについて、『（天啓）淮安府志』三十二卷（台湾故宮博物院蔵）の卷十九「藝文志一」の「吳承恩…射陽集四冊 卷、春秋列傳序、西遊記」という著録<sup>26</sup>を根拠に章回小説『西遊記』の作者を吳承恩と看做す立場から、吳承恩が荊王府の紀善を務めたことと関連があるという説<sup>27</sup>、周弘祖『古今書刻』に著録される魯府刊本『西遊記』と登州府刊本『西遊記』とに結び付ける説<sup>28</sup>、後述の盛於斯『休庵影語』「西遊記誤」条に引く周如山の証言に見える「周邸」と結び付ける説<sup>29</sup>などが入り乱れており、百回本『西遊記』の成立史を検討する上での大きな争点となっている。

二つめは、一つめの直後の「余覽其意、近跡地滑稽之雄、扈言漫衍之為也。舊有叙、余讀一過、亦不著其姓氏作者之名。豈嫌其丘里之言與？其叙以為」と、その直後に続く旧本の叙の要約或いは引用で、旧本に無記名の叙があり、それは登場人物や設定の寓意を読み解く内容であったことが読み取れる<sup>30</sup>。

三つめは、「唐光祿既購是書、竒之、益俾好事者為之訂校、秩其卷目梓之、凡二十卷數十萬言有餘、而充叙於余」である。この直前の「夫不可没已」で旧本の叙の要約または引用とそれに対する陳元之の論評が終わっていることは間違いない、ここでは陳元之が序を寄せた刊本自体の刊行の経緯が語られている。唐光祿なる人物が旧本を購入して価値を認め、「訂校」と「秩其卷目」という作業を経て二

十卷本として刊行することになり、陳元之に序文を求めて来た、というところまでは認められようが、「唐光祿」が何者なのか、「益俾好事者」をどのように読むべきか、「訂校」と「秩其卷目」とはどのような作業を指すのか、といった点は先行研究で多様な解釈が示されており、大きく見解が割れている。唐光祿が何者であるかを明確にすることが望まれよう。

## (2) 盛於斯『休庵影語』『西遊記誤』

盛於斯（字此公、一五九八～一六三八）『休庵影語』<sup>31</sup>「西遊記誤」条に、周如山なる人物の百回本『西遊記』の成立史に関する証言が引かれている。「西遊記誤」の全文は以下の通り。

余幼時讀『西遊記』、至「清風嶺唐僧遇怪 木棉菴三藏談詩」、心識其爲後人之偽筆、遂抹殺之。

後十餘年、會周如山云、「此樣抄本、初出自周邸、及授梓時訂書、以其數不滿百、遂增入一回、先生疑者、得毋是乎？」

蓋『西遊』作者、極有深意、每立一題、必有所指、即中間科譚語、亦皆關合性命眞宗、決不作尋常影響。

其末回云、「九九數完歸大道 三三行滿見眞如」。九、陽也。九九、陽之極也。陽孩於一、苗於三、盛於五、老於七、終於九、

則三三、九數也、不用一而用九、猶初九潛龍勿用之意云。三三九九、正合九十九回、而此回爲後人之偽筆、決定無疑。

至若『關尹』『管子』『博物誌』、皆後人偽筆、讀者皆不可不辨。近日『續藏書』、貌李卓吾、更是可笑。若卓老止於如此、亦不成其爲卓吾也。又若『四書眼』『四書評』・批點『西遊』『水滸』等書、皆稱李卓吾、其實皆葉文通筆也。余最恨今世齷齪豎儒、不揣己陋、欲附作者之林、將自家土苴糞壤、輒託一二名公以行世。而讀者又矮人觀場、見某老先生名諱、不問好歹、即捧誦之。若此等人、尚可與之上下千古、品隲是非乎。因『西遊記』誤、并及之。

ひとまず、周如山に関わる点のみ要約しておこう。

・盛於斯は幼い頃に『西遊記』を読んだ際、「木棉菴談詩」の話（詳細は終章で述べるが、現行の百回本第六十四回の木仙菴談詩の話に当たると思われる）を後人の偽作と受け止めた。  
・後に周如山から『西遊記』はもともと「周邸」から抄本が出たのですが、それを刊行するに当たって校訂した際に、全百回に達していなかったのです、（全百回とするために）一回分の話を増やしたということです。あなたが偽作だと疑っている話こそが、まさにその追加された回なのではないでしょう

か？」と聞いた<sup>32</sup>。

・それを聞いた盛於斯は、『西遊記』が九という数字を重視していることを踏まえれば本来は九十九回本だったというのは大いに頷ける話であると思い、第六十四回に相当する話が後から付け足されたものであることは間違いないと確信した。

周如山の証言には陳元之序にも通じるところがありそうだが、どのような情報源に基づくのか不明であるから、果たして信憑性を認めて良いのかどうか問題になろう。その点について、磯部彰氏<sup>33</sup>と呉聖昔氏<sup>34</sup>がそれぞれ別々に、周如山を万暦年間に活動した書坊である周氏大業堂の主人だとする言説が書誌学の分野で行われていることを指摘し、当時の出版業界に身を置いていた人物の証言として一定の信憑性を認めるべき旨を説いている。こうなると、大業堂がいかなる書坊で、周如山が確かにその主人なのかどうかをしかと確かめねばなるまい。

#### 四、各章の構成と初出

本論文の構成と初出は以下の通りである。

#### 第一章 聖僧歴難簿が語るもの

書き下ろし。但し、筆者卒業論文「西遊記世徳堂本

#### 第二章

の位相」(東京大学文学部言語文化学科、二〇〇三)における発想を元としている。

世徳堂本の版本について

拙稿「世徳堂本『西遊記』版本問題の再検討初探——他の世徳堂刊本小説・戯曲との版式の比較を中心に——」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要第』十二号、二〇〇九)と「世徳堂刊本『西遊記』伝本考述」(『文学遺産』二〇一〇年第四期)とを元に、全体を大幅に改稿・再構成した。

#### 第三章

金陵唐氏世徳堂主人考——二人の「唐光禄」——

拙稿「金陵書坊唐氏世徳堂主人考——二人の「唐光

禄」——」(『中国——社会と文化』第二十七号、二〇一

二)及びその中国語補訂版「金陵書坊唐氏世徳堂主人

考——兩位唐光禄——」(『国際漢学研究通訊』第八期、

北京大学出版社、二〇一四)に加筆修正を施した。

#### 第四章

李卓吾批評本系の版本について

拙稿『李卓吾先生批評西遊記』の版本について(『日本中国学会報』第六十三集、二〇一一)及びその中国語補訂版「關於『李卓吾先生批評西遊記』的版本問題」(『国際漢学研究通訊』第五期、二〇一二)に加筆修正

を施した。

## 第五章 周氏万卷楼と周氏大業堂の関係について——周如山をめぐって——

拙稿「金陵書坊周曰校万卷楼仁寿堂と周氏大業堂の

関係について」(『斯道文庫論集』第四十八輯、二〇一四)に加筆修正を施した。

## 第六章 清本諸系統の版本について

書き下ろし。

## 第七章 明末の商業出版における異姓書坊間の広域的連携の存在について

拙稿「明末の商業出版における異姓書坊間の広域的

連携の存在について」(『東方学』第百三十一輯、二〇

一六)に若干の加筆修正を施した。

## 終章

書き下ろし。

<sup>1</sup> 四大奇書という括りの成立過程については浦安迪 (Andrew H. Plaks) 著・沈亨寿訳『明代小説四大奇書』(中国和平出版社、一九九三)。原書は Andrew H. Plaks “The Four Masterworks of Ming Novel :Ssu ta ch'i-shu” (Princeton University Press, 1987) 参照。

<sup>2</sup> 大塚秀高「嘉靖定本から万曆新本へ——熊大木と英烈・忠義を端緒として——」(『東洋文化研究所紀要』第百二十四冊、一九九四)、小松謙『中国歴史小説研究』(汲古書院、二〇〇三)等参照。  
<sup>3</sup> 竺洪波『四百年《西遊記》學術史』(復旦大学出版社、二〇〇六)。  
<sup>4</sup> 大阪市立大学中国文学研究室編『中国の八大小説』(平凡社、一九六五) 所収。

<sup>5</sup> 磯部彰『『西遊記』形成史の研究』(創文社、一九九三) 序章。  
<sup>6</sup> 詳細については、磯部彰「大倉文化財団所蔵『大唐三蔵取経詩話』解題」(『大倉文化財団蔵 宋版 大唐三蔵取経詩話』所収、汲古書院、一九九七) 参照。本論文では両者のテキストを『取経詩話』と総称する。

<sup>7</sup> 研究史及び内容については、太田辰夫『朴通事諺解』所引西遊記者(初出は『神戸外大論叢』第十卷第二号、一九五九。のち同氏『西遊記の研究』(研文出版、一九八四) 第四章)、磯部彰「元本西遊記」の形態について」(『富山大学人文学部紀要』第八号、一九八四。のち磯部注5書第五章) 参照。

<sup>8</sup> 孫楷第「吳昌齡与雜劇西遊記」(『輔仁學誌』第八卷第一期、一九三九。のち同氏『滄州集』(中華書局、一九六五) 所収) 参照。  
<sup>9</sup> 孫楷第注8論文、太田辰夫「戲曲西遊記考」(『神戸外大論叢』第二十二卷第三号、一九七一。のち太田注7書第六章)、磯部彰「伝奇四十種本『楊東來先生批評西遊記』の成立時期とその刊行年代」(『富山大学人文学部紀要』第十四号、一九八九。のち『楊東來

先生批評西遊記』劇の成立とその刊行——明前期の戲曲西遊記物語について——と改題の上で磯部注5書第十章) 参照。

<sup>10</sup> 鄭振鐸「西遊記的演化」(『文学』第一卷四号、一九三三)、太田辰夫『西遊記』の二異本」(『神戸外大論叢』第二十卷第三・四号、一九六九。のちこの問題を扱う前半部を『永樂大典』本西遊記考」と改題の上で太田注7書第八章)、磯部注7論文参照。

<sup>11</sup> 太田辰夫「銷釋真空宝卷」に見える「西遊記」故事——元本西

遊記考——」(『神戸外大論叢』第十五卷第六号、一九六五。のち『朴通事諺解』と『銷釈真空宝卷』と改題の上で太田注7書第五号)、磯部注7論文参照。

<sup>12</sup> 『中華戯曲』第三輯(山西師範大学戯曲文物研究所、一九八七)、磯部彰『迎神賽社禮節傳簿四十曲宮調』に収められる「西遊記」関係隊舞戯について(『集刊東洋学』第六十号、一九八八。のち『迎神賽社禮節傳簿四十曲宮調』に収められる「西遊記」隊舞戯」と改題の上で磯部注5書第十一章)参照。

<sup>13</sup> 太田辰夫『玄奘三蔵渡天由来縁起』と『西遊記』の「古本」(『神戸外大論叢』第十五卷第六号、一九六七。のち太田注7書第九章)、田中智行「龍谷大学図書館蔵『玄奘三蔵渡天由来縁起』翻刻(一)附解題」(『徳島大学国語国文学』第二十二号、二〇〇九)参照。原本のマイクロフィルムも見てはいるが、難読の写本のため、本論文で『玄奘三蔵渡天由来縁起』を扱う際には、基本的に田中智行「龍谷大学図書館蔵『玄奘三蔵渡天由来縁起』翻刻(一)」「(五)」(『徳島大学国語国文学』連載、(一)・前掲。(二)・第二十三号、二〇一〇。(三)・第二十四号、二〇一一。(四)・第二十五号、二〇一二。(五)・第二十六号、二〇一三)における翻刻に従う。

<sup>14</sup> 但し、『玄奘三蔵渡天由来縁起』はそもそも本当に百回本に先行するテキストに基づくものなのか否かがはっきりしておらず、田中注13解題では、いずれも清代の百回本の邦訳である『絵本西遊記』初編と『通俗西遊記』後編・三編を襲っていると明らかに認められる箇所が複数あることが指摘されている。

<sup>15</sup> 「章回小説」という用語は清末民初に発生したもので、その経緯については陳美林・馮保善・李忠明『章回小説史』(浙江古籍出版社、一九九八)、羅書華「章回小説的命名和前称」(『明清小説研究』一九九九年第二期)参照。

<sup>16</sup> 中川諭『『三国志演義』版本の研究』(汲古書院、一九九八)参照。

<sup>17</sup> 例えば、中野美代子『西遊記の秘密——タオと煉丹術のシンボリズム——』(初版・福武書店、一九八四。改訂版・福武文庫、一九九五。重訂版・岩波現代文庫、二〇〇三)では、「このように、長い物語を回に分け、各回に回目を立てている小説を章回小説と呼ぶ。また、分回本といってもよい」(重訂版三三五頁)とした後で、旧式のものとして別途『三国演義』の初期版本のような「巻分けにして則目を立てるだけのもの」の存在に触れて両者を比較している。

<sup>18</sup> 大塚注2論文九八頁、陳美林・馮保善・李忠明注15書一〇頁等。

<sup>19</sup> 太田辰夫・鳥居久靖「解説」(太田辰夫・鳥居久靖訳『西遊記(上)』所収、平凡社中国古典文学全集、一九六〇)、齋藤・伊藤注4論文、太田辰夫「明刊本『西遊記』考」(『神戸外大論叢』第十九卷第一号、一九六八。のち太田注7書第十四章)等。

<sup>20</sup> 曹炳建『西遊記』版本源流考(人民出版社、二〇一二)、周文業『『三国演義』《水滸伝》《西遊記》《金瓶梅》《紅樓夢》版本研究』(著者自印、二〇一二)等。なお、この用語法は、百回本よりも遙かに簡略で、かつ内容的にも別系統と言うべき本文を持つ分則本を「簡本」と呼ぶのと三点セットとなっている。「簡本」という用語が、時には「百回本の中で簡略な本文を持つテキスト」の意で使われ、時には分則本を指して使われて来たという問題を解決しており、『西遊記』の版本問題を論じるだけなら申し分のない用語法ではある。しかし、「繁本」と「簡本」は他の章回小説、特に『三国演義』と『水滸伝』の版本を論じる上でも定着している用語で、それらとの整合性を考慮していないという難点もある。

<sup>21</sup> 孫氏は適宜要約しながら紹介しているが、ここでは内閣文庫蔵本の原文の該当箇所をそのまま引用した(前後は省略)。

<sup>22</sup> 百回本以外も著録しているが、本論文では直接扱わないため、省略する。

<sup>23</sup> この長い引用の中では、「世徳堂刊本」「楊閩齋刊本」などの「〇

○刊本」という用語と、「世徳堂本」「楊閩齋本」などの「○○本」という用語とが、一見無造作に混在しているかのように見えるが、良く読むとこれは使い分けられているようだ。世徳堂を例に取れば、「世徳堂刊本」が「世徳堂が版木を作成して刊行した版本」そのものを指しているのに対し、「世徳堂本」の方は「世徳堂刊本の本文」、つまりテキストだけを問題にする際に用いられている。この違いがより分かり易くなる例を挙げよう。仮に世徳堂刊本を極力忠実に抄写した写本があったとする。その写本は世徳堂が刊行した版本ではないから、「世徳堂刊本」とは呼べない。しかし、本文は世徳堂刊本と（多少の誤写はあるにせよ）基本的に同一であるから、この写本の本文も「世徳堂本」と称し得る。過去の拙論への自省も込めて言うと、通俗小説の版本研究はこの使い分けを意識せずに行われることが多く、しばしば議論の混乱を招いてしまっている。同様の問題は、「××なる機関ないし個人が所蔵する本」という意味である「××蔵本」や、「△△が印刷した本（版木の作成者は△△とは別の書坊・官署・個人等だったかもしれない）」を意味する「△△印本」との間に生じるものであり、太田氏でさえこれに続く文章の中で「××蔵本」と「××本」の使い分けは全くしていない。本論文では版本の覆刻・翻刻・後修・通修といった問題を頻繁に取り扱うため、これらの使い分けには極力厳格であるように努める。

<sup>24</sup> 以下に続く具体例も含め、中川注16書参照。

<sup>25</sup> なお、華陽洞天主人校本の場合と同じく、これらの呼称は必ずしも本文を一意に定められるものではない。汪象旭箋評本を例に取れば、『孫目』著録の内閣文庫蔵本やそれと同版の京大人文研蔵本はこの系統の中での文繁本（但し、百回本全体の中で見れば文簡本）、太田氏の指摘した十卷本西遊真詮はこの系統の中での文簡本であって、同一系統内でも本文の繁簡や評注の分量に相違がある。

<sup>26</sup> 『康熙』淮安府志』十三卷首一卷（国立公文書館内閣文庫、東洋文庫等蔵）の卷十二「藝文志」にも同文が見える。一方、黃虞稷『千頃堂書目』卷八「地理類下」にも「吳承恩『西遊記』」が著録されており、吳承恩作者否定説の立場からは重視されている。

<sup>27</sup> 曹炳建「《西遊記》世徳堂本研究二題」（『東南大学学報（哲学社会科学版）』第十一卷第二期、二〇〇九）等。

<sup>28</sup> 太田辰夫「魯府本西遊記と『西遊釈厄伝』（太田注7書第十三章）、黄永年「前言」（『黄周星定本西遊証道書 西遊記』所収、中華書局、一九九三）等。

<sup>29</sup> 曹炳建注20書第三章第三節（同氏注27論文とは若干見解が変わった点がある）等。

<sup>30</sup> 鄭振鐸注10論文は「惜所云「旧序」世徳堂本未刊入、今絶不可得見、未能一窺其究竟」とするが、太田辰夫「西遊記雑考」（『神戸外大論叢』第二十一卷第一・二号、一九七〇。のちこの問題を扱う後半部を「世徳堂本西遊記（世本）考」と改題の上で太田注7書第十二章）や磯部彰「明後期における『西遊記』の大成とその流布」（磯部注5書第十二章）が指摘する通り、「孫、孫也」以下は旧本の叙の内容を伝えるくだりであろう。

<sup>31</sup> 開明書店排印本（一九三二）に拠った。同排印本の陳楚材「新序二」によると、開明書店排印本は盛昌言から原本を借り受けて作成した抄本を校訂して標点を加えたものというが、その「原本」も「抄本」も、いずれも現所在が掴めない。因みにこの序では盛於斯の生平や生没年が考証されており、周亮工との交友関係や、『休庵影語』に「總批水滸傳」と「西遊記誤」という条が含まれていることの意味も指摘されている。また、朱一玄・劉毓忱『西遊記』資料匯編（初版：中州書画社、一九八三。増訂版：南開大学出版社、二〇〇二）は「積学齋抄本」によりこの条を収録するが、それも所在不明で、陳楚材抄本と同一か否かも分からない（字句には開明書店排印本と若干の異同があるが、片方ないし双方が

排印の際に校訂を加えた結果かもしれない)。

<sup>32</sup> 太田注7書第十章二一八頁や磯部注5書三一二頁などでは、ここで周如山が「周邸から出た本には木仙菴談詩の話が無かった」と証言していると解釈しているように見受けられるが、呉聖昔

「《西遊記》周邸抄本探秘」(『寧波師院学報(社会科学版)』第七卷第一期、一九九五)が説くように、周如山はあくまで「周邸から出た本に対して一回を補って刊行したと聞いている」という証言をした上で、「あなたの言うのがその一回ではないだろうか」との推測を示しているに過ぎないだろう。つまり、周如山はどの回が増補された一回なのかまでは知らなかったということになる。<sup>33</sup> 磯部注5書二七九〜二八二頁(初出論文には見えず、書籍化の際に増補された注釈)。

<sup>34</sup> 呉聖昔注32論文。なお、呉聖昔氏は「原名呉聖燮、筆名方勝」(曹炳建注20書一六頁)であるとのこと、「呉聖燮」名義や「方勝」名義で発表された論考も少なくない。

## 第一章 聖僧歴難簿が語るもの

### はじめに

百回本はどの版本でも、第九十九回に玄奘が下界に落とされてから西天の釈迦如来の下へたどり着くまでに遭遇した八十の難を示したリストを載せている。このリストを本論文では聖僧歴難簿と称するものとする（命名の由来は後述。なお、第九十九回で最後の一難が与えられ、全部で九×九の八十一難となる）。

筆者が卒業論文「西遊記世徳堂本の位相」（東京大学文学部言語文学化学科、二〇〇三年一月八日提出）の執筆準備に当たっていた際に、中野美代子『西遊記——トリック・ワールド探訪——』（岩波新書、二〇〇〇）七一〜七二頁所載の表への注記が目止まった。中野氏作成のその表は、聖僧歴難簿に見える諸難がそれぞれ百回本の第何回で語られる事件に対応しているかを示したもののだが、表の欄外に「世徳堂本は、第二十五難以降に著しい混乱があり、李卓吾本は、それを整理再編したものと思われる」という注記があったのだ。太田辰夫氏が「繁本のうち李卓吾本の本文は世徳堂本とほとんど差がなく、両者は同一のものと言ってよい」と述べているように、当時の先行研究においては両者の本文の相違はあまり注意されては

おらず、中野氏も世徳堂本の聖僧歴難簿が具体的にどのように混乱しているのかは紹介していなかった。

そこで『明清善本小説叢刊』初編二百三十六種八百九十九冊続編百七種三百七十三冊（天一出版社、初編…一九八五。続編…一九九〇）、『古本小説叢刊』全四十一輯百六十九種二百五冊（中華書局、第一輯…一九八七。第二〜四十一輯…一九九〇〜一九九一）、『古本小説集成』全五批四百二十八種六百九十三冊（上海古籍出版社、一九九〇〜一九九四）等に収録される百回本『西遊記』諸版本の影印本を一通り確認してみたところ、諸版本における聖僧歴難簿は大きく三つの類型に分けられることが判明し、前記卒業論文において、それを指摘して未熟ながらも分析を試みた。

実は、中野氏以前にも、聖僧歴難簿に版本間で相違が存在すること自体は指摘されていた。中でも多くの研究者の目に触れたであろうものとして、世徳堂本を底本とする初の排印本で、影印本が普及するまで研究上の主要な底本として重宝された『西遊記』（作家出版社、一九五四）<sup>2</sup>の「出版説明」に、次のような一段がある（五頁）。

所謂八十一難、除了前四難以外、都是写唐僧到西天求經的途



中遭遇。事實上、八十一難只由四十幾個故事所組成、並非八十一個故事。把哪一些故事由一個故事拆成幾個『難』、各本都有出入。我們在對照參詳以後、看出『書業公』本安排得比較合理、也最接近全書的敘述情況、因此就採用了它。這一篇『總賬』、其中第一到第九、第十二到第十七、第二十到第二十三、第五十三、第七十八、和世德堂本是相同的、其余的都不相同。

この『書業公』本」というのは張書紳註本の一種で、五四排印本の本文では、一々校注は施さずに、聖僧歷難簿を丸ごと『書業公』本の形に改めている。つまり、五四排印本ではどの難が違うのかだけを記していて、具体的にどう違うのかは明かしていなかった。そのためか、「出版説明」の右の記述も特段の注意を引いた形跡はなく、具体的にどのような相違があるかの詳細を分析したり、相違が生じた原因を探ったりするような研究は、管見の限りでは未だに皆無のようである<sup>3</sup>。そこで、本章ではこの相違を分析し、そこから何を読み取ることが出来るのかを論じたい。

### 一、聖僧歷難簿とその三類型

物語の中の設定としては、聖僧歷難簿というのは、観音菩薩の命を受けて玄奘一行の取經の旅を陰から守っていた掲諦や伽藍などの諸神が、玄奘が釈迦如来の下にたどり着くまでに経験した厄難の全

てを記録した帳簿である。第九十八回で西天に到着した玄奘一行が經典を受け取ったのを見届けた上で、第九十九回の冒頭で観音菩薩への報告書として提出された。形式としては「○○○○第一難、△△△第二難、……」のように順番に数えて行って、第十一難からは「第」が外れて「××××十一難」のようになり、そのまま八十難までを並べている。○○○○や△△△△のところは四字句が多いが、五字句も散見され、版本によっては六字句も見られる。第一難の前に二句の前置きを持つ版本があり、八十難の後には全ての版本が二句または四句の締めを句を置いている。百回本の地の文においては「災難的簿子」や「難簿」などと呼ばれているが、それでは呼称として今一つ締まりがないので、初期の版本における締めの一句「聖僧歷難簿分明」から取って、聖僧歷難簿と呼称することにした<sup>4</sup>。

聖僧歷難簿の三類型の版本ごとの分布状況は、聖僧歷難簿が第十九回の本文に見えるものである以上は当然と言えば当然ながら、本文の校訂者や評注者による分類との親和性が高い。そこで、まずは本文の校訂者や評注者による分類による各系統によって、聖僧歷難簿がどのように分かれているかを示そう。

#### (1) 華陽洞天主人校本型（華本型歷難簿と略称）

難の排列順序が本文における話柄の排列順序と食い違っている

混乱したもの。華陽洞天主人校本系の版本がこの型の聖僧歴難簿を持つ。

(2) 李卓吾批評本型（李本型歴難簿と略称）

本文における話柄の排列順序に沿うように並べ替えられ、難の名称も適宜変更されているもの。李卓吾批評本系・汪象旭箋評本系・張書紳註本系の各版本がこの型を持つ。

(3) 陳士斌詮解本型（陳本型歴難簿と略称）

李卓吾批評本型に対して微修正を施したもの。陳士斌詮解本系・劉一明解本系・張含章註本系・含晶子評註本系の各版本がこの型を持つ。

この通り、聖僧歴難簿の三類型による系統分類は、本文の校訂者や評注者による分類を包括する上位区分となっている。つまり、聖僧歴難簿は本文の校訂者や評注者による分類による各系統の間にとどのような継承関係があるかを考察する上での指標となり得よう。更に、誤字や同一類型内での細かな字句の異同を確認することで、同一系統に属する個々の版本同士の後を考察する糸口ともなる。そして、何故そのような違いが生じたのかという視点から百回本の成立過程に迫ることが出来るし、それによって世徳堂本と李卓吾批評本の本文が「ほとんど差がなく、両者は同一のものと言ってよい」

という認識を覆すことにも繋がるであろう。

では、実際にどのような違いがあるのかを確認したい。いきなり多くの版本の聖僧歴難簿を並べては分かりにくいだろうから、まずは聖僧歴難簿の各類型から、(1) 華本型歴難簿は世徳堂本の台湾故宫博物院蔵本（村口書房旧蔵、北平図書館旧蔵本）、(2) 李本型歴難簿は李卓吾評甲本の内閣文庫蔵本、(3) 陳本型歴難簿は十行二十二字陳士斌詮解A本（太田氏の言う甲本。太田氏とは異なる呼称とした理由は本論第六章参照）の静嘉堂文庫蔵本をそれぞれ代表として挙げて、三者の聖僧歴難簿を比較してみよう（表1）。なお、この三本を代表に選んだのは、これらが先行研究で各系統の現存最古ないし最善の版本とされることが多かったこと、特に台湾故宫蔵世徳堂本と内閣文庫蔵李卓吾評甲本については一九八〇年代から一九九〇年代にかけて影印本が出版されて広く利用されていること<sup>5)</sup>、及び三本とも筆者が原本を閲覧調査した上で全冊の紙焼きまたは画像データも入手していることによるもので、考察を始めるに当たっての便宜的な処置に過ぎない。これらが本当に各系統の代表として挙げるのに相応しい版本であるかどうかは、第二・四・六章で論じる。

さて、表1の見方についてだが、最上段の数字は第何難なのかを示す。数字の始まる前にaとbの欄、終わった後にc・d・e・fの欄があるが、前者は第一難の前に置かれる二句、後者は八十難の

後に置かれる二句または四句を載せる欄である。なお、覆刻や後修によって生じた細かな相違の状況を把握するために、後に掲げるものも含めた聖僧歴難簿の比較表においては、異体字は全て極力底本に忠実な形で入力している。基本的には拡張Unicodeで入力可能な範囲での区別に留めたが、巉觀勸難收姪瘡伏佉収収の十二文字については、特に外字を作成して入力した。また、底本に墨格がある場合、一格ごとに■一つで表す。また、底本の空格は、表においてスペースを空けることで表現した。

表1では、(2)李本型では(1)華本型と相違がある場合、(3)陳本型では(2)李本型と相違がある場合に、該当する欄を網掛けとした(但し、異体字のみの相違である場合は網掛けとはしていない)。この処理によって、華本型と李本型との間の相違がいか著しいかは一目瞭然であろう。特に、二十五難から七十七難までは、五十三難を除いて全てが異なっている。一方、李本型と陳本型の相違はそれほど大規模なものではないことも、この表を一見すれば分かるだろう。

しかし、華本型と李本型とを細かく比べてみると、前者の「號山逢姪三十難」と後者の「號山逢姪二十八難」のように、難の数字がずれているだけで、事件を表す字句自体は変わっていないものが多い。そもそも、ただ聖僧歴難簿同士を並べただけでは、華本型では作品内容に対してどの程度の混乱があるのか、李本型や陳本

型ではそれをどこまで修正出来ているのか、といった肝心な情報は読み取れない。そこで、表1の各類型の諸難が、それぞれ百回本のどの回に対応する事件なのかを別の表で示す(表2)。

表2の見方を説明しよう。百回本には一回で完結する話柄もあれば、同じ妖怪との戦いが三回も四回も続く場合もある。その話のまとまりを区分し、登場する妖怪名・発生した事件・事件の起きた地名のいずれかによって仮に命名したのが、最上段の「話柄」欄である。その下の数字を示した二段は、上が第九回を江流和尚故事とし、下が第九回を江流和尚故事とする。本系統における回数である(両者の相違は第九回から第十二回までの間にしか見られないが)。その下の三段に、各版本の聖僧歴難簿の諸難を、該当すると思われる回に配置した。その際、第九回の扱いを巡って取り沙汰される第一難から第四難については、地の文で直接語られる回が無い場合、初めて事情が明かされる回に括弧に入れて表示した。一つの難と一回が一对一で対応している場合もあれば、一難が二回以上にまたがる場合や、逆に一回に二つの難が起きている場合もある。難が全く起かない回については、対応する欄に斜線を引いておいた。網掛けとしてある欄は、(1)華本型では難の順番がおかしかったために並べ替えたもの、(2)李本型では対応する並べ替え後の華本型と名称または順番が異なるもの(異体字だけの

相違や、難の数字が異なるだけの場合は対象としない。但し、避諱による相違は対象とする。(3)陳本型では李本型と名称または順番が変わったもの(同前)である。

表2を見ると、華本型歴難簿は、「著しい混乱がある」とは言っても、起きてもない事件が混じっていたり、起きた事件が聖僧歴難簿から漏れていたという訳ではなく、第六十六難から第七十七難までの配置が作品内容と大きく異なっているという点が混乱の大半を占めていることが分かるだろう。

また、李本型歴難簿も、表1で相違として扱っていた点の大半は作品内容に併せた並べ替えによるもので、難の名称自体を変えているものは計二十例と、表1を一見しての印象よりはずっと少ないことが分かる。もともと、それでもちょうど四分の一が書き換えられている訳であるから、各難の名称についても全面的な見直しが行われていたと考えて差し支えあるまい。また、華本型の配列のままでも必ずしも作品内容に反してはいないと看做し得る箇所でも、敢えて順序を入れ替えてより分かりやすくしている事例が見られる。詳細は後述するが、総じて本文で語られた内容に忠実なリストにしようという意識をはつきりと持って再編されたものだと言出来る。

一方、(2)李本型と(3)陳本型の相違は、殆どが五十五難から五十八難の間に集中しており、表2では他は三十三難と六十三難で誤字が

修正されているのと、第七難の小異と、七十六難で康熙帝の諱を避けて「玄」に人偏が加えられた(末画は欠いていない)のみである。

なお、李本型と陳本型の相違としては、むしろ表1のa・b欄を廃して代わりにc・d欄を加え、更にf欄の字句も改めている点の方が目を引くかもしれない。しかし、こちらの改変は李本型歴難簿に属する汪象旭箋評本において既に発生していたものである(詳細後述)。従って、最初の陳士斌詮解本は汪象旭箋評本系の版本を参照していたことが窺い知れる。このように、各系統間の継承関係を把握しやすいのが聖僧歴難簿の利点の一つである。

## 二、江流和尚故事に関わる四難について

聖僧歴難簿の各類型のより具体的な性格や特徴の分析に入る前に、まずどの類型にも共通する問題点で、かつ既に先行研究の積み重ねが十分にある、江流和尚故事に関わる第一難から第四難の扱いについて確認しておこう。この最初の四難は、どの類型の聖僧歴難簿でも、異体字の相違を無視すれば、「金蟬遭貶第一難」「出胎幾殺第二難」「滿月拋江第三難」「尋親報冤第四難」で変化は無い。

序章で述べた通り、これに対応する話柄が明代の百回本には無いことは、早くも康熙初年に編まれた汪象旭箋註本の第九回の評で既に指摘されていた。それに気付いた孫楷第氏が『東京目』において、

明代の百回本では江流和尚故事のあらずしが第十一回の韻文で簡単に紹介されるに止まることを指摘しているのも序章で既述の通りである。ここでその第十一回の韻文の全体を、台湾故宮藏世徳堂本によつて引いておこう。

靈通本諱號金蟬	只為無心聽佛講	轉托塵凡苦受摩
降生世俗遭羅網	投胎落地就逢凶	未出之前臨惡黨
父是海州陳狀元	外公總管當朝長	出身命犯落紅星 <sup>マヤ</sup>
順水隨波逐浪決	海島金山有大縁	遷安和尚將他養
年方十八認親娘	特赴京都求外長	總管開山調大軍
洪州剿寇誅凶黨	狀元光蕊脫天羅	子父相逢堪賀獎
復謁當今受主恩	靈烟閣上賢名响	恩官不受願為僧
洪福沙門將道訪	小字江流古佛兒	法名喚做陳玄奘

確かに、第一〜四句が第一難、第五〜八句が第二難、第九〜十二句が第三難、第十三〜十六句が第四難にそれぞれ対応していると認められよう。従つて表2では、華本型でも李本型でも、この四難は第十一回に括弧に入れて配置する処理とした。

一方、陳本型の例に挙げた静嘉堂藏陳士斌詮解A本では、第九回で江流和尚故事が詳しく語られている。しかし、第九回には玄奘の前世がなんという仏だったかは語られていないので、第九回には第二難から第四難までを配置した。その設定は第十二回で玄奘が再登

場した際の地の文で初めて語られるので、その位置に第一難を括弧に入れて配した。

それらとは別に、表2ではどの類型においても、第八十一回にも括弧に入れて第一難を再掲する形とした。これは何故かと言うと、玄奘の前世が釈迦如来の二番弟子だった金蟬長老であるという設定は第十一回なり第十二回なりで明かされ、その後も本文の中でちらほらと触れられているのだが、その金蟬長老が下界に転生して取経の苦難を経なければならなくなった原因が如来の説法中に居眠りをしたという粗相であり、その際に左足で米粒を一つ踏み潰してしまつてもいたので下界で三日間病に伏せる因縁にあるのだということが、第八十一回で玄奘が病を得て寝込んだ際の悟空の言葉で初めて明かされるからである<sup>10</sup>。中野美代子氏はこのことに関して、

三蔵が西天取経の旅で受ける八十一難の内容は、第九十九回において明かされるが、その第一難は、第十一回の玄奘登場の際の詩の冒頭で暗示されている(二)三九頁)。とはいえ、「仏の講義にふとうわの空」の具体的内容が明示されるのは、この悟空のことばが最初である。八十一難の第一難が第八十一回で明かされるところに、『西遊記』の構成において数字(とくに「九」と「七」)が重要な役割を果たしていることの一端をみることでできよう。

と指摘している<sup>1)</sup>。確かに第八十一回で九×九＝八十一難の最初の難を振り返るというのは意図的な処置らしく感じられる。そこで、表2では第八十一回的位置にも第一難を配する処置を採っておいた。

### 三、百回本の構成に関する先行研究

『西遊記』の構成において数字（とくに「九」と「七」）が重要な役割を果たしている」という中野氏の所説について、ここでもう少し詳しく抑えておこう。これは中野美代子『西遊記』西天取経故事の構成——シンメトリの原理——（『東方学会創立五十周年記念東方学論集』所収、東方学会、一九九七）で提示され、前掲『西遊記——トリック・ワールド探訪——』（以下『探訪』と略称する）において詳しく検討された、百回本は話柄の排列順序を回数数字を強く意識して綿密な計算の上で決めているという仮説<sup>2)</sup>に基づいている。中野氏の仮説は多岐に渡る壮大なものであるが、本論での問題意識に関わる点を中心に要点をまとめてみたい。

まず、数字「七」の仕掛けは、そもそものは田中智行『西遊記』大成の前夜』（『饗養』第二号、一九九四）の「世本においては、特別な意味をもった物語が、意識的に七に関係する回数の回に配されている」という指摘によって発見されたものであった（『探訪』八九頁）。

田中氏は、

①第七回……いわゆる「大鬧天宮」故事の最後の回。八卦炉から飛び出して暴れる孫悟空を、釈迦如来が五行山下に閉じ込める。

②第四十九回……通天河（長安から西天までの十万八千里の道程の中間点にある）に住む金魚の精を観音菩薩が収服し、魚籃観音の姿を現じる。その後、救われた三蔵たち一行は、大海亀の背に乗って通天河を渡る。

③第七十七回……釈迦如来が、文殊・普賢両菩薩らと共に獅駝国に赴き、獅駝嶺獅駝洞の三人の魔王を収服する。

④第九十八回……三蔵一行が西天に到着する。

の四回を挙げた上で、「今のところ、確実に思われるのは以上の四点であるが、①と③は、釈迦如来が全編を通してただ二回西天を離れる箇所であり、一方②と④は、「七」に関係する回数と同時に、四十九と九十八という倍数の関係にあり、これに取経の旅の中間点とゴールという関係を重ね合わせたものと思われる（言うまでもなく、四十九は七の二乗である）」と指摘している（田中前掲論文八六頁）。

もう一方の数字「九」については、作中に散りばめられた七十二般変化（孫悟空の変化の数）・八十一難・五千四百日（三蔵が長安を発つてから西天到着までに要した日数）・一万三千五百斤（孫悟空の如意金箍棒の重さ）・十万八千里（長安から西天までの距離かつ孫悟

空が舳斗雲の術で飛べる距離）その他の数字が、いずれも九の倍数であることを中野氏は既に指摘していた<sup>13</sup>。このうち、五千四十日という数字は、一年三百六十日としてちょうど十四年に当たるが、第九十八回で三蔵が釈迦如来から頂いた經典の巻数である五千四十八と旅の日数とを一致させる必要があるために三蔵に唐に經典を伝えた上で八日後に再び西天に戻って来させるべきことを観音菩薩が如来に言上していることと、五千四十八巻の經典というのは『開元釈經錄』に最初に収められた經典の巻数に基づくことを指摘した上で、まず巻数があり、次いで巻数に日数を合致させるという設定があったために、往路の日数がそれに合わせた満十四年〓五千四十日である必然性があつたと中野氏は説いている（『探訪』五八頁）。

これらを踏まえた上で、中野氏は百回本の構成に「ふたつの中心軸」を見出した。一つは西天まで残り五万四千里、つまりちょうど半分まで来たことが明示される通天河を渡り終える第四十九回で、田中氏の指摘した七の倍数の回に当たる。もう一つは、三蔵が第十回で長安を出発して第九十八回で西天に到着していることから、そのちょうど半分の四十三回分を消化した第五十五回である。そして、この二つの中心軸のどちらかを挟んで、例えば第三十二〓三十五回の金角・銀角の段と第七十四〓七十七回の獅駝洞の段という構造的に良く似た話柄同士が第五十五回を中心軸としてシンメトリー

をなす位置に配置されているように、構造的に類似した話柄同士がシンメトリーに位置するように百回本の全体が構成されている、というのが中野説の骨子である（『探訪』六〇〓七〇頁）。

中野氏は『探訪』六四〓六五頁の図6において、意図的にシンメトリーに配置されていると看做された十三の事例を挙げるが、そのうち七つが第五十五回を中心軸とするペア、三つが第四十九回を中心軸とするペア、残る一つが第四十三回の黒水河の段を中心軸とするペアである<sup>14</sup>。なお、この第四十三回に関しては、西天取経を描く八十六回分のちょうど半分の四十三という数字だけをスライドさせたものとして、「サブ中心軸」としての役割を帯びているのではないかと中野氏は説明している（一〇七頁）。また、中野氏は第二十二回の流沙河で沙悟浄を加えて一行が勢揃いしてから第九十八回で西天に着くまでに登場する河が「たがいにかわめて近接した」三本しかなく、その三本は中心軸である第四十九回の通天河の段と、それを挟んで互いにシンメトリーに配置される第四十三回の黒水河の段と第五十三回の子母河の段とであることも指摘している（九二頁）。

中野氏は更に、前述の第八十一回で第一難の詳細が明かされることや（七七頁）、「河図」における数字の方角配当で東に八が配当されており、東は五行の木が配当される方角ということで、八の二乗数である六十四回に植物の精が唯一登場する荊棘嶺の段が置かれて

いると説明出来ること(同)など、シンメトリーとは別に、回の数  
字を意識して話柄の配列が行われていると思われる事例を、二乗数  
の回を中心に幾つか挙げている。

中野氏はまた、『周易』冒頭の「乾元亨利貞」という言葉を孫悟空  
が術を使う際の呪文として唱える箇所が第六十五回と第七十七回と  
に見えるが、これはそれぞれ第一回から数えた場合と第十三回から  
数えた場合とで、六十四卦が一巡りして最初に戻ったことを表明し  
ており、百回本の各回には第一回からの巡りと第十三回からの巡り  
という二通りの卦が配当されているとする西孝二郎氏の説<sup>15</sup>を挙  
げて、百回本の構成における数字へのこだわりを強調している(七  
八頁、一四九―一六五頁)。

その上で、中野氏は『探訪』第三章を通して、世徳堂本が最終的  
に集大成された際には、「先行テキストに盛られた話柄をバラバラに  
分解し、部品と化してから、まったく新しい部品とともに組み立て」  
(一二〇頁) という工程が採られたと想定し、その際にシンメト  
リーの原理や、回数 of 数字と話の中身との関連付けや、七の倍数の  
回への重要話柄の重点的配置や、六十四卦の各回への配当などとい  
った複雑な諸要素が綿密な計算の下に盛り込まれて行ったと推測し  
ている。但し、百回本の随所に見られる矛盾の存在から、その際に  
本文を最終的に書きあげた人物は一人ではなく、話柄によって執筆

者が異なるだろうとも想定されている。

要するに、中野説に従うならば、現存の百回本は、直接の祖本と  
なった先行テキストから話柄の配列順序を大きく変更することで成  
立したことになる。

また、現存の百回本の話柄の配列順が先行テキストから大幅に変  
更されたものである可能性の指摘は、近年では中野氏とは異なる視  
点からもなされている。

例えば、大塚秀高氏は、「通天河はどこに通じていたのか——『西  
遊記』成立史の一齣——」(『埼玉大学紀要(教養学部)』第三十八卷  
第二号、二〇〇三)において、世徳堂本に先行するテキストでは通  
天河が西天にあり、そこからの復路も一定のボリュームを割いて語  
られていたのではないかと推測した上で、その続編たる『西遊記』  
の復路(『中国文史論叢』第二号、二〇〇六)七四頁で次のように  
述べている。

原通天河を分身させ、その一方を通天河として西天取経の旅  
の半ばに置き、かつての復路を往路の後半に模様替えするにあ  
たっては、その仕掛け人も、それにふさわしい改変を施したは  
ずである。そもそも復路のボリュームは、『大唐三蔵取経詩話』  
の復路がそうであったように、往路と等量ではなかったはずで  
ある。それゆえ、西天取経の半ばと規定された通天河以降、か



つての復路には、大幅な増補が加えられたはずである。ただし、かつての復路、あらたな往路の後半のみにそれが加えられたわけではなかったろう。新たに往路の前半となったものの往路から通天河以降に移されたものもあったろう。もちろん、その穴を埋めるべく、往路の前半にも新しく創作された難が加えられたとみてよい。したがって、古い由来を持つ難は、世徳堂本の通天河以前のみならず、以後にも配されているに相違ないのである。

また、小松謙氏は注6論文において、「話説」「話表」や「有詩為証」などのテクニカルタムの回ごとの使用状況の分析結果によって、第五十二回までが四つの連続した部位に分けられることを指摘した上で次のように述べている（二八四～二八五頁）。

『西遊記』の原型として、まず元本が存在したことは間違いない。推定される元本における叙述の順序が現在の『西遊記』とは大きく異なる点から考えて、元本は一度解体されたのである。その後、再編集されるまでに、部位ごとにまとめられていったのではないか。「悟空出身伝」のように独立した物語となりうる部分が独立して成長したことについては特に問題はないが、その他の部分がなぜ部位ごとに異なる形でまとめられたかは定かではない。あるいは、最終的にまとめる際に手を加えた

編集者が部位ごとに異なり、それぞれの癖が出たということかもしれない。こうして各部位は一定のパターンでまとめられるが、そこに集められた個々の物語は、多様な原拠から集められたものであり、ある程度もとになったものの特徴を刻印されている。

このように、近年の研究においては、現在見られる百回本の話柄の配列順序が、成立過程でかなりの組み替えを経たものである可能性が様々な角度から指摘されている。また、部位によって最終的に本文を整えた人物が異なる（或いは本文の成立時期自体が異なる）というのも、漠然とした共通理解になりつつあるようだ<sup>16</sup>。

#### 四、華本型歴難簿の可能性

そうした視点に立つてみれば、華本型歴難簿は、現存最古の百回本である世徳堂本よりも古いテキストの話柄の配列順序に沿って作られたものだったと看做すべきではないだろうか。そのテキストから世徳堂本に至るまでのどこかの段階で大幅な改訂が行われて、華本歴難簿の六十六難から七十七難までの話の配列順序が最終的に現存の百回本の形に変更されたけれども、その際には聖僧歴難簿までは変更の手が及ばなかった、という考え方である。そして、李本型歴難簿は、この矛盾に気付いた人物が、作品内容に合致するように

修正したものではないか。

他の考え方は成立し難いことを確認しておきたい。例えば、華陽洞天主人校本型の聖僧歴難簿は単に杜撰であつたに過ぎないということはないか。だが、表2で網掛けとした六十六難から七十七難までの計十二難を除けば、他の難はきちんと作品内容に即した順番に並んでいる。また、問題の六十六難から七十七難までを含めても、作中で起きてもない事件が混じっていたり、逆に作中で起きた重大事件が明らかに漏れていたりとすることは一切無い。それに、配置がおかしい六十六難から七十七難までの間でも、連続した二難で一つの話柄に対応する六十七難と六十八難・七十六難と七十七難・七十四難と七十五難の三組が、いずれも別れ別れになることなく正しい順番で連続している。このように、むしろきちんとしている部分の方が多いので、これが全くいい加減に編まれたリストであるとは考えにくい。

それでは、作成過程での不手際によって一部の配列順だけがおかしくなってしまったというのはどうであろうか。だが、第四十三回に対応するべき七十二難・第六十四回に対応するべき七十一難・第八十五回から第八十六回に対応するべき七十難・第六十七回に対応するべき六十九難といった本来バラバラに配置されるはずの難に、何故か連続した数字が振られているという現状は、単なる不手際で

はまず生じ得ないだろう。まず内容を見なければ難の名前を決められるはずがなく、内容を見たならば同時に順番通りに数字を振ることも出来るはずだからだ。

こうして見ると、やはり華陽洞天主人校本型の聖僧歴難簿は古いテキストの話柄の配列順序を反映していると考えるのが最も自然であろう。その仮定の下に表2を見ると、第四十三回に置かれている黒水河の段は、七十二難の位置から三十三難の次の位置へと、大幅に前倒しされたことになる。この段は中野氏が意図的にその数字の回に配置されている話柄の一つとして例示しているものであった。同様に中野氏が第六十四回に置かれることに数字上の意味を見出している棘林吟詠（木仙菴談詩）の段も、七十一難の位置から五十二難の次の位置へと前倒しされている。

また、小松注6論文では、「話説」を使う回と「話表」を使う回にほぼ完全な棲み分けがあり、大まかにはそれぞれが固まって分布している傾向があることから、分布のかたまりごとに書き手が異なる可能性が指摘されている。そのうち、第五十九〜七十七回は全体に「話表」が使用されるが、第六十七・七十一・七十三回<sup>17</sup>では「話説」が使われているとして、このかたまりを更に第六十六回までは「話表」のグループ、第六十七回以降は「話表」と「話説」の混合グループと小松氏は二分している（二八六頁）。ここで問題視されて

いる第六十七回は、華本型歴難簿からは、六十九難の位置から五十四難の次の位置へと前倒しされたものと読み取れる。そうすると、元々は「話表」を使う第五十九く六十九回（但し、前倒しされて来た第六十四・六十七回は除く）がよりはっきりした「話表」のかたまりを成していたことになる。そこへ後から「話説」を使う第六十七回が動かされて来たために、分布の区切りが見えにくくなってしまったのではないだろうか。

このように、華本型歴難簿で位置が乱れている六十六難から七十難までの中でも、特に大きく位置を違えている三つの難は、いずれも配置を変更されたものである可能性を、華本型歴難簿以外の根拠からおぼろげながらとらえることが出来る。してみれば、華本型歴難簿は古いテキストの話柄の配列順序を反映しているという仮説の蓋然性は、より確かなものとはなるまいか。

また、もう一つ傍証として、尾崎勤『封神演義』第九十九回の問題「『汲古』第六十五号、二〇一二」において、『封神演義』の第十九回に見える作中で死亡した登場人物を神に封じる際のリストがあらゆる木版本で作品内容にそぐわぬものとなっていることについて、木版本のリストのような形で登場人物の生死が処理されていたテキストが祖本としてあったのではないかという、筆者の華本型歴難簿に対する見解と全く同様の見解が示されていることも挙げてお

こう。

但し、先行研究で推定されて来たことと、華陽洞天主人校本型の聖僧歴難簿から推測される古いテキストの話柄の配列順序は、当然のことながら必ずしも常に都合良く一致する訳ではない。華本型歴難簿は、前述の大きな前倒しの三箇所を除けば、六十五難までの話の配列は、現存の百回本の第七十九回まで順番通りに並んでいる。問題の六十六難から七十七難に関しても、前倒しされた三つの難を除けば、現存の百回本の第八十く九十二回という連続した範囲内で組み換えに止まっている。

つまり、現存の百回本の第七十九回以前の話柄の配列順序は、第四十三・六十四・六十七回の三箇所が第八十く九十二回附近から前倒しされて来た以外は、華本型歴難簿の元となった古いテキストから変更されていないということになる。すると、中野氏が想定されたほどの全面的な話柄の組み換えが施されたことがあるとしたら、華本型歴難簿の元となった古いテキストよりも更に古いテキストでの処理だったと考えざるを得ない。

しかし、その更に古いテキストの定めた話柄の配列順序は、世徳堂本などの現存の百回本とは違うのだから、中野氏が読み解いているような数字の仕掛けや中心軸の設定の多くは出来なかったのではないか。もし数字の仕掛けや中心軸の設定を意図的なものとして認

めるのであれば、それは現行の百回本と同じ話柄の配列順序を定めた時点でなされたものと見なければなるまい。その時点は必然的に華本型歴難簿の元となった古いテキストよりも新しい段階での処理ということになるから、そうした仕掛けを施した人物は、現存の百回本の第七十九回までの話は殆ど動かしていないということになる。

また、大塚氏が想定される通天河を西天に置くテキストがあったとすると、通天河が既に最終盤の凌雲渡と分離して中ほどに配置されている華本型歴難簿の元となった古いテキストは、それよりも新しいということになる。大塚氏は通天河が中ほどに移されて以降のテキストを一括して「世徳堂本西遊記」と総称して考察を進めているので、その辺りは見直しが迫られよう。

小松氏の説に関しても、第六十七回の「話説」の対立についてはたまたま華本型歴難簿によれば綺麗に整理出来たが、それ以外の回を華本型歴難簿によって並べ直した場合、現行の百回本の配列によって一つのグループと分析されている第八十五〜九十回のかたまりが崩れてしまうという問題がある。そもそも、華本型歴難簿から話柄の配列順が変更された時に、本文の書き換えがどの程度行われたのか、それとも殆ど行われなかったのかといった検討課題が出て来ることになるであろう。

## 五、作中の年数の矛盾と華本型歴難簿

華本型歴難簿で配列が「乱れている」箇所から、世徳堂本の本文に排列変更の痕跡が見出せる例を一つ挙げておきたい。

百回本全てに共通の設定として、玄奘は第十三回において貞觀十三年九月望前三日に長安を発つてから、第九十八回到西天の釈迦如来の下で經典を受け取るまでに、ぴったり十四年の五千四十日かかったことになっている。前述の通り、この十四年という数字には經典の数に合致させるという明確な作意があつて、無意味な数字ではない。

それを念頭に置きつつ、台湾故宫藏世徳堂本の第八十八回に見える、天竺国玉華県の王府での王子と玄奘の会話を見てみよう。直前の三蔵一行が玉華県城に入るところで「此時光景如梭、又值深秋之候、但見」という季節描写があるので、これは九月の出来事である。

（王子）問道：「國師長老、自你那大唐至此、歷徧諸邦、共有幾多路程？」三蔵道：「貧僧也未記程途、但先年蒙觀音菩薩在我王御前顯身、曾留了頌子言：『西方十萬八千里』。貧僧在路已經過一十四遍寒暑矣」。王子咲道：「一十四遍寒暑、即十四年了。想是途中有甚耽閣？」一言難盡、萬蟄生魔、也不知受了多少苦苦楚、終到得宝方」。（王子は「國師長老どの、あなたは大唐を出られてよりこの地まで諸国を遍歴して来たというが、どれほどの道

のりでありましたかな？」と問いました。三蔵は「拙僧もはつきりとは分かりかねますが、先年観音菩薩さまが我が王の御前に御姿を現された折に頂いた頌には、西方十万八千里と申しております。拙僧は道中で既に十四度の寒暑を過ごして参りました」と答えます。王子は笑って「十四度の寒暑を過ごしたということであれば、十四年も経っておるのだな。さぞかし難儀も多かったであろう」と聞き、三蔵は「それはもう一言では言い尽くせませぬ。数多の魔障に遮られ、とてつもない苦難の果てに、ようやくこちらにたどり着きました次第です」と申し上げました。

ここでは三蔵が「貧僧在路已經過一十四遍寒暑矣」と言い、王子は「十四遍寒暑、即十四年了」と理解している。三蔵は第百回で唐に戻って太宗に謁見した際にも「總記菩薩之言、有十萬八千里之遠。途中未曾記數、只知經過了一十四遍寒暑」という非常に良く似た台詞を言っており、そちらの場面は貞觀二十七年九月であることが明記されている。従って、この第八十八回の会話は、貞觀二十七年九月の初め、つまりはあと数日で西天に到着するという時期に設定されていることになろう。そう考えると、三蔵の「一言難盡、萬蟄生魔、也不知受了多少苦苦楚、終到得宝方」という台詞も効果的なものと思えて来る。

だが、百回本全体の構成からは、釈迦如来の待つ雷音寺に到着する第九十八回までにまだ三犀牛怪・玉兔精・銅台監禁の三つの話柄を残しているので、第八十八回が貞觀二十七年九月では辻褄が合わないのだ。第九十一回からの三犀牛怪の話は元宵節の時期に設定されているから、その時点でもう貞觀二十八年正月になってしまう。また、銅台監禁が始まる第九十六回の冒頭には「正是春盡、夏初時節」という季節描写がある。よって、第八十八回を貞觀二十七年九月として描くのは、明らかな矛盾であると言えよう。

何故この矛盾が生じたか。それは、第八十八回の本文が、元々は雷音寺に着く直前の話柄として書かれたものだったからなのであるまいか。その後に話柄の排列順の変更や新規話柄の追加が行われた結果、雷音寺の直前に設定されていたこの場面が随分前に押しやられてしまったという考え方である。これを間接的に支持するのが、華陽洞天主人校本型の聖僧歴難簿では、第八十八回を含む九頭獅子の話が、百回本の本文とは逆に、「元夜観燈七十四難」を含む三犀牛怪の話よりも後に配置されているという点だ。これならば、少なくとも貞觀二十八年の正月が来てしまう矛盾は生じない。

もともと、華本型歴難簿でも九頭獅子の話の後にまだ玉兔精の話と銅台監禁の話があるので、第八十八回が貞觀二十七年九月に設定されたのは、華本型歴難簿が依拠した古いテキストよりも更に前の

段階であったと考える必要がある。その後、華本歴難簿のように後に玉兔精の話と銅台府の話が追加（または前にあったのを先送り）され、更に世徳堂本の形に再度並べ直されたという訳だ。

もしもこれが確かであれば、第八十八回の先に引いた場面の文章が書かれてから、百回本の話柄の配列順が現在見られる形に固まるまでには、話柄の排列順の見直しが複数回行われていたということになる。このような示唆を与えてくれる華本型聖僧歴難簿は、百回本成立前史を探る上で貴重な資料となり得るのではなからうか。

## 六、華本型歴難簿の版本間における異同

以上、華本型歴難簿の持つ意味について考察して来たが、ここで台湾故宫蔵世徳堂本以外の版本における華本型歴難簿がどうなっているのかを確認しておこう（表3）。比較対象の版本が増えた分だけ縦に長くなったが、表3の見方は基本的に表1に同じ。但し、網掛けとしたのは、表内の他の版本と異体字以外の相違が生じている難である。各版本の詳細については第二章で述べるが、現存する華陽洞天主人校本系の伝本は、筆者未見の日光輪王寺慈眼堂天海蔵所蔵の世徳堂本と唐僧本の二本を除いて全てこの表に収めた。なお、この部分に限って言えば、同じ版木で刷られているのは②と③だけである（④と⑤は基本的には同版だが、聖僧歴難簿を含む葉は⑤では

補版葉となっている。詳細は第二章注29参照）。

全体を通して、覆刻・翻刻の際の単純な誤刻（④と⑤の十九難、④の七十七難・八十難・f、⑤の四十一難、⑥の五十七難など）や、印刷の不良で筆画が見えなくなっている事例（①の三十九難、②の六十一難、③の四十二難など）が稀に見られるものの、どの版本でも有意な改変は殆どなされていない。異体字を無視すれば、有意な改変は①～⑤が全て「女國留 四十四難」という形で意味をなしていない四十四難を、⑥が「女國招留四十四難」として意味を通しているのが認められる程度である。

版本系統上の問題を考える上では、四十三難は注意すべき事例となる。ここは①③では「吃水遭愆四十三難」となっている。飲んだ者を妊娠させる効果がある子母河の水を三蔵と八戒が飲んでしまったことを指す難なので、「愆」は『左伝』昭公二十六年への杜預注にある「愆、悪疾也」という意味で理解出来る。ところが、②は③と同じ版木を用いながら、「愆」の箇所が墨格である。④⑤ではその字が心の付かない「衍」になっている。「衍」ならまだ「愆」と通用もするだろうが、⑥では更に「行」となって意味をなさなくなってしまうという。ということは、①③の形から④⑤の形が作られ、更に④⑤の形から⑥が作られた、ということになる。単純に①か③そのものを底本として④や⑤が作られ、④か⑤そのものを底本として

⑥が作られたと考えると良いかどうかは他の事例と併せて慎重に検討すべき点ではあるが、少なくとも逆の順番は考えられないというのは認められるはずだ。

また、同じ世徳堂本であるはずの①と②③の間で、異体字の相違が非常に多く認められる。これは①と②③が異版であるためで、詳しくは第二章で述べるが、①では「難」や「國」など画数の多い正字になっている箇所が、②③では「難」「难」や「国」のような略字体になっている事例が非常に多く見出せることを確認しておきたい。

なお、百回本『西遊記』の諸版本の比較という本題からは外れるが、②③は三十九難より前では「難」の大半を略字とするが、四十難以降では「難」の殆どを正字で彫っている。これは、四十難から葉が変わるためだ。更に詳しく見ると、三十九難以前では略字といっても「難」と「难」が混在している。表3では読み取れないが、これにも一定の傾向がある。①②③の聖僧歴難簿は一行に三難ずつを配し、「難(難、难)」字の高さを全て揃えている。つまり、「二、四、……三十四、三十七」の各難、「二、五、……三十五、三十八」の各難、「三、六、……三十六、三十九」の各「難」字がそれぞれ同じ高さに位置しているのだが、上段の「一、四、……」には「难」と「難」が混在し、中段の「二、五、……」は殆どが「難」、下段の「三、六、……」は殆どが「难」という形で傾向が分かれている(図1)。こ

れは、この版本では横一列に並んだ文字を同じ刻工が担当し、刻工の判断で適宜版下の字体を改めて略字体で彫ることがあったことを示唆しているのではないだろうか。細かな異体字の相違まで気にして翻字した所以である。

## 七、李本型歴難簿の意義

続いて、李本型歴難簿について検討してみよう。最初に表2によって華本型歴難簿からの変更点を一通り確認しておこう。

まず第六難は、穴に落ちたことをきっかけに妖怪に捕らわれて従者を食べられてしまうという話なので、華本型の「折從落坑」よりも李本型の「落坑折從」の方がより本文に即していると言え、細かい点まで気配りが行き届いていることが分かる。

第七難の文字の相違については後述する。

第十難と十一難は、華本型とは入れ替えられている。この話の筋は以下のようなものだ。——第十六回で三蔵が観音院の老僧に観音菩薩から賜った袈裟を見せたところ、一夜限りの借用を申し出られ、やむなく許可した。あまりにも見事な袈裟に欲に駆られた老僧は、夜中に三蔵一行を焼き殺して袈裟を独占しようとたくらむが、悟空に気付かれて逆に寺を焼かれてしまう。その火事を見てやって来た黒大王が袈裟を見つけ、そのまま自分の黒風山黒風洞に持ち帰って

しまう。続く第十七回で悟空は黒大王と幾度も戦い、観音菩薩の助力もあつて大王を収服し、袈裟を取り戻す。——よって、老僧に袈裟を貸した時点で「失却袈裟」だと解釈すれば、華本型の配列でも間違っているとは言えまい。しかし、それでは第十六回に二つの難が配される一方、厳密に言えば第十七回に配される難がなくなってしまうことになる。その点、李本型のように順序を入れ替えれば、第十六回に「夜被火焼」、袈裟を取り戻すための戦いが描かれる第十七回に「失却袈裟」を充てていると考えられ、バランスが良くなる。これも微に入り細を穿った改変と言えよう。

一方、十八難と十九難の変更に、そこまでの必然性は感じられない。第二十四回で五莊観に着いた三蔵は、鎮元大仙から留守を預かる弟子に出された人参果を本物の赤子と思い込み、食べようとしていない。それを食べたがった悟空・八戒・沙僧が三蔵に隠れて騒動を巻き起こし、ついには第二十五回で人参果の木を倒してしまう。帰って来た鎮元大仙に取り押さえられた一行は木を復活させることを約束し、悟空が第二十六回で世界中を飛び回った挙句に、観音菩薩の助力を得てついに木を甦らせて頂く、という筋立てだから、これは華本型でも李本型でもどちらでも問題なからう。強いて言えば、第二十六回では五莊観から飛び出して世界中を飛び回るから、「五莊観中」では相応しくないとの判断であろうか。だとしたら本当に何

とも細かいところまで気を配っているものである。

二十一・四十・四十六・四十七・五十四・五十五・八十の各難は難の名称のみの微調整で、どちらでも良さそうなものが多い。但し、二十一・五十五・八十難は固有名詞（地名）をはっきりさせたという利点はある。

華本型で問題のあった四十三難と四十四難については、前者は華本型の「愆」「衍」「行」はいずれも継承せず、新たに意味の通る「毒」としている。これについては、ここを墨格とする版本に拠ったのか、或いは意味を分かりやすくしようとの処置か、どちらも考えられるので、これだけでは何とも言えないところだ。後者は空格のせいの意味不通だった華本型の多くから意味の通るように改めている。

二十五難は中野氏が華本型歴難簿と李本型歴難簿が大きく変わりはめる箇所として指摘するものだが、この部分に限れば、第三十三〜三十五回を「蓮花洞高懸二十五難」のみで片付けてしまう李本型よりも、第三十三回に二つ、第三十四〜三十五回に一つと、バランスはやや悪いながらも三回に対して三つの難を配する華本型の方が明らかに勝る。華本型で本文に相違する点がある訳でもなく、悟空と金角大王・銀角大王が五つの宝貝を奪い合う騙し合いや、その一つの名前を呼ばれて返事をするとか吸い込まれるという宝貝に対抗するために悟空が「孫行者の弟の者行孫」「そのまた弟の行者孫」など



という滅茶苦茶な偽名を次々に名乗るといような精彩ある場面をきちんと反映出来ている。おそらく、李本型ではこれ以降の難を増補修正した結果、代わりにどこかで二つを削る必要が生じ、たまたまここを削ることにしたというところではあるまいか。

二十六難からは華本型と数字がずれ始めるが、李本型の六十六難までは、基本的に正しい位置に並べ替えているだけである。この間の細かい名称変更については既述の通り。

第八十回に相当する李本型の六十七難からは、名称の大幅な変更が多くなるほか、華本型が二回に一難を充てていたのを各回一難に改める処置が二箇所で見られる。ちょうど華本型が連続して混乱を見せている位置であるから、順序を直す際に名称も全面的に見直したのであろう。李本型のどの名称も適切なものである。

但し、華本型においても、話の内容にそぐわない名称になっているのは実は一つだけであった。その一つとは第八十七回相当の難で、華本型では「鳳仙国救雨」とするが、この地名は李本型の「鳳仙郡」が正しい。もしかすると、華本型に基づいた古いテキストでは、本文でもこの地名は郡ではなく国だったということかもしれない。

それ以外の改変は、李本型の七十一・七十五・七十六の各難がいずれも地名を入れたものになっている。華本型の混乱範囲を過ぎた七十九難もその例であるから、李本型では全体的になるべく地名を

入れる方針で難の名称を改めていたようだ。但し、九頭虫の段や七蜘蛛怪と多目怪の段など、対応する難に地名が出ていないままの話柄も残ってはいる。

一通り李本型歴難簿における改訂の様子を辿ってみたが、全体的に非常に良く本文を読み込んだ上で、作品内容に即したリストを丁寧に作り上げていると評価出来る。この聖僧歴難簿の改変という一事だけをもつてしても、太田辰夫氏の「繁本のうち李卓吾本の本文は世徳堂本とほとんど差がなく、両者は同一のものと云ってよい」という見解は覆せるだろう<sup>18</sup>。また、世徳堂本と同じ話柄の配列順序を採る百回本の中で初めて作品内容と聖僧歴難簿の矛盾を解消したテキストが李卓吾批評本であったということと、現在見られるあらゆる清本系テキストの聖僧歴難簿が李本型もしくはそれを微修正した陳本型である（即ち、李卓吾批評本は全ての清本に共通の源流祖本となっている）こととをもつてすれば、それが『西遊記』成立史上における独自の価値とまで言えるかどうかはともかくとして、少なくとも百回本『西遊記』の展開史上においては、李卓吾批評本には極めて大きな価値があると認めることが出来る。

李本型歴難簿の持つ意義を確認したところで、この型の聖僧歴難簿を持つ版本間での異同も概観しておこう（表4）。表の見方は表3に同じ。前述の通り、ここに属するのは李卓吾批評本系・汪象旭箋

評本系・張書紳註本系の各版本だが、それぞれ伝本が華陽洞天主人校本系よりも遥かに多いため、主なものだけを収録した。なお、各版本の詳細は第四章と第六章とで述べる。

華本型の場合と同様に、この型の中での相違はあまり認められない。第一難から八十難までの間の有意な改変としては、⑥⑧の三十三難で華本型歴難簿以来一貫して誤っていた「車庭」を正しい地名の「車遲」に直していること（但し、この修正は⑥⑧に先行する陳本型の陳士斌詮解本系で先になされている）、⑧の六十三難で意味のとり難かったそれまでの「通災」を「遇災」に改めていること（これも陳士斌詮解本系で先になされている）、⑦⑧の七十六難及び⑧の六十五難の避諱、⑦の五十七難がやはり既に刊行されていた陳本型歴難簿の影響を受けて変わっていること（後述）くらいだろう。①の六十一難以降に空格が散見されるのは、これが後印本で版木に相당한傷みが見られるためであって、版本作成時点での問題ではない。

また、先にも述べた通り、a・b・c・d・fの各欄に関しては、陳士斌詮解本系に先行する康熙初年の⑤（汪象旭箋評本系の蝸寄刊本、第六章参照）の時点で、既に陳本型と同様の改変が行われていたことが分かる。つまり、陳本型歴難簿は、汪象旭箋評本系の版本の聖僧歴難簿を参照して作られていたことになる。それでも汪象旭箋評本系を李本型歴難簿に分類しているのは、作品内容に関わる五

十五難から五十八難までの形態の方をより重視したためである。

更に、e欄を良く見ると、①④は「路逢十萬八千里」、②③⑤⑥は「路過十萬八千里」、そして⑧は「路經十萬八千里」と、二文字目だけが微妙に変化していることが分かる。これは華本型歴難簿では全て①④と同じ形であったから、版本系統を考える上で重要な相違である。

類似の事例として、第七難の地名は版本間で表記の異同が激しく、②⑧では「又」に作る文字を、①④は華本型に属する殆どの版本と同じ「乂」としている。なお、いずれの版本でもこの地名は目録や本文ではそれらに「义」「又」を加えた四種のうちいずれか一つに山偏が付いた形で表記されている箇所が多い。そのため、⑤⑥⑦の聖僧歴難簿では、これをそちらにあわせた「𡵓」に改めている。

この二つの状況のみから単純に判断すると、華本型に近い①や④の方が、字が変わっている②や③よりも先行するように見えるが、果たしてそのように考えて良いのかどうかは、第四章で検討する。

最後に、汪象旭箋評本系の⑤と⑥では、「此一難分作二難」「一作二難」などの小字双行注が付いている。前者はもちろん「一つの話柄を分割して二つの難と数えている」という意味だし、後者もここでは通常の「ここの文字を「二難」とするテキストもある」という意味ではなく、前者と同じ意味で用いられているのは明らかである

う。話柄の切れ目に対する清初の読者の考え方を伝えてくれる貴重な資料である。但し、⑥には誤刻や漏れが多いので、第六章で見るとようにこの系統の初刻本そのものだと考えられる⑤によるべきことは申すまでもない。

#### 八、陳本型歴難簿について

残るは陳本型歴難簿である。まず表2によって李本型からの変更点を確認しよう。前述の通り、五十五難から五十八難までがまとまって変更されているのが、避諱や誤字を除けば李本型との殆ど唯一の相違点であった。

五十五難から五十八難は、李本型歴難簿でも作品内容に即して何の問題もない。にもかかわらずこのような改変が行われた理由は、李本型の五十七難が「拯救疲癯」という名称だったことによる。

これは五十六難の「朱紫國行醫」と一連の出来事を指しており、長年病に臥せていた朱紫國王を悟空が診察して薬を処方したところ、腹中に三年前から留まって病原となっていたちまきの塊を下すことが出来て、国王は快癒したという筋立てである。一連の行為とはいえ、第六十八回で診察することに決まるまでを描き、実際の診察から快癒までは第六十九回で描くので、各回に一難ずつを配した李本型歴難簿の処理には特に問題は無いだろう。しかし、一見すると

重複感があるのも事実である。

そして、「拯救疲癯」の「拯救」という語が、直前の第六十七回の回目「拯救駝羅禪性穩 脫離汗穢道心清」（内閣文庫蔵汪氏蝸寄刊汪象旭箋評本の本文による）という形で使われていることが変更の引き金となったと思われる。そこからの連想と、前述の重複感とによって、「拯救疲癯」の難は第六十七回に配すべきものと解釈して、難の名称もはつきり「拯救駝羅」と改めた上で、元々第六十七回に対応する難であった五十五難の直後に移動し、ついでに前後の五十五難と五十八難の名称も少しだけ変更したという訳だ。しかし、一回で一つの話柄が完結する第六十七回に二つの難を配し、逆に第六十八・六十九回の二回分には一つの難だけを充てるというのは、あまりバランスの良い処理とは言えない面もある。よって、陳本型歴難簿の段階での改変は、内容的にはあまり意味のあるものとは言えないだろう。

だが、本文系統間や個別の版本間の継承関係のメルクマールとしては、李本型と陳本型の相違は非常に役に立つ。この相違に着目することによって、それぞれ評注が全面的に異なる劉一明解本系・張含章註本系・含晶子評註本系が、いずれも先行する陳士斌詮解本系の本文を継承していることが簡単に確認出来るからだ。もちろん全体的な性格は詳細に本文を比較した上で論じるべきではあるが、後

出の三種類の新たな評注本に本文が継承されているとなれば、陳士斌詮解本もまた、百回本『西遊記』展開史上において重要な位置を占めるテキストであったと認められよう。

陳本型歴難簿を持つ版本間での異同は表5の通りである。見方は表3・4と同じで、所見の多くの伝本の中から必要最小限のものだけを採用した。各版本の詳細は第六章で述べる。この表からは、評注によって別系統に分類されるテキスト同士の間で、聖僧歴難簿の相違が殆ど見られないということが読み取れるだろう。また、違いが少ない分、四十七難や七十四難のような版本間ではつきりした違いが見られる例から、劉一明解本・張含章本・含晶子本が、それぞれこの型の聖僧歴難簿を持つ最も早い系統である陳士斌詮解本系の中のどの版本の系譜に直接連なるものなのか、という問題のヒントが得られそうだ。また、右の二難及びf欄の処理が全て一致している劉一明解本と張含章註本とは、異なる系統同士の中では特に近い関係にあるように見受けられる。

## 小結

以上、百回本『西遊記』諸版本における聖僧歴難簿の相違から読み取れる諸問題について概観した。本文とは話柄の配列順序が異なる華本型歴難簿には現行の百回本の成立以前のテキストの話柄の配

列順序を伝えている可能性があり、李本型歴難簿からは李卓吾批評本系が清本諸系統の共通の源流祖本であったことが読み取れるなど、注目すべき点が多々含まれていると言えよう。

なお、最後に一つ補足をしておくと、本論文では本格的には取り扱わないこととした分則本の陽至和編本と朱鼎臣編本では、いずれも三蔵が八十一難を経るという設定や、観音菩薩への報告時点で一難足りなかったために再び通天河に落とされるというくだりは見えるが、どの版本でも聖僧歴難簿自体は載せておらず、どの事件をどのような順番で難に数えているのかは明示されていない。

<sup>1</sup> 太田辰夫『西遊記の研究』（研文出版、一九八四）二六一頁。

<sup>2</sup> 一九六二年人民文学出版社排印本と一九八〇年人民文学出版社排印本はこれを底本としており、「出版説明」のこのくだりはどちらにも受け継がれている（後者では「前言」と題する）。

<sup>3</sup> 吳聖燮（吳聖昔）「版眼・破解『西遊記』版本承伝演變之秘的鑰匙——『西遊記』版本史『稿之一』（淮海工学院学报（社会科学版）第六卷第一期、二〇〇八）において、版本系統の分類の必要を説く文脈において、華陽洞天主人校系に属する版本に共通の特徴の一つとして聖僧歴難簿に大きな混乱が見られることが指摘されたことはある。しかし、それも相違があるということを指摘して版本系統を見分けるメルクマールとして利用出来ることを説くに止まっている。なお、口頭発表の形で論じられたことは、筆者の把握する限り二回ある。まず、二〇一一年九月に開かれた日本学術振興会特別研究費補助金特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の

研究」第九回研究会において筆者自身が行った口頭発表「明刊本『西遊記』版本問題の再検討」において、卒業論文の一部を紹介する形でこの相違について紹介し、以後の研究の展望を述べたことがある。そして、その発表を聞いておいでだった大塚秀高氏が、二〇一四年九月の中国古典小説研究会の大会におけるシンポジウム「いま書誌学・版本学について考える」の中での口頭発表『西遊記』の改作をめぐる」において、この相違が筆者の発見（厳密に言うところ「発見」ではなく、初めて価値を見出したという程度だが）であることに触れつつ、この問題についての初歩的な見解を披歴された。しかし筆者がディスカッションの際に博士論文においてこの問題を扱う予定であることを申し上げると、大塚氏はそれが審査されるまでは自分もこの問題を扱う論文は書かないとの配慮を示して下さった。聖僧歴難簿について今日までに先行論文が無いのは、このような事情にもよる。ここに記して大塚氏に心よりの感謝を申し上げる。

4 この句は別に「聖僧歴難簿」という固有名詞を示している訳では無く、「聖僧の歴難、簿に分明たり」と切るべきであるが、序章に引いた汪象旭箋註本第九回の評で「歴難簿子」と呼ばれていることも踏まえ、リストの呼称としては「聖僧（玄奘）の歴難の帳簿」ということでこれを用いることとした。

5 前者は『古本小説集成』と『明清善本小説叢刊』に、後者は『明清善本小説叢刊』と『続修四庫全書』（上海古籍出版社、一九九五）に影印を収める。但し、『明清善本小説叢刊』は底本の所在を明記せず、封面や刊記や蔵書印を消すなどの処理を行っているのに注意が必要。また、それに限らず、影印本では匡郭の欠けや不鮮明な文字に対して書き足しを行ったり、甚だしくは文字の憶改をしていることすら間々あるので、理想としては常に原本を確かめるべきであるし、それが叶わずとも可能な限り所蔵機関の提供するマイクロフィルムや画像データなどの加工が施されていない

い資料によつて調査すべきことを強調しておきたい。これは書誌学の分野においては全く初歩のことだが、文学研究者には周知されていないのが現状と感ずるので、敢えて贅言する次第である。

6 区切りと命名にあたっては中野前掲書六四～六五頁所載の「西天取経」故事のシンメトリの原理」と題する図での区分や、小松謙『西遊記』成立考（同氏『四大奇書の研究』第四部第一章、汲古書院、二〇一〇）の表などを参考にしたが、筆者の判断で適宜改めた。

7 中野前掲書七一～七二頁の表や、後述する汪象旭箋評本系の聖僧歴難簿に附された注などを参考にしたが、これも筆者の判断で適宜改めた。なお、聖僧歴難簿の掲載後に起きた第八十一難（唐土まで雲で送って貰う途中で、一つだけ足りなかった厄難の数を満たすために、第四十八回でも落ちた通天河に再び落とされる事件）を便宜上「再落通天河八十一難」と命名し、その事件が起きた第九十九回に配した。

8 第一難のみどの類型でも二箇所に配したが、その理由は後述。但し、個別の版本ごとに単純な誤字が生じている事例はある。表3・4・5参照。

9 原文「行者道：「你那里曉得、老師父不曾聽佛講法、打了一个盹。往下一試、左脚下躡了一粒米。下界來、該有這三日病」」。

10 中野美代子訳『西遊記（九）』（岩波文庫、二〇〇五改版）四二二頁。なお、一九九七年の初版でも既にほぼ同様の指摘をしている。

11 この仮説には、内閣文庫蔵李卓吾評甲本を底本とする中野美代子訳『西遊記』改訂版全十冊（岩波文庫、二〇〇五）の訳注と解説、及び中野美代子『西遊記』XYZ——このへんな小説の迷路をあるく（講談社選書メチエ、二〇〇九）、同氏『なぜ孫悟空のあたまには輪っかがあるのか』（岩波ジュニア新書、二〇一三）等において更なる肉づけが行われている。

12 中野美代子『西遊記の秘密——タオと煉丹術のシンボリズム——

『(初版：福武書店、一九八四。改訂版：福武文庫、一九九五。重訂版：岩波現代文庫、二〇〇三)』

<sup>14</sup> なお、残る二つは虫を正体とする妖怪と戦う話柄三つと、取経の後半になって初めて現れる女難の話柄四つとが、いずれもほぼ等間隔に並んでいるというもので、構造的に類似した話柄のペアがある中心軸を挟んで配置されているという他の十一例とはやや性格が異なる。

<sup>15</sup> 西孝二郎『『西遊記』の構造』(新風舎、一九九七)。

<sup>16</sup> この点に関しては、筆者も拙稿「孫悟空の画像イメージ——小説本文と絵姿と——」(瀧本弘之・大塚秀高編『アジア遊学百七十一 中国古典文学と挿画文化』所収、勉誠出版、二〇一四)において、悟空・八戒・沙僧の着る直裾の材質が、第二十二回以降では全て「錦布」とされるが、第十四・十五回では悟空の直裾を本来全て「綿布」に作っていたと考えられることを指摘して、第十四・十五回と第二十二回以降では文章を整理した人物が異なるとの見解を示したことがある。

<sup>17</sup> 二八六頁では第七十二回としているが、他の頁では第七十三回としている。第七十三回が正しいことを確認した。

<sup>18</sup> なお、聖僧歴難簿以外の箇所にも細々とした字句の異同は散見され、注12前掲の中野美代子訳『西遊記』改訂版の訳注においてそうした異同の主だったものが紹介されている。

第一章図1 台湾故宮博物院藏世徳堂本 卷二十一—四二B四三A↓

(国立国会図書館所蔵の北平図書館善本書膠片による。なお、第二章に載せるこの伝本の書影も全て同膠片によった。)

尋親報冤第四難	出城逢虎第五難	折從落坑第六難
雙入嶺上第七難	西界山頭第八難	陡澗換馬第九難
失却袈裟第十難	夜被火燒第十一難	收降八戒第十二難
黃風怪阻第十三難	請求靈吉第十四難	流沙難渡第十五難
收得沙僧十六難	四聖顯化十七難	不識人參十八難
五庄觀中十九難	貶退心猿二十難	松林失散二十一難
宝象國稱書王二十難	金盞殿變虎二十三難	平頂山降魔二十四難
山壓天竺二十五難	洞中高懸二十六難	盜寶更名二十七難
烏雞國救主二十八難	被魔化身二十九難	號山逢妖三十難
風攝聖僧三十一難	心猿遭害三十二難	請聖降妖三十三難
搬運車廄三十四難	大賭輸贏三十五難	祛道吳僧三十六難
路逢大水三十七難	身落天河三十八難	魚籃觀化三十九難
金兜山逢四十難	天神難伏四十一難	問佛根源四十二難
吃水遭難四十三難	女國番四十四難	琵琶洞客告四十五難
再敗心猿四十六難	識洋獼猴四十七難	火燒山高四十八難
求取芭蕉扇四十九難	收縛魔王五十難	宮城掃塔五十一難
取寶救僧五十二難	小雷音遇難五十三難	大鬧天神五十四難
朱紫國行醫五十五難	拯救疲癯五十六難	降妖取后五十七難
七情迷漫五十八難	多目豐傷五十九難	路阻獅狌六十難
怪分二色六十一難	城裡通火六十二難	請佛收魔六十三難
比丘救子六十四難	辨認真邪六十五難	鳳仙國求雨六十六難
救女怪卧僧芳六十七難	無衣洞遇困六十八難	稀柿拜穢六十九難
花豹迷人七十難	棘林吟咏七十一難	黑河沉沒七十二難
滅法國難行七十三難	元夜觀燈七十四難	起振犀牛七十五難

27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	b	a	版本	類型
盜寶更名二十七難	洞中高懸二十六難	山壓大聖二十五難	平頂山逢魔二十四難	金鑾殿變虎二十三難	寶象國稍書二十二難	松林失散二十一難	貶退心猿二十難	五庄觀中十九難	不識人參十八難	四聖顯化十七難	收得沙僧十六難	流沙難渡十五難	請求靈吉十四難	黃風怪阻十三難	收降八戒十二難	夜被火燒十一難	失却袈裟十難	陡澗換馬第九難	兩界山頭第八難	雙叉嶺上第七難	折從落坑第六難	出城逢虎第五難	尋親報冤第四難	滿月拋江第三難	出胎幾殺第二難	金蟬遭貶第一難	謹記唐僧難數清	蒙差謁師皈依	台灣故宮藏世德堂本	(1)華陽洞天主本校本型
被魔化身二十七難	烏鷄國救主二十六難	蓮花洞高懸二十五難	平頂山逢魔二十四難	金鑾殿變虎二十三難	寶象國稍書二十二難	黑松林失散二十一難	貶退心猿二十難	難活人參十九難	五莊觀中十八難	四聖顯化十七難	收得沙僧十六難	流沙難渡十五難	請求靈吉十四難	黃風怪阻十三難	收降八戒十二難	失却袈裟十一難	夜被火燒第十難	陡澗換馬第九難	兩界山頭第八難	雙叉嶺上第七難	落坑折從第六難	出城逢虎第五難	尋親報冤第四難	滿月拋江第三難	出胎幾殺第二難	金蟬遭貶第一難	謹記唐僧難數清	蒙差謁師皈依	內閣文庫藏李卓吾甲本	(2)李卓吾批評本型
被魔化身二十七難	烏鷄國救主二十六難	蓮花洞高懸二十五難	平頂山逢魔二十四難	金鑾殿變虎二十三難	寶象國稍書二十二難	黑松林失散二十一難	貶退心猿二十難	難活人參十九難	五莊觀中十八難	四聖顯化十七難	收得沙僧十六難	流沙難渡十五難	請求靈吉十四難	黃風怪阻十三難	收伏八戒十二難	失却袈裟十一難	夜被火燒第十難	陡澗換馬第九難	兩界山頭第八難	雙叉嶺上第七難	落坑折從第六難	出城逢虎第五難	尋親報冤第四難	滿月拋江第三難	出胎幾殺第二難	金蟬遭貶第一難			靜嘉堂藏陳士斌甲本	(3)陳士斌詮解本型

56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	版本	類型
拯救疲癯五十六難	朱紫國行醫五十五難	大困天神五十四難	小雷音遇難五十三難	取寶救僧五十二難	寶城掃塔五十一難	收縛魔王五十難	求取芭蕉扇四十九難	火焰山高四十八難	識得彌猴四十七難	再貶心猿四十六難	琵琶洞受苦四十五難	女國雷 四十四難	吃水遭 四十三難	問佛根源四十二難	天神難伏四十一難	金嶼山逢四十難	魚籃現身三十九難	身落天河三十八難	路逢大水三十七難	袈道與僧三十六難	大賭輸贏三十五難	搬運車庭三十四難	請聖降妖三十三難	心猿遭害三十二難	風攝聖僧三十一難	號山逢怪三十難	被魔化身二十九難	烏鷄國救主二十八難	台灣故宮藏世德堂本	(1)華陽洞天主本校本型
朱紫國行醫五十六難	稀柿衞阻五十五難	諸天神遭困五十四難	小雷音遇難五十三難	棘林吟咏五十二難	取寶救僧五十一難	寶城掃塔五十難	收縛魔王四十九難	求取芭蕉扇四十八難	路阻火燄山四十七難	難辨彌猴四十六難	再貶心猿四十五難	琵琶洞受苦四十四難	西梁國留婚四十三難	吃水遭毒四十二難	問佛根源四十一難	普天神難伏四十難	金嶼山遇怪三十九難	魚籃現身三十八難	身落天河三十七難	路逢大水三十六難	袈道與僧三十五難	大賭輸贏三十四難	搬運車遲三十三難	黑河沉沒三十二難	請聖降妖三十一難	心猿遭害三十難	風攝聖僧二十九難	號山逢怪二十八難	內閣文庫藏李卓吾甲本	(2)李卓吾批評本型
拯救駝羅五十六難	稀柿衞阻五十五難	諸天神遭困五十四難	小雷音遇難五十三難	棘林吟咏五十二難	取寶救僧五十一難	寶城掃塔五十難	收縛魔王四十九難	求取芭蕉扇四十八難	路阻火燄山四十七難	難辨彌猴四十六難	再貶心猿四十五難	琵琶洞受苦四十四難	西梁國留婚四十三難	吃水遭毒四十二難	問佛根源四十一難	普天神難伏四十難	金嶼山遇怪三十九難	魚籃現身三十八難	身落天河三十七難	路逢大水三十六難	袈道與僧三十五難	大賭輸贏三十四難	搬運車遲三十三難	黑河沉沒三十二難	請聖降妖三十一難	心猿遭害三十難	風攝聖僧二十九難	號山逢怪二十八難	靜嘉堂藏陳士斌甲本	(3)陳士斌詮解本型

f	e	d	c	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	版本	類型
聖僧歷難簿分明	路逢十萬八千里			脱胎凌雲八十難	奪帛耐恩七十九難	天竺招婚七十八難	會慶釘鉈七十七難	失落兵器七十六難	趕捉犀牛七十五難	元夜觀燈七十四難	滅法國難行七十三難	黑河沉沒七十二難	棘林吟咏七十一難	花豹迷人七十難	稀柿拜穢六十九難	無底洞遭困六十八難	救女怪卧僧房六十七難	鳳仙国救雨六十六難	辨認真邪六十五難	比丘救子六十四難	請佛收魔六十三難	城裡通災六十二難	怪分二色六十一難	路阻獅駝六十難	多目遭傷五十九難	七情迷沒五十八難	降妖取后五十七難	台灣故宮藏世德堂本	(1)華陽洞天主人校本型
聖僧歷難簿分明	路過十萬八千里			凌雲渡脱胎八十難	銅臺府監禁七十九難	天竺招婚七十八難	趕捉犀牛七十七難	玄英洞受苦七十六難	竹節山遭難七十五難	會慶釘鉈七十四難	失落兵器七十三難	鳳仙郡求雨七十二難	隱霧山遇魔七十一難	滅法國難行七十難	無底洞遭困六十九難	僧房卧病六十八難	松林救怪六十七難	辨認真邪六十六難	比丘救子六十五難	請佛收魔六十四難	城裡通災六十三難	怪分三色六十二難	路阻獅駝六十一難	多目遭傷六十難	七情迷沒五十九難	降妖取后五十八難	拯救疲瘠五十七難	内閣文庫藏李卓吾甲本	(2)李卓吾批評本型
難簿分明記不訛	路過十萬八千里	聖僧歷歷苦遭魔	揭諦伽藍護法多	凌雲渡脱胎八十難這正是	銅臺府監禁七十九難	天竺招婚七十八難	趕捉犀牛七十七難	玄英洞受苦七十六難	竹節山遭難七十五難	會慶釘鉈七十四難	失落兵器七十三難	鳳仙郡求雨七十二難	隱霧山遇魔七十一難	滅法國難行七十難	無底洞遭困六十九難	僧房卧病六十八難	松林救怪六十七難	辨認真邪六十六難	比丘救子六十五難	請佛收魔六十四難	城裡遇災六十三難	怪分三色六十二難	路阻獅駝六十一難	多目遭傷六十難	七情迷沒五十九難	降妖取金聖五十八難	朱紫國行醫五十七難	靜嘉堂藏陳士斌甲本	(3)陳士斌詮解本型



話柄		大開天宮										觀音東行		江流和尚		太宗入冥					寅將軍		双叉嶺	収伏行者	収伏龍馬	黒風大王			
回数	明清	1	2	3	4	5	6	7	8	9		10	11		12	13		14	15	16	17								
		1	2	3	4	5	6	7	8	9		10	11			12													
聖僧歴難簿	台湾故宮藏世徳堂本															(金蟬遭貶第一難) (出胎幾殺第二難) (滿月拋江第三難) (尋親報冤第四難)					出城逢虎第五難	折從落坑第六難	雙叉嶺上第七難	兩界山頭第八難	陡澗換馬第九難	失却袈裟第十難	夜被火燒第十一難		
	内閣文庫藏李卓吾甲本																												
	静嘉堂藏陳士斌甲本															(金蟬遭貶第一難)					出城逢虎第五難	落坑折從第六難	雙叉嶺上第七難	兩界山頭第八難	陡澗換馬第九難	夜被火燒第十難	失却袈裟第十一難		

話柄		収伏八戒				黄風怪		収伏沙僧		試禪心		人參果				白骨夫人		黄袍郎				金角大王 銀角大王				投宿吟詩		烏鷄国			紅孩児				黒水河					
回数	明清	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43													
聖僧歴難簿	台湾故宮藏世徳堂本	收降八戒十二難				黄風怪阻十三難		請求靈吉十四難		流沙難渡十五難		收得沙僧十六難		四聖顯化十七難		不識人參十八難		五庄観中十九難		貶退心猿二十難		松林失散二十一難		宝象國稍書二十二難		金銓殿變虎二十三難		平頂山逢魔二十四難		山壓大聖二十五難 洞中高懸二十六難		盜寶更名二十七難		烏鷄国救主二十八難		被魔化身二十九難		號山逢姪三十難 風攝聖僧三十一難 心猿遭害三十二難 請聖降妖三十三難		黒河沉没七十二難
	内閣文庫藏李卓吾甲本	收降八戒十二難				黄風怪阻十三難		請求靈吉十四難		流沙難渡十五難		收得沙僧十六難		四聖顯化十七難		五莊観中十八難		難活人參十九難		貶退心猿二十難		黒松林失散二十一難		寶象國稍書二十二難		金鑾殿變虎二十三難		平頂山逢魔二十四難		蓮花洞高懸二十五難		烏鷄國救主二十六難		被魔化身二十七難		號山逢怪二十八難 風攝聖僧二十九難 心猿遭害三十難 請聖降妖三十一難		黒河沈没三十二難		
	静嘉堂藏陳士斌甲本	収伏八戒十二難				黄風怪阻十三難		請求靈吉十四難		流沙難渡十五難		收得沙僧十六難		四聖顯化十七難		五莊観中十八難		難活人參十九難		貶退心猿二十難		黒松林失散二十一難		寶象國稍書二十二難		金鑾殿變虎二十三難		平頂山逢魔二十四難		蓮花洞高懸二十五難		烏鷄國救主二十六難		被魔化身二十七難		號山逢怪二十八難 風攝聖僧二十九難 心猿遭害三十難 請聖降妖三十一難		黒河沉没三十二難		

賽太歲				稀柿衝	黃眉大王	棘林吟詩	九頭虫	牛魔王				六耳獼猴	琵琶洞	西梁女國	子母河	兕大王	通天河	車遲國	話柄										
71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	明清	回数
71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	明	清
降妖取后五十七難	拯救疲癯五十六難	朱紫國行醫五十五難	稀柿拜穢六十九難	大困天神五十四難	小雷音遇難五十三難	棘林吟咏七十一難	取寶救僧五十二難	寶城掃塔五十一難	收縛魔王五十難	求取芭蕉扇四十九難	火焰山高四十八難	識得獼猴四十七難	再貶心猿四十六難	琵琶洞受苦四十五難	女國雷四十四難	吃水遭四十三難	問佛根源四十二難	天神難伏四十一難	金嶼山逢四十難	魚籃現身三十九難	身落天河三十八難	路逢大水三十七難	祛道與僧三十六難	大賭輸贏三十五難	搬運車庭三十四難	台灣故宮藏世德堂本			
降妖取后五十八難	拯救疲瘠五十七難	朱紫國行醫五十六難	稀柿衝穢阻五十五難	諸天神遭困五十四難	小雷音遇難五十三難	棘林吟咏五十二難	取寶救僧五十一難	寶城掃塔五十難	收縛魔王四十九難	求取芭蕉扇四十八難	路阻火燄山四十七難	難辨獼猴四十六難	再貶心猿四十五難	琵琶洞受苦四十四難	西梁國留婚四十三難	吃水遭毒四十二難	問佛根源四十一難	普天神難伏四十難	金嶼山遇怪三十九難	魚籃現身三十八難	身落天河三十七難	路逢大水三十六難	祛道與僧三十五難	大賭輸贏三十四難	搬運車庭三十三難	內閣文庫藏李卓吾甲本	聖僧歷難簿		
降妖取金聖五十八難	朱紫國行醫五十七難	拯救駝羅五十六難	稀柿穢阻五十五難	諸天神遭困五十四難	小雷音遇難五十三難	棘林吟咏五十二難	取寶救僧五十一難	寶城掃塔五十難	收縛魔王四十九難	求取芭蕉扇四十八難	路阻火燄山四十七難	難辨獼猴四十六難	再貶心猿四十五難	琵琶洞受苦四十四難	西梁國留婚四十三難	吃水遭毒四十二難	問佛根源四十一難	普天神難伏四十難	金嶼山遇怪三十九難	魚籃現身三十八難	身落天河三十七難	路逢大水三十六難	祛道與僧三十五難	大賭輸贏三十四難	搬運車遲三十三難	靜嘉堂藏陳士斌甲本			

成仏団円	滿了厄難	凌雲脱胎	銅台監禁	玉兔精	三犀牛怪	九頭獅子	鳳仙求雨	南山大王	滅法國	地湧夫人	比丘國	金翅鳥	青獅白象	七蜘蛛怪	話柄									
100	99	98	97 96	95 94 93	92 91	90 89	88 87	86 85	84	83 82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	明清	回数		
100	99	98	97 96	95 94 93	92 91	90 89	88 87	86 85	84	83 82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	台灣故宮藏世德堂本	聖僧歷難簿		
	再落通天河八十一難	脱胎凌雲八十難	奪帛醉恩七十九難	天竺招婚七十八難	趕捉犀牛七十五難	元夜觀燈七十四難	會慶釘鉞七十七難	失落兵器七十六難	鳳仙回救雨六十六難	花豹迷人七十難	滅法國難行七十三難	無底洞遭困六十八難	救女怪卧僧房六十七難	辨認真邪六十五難	比丘救子六十四難	請佛收魔六十三難	城裡通災六十二難	怪分二色六十一難	路阻獅駝六十難	多目遭傷五十九難	七情迷沒五十八難			
	再落通天河八十一難	凌雲渡脱胎八十難	銅臺府監禁七十九難	天竺招婚七十八難	趕捉犀牛七十七難	玄英洞受苦七十六難	竹節山遭難七十五難	會慶釘鉞七十四難	失落兵器七十三難	鳳仙郡求雨七十二難	隱霧山遇魔七十一難	滅法國難行七十難	無底洞遭困六十九難	僧房臥病六十八難	松林救怪六十七難	辨認真邪六十六難	比丘救子六十五難	請佛收魔六十四難	城裡通災六十三難	怪分三色六十二難	路阻獅駝六十一難		多目遭傷六十難	七情迷沒五十九難
	再落通天河八十一難	凌雲渡脱胎八十難	銅臺府監禁七十九難	天竺招婚七十八難	趕捉犀牛七十七難	玄英洞受苦七十六難	竹節山遭難七十五難	會慶釘鉞七十四難	失落兵器七十三難	鳳仙郡求雨七十二難	隱霧山遇魔七十一難	滅法國難行七十難	無底洞遭困六十九難	僧房臥病六十八難	松林救怪六十七難	辨認真邪六十六難	比丘救子六十五難	請佛收魔六十四難	城裡遇災六十三難	怪分三色六十二難	路阻獅駝六十一難	多目遭傷六十難	七情迷沒五十九難	靜嘉堂藏陳士斌甲本

型	版本	a	b	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
華陽洞天主人校本型聖僧歷難簿	①淺野文庫藏世徳堂本	蒙差掲諦皈依旨	謹記唐僧難教清	金蟬遭貶第一難	出胎幾殺第二難	滿月拋江第三難	尋親報冤第四難	出城逢虎第五難	折從落坑第六難	雙叉嶺上第七難	兩界山頭第八難	陡澗換馬第九難	失却袈裟第十難	夜被火燒十一難	收降八戒十二難	黃風怪阻十三難	請求靈吉十四難	流沙難渡十五難	收得沙僧十六難	四聖顯化十七難	不識人參十八難	五庄觀中十九難	貶退心猿二十難	松林失散二十一難	寶象國稍書二十二難	金銓殿變虎二十三難	平頂山逢魔二十四難	山壓大聖二十五難	洞中高懸二十六難	盜寶更名二十七難
	②台灣故宮藏世徳堂本	蒙差掲諦皈依旨	謹記唐僧難教清	金蟬遭貶第一難	出胎幾殺第二難	滿月拋江第三難	尋親報冤第四難	出城逢虎第五難	折從落坑第六難	雙叉嶺上第七難	兩界山頭第八難	陡澗換馬第九難	失却袈裟第十難	夜被火燒十一難	收降八戒十二難	黃風怪阻十三難	請求靈吉十四難	流沙難渡十五難	收得沙僧十六難	四聖顯化十七難	不識人參十八難	五庄觀中十九難	貶退心猿二十難	松林失散二十一難	寶象國稍書二十二難	金銓殿變虎二十三難	平頂山逢魔二十四難	山壓大聖二十五難	洞中高懸二十六難	盜寶更名二十七難
	③天理藏世徳堂本	蒙差掲諦皈依旨	謹記唐僧難教清	金蟬遭貶第一難	出胎幾殺第二難	滿月拋江第三難	尋親報冤第四難	出城逢虎第五難	折從落坑第六難	雙叉嶺上第七難	兩界山頭第八難	陡澗換馬第九難	失却袈裟第十難	夜被火燒十一難	收降八戒十二難	黃風怪阻十三難	請求靈吉十四難	流沙難渡十五難	收得沙僧十六難	四聖顯化十七難	不識人參十八難	五庄觀中十九難	貶退心猿二十難	松林失散二十一難	寶象國稍書二十二難	金銓殿變虎二十三難	平頂山逢魔二十四難	山壓大聖二十五難	洞中高懸二十六難	盜寶更名二十七難
	④叡山文庫藏唐僧本	蒙差掲諦皈依旨	謹記唐僧難教清	金蟬遭貶第一難	出胎幾殺第二難	滿月拋江第三難	尋親報冤第四難	出城遇虎第五難	折從落坑第六難	雙叉嶺上第七難	兩界山頭第八難	陡澗換馬第九難	失却袈裟第十難	夜被火燒十一難	收降八戒十二難	黃風怪阻十三難	請求靈吉十四難	流沙難渡十五難	收得沙僧十六難	四聖顯化十七難	不識人參十八難	五在觀中十九難	貶退心猿二十難	松林失散二十一難	寶象國稍書二十二難	金銓殿變虎二十三難	平頂山逢魔二十四難	山壓大聖二十五難	洞中高懸二十六難	盜寶更名二十七難
	⑤国会図書館藏唐僧本	蒙差掲諦皈依旨	謹記唐僧難教清	金蟬遭貶第一難	出胎幾殺第二難	滿月拋江第三難	尋親報冤第四難	出城遇虎第五難	折從落坑第六難	又嶺上第七難	兩界山頭第八難	陡澗換馬第九難	失却袈裟第十難	夜被火燒十一難	收降八戒十二難	黃風怪阻十三難	請求靈吉十四難	流沙難渡十五難	收得沙僧十六難	四聖顯化十七難	不識人參十八難	五在觀中十九難	貶退心猿二十難	松林失散二十一難	寶象國稍書二十二難	金銓殿變虎二十三難	平頂山逢魔二十四難	山壓大聖二十五難	洞中高懸二十六難	盜寶更名二十七難
	⑥内閣文庫藏楊閩齋本	蒙差掲諦皈依旨	謹記唐僧難教清	金蟬遭貶第一難	出胎幾殺第二難	滿月拋江第三難	尋親報冤第四難	出城逢虎第五難	折從落坑第六難	雙叉嶺上第七難	兩界山頭第八難	陡澗換馬第九難	失却袈裟第十難	夜被火燒十一難	收降八戒十二難	黃風怪阻十三難	請求靈吉十四難	流沙難渡十五難	收得沙僧十六難	四聖顯化十七難	不識人參十八難	五庄觀中十九難	貶退心猿二十難	松林失散二十一難	寶象國稍書二十二難	金銓殿變虎二十三難	平頂山逢魔二十四難	山壓大聖二十五難	洞中交高懸二十六難	盜寶更名二十七難

56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	版本
拯救疲癯五十六難	朱紫國行醫五十五難	大困天神五十四難	小雷音遇難五十三難	取寶救僧五十二難	賈城掃塔五十一難	收縛魔王五十難	求取芭蕉扇四十九難	火焰山高四十八難	識得獼猴四十七難	再貶心猿四十六難	琵琶洞受苦四十五難	女國雷 四十四難	吃水遭愆四十三難	問佛根源四十二難	天神難伏四十一難	金嶸山逢四十難	魚藍覩身三十九難	身落天河三十八難	路逢大水三十七難	法道與僧三十六難	大賭輸贏三十五難	搬運車庭三十四難	請聖降妖三十三難	心猿遭害三十二難	風攝聖僧三十一難	號山逢姪三十難	被魔化身二十九難	烏鷄國救主二十八難	①淺野文庫藏世德堂本
拯救疲癯五十六難	朱紫國行醫五十五難	大困天神五十四難	小雷音遇難五十三難	取寶救僧五十二難	賈城掃塔五十一難	收縛魔王五十難	求取芭蕉扇四十九難	火焰山高四十八難	識得獼猴四十七難	再貶心猿四十六難	琵琶洞受苦四十五難	女國雷 四十四難	吃水遭■四十三難	問佛根源四十二難	天神難伏四十一難	金嶸山逢四十難	魚藍覩身三十九難	身落天河三十八難	路逢大水三十七難	法道與僧三十六難	大賭輸贏三十五難	搬運車庭三十四難	請聖降妖三十三難	心猿遭害三十二難	風攝聖僧三十一難	號山逢姪三十難	被魔化身二十九難	烏鷄國救主二十八難	②台灣故宮藏世德堂本
拯救疲癯五十六難	朱紫國行醫五十五難	大困天神五十四難	小雷音遇難五十三難	取寶救僧五十二難	賈城掃塔五十一難	收縛魔王五十難	求取芭蕉扇四十九難	火焰山高四十八難	識得獼猴四十七難	再貶心猿四十六難	琵琶洞受苦四十五難	女國雷 四十四難	吃水遭愆四十三難	問佛根源四十 難	天神難伏四十一難	金嶸山逢四十難	魚藍覩身三十九難	身落天河三十八難	路逢大水三十七難	法道與僧三十六難	大賭輸贏三十五難	搬運車庭三十四難	請聖降妖三十三難	心猿遭害三十二難	風攝聖僧三十一難	號山逢姪三十難	被魔化身二十九難	烏鷄國救主二十八難	③天理藏世德堂本
拯救疲癯五十六難	朱紫國行醫五十五難	大困天神五十四難	小雷音遇難五十三難	取寶救僧五十二難	賈城掃塔五十一難	收縛魔王五十難	求取芭蕉扇四十九難	火焰山高四十八難	識得獼猴四十七難	再貶心猿四十六難	琵琶洞受苦四十五難	女國雷 四十四難	吃水遭愆四十三難	問佛根源四十二難	天神難伏四十一難	金嶸山逢四十難	魚藍覩身三十九難	身落天河三十八難	路逢大水三十七難	法道與僧三十六難	大賭輸贏三十五難	搬運車庭三十四難	請聖降妖三十三難	心猿遭害三十二難	風攝聖僧三十一難	號山逢姪三十難	被魔化身二十九難	烏鷄國救主二十八難	④叡山文庫藏唐僧本
拯救疲癯五十六難	朱紫國行醫五十五難	大困天神五十四難	小雷音遇難五十三難	取寶救僧五十二難	賈城掃塔五十一難	收縛魔王五十難	求取芭蕉扇四十九難	火焰山高四十八難	識得獼猴四十七難	再貶心猿四十六難	琵琶洞受苦四十五難	女國雷 四十四難	吃水遭愆四十三難	問佛根源四十二難	天神難伏四十一難	金嶸山逢四十難	魚藍覩身三十九難	身落天河三十八難	路逢大水三十七難	法道與僧三十六難	大賭輸贏三十五難	搬運車庭三十四難	請聖降妖三十三難	心猿遭害三十二難	風攝聖僧三十一難	號山逢姪三十難	被魔化身二十九難	烏鷄國救主二十八難	⑤國會圖書館藏唐僧本
拯救疲癯五十六難	朱紫國行醫五十五難	大困天神五十四難	小雷音遇難五十三難	取寶救僧五十二難	賈城掃塔五十一難	收縛魔王五十難	求取芭蕉扇四十九難	火焰山高四十八難	識得獼猴四十七難	再貶心猿四十六難	琵琶洞受苦四十五難	女國留 四十四難	吃水遭愆四十三難	問佛根源四十二難	天神難伏四十一難	金嶸山逢四十難	魚藍覩身三十九難	身落天河三十八難	路逢大水三十七難	法道與僧三十六難	大賭輸贏三十五難	搬運車庭三十四難	請聖降妖三十三難	心猿遭害三十二難	風攝聖僧三十一難	號山逢姪三十難	被魔化身二十九難	烏鷄國救主二十八難	⑥內閣文庫藏楊聞齋本

f	e	d	c	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	版本
聖僧歷難簿分明	路逢十萬八千里			脱胎凌雲八十難	奪帛醉恩七十九難	天竺招婚七十八難	會慶釘鉞七十七難	失落兵器七十六難	赶捉犀牛七十五難	元夜觀燈七十四難	滅法國難行七十三難	黑河沉沒七十二難	棘林吟咏七十一難	花豹迷人七十難	稀柿拜穢六十九難	無底洞遭困六十八難	救女怪卧僧房六十七難	鳳仙國救雨六十六難	辨認真邪六十五難	比丘救子六十四難	請佛收魔六十三難	城裡通災六十二難	怪分三色六十一難	路阻獅陀六十難	多目遭傷五十九難	七情迷沒五十八難	降妖取后五十七難	①淺野文庫藏世徳堂本
聖僧歷難簿分明	路逢十萬八千里			脱胎凌雲八十難	奪帛醉恩七十九難	天竺招婚七十八難	會慶釘鉞七十七難	失落兵器七十六難	赶捉犀牛七十五難	元夜觀燈七十四難	滅法國難行七十三難	黑河沉沒七十二難	棘林吟咏七十一難	花豹迷人七十難	稀柿拜穢六十九難	無底洞遭困六十八難	救女怪卧僧房六十七難	鳳仙國救雨六十六難	辨認真邪六十五難	比丘救子六十四難	請佛收魔六十三難	城裡通災六十二難	怪分二色六十一難	路阻獅陀六十難	多目遭傷五十九難	七情迷沒五十八難	降妖取后五十七難	②台灣故宮藏世徳堂本
聖僧歷難簿分明	路逢十萬八千里			脱胎凌雲八十難	奪帛醉恩七十九難	天竺招婚七十八難	會慶釘鉞七十七難	失落兵器七十六難	赶捉犀牛七十五難	元夜觀燈七十四難	滅法國難行七十三難	黑河沉沒七十二難	棘林吟咏七十一難	花豹迷人七十難	稀柿拜穢六十九難	無底洞遭困六十八難	救女怪卧僧房六十七難	鳳仙國救雨六十六難	辨認真邪六十五難	比丘救子六十四難	請佛收魔六十三難	城裡通災六十二難	怪分三色六十一難	路阻獅陀六十難	多目遭傷五十九難	七情迷沒五十八難	降妖取后五十七難	③天理藏世徳堂本
聖僧歷難簿分明	路逢十萬八千里			脱胎凌雲八十難	奪帛醉恩七十九難	天竺招婚七十八難	會慶釘鉞七十七難	失落兵器七十六難	赶捉犀牛七十五難	元夜觀燈七十四難	滅法國難行七十三難	黑河沉沒七十二難	棘林吟咏七十一難	花豹迷人七十難	稀柿拜穢六十九難	無底洞遭困六十八難	救女怪卧僧房六十七難	鳳仙國救雨六十六難	办認真邪六十五難	比丘救子六十四難	請佛收魔六十三難	城裡通災六十二難	怪分三色六十一難	路阻獅陀六十難	多目遭傷五十九難	七情迷沒五十八難	降妖取后五十六難	④叡山文庫藏唐僧本
聖僧歷難簿分明	路逢十萬八千里			脱胎凌雲八十難	奪帛醉恩七十九難	天竺招婚七十八難	會慶釘鉞七十七難	失落兵器七十六難	赶捉犀牛七十五難	元夜觀燈七十四難	滅法國難行七十三難	黑河沉沒七十二難	棘林吟咏七十一難	花豹迷人七十難	稀柿拜穢六十九難	無底洞遭困六十八難	救女怪卧僧房六十七難	鳳仙國救雨六十六難	辨認真邪六十五難	比丘救子六十四難	請佛收魔六十三難	城裡通災六十二難	怪分三色六十一難	路阻獅陀六十難	多目遭傷五十九難	七情迷沒五十八難	降妖取后五十六難	⑤国会図書館藏唐僧本
聖僧歷難簿分明	路逢十萬八千里			脱胎凌雲八十難	奪帛醉恩七十九難	天竺招婚七十八難	會慶釘鉞七十七難	失落兵器七十六難	赶捉犀牛七十五難	元夜觀燈七十四難	滅法國難行七十三難	黑河沉沒七十二難	棘林吟咏七十一難	花豹迷人七十難	稀柿拜穢六十九難	無底洞遭困六十八難	救女怪卧僧房六十七難	鳳仙國救雨六十六難	办認真邪六十五難	比丘救子六十四難	請佛收魔六十三難	城裡通災六十二難	怪分三色六十一難	路阻獅陀六十難	多目遭傷五十九難	七情迷沒五十八難	降妖取后五十七難	⑥内閣文庫藏楊閩齋本

型	系統	李卓吾批評本系																									(2)李卓吾批評本型聖僧歷難簿		汪象旭箋評本系		張書紳註本系
版本	①淺野文庫藏李卓吾丙本	②內閣文庫藏李卓吾甲本	③書院部藏李卓吾乙本	④慶應藏閻齋堂本	⑤內閣文庫藏惺齋刊汪象旭本	⑥浙江圖書館藏汪象旭奇書本	⑦双紅堂藏懷新樓刊汪本	⑧東大漢籍藏張書紳註本																							
a	蒙差揭諦皈依	蒙差揭諦皈依	蒙差揭諦皈依	蒙差揭諦皈依				蒙差揭諦皈依																							
b	謹記唐僧難數清	謹記唐僧難數清	謹記唐僧難數清	謹記唐僧難數清				謹記唐僧難數清																							
1	金蟬遭貶第一難	金蟬遭貶第一難	金蟬遭貶第一難	金蟬遭貶第一難	金蟬遭貶第一難 一難	金蟬遭貶第一難 一難		金蟬遭貶第一難																							
2	出胎幾殺第二難	出胎幾殺第二難	出胎幾殺第二難	出胎幾殺第二難	出胎幾殺第二難 一難	出胎幾殺第二難 一難		出胎幾殺第二難																							
3	滿月拋江第三難	滿月拋江第三難	滿月拋江第三難	滿月拋江第三難	滿月拋江第三難 一難	滿月拋江第三難 一難		滿月拋江第三難																							
4	尋親報冤第四難	尋親報冤第四難	尋親報冤第四難	尋親報冤第四難	尋親報冤第四難 一難	尋親報冤第四難 一難		尋親報冤第四難																							
5	出城逢虎第五難	出城逢虎第五難	出城逢虎第五難	出城逢虎第五難	出城逢虎第五難	出城逢虎第五難		出城逢虎第五難																							
6	落坑折從第六難	落坑折從第六難	落坑折從第六難	落坑折從第六難	落坑折從第六難 此一難分作二難	落坑折從第六難 此一難分作二難		落坑折從第六難																							
7	雙叉嶺上第七難	雙叉嶺上第七難	雙叉嶺上第七難	雙叉嶺上第七難	雙叉嶺上第七難 一難	雙叉嶺上第七難 一難		雙叉嶺上第七難																							
8	兩界山頭第八難	兩界山頭第八難	兩界山頭第八難	兩界山頭第八難	兩界山頭第八難 一難	兩界山頭第八難 一難		兩界山頭第八難																							
9	陡澗換馬第九難	陡澗換馬第九難	陡澗換馬第九難	陡澗換馬第九難	陡澗換馬第九難 一難	陡澗換馬第九難 一難		陡澗換馬第九難																							
10	夜被火燒第十難	夜被火燒第十難	夜被火燒第十難	夜被火燒第十難	夜被火燒第十難	夜被火燒第十難		夜被火燒第十難																							
11	失却袈裟十一難	失却袈裟十一難	失却袈裟十一難	失却袈裟十一難	失却袈裟十一難 一難分作二難	失却袈裟十一難 一難分作二難		失却袈裟十一難																							
12	收降八戒十二難	收降八戒十二難	收降八戒十二難	收降八戒十二難	收降八戒十二難 一難	收降八戒十二難 一難		收降八戒十二難																							
13	黃風怪阻十三難	黃風怪阻十三難	黃風怪阻十三難	黃風怪阻十三難	黃風怪阻十三難	黃風怪阻十三難		黃風怪阻十三難																							
14	請求靈吉十四難	請求靈吉十四難	請求靈吉十四難	請求靈吉十四難	請求靈吉十四難 一作二難	請求靈吉十四難 一作二難		請求靈吉十四難																							
15	流沙難渡十五難	流沙難渡十五難	流沙難渡十五難	流沙難渡十五難	流沙難渡十五難	流沙難渡十五難		流沙難渡十五難																							
16	收得沙僧十六難	收得沙僧十六難	收得沙僧十六難	收得沙僧十六難	收得沙僧十六難 一作二難	收得沙僧十六難 一作二難		收得沙僧十六難																							
17	四聖顯化十七難	四聖顯化十七難	四聖顯化十七難	四聖顯化十七難	四聖顯化十七難 一難	四聖顯化十七難 一難		四聖顯化十七難																							
18	五莊觀中十八難	五莊觀中十八難	五莊觀中十八難	五莊觀中十八難	五莊觀中十八難	五莊觀中十八難		五莊觀中十八難																							
19	難活人參十九難	難活人參十九難	難活人參十九難	難活人參十九難	難活人參十九難 一作二難	難活人參十九難 一作二難		難活人參十九難																							
20	貶退心猿二十難	貶退心猿二十難	貶退心猿二十難	貶退心猿二十難	貶退心猿二十難 一難	貶退心猿二十難 一難		貶退心猿二十難																							
21	黑松林失散二十一難	黑松林失散二十一難	黑松林失散二十一難	黑松林失散二十一難	黑松林失散二十一難	黑松林失散二十一難		黑松林失散二十一難																							
22	寶象國稍書二十二難	寶象國稍書二十二難	寶象國稍書二十二難	寶象國稍書二十二難	寶象國稍書二十二難	寶象國稍書二十二難		寶象國稍書二十二難																							
23	金鑾殿變虎二十三難	金鑾殿變虎二十三難	金鑾殿變虎二十三難	金鑾殿變虎二十三難	金鑾殿變虎二十三難 一難分作三難	金鑾殿變虎二十三難 一難分作三難		金鑾殿變虎二十三難																							
24	平頂山逢魔二十四難	平頂山逢魔二十四難	平頂山逢魔二十四難	平頂山逢魔二十四難	平頂山逢魔二十四難	平頂山逢魔二十四難		平頂山逢魔二十四難																							
25	蓮花洞高懸二十五難	蓮花洞高懸二十五難	蓮花洞高懸二十五難	蓮花洞高懸二十五難	蓮花洞高懸二十五難 一作二難	蓮花洞高懸二十五難 一作二難		蓮花洞高懸二十五難																							
26	烏鷄國救主二十六難	烏鷄國救主二十六難	烏鷄國救主二十六難	烏鷄國救主二十六難	烏鷄國救主二十六難	烏鷄國救主二十六難		烏鷄國救主二十六難																							
27	被魔化身二十七難	被魔化身二十七難	被魔化身二十七難	被魔化身二十七難	被魔化身二十七難 一作二難	被魔化身二十七難 一作二難		被魔化身二十七難																							
28	號山逢怪二十八難	號山逢怪二十八難	號山逢怪二十八難	號山逢怪二十八難	號山逢怪二十八難	號山逢怪二十八難		號山逢怪二十八難																							
29	風播聖僧二十九難	風播聖僧二十九難	風播聖僧二十九難	風播聖僧二十九難	風播聖僧二十九難	風播聖僧二十九難		風播聖僧二十九難																							

系統		李卓吾批評本系				汪象旭箋評本系				張書紳註本系	
版本	①淺野文庫藏李卓吾丙本	②內閣文庫藏李卓吾甲本	③書院部藏李卓吾乙本	④慶應藏閩齋堂本	⑤內閣文庫藏桐寄刊汪象旭本	⑥浙江圖書館藏汪象旭奇書本	⑦双紅堂藏懷新樓刊汪本	⑧東大漢籍藏張書紳註本			
30	心猿遭害三十難	心猿遭害三十難	心猿遭害三十難	心猿遭害三十難	心猿遭害三十難	心猿遭害三十難	心猿遭害三十難	心猿遭害三十難			
31	請聖降妖三十一難	請聖降妖三十一難	請聖降妖三十一難	請聖降妖三十一難	請聖降妖三十一難	請聖降妖三十一難	請聖降妖三十一難	請聖降妖三十一難			
32	黑河沈沒三十二難	黑河沈沒三十二難	黑河沈沒三十二難	黑河沈沒三十二難	黑河沈沒三十二難	黑河沈沒三十二難	黑河沈沒三十二難	黑河沈沒三十二難			
33	搬運車庭三十三難	搬運車庭三十三難	搬運車庭三十三難	搬運車庭三十三難	搬運車庭三十三難	搬運車庭三十三難	搬運車庭三十三難	搬運車庭三十三難			
34	大賭輸贏三十四難	大賭輸贏三十四難	大賭輸贏三十四難	大賭輸贏三十四難	大賭輸贏三十四難	大賭輸贏三十四難	大賭輸贏三十四難	大賭輸贏三十四難			
35	祛道興僧三十五難	祛道興僧三十五難	祛道興僧三十五難	祛道興僧三十五難	祛道興僧三十五難	祛道興僧三十五難	祛道興僧三十五難	祛道興僧三十五難			
36	路逢大水三十六難	路逢大水三十六難	路逢大水三十六難	路逢大水三十六難	路逢大水三十六難	路逢大水三十六難	路逢大水三十六難	路逢大水三十六難			
37	身落天河三十七難	身落天河三十七難	身落天河三十七難	身落天河三十七難	身落天河三十七難	身落天河三十七難	身落天河三十七難	身落天河三十七難			
38	魚籃現身三十八難	魚籃現身三十八難	魚籃現身三十八難	魚籃現身三十八難	魚籃現身三十八難	魚籃現身三十八難	魚籃現身三十八難	魚籃現身三十八難			
39	金峽山遇怪三十九難	金峽山遇怪三十九難	金峽山遇怪三十九難	金峽山遇怪三十九難	金峽山遇怪三十九難	金峽山遇怪三十九難	金峽山遇怪三十九難	金峽山遇怪三十九難			
40	普天神難伏四十難	普天神難伏四十難	普天神難伏四十難	普天神難伏四十難	普天神難伏四十難	普天神難伏四十難	普天神難伏四十難	普天神難伏四十難			
41	問佛根源四十一難	問佛根源四十一難	問佛根源四十一難	問佛根源四十一難	問佛根源四十一難	問佛根源四十一難	問佛根源四十一難	問佛根源四十一難			
42	喫水遭毒四十二難	喫水遭毒四十二難	喫水遭毒四十二難	喫水遭毒四十二難	喫水遭毒四十二難	喫水遭毒四十二難	喫水遭毒四十二難	喫水遭毒四十二難			
43	西梁國留婚四十三難	西梁國留婚四十三難	西梁國留婚四十三難	西梁國留婚四十三難	西梁國留婚四十三難	西梁國留婚四十三難	西梁國留婚四十三難	西梁國留婚四十三難			
44	琵琶洞受苦四十四難	琵琶洞受苦四十四難	琵琶洞受苦四十四難	琵琶洞受苦四十四難	琵琶洞受苦四十四難	琵琶洞受苦四十四難	琵琶洞受苦四十四難	琵琶洞受苦四十四難			
45	再貶心猿四十五難	再貶心猿四十五難	再貶心猿四十五難	再貶心猿四十五難	再貶心猿四十五難	再貶心猿四十五難	再貶心猿四十五難	再貶心猿四十五難			
46	難辯獼猴四十六難	難辯獼猴四十六難	難辯獼猴四十六難	難辯獼猴四十六難	難辯獼猴四十六難	難辯獼猴四十六難	難辯獼猴四十六難	難辯獼猴四十六難			
47	路阻火鉢山四十七難	路阻火鉢山四十七難	路阻火鉢山四十七難	路阻火鉢山四十七難	路阻火鉢山四十七難	路阻火鉢山四十七難	路阻火鉢山四十七難	路阻火鉢山四十七難			
48	求取芭蕉扇四十八難	求取芭蕉扇四十八難	求取芭蕉扇四十八難	求取芭蕉扇四十八難	求取芭蕉扇四十八難	求取芭蕉扇四十八難	求取芭蕉扇四十八難	求取芭蕉扇四十八難			
49	收縛魔王四十九難	收縛魔王四十九難	收縛魔王四十九難	收縛魔王四十九難	收縛魔王四十九難	收縛魔王四十九難	收縛魔王四十九難	收縛魔王四十九難			
50	寅城掃塔五十難	寅城掃塔五十難	寅城掃塔五十難	寅城掃塔五十難	寅城掃塔五十難	寅城掃塔五十難	寅城掃塔五十難	寅城掃塔五十難			
51	取寶救僧五十一難	取寶救僧五十一難	取寶救僧五十一難	取寶救僧五十一難	取寶救僧五十一難	取寶救僧五十一難	取寶救僧五十一難	取寶救僧五十一難			
52	棘林吟咏五十二難	棘林吟咏五十二難	棘林吟咏五十二難	棘林吟咏五十二難	棘林吟咏五十二難	棘林吟咏五十二難	棘林吟咏五十二難	棘林吟咏五十二難			
53	小雷音遇難五十三難	小雷音遇難五十三難	小雷音遇難五十三難	小雷音遇難五十三難	小雷音遇難五十三難	小雷音遇難五十三難	小雷音遇難五十三難	小雷音遇難五十三難			
54	諸天神遭困五十四難	諸天神遭困五十四難	諸天神遭困五十四難	諸天神遭困五十四難	諸天神遭困五十四難	諸天神遭困五十四難	諸天神遭困五十四難	諸天神遭困五十四難			
55	稀柿衞穢阻五十五難	稀柿衞穢阻五十五難	稀柿衞穢阻五十五難	稀柿衞穢阻五十五難	稀柿衞穢阻五十五難	稀柿衞穢阻五十五難	稀柿衞穢阻五十五難	稀柿衞穢阻五十五難			
56	朱紫國行醫五十六難	朱紫國行醫五十六難	朱紫國行醫五十六難	朱紫國行醫五十六難	朱紫國行醫五十六難	朱紫國行醫五十六難	朱紫國行醫五十六難	朱紫國行醫五十六難			
57	拯救疲癯五十七難	拯救疲癯五十七難	拯救疲癯五十七難	拯救疲癯五十七難	拯救疲癯五十七難	拯救疲癯五十七難	拯救疲癯五十七難	拯救疲癯五十七難			
58	降妖取后五十八難	降妖取后五十八難	降妖取后五十八難	降妖取后五十八難	降妖取后五十八難	降妖取后五十八難	降妖取后五十八難	降妖取后五十八難			
59	七情迷沒五十九難	七情迷沒五十九難	七情迷沒五十九難	七情迷沒五十九難	七情迷沒五十九難	七情迷沒五十九難	七情迷沒五十九難	七情迷沒五十九難			
60	多目遭傷六十難	多目遭傷六十難	多目遭傷六十難	多目遭傷六十難	多目遭傷六十難	多目遭傷六十難	多目遭傷六十難	多目遭傷六十難			

f	e	d	c	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	版本	系統
聖僧歷難簿分明	路逢十萬八千里			凌雲渡脱胎八十難	銅臺府監禁七十九難	天竺招婚七十八難	趕捉犀牛七十七難	玄英洞受苦七十六難	竹節山遭難七十五難	會慶釘鈹七十四難	失落兵器七十三難	鳳仙郡求雨七十二難	隱霧山遇魔七十一難	滅法國難行七十難	無底洞遭困六十九難	僧房臥病六十八難	松林救怪六十七難	辯認真邪六十六難	比丘救 十五難	請佛收魔六十四難	城裏通災 十三難	怪分三色六十二難	路阻獅 難	①淺野文庫藏李卓吾丙本	李卓吾批評本系
聖僧歷難簿分明	路過十萬八千里			凌雲渡脱胎八十難	銅臺府監禁七十九難	天竺招婚七十八難	趕捉犀牛七十七難	玄英洞受苦七十六難	竹節山遭難七十五難	會慶釘鈹七十四難	失落兵器七十三難	鳳仙郡求雨七十二難	隱霧山遇魔七十一難	滅法國難行七十難	無底洞遭困六十九難	僧房臥病六十八難	松林救怪六十七難	辯認真邪六十六難	比丘救子六十五難	請佛收魔六十四難	城裡通災六十三難	怪分三色六十二難	路阻獅駝六十一難	②内閣文庫藏李卓吾甲本	
聖僧歷難簿分明	路過十萬八千里			凌雲渡脱胎八十難	銅臺府監禁七十九難	天竺招婚七十八難	趕捉犀牛七十七難	玄英洞受苦七十六難	竹節山遭難七十五難	會慶釘鈹七十四難	失落兵器七十三難	鳳仙郡求雨七十二難	隱霧山遇魔七十一難	滅法國難行七十難	無底洞遭困六十九難	僧房臥病六十八難	松林救怪六十七難	辯認真邪六十六難	比丘救子六十五難	請佛收魔六十四難	城裡通災六十三難	怪分三色六十二難	路阻獅駝六十一難	③書陵部藏李卓吾乙本	
聖僧歷難簿分明	路逢十萬八千里			凌雲渡脱胎八十難	銅臺府監禁七十九難	天竺招婚七十八難	趕捉犀牛七十七難	玄英洞受苦七十六難	竹節山遇難七十五難	會慶釘鈹七十四難	失落兵器七十三難	鳳仙郡求雨七十二難	隱霧山遇魔七十一難	滅法國難行七十難	無底洞遭困六十九難	僧房臥病六十八難	松林救怪六十七難	辯認真邪六十六難	比丘救子六十五難	請佛收魔六十四難	城裡通災六十三難	怪分三色六十二難	路阻獅駝六十一難	④慶應藏閻齋堂本	
難簿分明記不訛	路過十萬八千里	聖僧歷七苦遭魔	揭諦伽藍護法多	凌雲渡脱胎八十難 一難 這正是	銅臺府監禁七十九難 一難	天竺招婚七十八難 一難	趕捉犀牛七十七難 一作二難	玄英洞受苦七十六難	竹節山遭難七十五難 一作三難	會慶釘鈹七十四難	失落兵器七十三難	鳳仙郡求雨七十二難 一難	隱霧山遇魔七十一難 一難	難行七十難 一難	無底洞遭困六十九難 一作二難	僧房臥病六十八難	松林救怪六十七難 一難	辯認真邪六十六難 一作難	比丘救子六十五難	請佛收魔六十四難 一作四難	城裡通災六十三難	怪分三色六十二難	路阻獅駝六十一難	⑤内閣文庫藏桐寄刊汪象旭本	汪象旭箋評本系
難簿分明記不訛	路過十萬八千里	聖僧歷歷苦遭魔	這正是 揭諦伽藍護法多	凌雲渡脱胎八十難 一難	銅臺府監禁七十九難 一難	天竺招婚七十八難 一難	趕捉犀牛七十七難 一作二難	玄英洞受苦七十六難	竹節山遭難七十五難 一作三難	會慶釘鈹七十四難	失落兵器七十三難	鳳仙郡求雨七十二難 一難	隱霧山遇魔七十一難 一難	滅法國難行七十難 一難	無底洞遭困六十九難 一難一難	僧房臥病六十八難	松林救怪六十七難 一難	辯認真邪六十六難 一作二難	比丘救子六十五難	請佛收魔六十四難 一作四難	城裡遇災六十三難	怪分三色六十二難	路阻獅駝六十一難	⑥浙江圖書館藏汪象旭奇書本	
				凌雲渡脱胎八十難	銅臺府監禁七十九難	天竺招婚七十八難	趕捉犀牛七十七難	玄英洞受苦七十六難	竹節山遭難七十五難	會慶釘鈹七十四難	失落兵器七十三難	鳳仙郡求雨七十二難	隱霧山遇妖七十一難	滅法國難行七十難	無底洞遭困六十九難	僧房臥病六十八難	松林救怪六十七難	辯認真邪六十六難	比丘救子六十五難	請佛收魔六十四難	城裡通災六十三難	怪分三色六十二難	路阻獅駝六十一難	⑦双紅堂藏懷新樓刊汪本	張書紳註本系
聖僧歷難簿分明	路經十萬八千里			凌雲渡脱胎八十難	銅臺府監禁七十九難	天竺招婚七十八難	趕捉犀牛七十七難	玄英洞受苦七十六難	竹節山遭難七十五難	會慶釘鈹七十四難	失落兵器七十三難	鳳仙郡求雨七十二難	隱霧山遇魔七十一難	滅法國難行七十難	無底洞遭困六十九難	僧房臥病六十八難	松林救怪六十七難	辯認真邪六十六難	比丘救子六十五難	請佛收魔六十四難	城裡遇災六十三難	怪分三色六十二難	路阻獅駝六十一難	⑧東大漢籍藏張書紳註本	



型	系統	版本	a	b	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
(3) 陳士斌詮解本型	陳士斌詮解本系	① 靜嘉堂藏陳士斌A本			金蟬遭貶第一難	出胎幾殺第二難	滿月拋江第三難	尋親報冤第四難	出城逢虎第五難	落坑折從第六難	雙叉嶺上第七難	兩界山頭第八難	陡澗換馬第九難	夜被火燒第十難	失却袈裟十一難	收伏八戒十二難	黃風怪阻十三難	請求靈吉十四難	流沙難渡十五難	收得沙僧十六難	四聖顯化十七難	五莊觀中十八難	難活人參十九難	貶退心猿二十難	黑松林失散二十一難	寶象國稍書二十二難	金鑾殿變虎二十三難	平頂山逢魔二十四難	蓮花洞高懸二十五難	烏鷄國救主二十六難	被魔化身二十七難
		② 無窮會藏陳士斌A本			金蟬遭貶第一難	出胎幾殺第二難	滿月拋江第三難	尋親報冤第四難	出城逢虎第五難	落坑折從第六難	雙叉嶺上第七難	兩界山頭第八難	陡澗換馬第九難	夜被火燒第十難	失却袈裟十一難	收伏八戒十二難	黃風怪阻十三難	請求靈吉十四難	流沙難渡十五難	收得沙僧十六難	四聖顯化十七難	五莊觀中十八難	難活人參十九難	貶退心猿二十難	黑松林失散二十一難	寶象國稍書二十二難	金鑾殿變虎二十三難	平頂山逢魔二十四難	蓮花洞高懸二十五難	烏鷄國救主二十六難	被魔化身二十七難
		③ 上海圖書館藏陳士斌B本			金蟬遭貶第一難	出胎幾殺第二難	滿月拋江第三難	尋親報冤第四難	出城逢虎第五難	落坑折從第六難	雙叉嶺上第七難	兩界山頭第八難	陡澗換馬第九難	夜被火燒第十難	失却袈裟十一難	收伏八戒十二難	黃風怪阻十三難	請求靈吉十四難	流沙難渡十五難	收得沙僧十六難	四聖顯化十七難	五莊觀中十八難	難活人參十九難	貶退心猿二十難	黑松林失散二十一難	寶象國稍書二十二難	金鑾殿變虎二十三難	平頂山逢魔二十四難	蓮花洞高懸二十五難	烏鷄國救主二十六難	被魔化身二十七難
		④ 上海古籍藏陳士斌本			金蟬遭貶第一難	出胎幾殺第二難	滿月拋江第三難	尋親報冤第四難	出城逢虎第五難	落坑折從第六難	雙叉嶺上第七難	兩界山頭第八難	陡澗換馬第九難	夜被火燒第十難	失却袈裟十一難	收伏八戒十二難	黃風怪阻十三難	請求靈吉十四難	流沙難渡十五難	收得沙僧十六難	四聖顯化十七難	五莊觀中十八難	難活人參十九難	貶退心猿二十難	黑松林失散二十一難	寶象國稍書二十二難	金鑾殿變虎二十三難	平頂山逢魔二十四難	蓮花洞高懸二十五難	烏鷄國救主二十六難	被魔化身二十七難
	劉一明解本系	⑤ 甘肅圖書館藏劉一明本			金蟬遭貶第一難	出胎幾殺第二難	滿月拋江第三難	尋親報冤第四難	出城逢虎第五難	落坑折從第六難	雙叉嶺上第七難	兩界山頭第八難	陡澗換馬第九難	夜被火燒第十難	失却袈裟十一難	收伏八戒十二難	黃風怪阻十三難	請求靈吉十四難	流沙難渡十五難	收得沙僧十六難	四聖顯化十七難	五莊觀中十八難	難活人參十九難	貶退心猿二十難	黑松林失散二十一難	寶象國稍書二十二難	金鑾殿變虎二十三難	平頂山逢魔二十四難	蓮花洞高懸二十五難	烏鷄國救主二十六難	被魔化身二十七難
		⑥ 北京大學藏張含章本			金蟬遭貶第一難	出胎幾殺第二難	滿月拋江第三難	尋親報冤第四難	出城逢虎第五難	落坑折從第六難	雙叉嶺上第七難	兩界山頭第八難	陡澗換馬第九難	夜被火燒第十難	失却袈裟十一難	收伏八戒十二難	黃風怪阻十三難	請求靈吉十四難	流沙難渡十五難	收得沙僧十六難	四聖顯化十七難	五莊觀中十八難	難活人參十九難	貶退心猿二十難	黑松林失散二十一難	寶象國稍書二十二難	金鑾殿變虎二十三難	平頂山逢魔二十四難	蓮花洞高懸二十五難	烏鷄國救主二十六難	被魔化身二十七難
		⑦ 慶應藏含晶子本			金蟬遭貶第一難	出胎幾殺第二難	滿月拋江第三難	尋親報冤第四難	出城逢虎第五難	落坑折從第六難	雙叉嶺上第七難	兩界山頭第八難	陡澗換馬第九難	夜被火燒第十難	失却袈裟十一難	收伏八戒十二難	黃風怪阻十三難	請求靈吉十四難	流沙難渡十五難	收得沙僧十六難	四聖顯化十七難	五莊觀中十八難	難活人參十九難	貶退心猿二十難	黑松林失散二十一難	寶象國稍書二十二難	金鑾殿變虎二十三難	平頂山逢魔二十四難	蓮花洞高懸二十五難	烏鷄國救主二十六難	被魔化身二十七難

系統	陳士斌詮解本系	劉一明解本系	張含章註本系	含晶子評註本系
版本	① 静嘉堂藏陳士斌 A 本	甘肅圖書館藏劉一明解本	北京大學藏張含章註本	慶應藏含晶子評註
28	號山逢怪二十八難	號山逢怪二十八難	號山逢怪二十八難	號山逢怪二十八難
29	風攝聖僧二十九難	風攝聖僧二十九難	風攝聖僧二十九難	風攝聖僧二十九難
30	心猿遭害三十難	心猿遭害三十難	心猿遭害三十難	心猿遭害三十難
31	請聖降妖三十一難	請聖降妖三十一難	請聖降妖三十一難	請聖降妖三十一難
32	黑河沉沒三十二難	黑河沉沒三十二難	黑河沉沒三十二難	黑河沈沒三十二難
33	搬運車遲三十三難	搬運車遲三十三難	搬運車遲三十三難	搬運車遲三十三難
34	大賭輸贏三十四難	大賭輸贏三十四難	大賭輸贏三十四難	大賭輸贏三十四難
35	祛道興僧三十五難	祛道興僧三十五難	祛道興僧三十五難	祛道興僧三十五難
36	路逢大水三十六難	路逢大水三十六難	路逢大水三十六難	路逢大水三十六難
37	身落天河三十七難	身落天河三十七難	身落天河三十七難	身落天河三十七難
38	魚籃現身三十八難	魚籃現身三十八難	魚籃現身三十八難	魚籃現身三十八難
39	金嶼山遇怪三十九難	金兜山遇怪三十九難	金嶼山遇怪三十九難	金嶼山遇怪三十九難
40	普天神難伏四十難	普天神難伏四十難	普天神難伏四十難	普天神難伏四十難
41	問佛根源四十一難	問佛根源四十一難	問佛根源四十一難	問佛根源四十一難
42	吃水遭毒四十二難	吃水遭毒四十二難	吃水遭毒四十二難	吃水遭毒四十二難
43	西梁國留婚四十三難	西梁國留婚四十三難	西梁國留婚四十三難	西梁國留婚四十三難
44	琵琶洞受苦四十四難	琵琶洞受苦四十四難	琵琶洞受苦四十四難	琵琶洞受苦四十四難
45	再貶心猿四十五難	再貶心猿四十五難	再貶心猿四十五難	再貶心猿四十五難
46	難辨獼猴四十六難	難辨獼猴四十六難	難辨獼猴四十六難	難辨獼猴四十六難
47	路阻火鉢山四十七難	路遇火鉢山四十七難	路遇火鉢山四十七難	路遇火鉢山四十七難
48	求取芭蕉扇四十八難	求取芭蕉扇四十八難	求取芭蕉扇四十八難	求取芭蕉扇四十八難
49	收縛魔王四十九難	收縛魔王四十九難	收縛魔王四十九難	收縛魔王四十九難
50	寶城掃塔五十難	寶城掃塔五十難	寶城掃塔五十難	寶城掃塔五十難
51	取寶救僧五十一難	取寶救僧五十一難	取寶救僧五十一難	取寶救僧五十一難
52	棘林吟咏五十二難	棘林吟咏五十二難	棘林吟咏五十二難	棘林吟咏五十二難
53	小雷音遇難五十三難	小雷音遇難五十三難	小雷音遇難五十三難	小雷音遇難五十三難
54	諸天神遭困五十四難	諸大神遭困五十四難	諸大神遭困五十四難	諸大神遭困五十四難
55	稀柿穢阻五十五難	稀柿穢阻五十五難	稀柿穢阻五十五難	稀柿穢阻五十五難
56	拯救駝羅五十六難	拯救駝羅五十六難	拯救駝羅五十六難	拯救駝羅五十六難

系統	陳士斌詮解本系	劉一明解本系	張含章註本系	含晶子評註本系
版本	①靜嘉堂藏陳士斌A本	甘肅圖書館藏劉一明解本	北京大學藏張含章註本	慶應藏含晶子評註
57	朱紫國行醫五十七難	朱紫國行醫五十七難	朱紫國行醫五十七難	朱紫國行醫五十七難
58	降妖取金聖五十八難	降妖取金聖五十八難	降妖取金聖五十八難	降妖取金聖五十八難
59	七情迷沒五十九難	七情迷沒五十九難	七情迷沒五十九難	七情迷沒五十九難
60	多目遭傷六十難	多目遭傷六十難	多目遭傷六十難	多目遭傷六十難
61	路阻獅駝六十一難	路阻獅駝六十一難	路阻獅駝六十一難	路阻獅駝六十一難
62	怪分三色六十二難	怪分三色六十二難	怪分三色六十二難	怪分三色六十二難
63	城裡遇災六十三難	城裡遇災六十三難	城裡遇災六十三難	城裡遇災六十三難
64	請佛收魔六十四難	請佛收魔六十四難	請佛收魔六十四難	請佛收魔六十四難
65	比丘救子六十五難	比丘救子六十五難	比丘救子六十五難	比丘救子六十五難
66	辨認真邪六十六難	辨認真邪六十六難	辨認真邪六十六難	辨認真邪六十六難
67	松林救怪六十七難	松林救怪六十七難	松林救怪六十七難	松林救怪六十七難
68	僧房卧病六十八難	僧房卧病六十八難	僧房卧病六十八難	僧房卧病六十八難
69	無底洞遭困六十九難	無底洞遭困六十九難	無底洞遭困六十九難	無底洞遭困六十九難
70	滅法國難行七十難	滅法國難行七十難	滅法國難行七十難	滅法國難行七十難
71	隱霧山遇魔七十一難	隱霧山遇魔七十一難	隱霧山遇魔七十一難	隱霧山遇魔七十一難
72	鳳仙郡求雨七十二難	鳳仙郡求雨七十二難	鳳仙郡求雨七十二難	鳳仙郡求雨七十二難
73	失落兵器七十三難	失落兵器七十三難	失落兵器七十三難	失落兵器七十三難
74	會慶釘鉅七十四難	妖慶釘鉅七十四難	妖慶釘鉅七十四難	會慶釘鉅七十四難
75	竹節山遭難七十五難	竹節山遭難七十五難	竹節山遭難七十五難	竹節山遭難七十五難
76	佞英洞受苦七十六難	佞英洞受苦七十六難	佞英洞受苦七十六難	佞英洞受苦七十六難
77	趕捉犀牛七十七難	趕捉犀牛七十七難	趕捉犀牛七十七難	趕捉犀牛七十七難
78	天竺招婚七十八難	天竺招婚七十八難	天竺招婚七十八難	天竺招婚七十八難
79	銅臺府監禁七十九難	銅臺府監禁七十九難	銅臺府監禁七十九難	銅臺府監禁七十九難
80	凌雲渡脫胎八十難這正是	凌雲渡脫胎八十難這正是	凌雲渡脫胎八十難這正是	凌雲渡脫胎八十難這正是
c	揭諦伽藍護法多	揭諦伽藍護法多	揭諦伽藍護法多	揭諦伽藍護法多
d	聖僧歷歷苦遭魔	聖僧歷歷苦遭魔	聖僧歷歷苦遭魔	聖僧歷歷苦遭魔
e	路過十萬八千里	路過十萬八千里	路過十萬八千里	路過十萬八千里
f	難簿分明記不訛	難簿分明記不訛 收束全部	難簿分明記不訛 收束全部	難簿分明記不訛

## 第二章 世徳堂本の版本について

### はじめに

本章では、現存最古の百回本として重視される所謂世徳堂本の版本問題を検討する。世徳堂本と呼ばれるものには二版あることが先行研究で指摘されているが、そのうちどちらが覆刻であるのかについては、見解が割れている。本章ではその問題の決着を図る。

### 一、世徳堂本『西遊記』の伝本

百回本『西遊記』の現存最古の版本として広く知られるのが、刊行の経緯を述べる秣陵陳元之の序が「時壬辰夏端四日也」と結ぶことから万暦二十年（一五九二）の刊行とされ、一般に世徳堂本（または単に世本）と呼ばれている、『新刻出像官板大字西遊記』二十巻である。この世徳堂本には、以下の四本の伝存が確認されている。まず、それぞれの伝来と学術的な紹介の経緯を確認しておこう。

①台湾国立故宮博物院蔵本（高崎藩大河内家・村口書房・北平図書館旧蔵。以下「故宮世本」と略称）

一九二九年の夏に神田神保町にあった村口書房が高崎藩大河内家

の旧蔵書を一括購入し、その目録を編纂して売りに出した際に含まれていたもの。ほどなく長澤規矩也「蠹魚漫言」〔『斯文』第十二編第一号、一九三〇〕において、同じくその中に含まれていた劉蓮台刊朱鼎臣編本（台湾故宮博物院現蔵）とともに、大きな価値のあるものとして概略が紹介された。村口書房の店頭にあった時期に孫楷第氏が調査し、『日本東京及大連図書館所見中国小説書目提要』（国立北平図書館、一九三一。以下『東京目』と称す）でより詳しい書誌を紹介した。一九三三年到北京図書館（現中国国家図書館）の前身である北平図書館に入り、大戦中に他の善本とともにアメリカに移管され、一九六五年に台湾に渡って、一九六八年から台湾故宮博物院に保管されている<sup>1</sup>。アメリカ保管中に撮影された「北平図書館善本書膠片」が国会図書館・東洋文庫・中国国家図書館などに所蔵され、『明清善本小说叢刊』と『古本小说集成』に影印もされているため、日本所蔵で影印本も無い他の三本より広く利用されて来た。筆者は主に国会図書館蔵「北平図書館善本書膠片」からの紙焼きによって調査し、疑問の箇所につき原本を閲覧して確認した。

②広島市立中央図書館浅野文庫蔵本「存卷十一〜二十」(広島藩浅野

家旧蔵。以下「浅野世本」と略称)

この浅野世本のみ、他の三本と全葉が異版である。

広島藩浅野家の旧蔵書。最後の広島藩主だった浅野長勲(一八四二〜一九三七)は、一九二六年十一月に浅野図書館を設立し、一九三一年十月にそれを広島市に寄贈した。同時に浅野家の旧蔵書も浅野図書館に寄贈され、浅野文庫の名の下に管理されることとなった。原爆の被害は疎開していたことで免れ、一九七四年には浅野図書館の名が現在の名称に変更された。長澤前掲論文にその存在がごく簡単に触れられているが、詳細な紹介は斯波六郎・田中巖『広島市立浅野図書館和漢図書目録』(広島市教育委員会、一九五二)や田中巖「西遊記の伝本」(『横浜大学論叢・人文科学系列』第八卷第三号、一九五七)など、田中巖氏によつてなされた。なお、浅野文庫には李卓吾評丙本も所蔵されている。

毎巻一冊の装丁だが、巻十一の冊の前表紙に「西遊記十一始」と墨書しており、前半は早くから欠いていたものと思われる。

筆者は原本を四度閲覧しており、その際に撮影させて頂いた画像データと、マイクロフィルムからの紙焼きとを所持している。

③日光輪王寺慈眼堂天海蔵蔵本(天海大僧正旧蔵。以下「日光世本」

と略称)

天海蔵とは輪王寺における天海大僧正旧蔵書の称。輪王寺の天海蔵には通俗小説の善本が多く、『唐僧西遊記』や分則本の劉蓮台刊朱鼎臣編本も所蔵されている。また、叡山文庫にも天海蔵があつて、そちらにも『唐僧西遊記』が所蔵される。豊田穰「某山法庫観書録」(『書誌学』第十六卷六号、一九四一)で紹介されたが、発見までの経緯は長澤規矩也「日光慈眼堂の小説書について」(『大安』第五卷第九号、一九五九)に詳しい。戦後は原則非公開となっており、筆者未見。但し、長澤規矩也氏<sup>2</sup>・瀧本弘之氏<sup>3</sup>・磯部彰氏<sup>4</sup>が実見して書誌事項を紹介している。

なお、この本の書影は、丹表紙が磯部注4書にカラーで二冊分、目末と巻一首の見開きが磯部注4書にカラーで一点、挿画部分の見開きがいずれも白黒で瀧本注3書に十点と磯部注4書に七点、更に数文字のみを取り出している部分図が磯部注4書に白黒で二十八点掲載されており、本章の考察ではそれらを活用した。

④天理大学附属天理図書館蔵本(京都槇尾山西明寺平等心王院旧蔵

以下「天理世本」と略称)

各冊首に陽刻長方「平等心王院」朱印を捺す。一九五〇年代後半に天理図書館に帰したもので、鳥居久靖「天理図書館蔵『新刻出像

官板大字西遊記』覚え書」(『ビブリア』第十二号、一九五八。次号に補訂を載せる)で書誌事項が紹介された。

筆者は原本未見、マイクロフィルムからの紙焼きによって調査している。なお、磯部注4書に封面と挿画一幅の計二点の書影をカラーで載せている。

## 二、四本の伝本の書誌

四本とも二十巻百回で、天理世本のみ封面を存する(磯部注4書口絵にカラー写真あり)。その封面は白紙墨印で、単辺無界の枠内左右に大きく「刻官板全／像西遊記」、その中間に小さく「金陵唐氏世德堂校梓」と刻し、上方に魁星朱印を捺している。

故宮世本・日光世本・天理世本は、いずれも巻頭に秣陵陳元之撰「刊西遊記序」を持つ(序章に故宮世本によつて全文を引いた)。序末に「時壬辰夏端四日也」と署名するが、これは万暦二十年と見るのが『東京目』以来の通説である。異論も全く出ていない訳ではないが、万暦二十年で問題ないことは第三章において確認する。続いて「新刻出像官板大字西遊記目錄」があり、邵康節の五言絶句「清夜吟」から一字ずつを取って「月字卷之一」等と巻数を記す。

本文は半葉十二行二十四字、四周單辺、有界、白口、單黒魚尾。

版心は「出像西遊記【魚尾】卷之幾(隔七／＼八格)葉数(隔三格)

文字数」とする。但し、文字数は浅野世本卷十一第四十葉「五百廿七」と、浅野世本・故宮世本・天理世本の卷十一第四十一葉「五百廿四」<sup>5)</sup>とが見えるのみである(日光世本は不明)。

故宮世本・日光世本・天理世本は、卷一首第一／＼三行に「新刻出像官板大字西遊記月字卷之一／(低十三格)華陽洞天主人校／(低十三格)金陵世德堂梓行」とある。他の巻の冒頭も基本的にこれに準ずるが、第二／＼三行の「華陽洞天主人校／金陵世德堂梓行」の箇所は、卷九・十・十九・二十では「華陽洞天主人校／金陵榮壽堂梓行」(卷九のみ榮を榮に作る)とし、同卷十六では「華陽洞天主人校／書林熊雲瀆重鏤」となっている。『古本小説集成』(上海古籍出版社、一九九四)に収める故宮世本の影印本の徐朔方「前言」では、右の状況から故宮世本は卷九・十・十九・二十の各巻は榮壽堂刊本、卷十六は熊雲瀆刊本、それ以外の巻は世德堂刊本という三種の異版を收藏の段階で取り合わせた配本であろうとの見解が示されているが、日光世本や天理世本でも同じ状況である以上、收藏段階での取り合わせということは考えられない。

三者と異版の浅野世本の現存する巻の巻頭は、卷十六以外の状況は他の三本に同じだが、卷十六では「華陽洞天主人校／書林熊雲瀆重鏤」に相当する箇所が削り取られて空白となっている(図1／＼3)。

四本とも本文中の三／＼十葉おきに、ある葉のB面と次の葉A面の

二半葉を使った見開きの図（以降、本論文全体を通してこの形式の図を双面連式挿画と称する）が挿入され、上部に版面の八分の一ほどの欄を設けて八十字程度の図題を記す。挿画の数は故宮世本は全百九十七幅、天理世本は全百九十五幅。浅野世本は故宮世本・天理世本の卷十一以降と同じ九十九幅を存するが、本文と同様に全葉が異版。筆者未見の日光世本は、瀧本注3解題の記述から判断するに、故宮世本と同じ百九十七幅を持つようだ。瀧本氏は

本来二十卷一百回の構成で、各回に二図ずつを挿画として付するのであれば、二百図があるべきである。構成上区切りの悪い数字であることは説明が付かない。原刻本が金陵で刊行されたときには、二百図が付せられていたと考えるのが自然である（比較的状态の良い輪王寺本も、残されているのは百九十七図ということとは、説明が付かないままである）。長澤規矩也氏による戦前の実見調査の記録には、これら版本の前後関係などについての記述があるが、挿画についての文字は残されていない。刊行された時点で残りの三図が存在していたのか、それは何らかの理由で残っていないのかなどの究明は今後の課題といえそうである。

と述べている（四頁）。瀧本氏の参照されなかった故宮世本も図は日光世本と同じ百九十七幅しか見えないので、両者とも印行時点で百

九十七幅しか存在しなかったと見てよからう。しかし、世徳堂初刻本でも同じ数の図しかなかったのか、それとも瀧本氏の推定通り二百幅あったのかは別の問題である。その意味で、後述のように初刻本説のある浅野世本も後半五十回で九十九幅しか図がないことは注意すべき点であろう。

なお、故宮世本で挿画が無いのは、第三回前半、第十八回相当部分。前半、第九十四回後半である。この他、第六十五回後半の挿画の右半分が欠葉だが、これは天理世本には存する。

天理世本では、更に第四回後半（故宮世本卷一―四五B四六A）と第七十二回後半（同卷十五―二三B二四A）の図が無い。このうち後者は二三Aと二四Bがともに残るため、伝来の過程で図のみが切り取られたものと考えられる<sup>7</sup>。一方前者は天理世本の印刷段階で既に無かったと考えられる。天理世本の卷一には補版葉が多く、第七・八・二十七・四十四・四十五・四十六・四十七の各葉が補版である。これらの補版葉は天理世本の丁付に従って示したが、天理世本では故宮世本の卷一―四六Bを自らの卷一―四五Bとして覆刻しており、以下の葉では同版であっても補版であっても版心の丁付を故宮世本から一を引いた数字に改めている。つまり、天理世本は補版を行った際に卷一―四五B四六Aの挿画を省略して、その分だけ丁付を詰める処理を行っていると言う訳だ。

また、故宮世本・天理世本・日光世本には刻工や画工の名が見えず、世徳堂本の図は従来刻工・画工とも不明とされてきた。しかし、これらと版を異にする浅野世本には画工の署名が残っている。即ち、卷十三—三B（第六十一回第一図）の右端に、他の三本には見えない「王少淮寫」という署名があるのだ（図9）。王少淮については後述する。

### 三、先行研究

#### （1）世本四種相互の関係

日光世本が長らく原則未公開であるため、四本を全て調査した上でこの問題を論じたのは長澤規矩也氏と磯部彰氏の二人だけだが、両氏の説は正反対である。

まず長澤氏は、注2解題一一四頁において、この本を次のように著録している。

（新刻出像官板大字）西遊記 二十卷百回 （整理番号略）

明万曆刊後修本。十二行二十四字。段句、白口、单边。首、

陳元之「刊西遊記序」。伝存の西遊記中最古のもので、巻頭には

「華陽洞天主人校」金陵世徳堂梓行」の両行があり、高崎藩大

河内家から出て北京図書館に納めた本。とは同版であるが、これはその後印補修本である。天理図書館所蔵本は更に後の印刷

か。又、浅野図書館所蔵残本（卷十一至二十）はこの本の覆刻本である。第一・十冊前表紙裏に「進上 觀泉坊」の墨書がある。

対して、磯部注4書では、故宮世本・日光世本・天理世本では各巻の巻頭第三行に記される刊行者の名が基本的に「金陵世徳堂梓行」であるものの、卷九・十・十九・二十では「金陵榮壽堂梓行」（卷九のみ榮を榮に作る）、卷十六では「書林熊雲濱重鐫」となっていること、異版の浅野世本の各巻巻頭は、卷十六が該当行を空白とする点のみ故宮世本と異なり、その他の巻では故宮世本に同じであることを踏まえつつ論を進め、二二二頁に示される結論は次の通りである。

1 初刻本（後印刷） 金陵・唐氏世徳堂榮壽堂刊 広島市立

中央図書館浅野文庫本

2 重刻本 建陽・熊雲濱用世徳堂版重刻 日光輪王寺本

後印本 天理図書館本

3 重刻補修本 建陽・熊雲濱重刻版補修重印 台湾国立故宮

博物院図書館文献処本

但し、天理世本と故宮世本の前後については、磯部氏は同頁の注7において

……天理本と台湾故宮本双方を比較すると、その先後の区別がつきにくい点があり、論旨とは矛盾するかのように台湾故宮本



が日光本よりやや後印、天理本はむしろその台湾故宫本の後印・補刻版と言った葉も見られる。同時印刷時の技術的な「むら」という処理ではその点は解決できず、本論では全体の様相からその先後を想定した。現存本が、商品もしくは蔵本として完全を来たすように、ある段階で別の版本から部品取りのようにして補配されて伝存したという想像もできるかもしれない。

(中略) ささいなことではあるが、天理本と台湾故宫本の刊行先後については筆者自身も疑問がなお払拭されないので、更に検討を続けたい。

と、確信の持てる判断ではないことを告白されている。

この通り、両氏の説で一致しているのは浅野世本と他の三本が異版であるという点だけで、異版二種の先後についても、故宫世本と同版の三本の中の先後についても見解が割れている。

なお、このほか、浅野世本については太田辰夫氏が

浅野図書館蔵のものは、版は処々磨滅があるが甚だしくはなく、天理蔵本よりもはるかに読みやすい。補刻したらしく字体のちがっている葉が若干ある。

との見解を示されている。太田氏は天理世本と浅野世本が同版か異版かについては述べていないが、浅野世本に補版葉が含まれることを指摘しているという形だ。この点について長澤氏は何も触れて

おらず、磯部氏は磯部注4書二〇九頁で「やや後印本か補修本であったかもしれない」としているが、補修本というのが補版葉が含まれるという意味で言っているのか、或いは版木の差し替えまでは伴わない部分的な修版を想定しているのかは明確ではない。

それから、天理世本について鳥居久靖氏が前掲論文で

総じて天理本には、版木の磨滅はなだしく判読に堪えぬ部分が随所にある。後印本であること疑いなく、また補刻されたとおぼしき葉も混在する。他の刊本を見ていないので軽々しい論断はできないが、概して言えば善本とは申せないようである。

と述べている(一三頁)。既に前節で巻一の状況を示した通り、確かに天理世本には故宫世本に対して一定量の補版葉が認められる。

## (2) 刊行者をめぐる

一方、専ら比較的容易に見られる故宫世本を対象に行われて来た中台の研究では、その各巻の巻頭における、「金陵世德堂梓行」「金陵榮壽堂梓行」「書林熊雲瀆重鐫」という刊行者名の相違をどのように解釈すべきかについて多くの議論がなされて来た。

例えば、王重民『中国善本書提要』(上海古籍出版社、一九八三)四〇二頁では、故宫世本は金陵世德堂による初刻本ではなく、熊氏榮壽堂が世德堂刊本の版木を入手して修版重印したものではないかと指摘される。それを承けた方彦寿「熊雲瀆与世德堂本《西遊記》」

『文献』一九八八年第四期）は、王氏が熊雲瀆を金陵榮寿堂の主人と看做したのは誤りで、熊雲瀆は『潭陽熊氏宗譜』に見える明末清初の建陽崇化里の人で、名は体忠、字を爾報、雲瀆は号であると指摘して、故宮世本は彼による建陽での重刊本であると唱えた。上記の磯部氏の説もこの系譜に連なるもので、磯部氏は注4書二一〇〜二二一頁において、方氏の説に補正を加えつつ論を進めている<sup>10</sup>。

また、「金陵榮壽堂」については、磯部氏が注10書において、唐氏世徳堂の同族で、初刻本の時点で世徳堂と協力して版木を鑄工して印刷した書坊だとの推測をなされているが、自ら「確證は乏しいが」ともされている（三九七頁）。また、黄霖「關於《西遊記》的作者和主要精神」、『復旦学報（社会科学版）』一九九八年第二期）は、王重民氏の説を引きつつ、逆に先行する榮寿堂刊本の版木を世徳堂が入手して重印した可能性もあるのではないかとしている。

謝文華注1論文六〇〜六五頁では、これらを踏まえて、故宮世本は巻頭にどの書肆名を冠する巻にも他と字体の異なる葉が含まれていること、巻頭に世徳堂の名を冠する巻十五の中だけで見ても版心の表記方法が葉ごとにバラバラであることなどを挙げつつ、世徳堂原刊本の版木が榮寿堂ないし熊雲瀆の手に渡り、彼らの手による修版・補版を経て、全葉が同時に印行されたのが故宮世本であろうとしている（榮寿堂と熊雲瀆の先後については保留されている）。

#### 四、故宮世本・天理世本・日光世本の印刷順序について

では、まず長澤氏も磯部氏も互いに同版後修の關係と認めている故宮世本・天理世本・日光世本の印刷順序について検討してみよう。確認しておく、長澤説は故宮↓日光（後修）↓天理（後修の後印）の順というもの。磯部説は日光↓天理（後印）↓故宮（後修）だが、「論旨とは矛盾するかのように台湾故宮本が日光本よりやや後印、天理本はむしろその台湾故宮本の後印・補刻版と言った葉も見られる」とも認めており、別の箇所では「日光本と比べると台湾故宮本・天理本ともに後印本で、いずれも熊雲瀆重鏤という刊記を卷十六に伴う。台湾故宮本には補刻葉が見当たらないのに対し、天理本には明らかに補配が見られる」（磯部注4書二一〇頁）とも記している。

まず、磯部氏の論は内部に矛盾を孕んでいると言わざるを得ない。「台湾故宮本には補刻葉が見当たらないのに対し、天理本には明らかに補配が見られる」（傍点筆者）というのであれば、両者が基本的に同版であるという以上、補版葉の無い故宮世本が先行し、補版葉を含む天理世本がその後修本だというのが当然である。これは「補版」という現象の定義の問題であって、覆しようがない。それなのに補版が無いと認める故宮世本の方が補版があるとする天理世本に対して後修本だと結論付けるのは、明らかに矛盾している<sup>11</sup>。磯部

氏は「全体の様相からその先後を想定した」とするが、補版の無い本を強いて補版のある本の後修本と見るのであれば、少なくとも補版がある方の補版が含まれる冊が印刷出売後の伝来・収蔵段階での配本であることを証明せねばなるまい。それはなされていないし、「全体の様相から」と言うだけで、具体的にどの点を重視して天理世本が先行すると判断したのかも特に述べられていない。

しかし念のため、磯部注4書の挙げる例の中から、故宮世本を日光世本・天理世本よりも後に置いた根拠と思しきものを推測してみると、次の四箇所が見出せた。

(一) 卷七—三二B・三三A図で、第三十三葉表の沙和尚の顔と足が、故宮世本のみ日光世本・天理世本と異なる。日光世本・故宮世本は他の図における沙和尚の顔と同じ描き方だが、故宮世本のそれは明らかに風格が異なっている（磯部注4書二二〇頁に三者の書影を掲載）。

(二) 卷十一—A第十一頁、日光世本と天理世本が「輕」とする字を故宮世本は異体字の「輕」とする（磯部注4書二〇六頁に三者のこの前後五文字分の書影を掲載）。

(三) 卷十一—二B三A<sub>1/2</sub>図で、日光世本と天理世本はどちらの半葉にも陰刻でベタ塗りにする箇所を多く含むが、故宮世本のみ三蔵・悟空・八戒・沙僧を描く第二葉裏は全く陰刻を使わず、敵

方の虎力大仙らを描く第三葉表では陰刻も使う（磯部注4書二二頁に三者の書影を掲載）。

(四) 卷二十一—四三A第二行、日光世本と天理世本は「吃水遭愆四十三難」とするが、故宮世本では「吃水遭■四十三難」となっており、これについて磯部氏は「埋木の相違」と注記する（磯部注4書二〇八頁に三者のこの七字分の書影を掲載）。

これらについて検討してみよう。まず(一)は、確かに故宮世本が不自然で、掲載の書影やマイクロフィルムで見る限り、故宮世本には修版が施されているように見える。しかし、故宮世本の原本を閲覧した際にこの箇所を確認したところ、第三十三葉表の沙和尚の顔周辺と足周辺とで原本の料紙に破損があり、そこに裏打修補をし、あてがった紙に手書きで顔と足を補ったためにこのような状態になっていることが分かった。つまり、版木で刷られた部分だけを比べれば、日光世本や天理世本と相違は見出せないのである。

次いで(二)と(三)だが、第一・二葉は同じ版木の裏表で刷られたもので、実質的には一つの問題である。仔細に見ると第三葉も故宮世本だけ他二者と版が異なるが、連続した葉なので、同時に行われた一連の補版と見て差し支えないだろう。この箇所については、確かに陰刻を全く使わない故宮世本の第二葉裏は異色ではあるが、だからと言って日光↓天理↓故宮の印刷順と看做す必然性は無く、長

澤説のように故宮↓日光↓天理の印刷順だったとしても説明は付く。

そして(四)だが、これは第一章表3で見た聖僧歴難簿の一部である。

磯部氏はこの相違を「埋木の相違」と注記しているので、この葉が三者同版であることは認めていることになる。筆者もこの葉は少なくとも故宮世本と天理世本は確実に同版だと確認しているし、磯部注4書掲載のこの部分だけの書影を見る限り、日光世本も同版と認めて良いと感じる。さて、いま仮に印刷順を日光↓天理↓故宮だとする磯部氏の説に従い、かつ「埋木の相違」との注記を踏まえると、磯部氏は日光世本と天理世本で「愆」であった文字を故宮世本が埋木によって墨格に変えた」と解釈されたということになる。しかし、一般論として、同版の二本の間で片方に墨格があり、もう片方でそこが文字となっていれば、版木の作成時に(覆刻なり翻刻なりの底本がたまたま破損していたなどの理由で)正しい文字が分からずに墨格のまま残しておいたところ、後から文字が確認出来たので墨格をそのまま彫って字に変えた、というのが自然な理解だろう。文字を変えるために埋木改刻を施すなら、墨格だけ埋木してそのままにするとは考え難い。従って、これはむしろ墨格のある故宮世本が最も刷りが早く、墨格を彫って「愆」とした日光世本・天理世本がその後修本であるということの証左と見るべき事例であろう。

このように、仔細に検討してみたところ、補版のある天理世本を

強いて補版の無い故宮世本の前の印刷と見ねばならない理由は見当たらなかった。マイクロフィルム同士で全葉を比べてみても、同版の葉ならば、版木の横割れが大きく伸びていたり、匡郭の欠けが増えていたりするのは常に天理世本の方であった。例えば、図2と図3を比べると、天理世本には第一行「字」を貫く版木の横割れがはっきり確認出来るが、故宮世本ではそれがまだずっと小さいことが見て取れる。

このように、故宮世本と天理世本の関係については長澤説の通りで、故宮世本の方が印刷が早く、天理世本がその後修本であることには、もはや疑いの余地は無いと考える。

そして、故宮世本と日光世本の印刷順については、先に挙げた(二)(三)(四)の三例において、日光世本はいずれも故宮世本とは異なり天理世本と同じ状態になっていた。つまり、故宮世本に対する後修本ということになり、これも長澤説の通りで問題ない。

また、日光世本と天理世本の印刷順については長澤氏と磯部氏で日光↓天理で見解が一致している。前述の通り天理世本は補版の際に図を一つ省略して丁付を改める修改をしているが、日光世本の図の数は故宮世本と同じであるから、まだその補修が入っていないようだ。してみれば、故宮世本を基準に見ると、天理世本は最低でも二回の補修を経た通修本ということになる。

よって、この同版三本の関係は、故宮世本が最も早い印刷で、日光世本はその後修本、天理世本は通修本という結論が得られた。故宮世本が最も早い印刷であり、日光世本にはそれに対する修版と補版が、天理世本には更なる修版と補版があるということだから、以下ではこの三本は基本的に故宮世本で代表させ、必要に応じて日光世本と天理世本にも触れる形とする。

## 五、浅野世本と他三本の関係について

では、故宮世本以下の同版三本と、それとは異版の浅野世本とはどのような関係なのだろうか。長澤氏は浅野世本の方が覆刻だとするが、特に根拠は示していない。一方、磯部氏の見解は磯部注4書二〇九頁で述べられており、やや長くなるが、以下に引用する。

……封面や本文に金陵（南京）の「世徳堂」や「榮（榮）壽堂」の刊記があることや陳元之序から見て、金陵版が初刻本であり、建陽刊刻と考えられる熊雲瀆の重刻本は、当然、その再刻版であることは間違いない。従って、一般に世徳堂刊本と総称されて来た『西遊記』の版本は、金陵版と熊雲瀆の建陽版重刻・補修二種の合計三種存在していた可能性がある。

浅野本に「榮壽堂」の名称があつて、「熊雲瀆重鏤」の文字がない点に対し、故宮本・日光本に双方が刻印されていること、

しかも故宮本と日光本（上原按：「浅野本」の誤字か）両版が異版であることを勘案すると、浅野本こそが先行する金陵版であり、日光本・故宮本は金陵版をほぼ忠実に覆刻した建陽版であろうことが想定される。熊雲瀆が卷十六のみを刻板したとは考えられず、また、封面や本文に世徳堂名を残すことを考えると、金陵版を盗版したとは思えず、版權を譲り受けて建陽で開版したのではないかと思われる。金陵版が建陽で重刻された例は、同じ人気小説であつた『三国志演義』にも見られる。『新鏤京本校正按鑑演義全像三国志傳』は、封面に「金陵萬卷書樓藏板」とあるものの、巻一には「熊成治梓行」とあり、巻二には「書林種徳堂熊冲宇梓行」と刻む。種徳堂熊氏は、建陽書林である。建陽での「重鏤」（何らかの底本に基づいて新たに版木を刻んだという意味）だと明記してある版があり、実際にそれとそっくりな異版の本もある以上、書いてある通り本当に建陽での重刊に違いない、というのは実にもつともな指摘である。従って、故宮世本・日光世本・天理世本が熊雲瀆による建陽での覆刻本だという点には、もはや疑念を挟む余地があるまい。そこで、以下ではこの三本は熊雲瀆覆世徳堂刊本と呼ぶことにしよう。

ただ、幾つか気になる点もある。まずは、浅野世本が金陵唐氏世徳堂の初刻本そのものだとして認めて良いかどうかという点だ。本章で

は以下その検証を行っておきたい。

また、熊雲濱が版權を譲り受けて覆刻したという推定についても、そのように認めて良いかどうか検証される必要がある。こちらについては第七章で別の書坊の事例も挙げつつ検証する。

## 六、金陵唐氏世徳堂刊本小説・戯曲の版心表記

### (1) 小説

浅野世本が初刻本と認められるかどうかを検証するために、謝文華注1論文の手法を一步進めて全葉の版心表記を調査し、熊雲濱覆世徳堂刊本や、金陵唐氏世徳堂が刊行した他の小説刊本や戯曲刊本の版心の形式との比較を行ってみたい。

まずは唐氏世徳堂が刊行した他の小説刊本や戯曲刊本の版心や挿画の形式を押さえておこう。小説は以下のものを取り上げる。

- (イ)『新刊出像補訂叅采史鑑南宋志傳通俗演義題評』十卷五十回  
『新刊出像補訂叅采史鑑北宋志傳通俗演義題評』十卷五十回  
唐氏世徳堂癸巳〔万曆二十一年〕<sup>13</sup>長至（夏至）序刊本

（国立公文書館内閣文庫、韓国明珠古版画博物館蔵）<sup>14</sup>

以下では『南北両宋志伝題評』と称す。南宋序末に「時癸巳長至、泛雪斎紋」とあり、北宋序も「癸巳長至紋」と結ぶ。各

巻頭第二〇三行に「姑孰陳氏尺蠖齋評釋／繡谷唐氏世徳堂校訂」と見える。「繡谷」は世徳堂主人の名や金陵の別称などと看做されたこともあるが、江西撫州府金谿県の美称で、世徳堂主人唐氏の籍貫を表すことが近年になって判明している<sup>15</sup>。

- (ロ)『新刊出像補訂叅采史鑑唐書志傳通俗演義題評』八卷八十九節  
唐氏世徳堂癸巳〔万曆二十一年〕<sup>16</sup>陽月（旧曆十月）序刊本

（静嘉堂文庫、尊経閣文庫蔵）<sup>17</sup>

以下では『唐書志伝題評』と称す。序末に「癸巳陽月、書之尺蠖齋中」とある。各巻頭第二〇三行に「姑孰陳氏尺蠖齋評釋／繡谷唐氏世徳堂校訂」と見える。

- (ハ―1)『新鐫重訂出像註釋西晋志傳通俗演義題評』四卷百十七則  
『新鐫重訂出像註釋通俗演義東晋志傳題評』八卷二百三十二則  
唐氏世徳堂〔万曆前期〕刊〔万曆天啓間〕後修本

（尊経閣文庫蔵）<sup>18</sup>

以下では『東西両晋志伝題評』と称す。序欠、刊年不詳。各巻第二〇三行に「秣陵 陳氏尺蠖齋 評釋／繡谷 唐氏世徳堂 校梓」と見える（西晋卷二・四はこの行なし）。

- (ハ―2) 同右

〔清前期〕通修本（中国芸術研究院戯曲研究所蔵）<sup>19</sup>

(ハ―1) は周氏大業堂により明末に通修されたが、それを

經由しての更なる通修本。全体的には（ハ―1）と同じ版木をそのまま使っている葉が多いが、東晋卷五〇八の全葉を初めてする大量の補版葉を含む。補版葉では上層の評釈が削除され、第一葉が補版葉の巻では本来の巻首題「新鐫重訂出像註釋通俗演義西（東）晋志傳題評」からも「註釋」の二字を削っている（但し、該当葉のうち東晋卷七のみ「註釋」の二字を残す）。各卷頭第二〇三行に「秣陵 陳氏尺蠖齋 評釋／繡谷 周氏大業 堂 校梓」と見える（やはり西晋卷二・四にはこの行なし）<sup>20</sup>。

（二）『新刻夷堅志』十卷

唐氏世德堂万曆二十九年刊本（内閣文庫「二本」等蔵）<sup>21</sup>  
文言小説集。封面「辛丑〔万曆二十九年〕冬月／夷堅志／唐氏世德堂梓」。各卷卷頭第二行以降は、卷一が「宋鄱陽洪邁著／明姚江呂胤昌校／繡城唐晟訂／唐景次」、卷二以降は「宋鄱陽洪邁著 明姚江呂胤昌校／繡城唐晟訂／唐景次」（卷四、八では「繡城唐晟訂」が「繡谷唐晟詮」）。

（ホ）『新刻耳談』〔十五卷存〕五卷

唐氏世德堂〔万曆中期〕刊本（台湾故宫博物院蔵）  
文言小説集。封面あり、左右の幅広の欄に「重刻北京／原板耳譚」と大書し<sup>22</sup>、その間の細い欄にやや小さい字で「金陵世德堂梓」。自叙末に「萬曆丁酉（二十五年）孟夏上庚王同軌撰」。

各卷卷頭第二〇四行「黃岡王同軌行甫撰／上饒門生王嗣經校／金陵書坊世德堂梓」。無図。毎卷全十七〇十八葉。

（ヘ）『耳談類増』五十四卷

唐晟・唐景〔世德堂〕万曆三十一年序刊本

（台湾故宫博物院蔵）

五十四卷。（ホ）を大幅に増補した新版で、自叙に金陵で刊行する旨記されているので、初刻本と見られる。自叙末に「萬曆癸卯年（三十一年）上澣王同軌撰」。封面を欠き世德堂の名はどこにも見えないが、各卷卷頭第二〇四行を「黃岡 王同軌 行甫 著／滁陽 夏守成 克家 校／繡谷 唐景 叔永 梓」としており、（三）と同じ刊行者と知れる。無図。毎卷全六〇十八葉。

表1で版式と版心表記の原則、及び版心題・版心巻数の表記が乱れる葉を示し、表2で各巻の葉数、それぞれの版心葉数の表記原則とそれが乱れる葉、及び挿画の数と署名について示す。表1には『西遊記』の浅野世本と熊雲瀆覆世德堂刊本についてまとめた欄も設けた。（ホ）（ヘ）は共通点が多いので表1では同欄にまとめ、無図であり、かつ全二十葉以上ある巻が無いいため、表2には含めなかった。表1でまず目に付くのは、（イ）（ロ）（ハ）の版式が殆ど一致しており、版心の体例まで揃っているということである。書名も『〇〇

志傳題評』で揃えてあり、陳氏尺蠖齋なる人物の評を眉欄に掲げる点も一致している。なお、この陳氏尺蠖齋は後述の世徳堂刊行の戯曲にも評釈者としてしばしば名が見え、世本『西遊記』の序を書いた「秣陵陳元之」と同一人物であると思われる<sup>23</sup>。

また、(イ)(ロ)(ハ)はいずれも双面連式挿画を持ち、図中に王少淮が画工として署名している。してみると、浅野世本に見える王少淮の署名は、世徳堂初刻本にあったものと考えてよからう<sup>24</sup>。但し、画工署名をそのまま覆刻するという事例もあるので<sup>25</sup>、それが直ちに浅野世本が初刻本であることを証明するわけではない。

挿画について更に見ておくと、原則として各回(節)一幅の(イ)(ロ)においても、どちらも挿画の無い回(節)や、逆に二幅の挿画がある回(節)が含まれている。してみると、世徳堂本『西遊記』の初刻本も、必ずしも瀧本氏が予測されたように規則的に各回二幅ずつの二百幅があったと考える必要はなさそうだ。つまり、浅野世本に九十九幅しか挿画がないことは浅野世本が初刻本ではないと考える根拠にはならないし、故宮世本と日光世本に見える百九十七幅が、初刻本にあった全ての挿画を漏れなく覆刻したものであってもおかしくないということになる。

一方、世徳堂本『西遊記』の版式及び版心の表記法は、刊行時期が近く、同じように王少淮の双面連式挿画を備えた章回小説である

(イ)(ロ)(ハ)とは異なっており、挿画の無い文言小説集で刊行時期も少し離れた(三)(ホ)(ヘ)とほぼ一致していることも目を引く。

そして、最低でも三度の補修重印を経ている(ハ―2)も含め、版心題と版心巻数の表記は体例に非常に忠実で、表記に乱れがある葉は数えるほどしかないことが表1から読み取れる。対して、表2から明らかなように、版心葉数の表記法の統一は殆ど図られていないようだ。同一版本内で各巻の表記原則がバラバラなことも珍しくなく、各巻内での乱れも多い。

してみると、版心の葉数表記に統一基準が無いことは、唐氏世徳堂の初刻本であることを疑う根拠にはならなさそうだ。逆に、版心題や版心巻数に乱れが多く見られる場合は、補版葉がある可能性や、全体が覆刻である可能性を疑ってかかる必要があるだろう。

## (2) 戯曲

次に戯曲について見よう(表3)。『古本戯曲叢刊』初・二・五集に世徳堂刊本として影印を収めるものから、世徳堂刊本とする根拠が見出せない『齊鳴記』を除いた七本を取り上げた<sup>26</sup>。このうち刊年が分かるのは、封面に「萬曆丙戌(十四年)春月」と見える『断髮記』のみである。

表3で注目すべきは、第一に、同じ「唐氏世徳堂校梓」の戯曲で



あつても、「陳氏尺蠖齋」の訂釈（註釈）を掲げるもの、「游氏興賢堂重訂／海陽程氏敦倫堂參録」とするもの、「游氏興賢堂重訂」のみを掲げるものでは、それぞれ版心表記の基本体裁が違うということである。そして、陳氏尺蠖齋と陳元之が同一人物であるとの通説を更に裏付けるかの如く、表1に付記した世本『西遊記』の版心表記の体裁は、陳氏尺蠖齋の関わる戯曲でのそれにほぼ等しい。

第二に、小説の場合と同様に、葉数の記載法のバラつきはかなり多い。逆に、版心題・版心巻数の表記の統一は殆どの巻で完全に徹底されており、『還帶記』以外では乱れは全く見られない。その徹底ぶりは小説以上である。戯曲刊本の方がより丁寧に作られていたことが窺えよう。

第三に、世徳堂の他に游氏興賢堂の名が見える『還帶記』上巻に限り、巻数表記で「巻」字を特徴的な略字（匚）の部分だけを大きく崩したものか？）にしている葉が確認出来る。これは、万暦から崇禎にかけての建陽刊本では非常に多く見られるが、同時期に金陵で刻された版本では稀な現象である<sup>27</sup>。しかし、『還帶記』上巻のこれらの葉は他と字様が異なることが多く、特に第四十一・四十二葉には、上下巻を通して他の葉には必ずある評が一つも見えない。これ以外の戯曲では版心の乱れが一切見られないことも考え合わせると、これらは世徳堂以外の書坊の手による補版葉である可能性が

高い。従つて、これを戯曲の世徳堂初刻本にも版心巻数の表記に略記号を用いることがある例として捉えるには慎重であるべきだろう。

第四に挿画についてだが、白話小説同様、戯曲においても巻ごとや齣ごとの挿画の数に規則性は見出せない。全て半葉全面で一幅の形式で、画工・刻工の署名は一切見られないが、どの図も王少淮と非常に良く似た筆致である。王少淮の属する上元（金陵上元県）王氏は一族で画工を務めていたようなので<sup>28</sup>、王少淮本人かどうかはさておき、彼と技術を共有する者の手によることはほぼ確実だろう。

## 七、熊雲演覆世徳堂刊本の版心表記

浅野世本について検討する前に、まず全巻が揃っている熊雲演覆世徳堂刊本の版心表記について見ておこう。それと比較することで、浅野世本の版心表記の特徴がよりはっきりとするはずである。

表4で故宮世本と天理世本の各巻の全葉数と欠葉、及び版心葉数の表記法について示し、次いで表5に版心題・版心巻数が乱れている全ての葉とその詳細を示す。

まず表4に挙げた事項は、欠葉の状況と前述した巻一の補版に伴う葉数のずれを除いては、故宮世本と天理世本で異同は無い。葉数の表記原則は例によって各巻ごとにバラバラだが、巻内での統一度について見ると、巻一・四・八・十七では乱れが多いものの、それ

以外の巻では原則がかなり行き届いており、完全に徹底されている巻もかなりの数に上る。

次いで表5を見よう。巻三・九・十・十一・十四・十九・二十には版心題・版心巻数の乱れが皆無かそれに近いのに対して、巻四、十五、十八では十以上もの葉で乱れがある。世徳堂刊本の他の小説・戯曲で版心題・版心巻数がこれほど多く乱れる例は他に無いので、これは熊雲濱覆世徳堂刊本が確かに覆刻本であることを示す現象と捉えられよう。その中で、巻頭表記が「金陵榮壽堂梓行」の巻九・十・十九・二十が全て版心の乱れが非常に少ない巻であるのは目を引く。これらの巻は葉数表記の原則も「二五」式で揃っており、巻十九以外の三巻ではそれが完全に徹底されている。

一方、熊雲濱の名を冠する巻十六を初め、巻六・七・十二・十五・十八にも「巻」字を略字とする例が散見される。前章で触れた通り、これはこの時期の金陵刊本には稀で建陽刊本に頻繁に見られる現象なので、熊雲濱による覆刻の際に生じたものである可能性が高い。

また、巻十三・十八・十九・二十に見られる、巻の最初または最後の葉において、巻数を記すべき位置が幾何学模様になっているというのも、同様に建陽刻本にしばしば見られる特徴である（これは巻の首尾の位置を分かりやすくするための処置であろう）。

総じて、版心からは熊雲濱覆世徳堂刊本が確かに額面通り覆刻本

だと思われる例が多く見出せた。版心表記の乱れが皆無な巻でも全葉が浅野世本と異版であり、しかもそうした巻は浅野世本でも版心の乱れが無い（後掲表6参照）ということを考え合わせると、やはり熊雲濱覆世徳堂刊本は全巻が熊雲濱による覆刻で、巻頭の刊行者名に従って巻ごとに版木の由来が違うようなことは無いと見てよからう。版心の乱れが特定の巻に偏っているのは、巻ごとに担当する写字工や刻工が違ったなどの事情があったためかもしれない。

なお、故宮世本が配本ではないとする謝文華注1論文とその点においては見解が一致したが、謝氏は熊雲濱の行ったのは全巻の重刻ではなく部分的な修版・補版に過ぎないと看做しており（六二頁）、その点は筆者の結論と異なる。謝氏は浅野世本を利用出来なかったため、故宮世本とは全葉が異版の本が存在するという想定はしにくかったのだろう。

## 八、浅野世本について

それでは、今度は浅野世本について検討しよう。

まず、版式は故宮世本に等しいが、それとは全葉が異版である。浅野世本は俗字や略字をあまり使っておらず、熊雲濱覆世徳堂刊本では俗字や略字を用いる箇所が、浅野世本では正字であるという例が非常に多い。例えば、「変」「難・難」「宝」「観」に対して「變」

「難」「寶」「觀」などで、第一章で聖僧歷難簿を比較した際にも触れた通りである。世徳堂刊の章回小説刊本である（イ）（ロ）（ハ）には俗字は少ないので、浅野世本は仮に世徳堂初刻本そのものでなかったとしても、熊雲瀆覆世徳堂刊本に比べてより良く初刻本の趣を伝える傾向があるとは認めて良さそうだ。

しかし、熊雲瀆覆世徳堂刊本が正字の箇所を、却って浅野世本が俗字としている例も若干見られる。例えば、卷十四―六三A（図4左側）では、故宮世本・天理世本が「寶」「無」とする複数の箇所を、浅野世本では尽く「宝」「无」としている。浅野世本のそうした葉を仔細に検討してみると、字様が他の葉とやや違っていることが多い。となると、前述の太田氏の指摘通り、浅野世本は補版葉を含む後修本だと考えるべきであろう。よって、浅野世本は世徳堂初刻本の初印本ではないということになる。図4は補版の半葉（左）とそうでない半葉（右）の見開きなので、字様や俗字の使用頻度の相違を確認されたい。但し、このような明らかな補版葉を除いても、浅野世本の字様は必ずしも均一ではない。従って、字様だけを頼りにどれだけの補版葉が含まれているかを判定するには限界がある。

また、熊雲瀆覆世徳堂刊本との間には、異体字に止まらない字句の異同も僅かながらある。例えば、浅野世本卷十四―八B第五―六行の「天／雨瀆紛」を、熊雲瀆覆世徳堂刊本は「大／雨瀆紛」に作

っている。もう一つ、浅野世本卷十一―一八B第五行「美武藝」（美は弄の異体字）は、熊雲瀆覆世徳堂刊本では「美武藝」に作る。いずれも意味の上から明らかに浅野世本の形が正しく、熊雲瀆覆世徳堂刊本が魯魚の誤りを犯した例であろう。これらは浅野世本の方が初刻本に近い要素を留めている例と言える。

因みに、世徳堂本を底本とする文簡本である『唐僧西遊記』と楊閨齋刊本では、前者はいずれも「天雨瀆紛」とし、後者は『唐僧西遊記』が「弄武藝」、楊閨齋刊本も「美武藝」である。つまり、『唐僧西遊記』と楊閨齋刊本とは、いずれも浅野世本と一致する。両者の底本は熊雲瀆覆世徳堂刊本ではなかったようだ。そうすると、世徳堂初刻本に拠っていた可能性が高かる。楊閨齋刊本の序の年次は「癸卯〔万曆三十一年〕」で世徳堂初刻本と十一年しか違わず、『唐僧西遊記』は楊閨齋刊本に先行すると見られているから<sup>29</sup>、両者の底本は世徳堂初刻本の中でも早期の印本であったと考えて良いのではあるまいか。そうだとすると、『唐僧西遊記』の序と楊閨齋刊本の序はいずれも熊雲瀆覆世徳堂刊本の持つ陳元之序とほぼ同文であるから<sup>30</sup>、世徳堂本の中では熊雲瀆覆世徳堂刊本にしか残っていない陳元之の序は、世徳堂初刻本にも確かにあったと考えて良いだろう。

また、先に見た聖僧歷難簿の四十三難では、現存の熊雲瀆覆世徳堂刊本で最も印刷の早い故宮世本が「吃水遭■四十三難」と墨格を

含むのに対し、浅野世本は「吃水遭愆四十三難」と墨格が無い。一般に、同版本同士の場合と異なり、互いに異版であれば、墨格が少ない方が初刻本に近い傾向がある（注27拙稿参照）。よって、この例も浅野世本の方が良く初刻本の様相を留める一例と看做せよう。

浅野世本の版心表記に関しては、表6の通りである。熊雲瀆覆世徳堂刊本で乱れが多い巻十五に全く乱れが見られないなど、熊雲瀆覆世徳堂刊本と比べて版心表記の統一度は遥かに高い。その意味では、世徳堂初刻本らしい版心の様相を見せていると言える。

しかし、巻十七・十八の版心題・版心巻数の乱れの多さは、他の世徳堂刊本の特徴に照らして考えると、浅野世本のこれらの巻が世徳堂初刻本の版本を使っていると断ずることを躊躇させるには十分な量である。もし浅野世本が確かに世徳堂初刻本の後修本だとしたら、これらの巻には補版葉が多いのだろう。しかも、浅野世本の版心表記の乱れの殆どは、熊雲瀆覆世徳堂刊本と一致している。こうなると、浅野世本における補版葉の中には、熊雲瀆覆世徳堂刊本を覆刻することで補版した葉があることも必要かもしれない。

但し、巻数表記を幾何学模様にしたたり、「巻」字を略字とするなどの、建陽刊本に特徴的な現象は浅野世本では一切見えない。従って、浅野世本は、版木が作られたのも、補版が行われたのも、建陽以外の地においてだった可能性が高そうだ。となると、浅野世本におけ

る版心表記の乱れは、これが金陵唐氏世徳堂初刻本の後修本である可能性を否定する積極的な材料とまではならないのではないか。

浅野世本は、挿画の部分にも補版葉と思われるものがある。一例として、巻十四―五三B五四Aを熊雲瀆覆世徳堂刊本と比べてみよう（図5・6）。五四A左上の孫行者の顔と左手に注目されたい。浅野世本は明らかに覆刻と分かる生硬な彫りで、却って熊雲瀆覆世徳堂刊本の方が繊細な彫りである。同じ半葉に描かれる賽太歳の両手も同様で、指の表現が全く違っている。

また、巻十七―三六B三七A（図7）・巻十九―二九B三〇A（図8）・同四一B四二Aの三図は浅野世本でも熊雲瀆覆世徳堂刊本でも左右の面で図柄が繋がっておらず<sup>31</sup>、巻十七―二九B三〇Aは構図が他の挿画よりも単純で彫りも稚拙である。しかも、このうち巻十七第三十・三十七葉はともに版面が他の葉より小さい。上記の問題は熊雲瀆覆世徳堂刊本でも同様であるが、このような不自然な挿画は他の世徳堂刊本には全く見られない。つまり、これらの挿画は浅野世本・熊雲瀆覆世徳堂刊本の両者ともに初刻の様相を伝えていない可能性もありそうだ（無論初刻時からそうだったかもしれないが）。但し、熊雲瀆覆世徳堂刊本、浅野世本ともに殆どの挿画は見事な出来栄で、どちらの刻工も確かな腕だったことを窺わせる。一例として、浅野世本に王少淮の署名が見える図を挙げよう（図9・10）。

どちらも精緻な彫りである。

また、浅野世本の挿画が補版葉ではない場合は、浅野世本の図の細部の意匠、特に背景の草や武器等の目立たない箇所が、熊雲瀆覆世徳堂刊本では省略されている場合がある。例えば巻十二—四Aでは浅野世本では版心葉数のすぐ右にヒトデ型の草があるが(図11)、熊雲瀆覆世徳堂刊本にはそれが無い(図12)。このような場合は、浅野世本の方が初刻本の様相を良く留めているだろう(注27拙稿に類例を挙げた)。逆に、浅野世本の挿画が補版と思しき稚拙な彫りである場合は、却って熊雲瀆覆世徳堂刊本の方が浅野世本に見られない細部の意匠を残していることもある。例えば先にも挙げた巻十四—五三Bでは、故宮世本の方が浅野世本よりも右上端の雲を細かく描き込んでいる(図5・6)。

### 小結

以上の検討で分かったことをまとめておこう。

まず、熊雲瀆覆世徳堂刊本は全体が熊雲瀆による建陽での重刻で、徐朔方氏の説のような巻ごとの配本ではない。

一方、浅野世本は、版心表記の乱れ・俗字・墨格の少なさや、挿画の細部がより詳細になっている場合が多いことなど、熊雲瀆覆世徳堂刊本より世徳堂初刻に近いと思われる特徴が多く、挿画には画

工名(王少淮)も残している。しかし、一部の巻での版心表記の乱れの多さとその熊雲瀆覆世徳堂刊本との一致、一部の挿画の彫りの稚拙さなどから、浅野世本は仮に世徳堂初刻本の版木を用いているとしても、かなり多くの補版葉を含んでいるものと思われる。

浅野世本が世徳堂初刻本の版木を利用した後修本なのか、それとも熊雲瀆覆世徳堂刊本とは異なる覆刻本だったのかについては、確たる判断は下し難い。しかし、現状ではこの二版しか世徳堂本は知られておらず、全体的に浅野世本の方が初刻本に近い要素をより多く残す傾向は認められるのだから、今後より初刻本らしい特徴を持った第三の版による世徳堂本が現れない限りは、ひとまず浅野世本を世徳堂刊本の後修本と看做しておいても良いのではあるまいか<sup>32</sup>。但し、浅野世本に世徳堂初刻本としての意義を認めて細かな字句の対校などに使う場合は、補版葉とそうでない葉とを弁別した上で利用する必要がある。しかし、現実問題として、前述の通り字樣のみを手掛かりにして浅野世本の補版葉を完全に見極めることは困難である。従って、世徳堂本の本文を論じる際には、浅野世本が残る巻十一以降においては、浅野世本と熊雲瀆覆世徳堂刊本の両者を参照し、異同があればその都度検討するのが望ましい。

1 北平図書館が購入して以降の経緯は、謝文華『金陵世德堂本『西遊記』成書考』(東華大学中国語文学系研究所碩士論文、二〇〇六)五四～五六頁に詳しい。なお、前述の劉蓮台刊朱鼎臣編本も同じルートを辿っている。

2 長澤規矩也『日光山「天海藏」主要古書解題』(日光山輪王寺、一九六六)。

3 瀧本弘之「『西遊記』版本の挿画について」(同氏『中国古典文学挿画集成(二)・西遊記』所収、遊子館、二〇〇〇)。

4 磯部彰「世德堂刊西遊記の版本研究——明代における完成体『西遊記』の登場——」(『東北大学中国語文学論集』第十号、二〇〇五。のち同氏『『西遊記』資料の研究』(東北大学出版会、二〇〇七)第五章)

5 磯部注4書二〇三頁ではこれは故宮世本には見えないとするが、原本を確認したところ「五百廿□」(□は破損)とあるのが確認出来た。マイクロフィルムでは写りが悪く確認出来ないのも、磯部氏はマイクロフィルムによって著録したのであろう。

6 故宮世本と天理世本は第十八回だけは本文内に回数・回目を表記する行が無く(日光世本は未確認だが、おそらく同じだろう)、見かけ上は他の回の倍の長さの第十七回の次に第十九回が来る形になっている。但し、目録では第十八回の回目も示される。この現象は、筆者卒業論文(第一章前掲)や呉聖燮(呉聖昔)「版眼・破解『西遊記』版本承伝演變之秘的鑰匙——『西遊記』版本史」稿之一」(淮海工学院学报(社会科学版))第六卷第一期、二〇〇八)等の指摘する通り、『唐僧西遊記』や楊閨齋刊本も引き継いでいる華陽洞天主人校本に共通の特徴で、他の系統に属する版本ではこの問題は解消されている。

7 この図は猪八戒が女妖怪である七人の蜘蛛精の入浴に乱入する場面を描いた、裸の女性が並ぶエロチックなもので、もともと寺院に所蔵されていたこの本では、真面目な僧侶により修行の

妨げ(?)として故意に取り去られたのであろう。

8 前述の通り、北平図書館には入ったが、戦後の北京図書館に所蔵されたことはない。

9 太田辰夫『西遊記の研究』(研文出版、一九八四)第十二章「世德堂本西遊記(世本)考」二四三頁(このくだりの初出は同氏「明刊本『西遊記』考」(『神戸外大論叢』第十九卷第一号、一九六八)で、別の論考に吸収される形で前掲書第十二章に入った)。

10 なお、磯部氏は注4論文に先立つ『『西遊記』形成史の研究』(創文社、一九九三)第十二章「明後期における『西遊記』の大成とその流布」三九八頁では、方氏の故宮世本重刊本説を否定して、熊雲濱は世德堂の版本を買い取って重印し、補刻しながら印刷を続けたとの説を採っていた。これは、当時は故宮世本と天理世本しか調査されていなかったが、その後浅野世本と日光世本を閲覧された結果、見解が変わることになったもののようだ。また、『西遊記』形成史の研究』では天理世本を故宮世本の補修後印本とされていたが、この見解も前述のように変化している。

11 他にも二二一頁では天理世本について「印刷するにつれて、版本(上原按:「版本」の誤字か)が磨滅して行った」段階のもの、故宮世本について「最小限の補刻と改修を行った」上で印刷が続けられた段階のものとと思われるとしているが、これは「台湾故宮本には補刻葉が見当たらないのに対し、天理本には明らかに補配が見られる」という二二〇頁の記述と矛盾を来たしているだろう。なお、二二〇頁の「補配」は、「補刻葉が見当たらない」のに「対し」「見られる」という使い方だから、伝来過程で複数の伝本が取り合わせられたという意味の補配ではなく、版本に対する補配(補版葉の出現)という意味に取るしかないだろう。

12 なお、磯部注4書は二〇六頁では葉数を「三葉a b」と誤り、三者の書影を載せる二二二頁では「卷十五 第七十二回」に誤る。

13 この干支がこの年に特定出来ることについては本論第三章参照。

<sup>14</sup> 書誌的な詳細は、拙稿「金陵唐氏世德堂刊本講史小説三種と上元王氏の双面連式挿画について」(瀧本弘之編『中国古典文学挿画集成(九)・小説集(三)』所収、遊子館、二〇一四)参照。なお、その時点では把握していなかった古版画博物館蔵本は、南宋卷六至八のみを存する残本で、内閣文庫蔵本と同版である。

<sup>15</sup> 詳細は本論第三章参照。

<sup>16</sup> この干支がこの年に特定出来ることについては本論第三章参照。

<sup>17</sup> 書誌的な詳細は注14拙稿参照。

<sup>18</sup> 書誌的な詳細は注14拙稿参照。そこで述べた通り、長らく北京大学図書館蔵の大業堂通修本や(ハ―2)の一部の葉の版心下部に「世德堂刊」とあるのを根拠に存在が推定されるのみであったが、現物を発見した。なお、大業堂通修本を万暦四十年刊とする通説が全く根拠を持たず採るべきものではないことも同拙稿参照。  
<sup>19</sup> 書誌的な詳細は注14拙稿参照。

<sup>20</sup> 「秣陵」を東晋卷六は「科陵」に、東晋卷七では「棟陵」に誤る。

<sup>21</sup> (二)(ホ)(ハ)は本論第三章でも詳しく取り上げる。

<sup>22</sup> 齐鲁書社『四庫全書存目叢書』に影印を収める中国国家図書館蔵本(十五卷、十行二十字)が、封面に言う「北京原板」である可能性がある。唐氏世德堂刊本が「北京原板」を謳う例は、管見の範囲では他に封面に「萬曆辛丑(万暦二十九年)秋月唐氏世德堂遵依北京梓行」と見える『皇明典故紀聞』(広島市立中央図書館浅野文庫、東京大学東洋文化研究所蔵)がある。

<sup>23</sup> 既に多くの先行研究で指摘されている。本論第三章参照。

<sup>24</sup> 王少淮の手掛けた双面連式挿画を持つ章回小説刊本の全容や、その挿画自体の特徴については、注14拙稿で詳しく論じた。なお、世德堂本『西遊記』の双面連式挿画の風格が王少淮のそれに似ていることは、磯部氏(注10書三九二頁)、瀧本氏(注3解題四頁)らにより指摘されていた。特に磯部氏の指摘は(ロ)が世德堂本『西遊記』と刊行元や序の撰者が同じであることを視野に入れた

上で王少淮の参画を推定したもので、単なる印象批評ではない。卓見であったと言えよう。

<sup>25</sup> 本論第四章参照。

<sup>26</sup> なお、これらが現存の世德堂刊本戯曲の全てという訳ではない。

<sup>27</sup> 例えば、明白に建陽刊本と知れる明刊百回本『西遊記』だけでも、癸卯(万暦三十一年)序の楊閨斎刊本(内閣文庫蔵)、「崇禎辛未歲(四年)刊の閩齋堂刊本(慶応義塾図書館蔵)に多数確認出来る。その他の事例は、拙稿「唐氏世德堂と周日校万卷楼仁寿堂の章回小説刊本の覆刻及び後印の事例について」(『中国古典小説研究』第十六号、二〇一一)参照。

<sup>28</sup> 注14拙稿参照。

<sup>29</sup> 太田注9「明刊本『西遊記』考」参照。なお、太田氏は叡山文庫蔵本『唐僧西遊記』を「蔡敬吾刊本」と呼ぶが、これは卷十八の巻頭挿画第一葉表左上に「全像書林蔡敬吾刻」という小型蓮牌木記があるためである。太田氏はこれを「書坊主である蔡敬吾による刊刻」という意味に取って蔡敬吾を刊行者ないし補修刊行者ではないかと看做しているのだが、一般的に挿画中の「〇〇刻」という署名は第四章で挙げる例のように刻工のものであるし、「書林」は出版業者を指す一般名詞である他に建陽崇化里書坊街の異称でもある(拙稿「萃慶堂の歴代主人について——建陽余氏刻書活動研究(1)——」附『書林余氏重修宗譜』『書坊文興公派下世系』第37世までの翻刻と校訂(『中国古典小説研究』第十九号、二〇一六)参照)ので、これは「全巻の図像を書林の蔡敬吾が刻した」という意味に取るべき、つまりは籍貫を伴う刻工署名だと捉えるべきではなからうか。また、わざわざ「全像」と言っているのは、刻工だけではなく画工も兼ねていたという意味かもしれない。また、太田氏が「補修刊行」と言っているのは、叡山文庫蔵本を国会図書館蔵本に対する後修本だと見ているためだが、筆者が両者の原本を調査しての所見は逆で、先行する叡山文庫蔵本の後修本

が国会図書館蔵本だと思われる。例えば、聖僧歴難簿において、叡山文庫蔵本が二種の世徳堂本のどちらとも同じ「双又嶺上第七難」とする箇所を、異版の国会図書館蔵本では「又嶺上第七難」とし、上二字が異なっている。同じく、叡山文庫蔵本では正しく「天神難伏四十一難」とするのを、異版の国会図書館蔵本では「天神難伏四十一難」に誤刻している。これらの補版葉では補版の方に正字が多いという珍しい現象が見られるが、俗字を正字に直すのは機械的な処理だから、たまたまそのような方針でなされた補版なのだろう。同版葉の版木の割れ目等の比較からも、印刷順は叡山文庫蔵本が先と見て間違いない。

<sup>30</sup> 太田注9書二七〇頁参照。

<sup>31</sup> 浅野世本の残らない部分では、熊雲瀆覆世徳堂刊本の挿画は、巻九一六四A六五Bと巻十一四八A四九Bも若干左右の繋がりが悪い（但し、前者は意図的に半葉ずつ地上と空中を分けて描いた構図の可能性あり）。これら以外の百九十一幅は見開き左右の葉が背景の線まで概ね綺麗に繋がっている。

<sup>32</sup> 曹炳建「『西遊記』浅野世本与台湾世本校勘及其啓示」（會議論文集『第十二届中国古代小説、戯曲文献暨数字化国際研討会論文集』所収、二〇一三）では、本章の元となった二篇の拙稿のうち「世徳堂刊本『西遊記』伝本考述」（『文学遺産』二〇一〇年第四期）を承けて、故宮世本と浅野世本の詳細な字句の比較を行い、故宮世本が誤刻している浅野世本が正しい例と、その逆の例とがいずれも少なからずあることを指摘して、故宮世本と浅野世本はどちらも世徳堂初刻本ではなく、それぞれが別々に世徳堂初刻本を覆刻したものである可能性が高いとの見解を示している。しかし、曹氏が参照された拙稿では浅野世本が補版葉を多く含むことには触れていなかったこともあり、曹氏の見解は浅野世本における補版葉の存在を全く考慮に入れずに出されているので、曹氏の見解の可否を確かめるためには、浅野世本が誤刻している故宮世

本が正しい例が、浅野世本の補版ではないと見るべき葉にも十分な数があるのか、それとも補版と思われる葉に集中しているのかをまず検証する必要がある。しかし、前述のように浅野世本のある葉が補版か否かを字様のみによって完全に弁別するのは困難であるため、現時点では筆者も十分な検証が出来ていない。補版葉の弁別基準と併せて、将来的な検討課題としたい。



第二章表 1 世徳堂刊小説の版式と版心、及び版心題・版心巻数の乱れ (□は一文字分の空欄、■は一文字分の墨格をそれぞれ表す。○には巻数の数字が、ホの△には十が入る)

	版式 (上段) / 版心 (下段)	版心題・版心巻数の乱れ	版心最下段に「世徳堂刊」or「文字数」が見える全ての葉 (他の葉では空欄)
イ	上下二層、尊経閣蔵本内匡郭: 21.2 (2.5+18.6) × 14.1cm、静嘉堂蔵本内匡郭: 21.3 (2.4+18.7) × 14.0cm 下層本文半葉 12 行 24 字、上層評釈行 5 字 四周双辺と単辺が入り混じり、有界無界も相半ば。白口、単黒魚尾	南宋: 卷 2-26 (「南宋志」)、卷 4-21~24 (「巻四」)、卷 5-31 魚尾二字分下がり「五」、卷 8-13 (魚尾二字分下がる)、14 (魚尾一字分下がり「八」、15 (「□八」、16~19、21、22、29、30 (全て「□□八」、卷 9-7 (版心題無し)、北宋: 乱れ無し	南宋: 卷 1-20、21、23~32、卷 2-21~24、27、28、卷 3-1~12、卷 4-1~16、25、29、30、卷 5-1、9~12、卷 6-なし、卷 7-なし、卷 8-1~12、卷 9-17~20、23、25、26、卷 10-27、28、33、34 北宋: 序-1、2、卷 1-8、12、14、15、18~22、25~27、29、卷 2-5~7、9~14、17~20、25~28、卷 3-23、卷 4-7~18、卷 5-1~8、17~22、27、28、卷 6-1~12、15、16、21~28、卷 7-2~6、8、11、12、23、24、卷 8-1、2、4、7、8、22、卷 9-11、12、14、15、20~23、卷 10-1~4、7~10、13~16、19、20
	「南宋志傳 (隔 2 格) 【魚尾】 卷之〇 (隔 10~11 格) 葉數 (隔 1 格) 世徳堂刊」 ※「南宋志」まで上層。北宋は版心題「北宋志傳」となる	卷 1-29 (「世徳堂刊」の位置が墨格)、卷 1-47、48 (ともに魚尾と「巻」字が無い)、卷 4-52 (魚尾と「巻之」字が無い)	序 1~3、卷 1-1~3、5~8、13、17、18、21~28、30、卷 2-5~28、30~36、53~56、卷 3-51、52、55、56、58、卷 4-13~16、18~34、37、38、43、44、49、50、卷 5-13~20、29~52、卷 6-1、2、5~10、12~14、20~24、45~55、59~65、卷 7-1~6、17~30、33~42、65、卷 8-31~33、42~48
ロ	上下二層、内閣文庫蔵本内匡郭: 21.8 (2.7+19.1) × 14.2cm 下層本文半葉 12 行 24 字、上層評釈行 5 字 四周双辺と単辺が入り混じり、有界無界も相半ば。白口、単黒魚尾	東晋: 卷 5-44 (魚尾と「巻之」字が無い)	西晋: 卷 2-33、34、41、42、卷 3-63、64 東晋: 卷 4-1、9、10、56、卷 6-29~32、卷 7-41、42、49、50、卷 8-41、49
	「唐書志傳 (隔 2 格) 【魚尾】 卷之〇 (隔 10~11 格) 葉數 (隔 1 格) 世徳堂刊」 ※「唐書志」まで上層。		
ハ	上下二層、尊経閣蔵本内匡郭: 21.4 (2.6+18.8) × 14.0cm 下層本文半葉 12 行 24 字、上層評釈行 5 字 四周双辺・左右双辺・上下双辺・四周単辺混在。有界 (稀に無界)。白口、単黒魚尾	西晋: 卷 2-22 (「巻□二」)、卷 3-29 (「□之三」)、32 (「□□三」) 東晋: 卷 6-1 (魚尾が二文字分下がる)、3 (魚尾無し)、卷 7-15 (魚尾二字分下がり「七巻」)	西晋: 卷 2-33、34、41、42、卷 3-63、64 東晋: 無し (ハ-1 の該当葉とは全ての葉が異版)
	「西晋志傳 (隔 2 格) 【魚尾】 卷之〇 (隔 10~11 格) 葉數 (隔 1 格) 世徳堂刊」 ※「西晋志」まで上層。東晋は版心題「東晋志傳」となる。	西晋: 卷 2-33、34、41、42、卷 3-63、64 東晋: 無し (ハ-1 の該当葉とは全ての葉が異版)	
ニ	上下二層、原本未見につき内匡郭未測定 下層本文半葉 12 行 24 字、上層評釈行 5 字 四周双辺・左右双辺・四周単辺混在。有界 (稀に無界)。白口、単黒魚尾	西晋: 卷 2-33、34、41、42、卷 3-63、64 東晋: 無し (ハ-1 の該当葉とは全ての葉が異版)	西晋: 卷 2-33、34、41、42、卷 3-63、64 東晋: 無し (ハ-1 の該当葉とは全ての葉が異版)
	「西晋志傳 (隔 2 格) 【魚尾】 卷之〇 (隔 10~11 格) 葉數 (隔 1 格) 世徳堂刊」 ※「西晋志」まで上層。東晋は版心題「東晋志傳」となる。	西晋: 卷 2-33、34、41、42、卷 3-63、64 東晋: 無し (ハ-1 の該当葉とは全ての葉が異版)	
ホ	半葉 12 行 24 字、四周単辺、有界無界相半ば (巻ごとに傾向あり)、白口、単黒魚尾 「夷堅志 (四字分空白) 【魚尾】 △集〇巻 (五字分空白) 葉數 (三字分空白) 文字数」	卷 7 全葉 (巻數表記「庚巻」の二字のみ)、卷 10-20 (魚尾無し)	卷 1-32 (一千四十三)、34 (一千三十三)、35 (一千五十)、卷 3-3 (一千〇二) ※2 葉分の文字数か? なお、巻 3-3 のみ葉數との間の空白が一字分しかない。
	半葉 12 行 24 字、四周単辺、有界 (無界の葉もある)、白口、単黒魚尾 (ホ) 「耳譚 (隔 4 格) 【魚尾】 卷之〇 (隔約 6 格) 葉數」 (ヘ) 「耳談類増 (隔 3 格) 【魚尾】 卷之〇 (隔約 7 格) 葉數」	版心題で「譚」と「談」が入り混じること以外は乱れ無し。「譚」と「談」についても同一巻内では殆ど統一されている。	(ホ) (ヘ) とともに無し
西遊記	故宮世本内匡郭: 21.2x14.1cm、浅野世本内匡郭 (巻 11 首): 20.4x13.6cm 半葉 12 行 24 字、四周単辺、有界 (無界の葉もある)、白口、単黒魚尾 「出像西遊記 【魚尾】 卷之〇〇 (隔 7~8 格) 葉數 (隔 3 格) 文字数」 ※故宮世本・浅野世本共通	非常に多い (別表参照)	卷 11-40 (五百廿七) [浅野世本のみ]、41 (五百廿四) [浅野世本・故宮世本・天理世本] ※日光世本未確認

第二章表2 世徳堂刊小説の版心における葉数表記、挿画

	各巻葉数と版心の葉数表記	挿画
イ	南宋：全巻全集「二五」式 巻1（全32葉）、巻2（全30葉）、巻3（全31葉）、巻4（全30葉）、巻5（全31葉）、巻6（全30葉）、巻7（全30葉）、巻8（全30葉）、巻9（全30葉）、巻10（全35葉） 北宋：巻2-21（二十一）を除き全て「廿五」式（20は二十） 巻1（全29葉）、巻2（全28葉）、巻3（全28葉）、巻4（全27葉）、巻5（全29葉）、巻6（全28葉）、巻7（全29葉）、巻8（全28葉）、巻9（全23葉）、巻10（全24葉）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・双面連式、右上に四角で囲って図題を記す。南宋52幅、北宋44幅。</li> <li>図は原則として各回1幅だが、南宋第4、49回と北宋第30回には各2副があり、北宋第5、9、15、19、29、45、49回には図が無い（南北ともに全50回）。</li> <li>・南宋巻1-4B「上元王少准寫」、北宋巻1-3B「上元王少准寫」とともに右端に四角で囲って記す。どちらもその巻の最初の図。</li> </ul>
ロ	巻1（全48葉、二五式）、巻2（全62葉、二五式）、巻3（全64葉、20-39は二十、三十を除いて「廿五」式、40以降「二五」式）、巻4（全62葉、1は乙、39まで「廿五」式、以降五一、五五、五六と影印の陰で判別不能な57-59以外は「二五」式）、巻5（全66葉、1は乙、39まで「廿五」式、以降六四、六五を除き「二五」式）、巻6（全65葉1、11は乙、十乙、39まで「廿五」式以降四三、四四を除き「二五」式）、巻7（全65葉、1は乙、20-29「廿五」式、30以降全て「二五」式）、巻8（全57葉、三九を除き全て「二五」式）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・双面連式、右上に四角で囲って図題を記す。全85幅。原則として各回1幅だが、第9、40、46、52、89節に図が無く、第12節には2幅ある（全89節）。</li> <li>・巻1-2B「上元王少准寫」、巻2-2B「湖塾王少准寫」、巻3-3A「上元王少准寫像」、巻4-2B「上元王氏少准寫」、巻5-4B「上元王少准寫像」、巻7-1Bに「王少准寫相／万八刊」。巻3-3Aのみ画面左上隅に、他は画面右端に四角で囲って記す（「万八刊」はその左脇に小さな四角を設けて記す）。全てその巻の最初の図。</li> </ul>
ハ — 1	西晋：二十、三十を除き39まで「廿五」式、40以降「二五」式、1は乙 巻1（全50葉）、巻2（全46葉）、巻3（全64葉）、巻4（全64葉） 東晋：特別注記しない限り西晋と同じ 巻1（全58葉）、巻2（全63葉、63を三に誤る）、巻3（全62葉、30が卅）、巻4（全71葉）、巻5（全65葉）、巻6（全60葉）、巻7（全54葉）、巻8（全54葉）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・双面連式、右上に四角で囲って図題を記す。全90幅。西晋巻1、2は各6幅、西晋巻3、4は各8幅、東晋巻1、7、8は各7幅、東晋巻2、3、5、6は各8幅、東晋巻4は9幅。各則に何幅ずつ（或いは何則ごとに1幅）というような原則は見られないが、図が配置される葉の丁付は僅かな例外を除いてほぼ完全に揃っている。つまり、「各巻の第何葉は挿画」という原則で図を配置したものと思われる。</li> <li>・東晋巻1-2B「王少准寫像」。右端に四角で囲って記す。その巻で最初の図。</li> </ul>
ハ — 2	西晋：二十、三十を除き39まで「廿五」式、40以降「二五」式、1は乙 巻1（全50葉）、巻2（全43葉）、巻3（全64葉）、巻4（全65葉、64、65をそれぞれ五五、五六に誤る） 東晋：特別注記しない巻では西晋に同じ葉数表記 巻1（全58葉）、巻2（全63葉、1は一、63を五五に誤る）、巻3（存62葉、62A 7行目以降全欠。30が卅）、巻4（全71葉、1、11が一、卅、65、66をそれぞれ五五、五六に誤る）…9、10、巻5（全57葉、20、26、30、37、51、52がそれぞれ卅、二六、卅、三十七、五十一、五十二）、巻6（全52葉、1、20、30がそれぞれ一、卅、卅）、巻7（全47葉、20、26、30がそれぞれ卅、二六、卅）、巻8（全47葉、20が卅）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本的に（ハ-1）と同じ図が同じ葉に配されるが、東晋巻5-8では図が全て省かれ、数字が連続するように版心葉数を振り直す。（ハ-1）の東晋巻4の最後の図（65B66A）も省かれ、やはり版心葉数が詰められている（但し、65と66の葉数表記は左記の如く誤っている）。同じく東晋巻4の最初の図（1B2A）も無く、葉数を詰めているが（ハ-1）の3が「二」に、その影響は「三」が次番となるまで、「四」から「六四」までは葉数表記が再び（ハ-1）と一致する。</li> <li>・東晋巻1-2B「王少准寫像」。右端に四角で囲って記す。その巻で最初の図。</li> </ul>
ニ	挿画は無いので、巻数表記についてのみ記す。巻1（全62葉、廿三、廿四、卅七、卅八を除き「二五」式）、巻2（全52葉、全て「二五」式）、巻3（全64葉、全て「二五」式、67は六十七止）、巻4（全51葉、卅三、卅四を除き「二五」式、1、11は乙、十乙）、巻5（全64葉、全て「二五」式）、巻6（全60葉、39まで二十、二二、二三、三十を除き「廿五」式、40以降「二五」式、60は六十止）、巻7（全61葉、38まで二十を除き「廿五」式、39以降「二五」式、61は六十一止）、巻8（全66葉、二十、二十一、二十二、二十三、廿七を除き「二五」式）、巻9（全66葉、39まで二十を除き「廿五」式、40以降「二五」式）、巻10（全64葉、全て「二五」式、51は五乙、64は六四全）	

第二章表3 唐氏世徳堂刊行戯曲の刊行者名・版式・版心・挿画 (□は一文字分の空格を表す。挿画は全て半葉のみの単面式で、上12分の1ほどの幅に左右を雲模様で飾った図題を配する)

戯曲名	巻頭刊行者など	版式	版心	各巻巻数、版心葉数表記、版心表記に乱れのある葉	挿画
『趙氏孤児記』 二巻	姑孰陳氏尺蠖齋記釋 繡谷唐氏世徳堂校梓 ※下巻では「姑孰陳氏尺蠖堂」釋	上評下文、半葉8行21字+小字で行6字の評。左右双辺が基本だが、四周単辺も混じる。有界、白口、単黒魚尾。	「孤児記□□(魚尾)○卷(七〜八字分空白)葉数」 ※版心題は本文一字目の高さから。	上巻(全48葉)、葉数表記は39まで「廿五」式、40から「二五」式、1、41が乙、四乙。 下巻(全47葉)、葉数表記上巻に全く同じ。15Bが欠(前後で文章続くので、図があつたものと思われる)	図題陰刻。上巻25 齣7幅下巻19齣に 存6幅
『驚鴻記』 二巻	秣陵陳氏尺蠖齋記釋 繡谷唐氏世徳堂校梓	上評下文、半葉8行21字+小字で行6字の評。四周双辺が基本だが、単辺も混じる。有界、白口、単黒魚尾。	「驚鴻記□□(魚尾)○卷(七〜八字分空白)葉数」 ※版心題の高さ同上。	上巻(全48葉)、葉数表記は廿五〜廿九を除き「二五」式。 下巻(全43葉)、葉数表記は全て「二十五」式。	図題陽刻。上巻22 齣に7幅、下巻17 齣に7幅。
『節孝記』 『賦歸記』 一卷・『陳情記』一卷)	姑孰陳氏尺蠖齋重訂 繡谷唐氏世徳堂校梓	上評下文、半葉8行21字+小字で行6字の評。四周双辺が基本だが、単辺も混じる。有界、白口、単黒魚尾。	「賦歸記□□(魚尾)卷之上(七〜八字分空白)葉数」 ※版心題の高さ同上 「陳情記□□(魚尾)卷之下(七〜八字分空白)葉数」 ※版心題の高さ同上。	賦歸記卷之上(全41葉)、葉数表記は二七、二八を除き「二十五」式。  陳情記卷之下(存37葉、第38葉以下欠)、葉数表記は25が二〇五に見えるが、他全て「二十五」式。	図題陽刻。賦歸記 17齣に9幅。陳情 記存15齣に存7 幅。
『樹髮記』 二巻	星源游氏興賢堂重訂 繡谷唐氏世徳堂校梓 海陽程氏敦倫堂參録 ※下巻は世徳堂のみ	上評下文、半葉8行21字+小字で行6字の評。四周双辺が基本だが、単辺も混じる。有界、白口、単黒魚尾。	「(本文一字目の高さから 五字分空白)(魚尾)斷髮 記卷之上(四字分空白)葉 数」	卷之一(全51葉)、葉数は一文字分のスペースに詰め込む。二十、三十を除き39まで「廿五」式、以降「二十五」式。 卷之二(全55葉)、葉数は一文字分のスペースに詰め込む。二十、三十を除き39まで「廿五」式、以降「二五」式。	図題陽刻。卷之一 21齣で10幅、卷之 二28齣で10幅。
『月亭記』 二巻	星源游氏興賢堂重訂 繡谷唐氏世徳堂校梓 海陽程氏敦倫堂參録 ※卷之二は全て無し	上評下文、半葉8行21字+小字で行6字の評。四周双辺が基本だが、ごく稀に左右双辺もある。有界、白口、単黒魚尾。※41〜44のみ眉欄が有界。	「(本文一字目の高さから 五字分空白)(魚尾)月亭 記卷之一(四字分空白)葉 数」	卷之一(全45葉)、葉数表記は全て「二五」式。 卷之二(全44葉)、葉数表記は四十一、四十四を除き「二五」式、影印本では確認しづらいが1は乙か? 8A欠(前後から図だったと思われる)。	図題陽刻。卷之一 25齣で5幅、卷之 二18齣で存5幅。
『還帶記』 二巻	星源游氏興賢堂重訂 繡谷唐氏世徳堂校梓	上評下文、半葉8行21字+小字で行6字の評。四周双辺が基本だが、単辺も混じる。有界、白口、単黒魚尾。	「□還帶記□(魚尾)上巻(七〜八字分空白)葉数」 ※版心題は本文一字目の高さから。巻数の上が一 字分空白葉も多い。	卷之上(全55葉)、全て「二五」式、29、30、36、37、39、41、42、43で「巻」字を踊り字か梵字のような略字(略記号?)とする。 卷之下(全52葉)、五十一を除き「二五」式で、21は二乙。5、8、13は葉数表記が他葉より高い位置。同13、14、33、34は版心題が他より下がり、上にも魚尾あり。	図題陽刻。卷之上 20齣で12幅、卷之 下21齣で12幅。
『忠孝記』 四巻	星源游氏興賢堂重訂 撫東王氏莢英堂參閱 繡谷唐氏世徳堂校梓 ※卷之二以降は世徳堂のみ記載	上評下文、半葉8行21字+小字で行6字の評。四周双辺が基本だが、単辺も混じる。有界、白口、単黒魚尾。	「忠孝記□□(魚尾)卷之○(七〜八字分空白)葉数」 ※版心題は本文一字目の高さから。魚尾の下に必ず白丸がある。	卷之一(全40葉)、三十〜三十五、四十を除き「廿五」式。 卷之二(全34葉)、廿九まで「廿五」式、以下三十一を除き「二五」式、5B欠(図か)、 卷之三(全40葉)、廿八まで「廿五」式、以下「二五」式、1B、6B欠(ともに図か)、 卷之四(全39葉)、十一〜廿九は「廿五」式、他は「二五」式、1B、6A、11B、16A、27B、33B欠(全て挿画か)。	図題陽刻。卷之一8 齣で6幅、卷之二7 齣で存5幅、卷之三 7齣で存3幅、卷之 四7齣で存1幅。

第二章表4 故宮世本と天理世本の全葉数と欠葉、及び葉数表記

巻1	故は全61葉、天は全60葉。ともに廿三、廿四、廿六～卅を除き「二十五」式。1のみ乙とし、他では全て一を用いる。 ※故と天は刊行時点で葉数が異なっていたと見て間違いない。 途中から版心葉数もずれるが、葉数の表記法は共通。
巻2	全58葉。全ての葉で「二十五」式。1のみ乙を用い、他は全て一。 ※天の25、39は欠葉。
巻3	全64葉。廿と六四を除いて「二十五」式。1のみ乙を用いる。 ※故の55、56、64Bは欠葉。天の21、64Bは欠葉。
巻4	全64葉。廿七と廿八を除く五十二までと六十一以降が「二十五」式で、五三から六十までは「二五」式。1のみ乙を用いる。五五は他より二文字分高く、かつ一文字分のスペースに詰め込まれる。
巻5	全65葉。全ての葉で「二五」式。1、21、41、51では乙を、11、31、61では一を用いる。
巻6	全64葉。全ての葉で「二五」式。1、21（天は印刷悪く不明）、31、51、61では乙、11、41では一を使用。三三と三四は一文字分のスペースに詰め込む。
巻7	全69葉。全ての葉で「二十五」式（但し、25は故天とも五しかはつきり見えない）。1のみ乙を用いる。8、故天とも葉数表記無し。27、故天とも十七に見えるが、故はよく見ると二十七らしい。
巻8	全67葉。二十～二十九と五十九～六十一は「二十五」式、三乙から五八までと六三以降は「二五」式。62は故天とも「六二」しか見えないが、間に少しスペースがあり、マイクロからでは「十」の有無確定は困難。六三と六四は他よりも約二文字分高く、一文字分のスペースに詰め込む。31、41、51では乙、1、11、21、61では一を用いる。
巻9	全68葉。全ての葉で「二五」式。1、11、21、31、41、51は乙を用い、61のみ一を使う。8は天では印刷不鮮明で葉数が見えないが、故ではA面に「八」の右画らしきものが辛うじて見える。
巻10	全64葉。全ての葉で「二五」式。1（故と天は異版だがどちらも乙）、21、31、41、51、61は乙を用い、11のみ一を使用。六十は他より一文字分高く、かつ一文字分のスペースに詰め込む。
巻11	全66葉。全ての葉で「二五」式。11のみ一を用いる。
巻12	全63葉。全ての葉で「二五」式。11のみ一を用いる。五五、五六、五七、五八、六二、六三は他より一文字分高く、一文字分のスペースに詰め込む。
巻13	全65葉。全ての葉で「二五」式。全て一を使い、乙は用いない。 ※故の60は欠葉。
巻14	全64葉。二十九を除き「二五」式。41のみ乙を使う。
巻15	全69葉。廿一、廿二、廿五、廿六、卅三、卅四を除き「二十五」式。乙は用いない。
巻16	全64葉。全ての葉で「二五」式。乙は用いない。 ※天の33は欠葉。
巻17	全64葉。三十まで「二十五」式、三乙からは卅七、卅八を除き「二五」式。1、11、31、61は乙を、21、41、51は一を用いる。
巻18	全61葉。卅四を除き「二五」式。1、21、31、51、61は乙を、11、41は一を用いる。 ※故の25は欠葉。天は61Bが欠葉。
巻19	全60葉。廿七・廿八を除き「二五」式。但し、29は故天とも「二〇九」となっている。11のみ一を用い、他は全て乙。 ※天の44、59、60は欠葉。
巻20	全62葉。全葉「二五」式。1、21、31、41、61は乙、11、51は一。 ※故天とも62は欠葉。殆ど心経の引用と巻末題だけの葉なので無くてもさほどの不都合は生じないが、浅野世本に存する他、磯部注4書によれば日光世本にも存するようだから、少なくともそれより早印の故宮世本には元々はあったのだろう。

第二章表5 故宮世本と天理世本、版心題・巻数表記の乱れ

- ・版心表記の原則は「出像西遊記【魚尾】巻之〇〇（七～八字分空格）葉数（三字分空格）文字数」（文字数は巻11の1葉のみに見える）
- ・まず「故」「天」でどちらの本での現象かを示し、続けて「問題のある葉数（版心題／巻数表記）」という形式で記す。
- ・版心題は通常通り「出像西遊記」とする場合は省略。
- ・□は一文字分の空格を表す。「＝」は「巻」の字が特徴的な略字であることを示す。

巻1	天7（出像西遊記□□ <sup>i</sup> ／巻之一）[故は異版で版心通常]、天8（出像西遊記□□／巻之一）[故は異版で版心通常]、故天42（一卷）、故天43（一卷）、故47（一卷）＝天46（一卷） <sup>ii</sup> 、故48（巻数表記は見えず。但しマイクロ写り悪い）≒天1－47（一卷）
巻2	故天1（□□□□□／巻之二）、故天2（西遊記□□／二巻）、故天5（西遊記□□／二巻）、故天6（西遊記□□／二巻）、故天7（西遊記□□／二巻）、故天8（西遊記□□／二巻）、故天34（[出像西遊記] □ <sup>ii</sup> ／巻之二）、故天42（巻二）
巻3	故天とも乱れ無し ※但し、故は31以降版心題の部分の紙が破損しているらしく、確認不能な葉多い。
巻4	故天25（西遊記□□／巻之四）、故天26（西遊記□□／巻之四）、故天27（西遊記□□／巻之四）、故天28（西遊記□□／巻之四）、故天53（西遊記□□／四巻）、故天54（西遊記□□／四巻）、故天54（西遊記□□／四巻）、故天56（西遊記□□／四巻）、故天57（西遊記□□／四巻）、故天58（西遊記□□／四巻）、故天59（□□□□□／四巻）、故天60（西遊記□□／四巻）
巻5	故天27（西遊記□□／巻之五）、故天28（西遊記□□／巻之五）、故天29（西遊記□□／巻之五）、故天30（西遊記□□／巻之五）、故天33（西遊記□□／巻之五）、故天34（西遊記□□／巻之五）、故天35（□□西遊記／巻之五）、故天36（西遊記□□／巻之五）
巻6	天8（[出像西遊記] □／六＝）[故は版木の状態が非常に悪い異版で、版心表記は通常通り]、故天21（＝之六）、故天22（＝之六）、故天33（[出像西遊記] □／巻之六）、故天34（[出像西遊記] □／巻之六）
巻7	故天5（七＝）、故天7（□□□□□／巻之七）、故天8（七＝）、故天12（七＝）、故天14（七＝）、故天17（□□□□□／巻之七）、故27（巻之七 [七は無いようにも見える]）≒天27（巻） <sup>iv</sup> 、故天35（□□□□□／七＝）、故天67（巻之）
巻8	故天15（西遊記□□／巻之八）、故天57（□□□□□／巻之八）
巻9	故天1（□□□□□／巻之九）
巻10	天1（□□□□□／巻之十）[故は異版で版心通常]
巻11	故天41（版心題と巻数は通常通りだが、葉数の下に小字で「五百廿四」とある）[故はマイクロでは撮影時に影が出来てしまっており葉数とこの数字がともに確認不能だが、原本では葉数と「五百廿□」を確認可能]
巻12	故天28（□□十二 [巻之があるべき箇所が空白]）、故天34（之巻十二）、故天40（西遊記□□／十二＝）、故天51（出記西遊記／巻之十二）、天63（□之十二 [巻はA面に右払いの痕跡が見えるのみ]） <sup>v</sup>
巻13	故天1（□□□□□／ [幾何学模様]）、故天10（□□□□□／巻之十三）、故天65（□□□□□／ [幾何学模様]）、故天45（十三 [魚尾が二字分下がり、版心題との間は空白]）、故天46（十三 [魚尾が二字分下がり、版心題との間は空白]）
巻14	故天とも乱れ無し
巻15	故天24（西遊記□□／巻之十五）、故天13（十五）、故天14（十五）、故天19（十五）、故天20（十五）、故天21（十五）、故天22（十五）、故天25（十五）、故天26（十五）、故天27（十五＝）、故天28（十五＝）、故天33（十五）、故天34（十五）、故天43（出像□□記／巻之十五）、故天52（□□□□□／巻之十五）、故天58（□□□□□／巻之十五）
巻16	故天5（十六＝）、故天6（十六＝）、故天7（十六＝）、故天8（十六＝）、故33（□□□□□／□之十六 [魚尾も無し]）[天では欠葉]、故天57（巻十六）、故天58（巻十六）
巻17	故天7（巻十七）、故天8（巻十七）、故天30（巻之十七 [魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白。なお、この葉は他より版面が一回り小さい]）、故天41（□十七巻 [魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白]）、故天44（十七巻 [魚尾が無い]）、故天57（出像西□記／巻之十七）、故天58（□巻之十七 [魚尾の下に一字分の空欄]）
巻18	故天1（□□□□□／ [幾何学模様]）、故天2（巻十八）、故天4（□□□□□／十八＝）、故天6（□□□□□／□□十八 [魚尾無し]）、故天10（□□□□□／十八＝）、故天11（□□□□□／巻之十八）、故天14（□□□□□／巻之十八）、故天16（□□□□□／巻之十八）、故天17（□□□□□／巻之十八）、故天29（□□十八）、故天30（十八 [魚尾が二文字分下がり、版心題との間が空白]）、故天31（十八 [魚尾が二文字分下がり、版心題との間が空白]）、故天32（十八 [魚尾が二文字分下がり、版心題との間が空白]）、故天36（[出像西遊記] □／巻之十八）、故天39（□□十八）、故天40（□□十八／四十）、故天47（□□十八）、故天48（□十八 [魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白]）、故天50（巻之十八 [魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白]）、故天60（□十八 [魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白]）
巻19	故天1（□□□□□／ [幾何学模様]）、故60（巻十九）[天は欠葉]
巻20	故天1（□□□□□／ [幾何学模様] ／乙）、故天35（二十巻）、故天36（二十巻）

i 魚尾が二字下がり、版心題との間が空格。「出像西遊記□□」と表記するものは以下全て同じ。  
ii 天理世本の巻1では故宮世本にある挿画を一つ省くので、この葉以下は同じ内容の葉で、版心葉数が異なる。  
iii 「出像西遊記」の五文字を四文字分のスペースに詰め込み、魚尾との間が一文字分空格となるもの。以下同じ。  
iv この葉に関しては版刻の際の問題ではなく、天で版木の損壊により字が見えなくなったものの模様。天は葉数も「十七」しか見えないが、故だとA面に僅かながらその上に「二」の痕跡が確認出来る。両者は同版なので、天よりも故の方が印刷が早いと言える。  
v この葉、故は同版であるが、「巻」は見える。これも天が版木の損傷が進んでからの印刷だったことによる。

第二章表6 浅野世本の版心表記が通常でない葉

- ・「葉数表記の原則」欄は、「20 葉以降の表記／下一桁の1 の表記」の順に記す。他の葉数表記に問題がある場合はそれに続けて記す。
- ・「版心題・巻数・特記事項」欄は、版心題と巻数のうち乱れがあるもののみ記す。それに続けて、空格・誤字・埋木の跡等が見える場合はその旨を、他の葉でよく用いる字とは異体字で表記される字がある葉である場合はその字（〔 〕内には他の葉で多く用いられる字）を記す。
- ・熊雲演覆世徳堂刊本と特徴が共通する事項には網掛けにし（例えば、巻11～34は版心題を「之巻十二」とするのは故天と同じだが、故天では「変」ではなく「變」を用いているということ）、故宮世本・天理世本でも表記乱れるが乱れ方が異なる葉は下線を付した。

	葉数表記の原則	版心題・巻数・特記事項
巻11	全て「二五」式／11のみ	40（葉数の下に小字で「五百廿七」とある）、41（葉数の下に小字で「五百廿四」とある）
巻12	全て「二五」式／11は十口、 他は全て乙	28（□□十二）、34（之巻十二／変〔變〕）
巻13	全て「二五式」／全て一	45（十三〔魚尾が二字分下がり、版心題との間は空白〕／台〔臺〕）、46（十三〔魚尾が二字分下がり、版心題との間は空白〕）
巻14	全て「二五式」／41のみ乙／34 は二四に見える	乱れ無し
巻15	全て「二五式」／21のみ乙	乱れ無し
巻16	全て「二五式」／全て一	乱れ無し
巻17	21～29「二十五」式、以降は卅七、卅八を除き「二五」式／21、41、51が一	5（出像西遊記□〔五文字を四文字分に詰め込む〕／個個〔个く〕）、7（巻十七／因〔興〕、変ヒ〔變く〕）、8（巻十七／團ヒ〔團く〕、鸞〔鸞〕）、30（魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白。他の葉より反面が一回り小さい）、41（□十七巻〔魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白〕／灯〔燈〕、観〔觀〕）、44（□□十七巻〔但し故天と違い魚尾あり〕／A面11行目の故天「叫」）とする字が見えず、埋木の跡がある）、58（□巻之十七〔魚尾の下に一字分の空欄〕）
巻18	全て「二五」式／11、41が一を用いる	1（巻十八〔A面1行目、故天の「尋」が空格〕）、2（巻十八）、6（□□十八〔魚尾が無い〕／国〔國〕）、29（□□十八）、30（十八〔魚尾が二文字分下がり、版心題との間は空白〕／A面3行目、故天の「待」が空格。故天は俗字多用）、31（十八〔魚尾が二文字分下がり、版心題との間は空白〕）、32（十八〔魚尾が二文字分下がり、版心題との間は空白〕／A面2行目「降妖寶杖」とすべきを「降妖寶劍」に誤る。B面12行目、故天の「佛人」を「弗人」に誤り、かつ埋木の跡が見える）、36（出像西遊記□〔五文字を四文字分に詰め込む〕）、37（□□十八／故天の「体」を「體」とする反面、「鐵」を「鉄」とする）、38（□□十八／故天の「観」を「觀」）、39（出像西遊記／□□十八／故天は俗字を多用）、40（□□十八／故天は俗字を多用）、47（□□十八）、48（□十八〔魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白〕／故天「乱」を浅〔亂〕）、50（魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白／故天「戦」を浅〔戰〕）、60（出像西遊記／□十八〔魚尾が一文字分下がり、版心題との間は空白〕／A面8行目、故天の「く」が空格）
巻19	廿七、廿八を除き「二五」式／11のみ	乱れ無し
巻20	全て「二五」式／11、51が一	乱れ無し

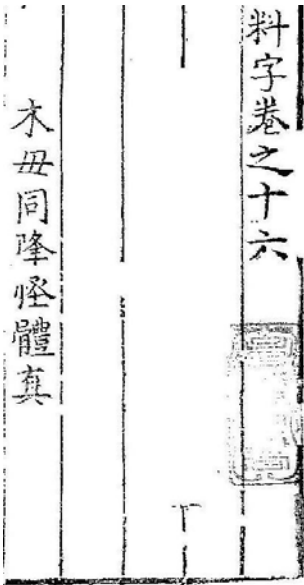


図1 浅野世本巻16-1A（部分）

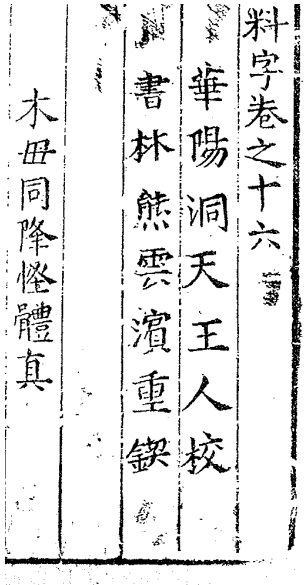


図2 故宮世本巻16-1A（部分）

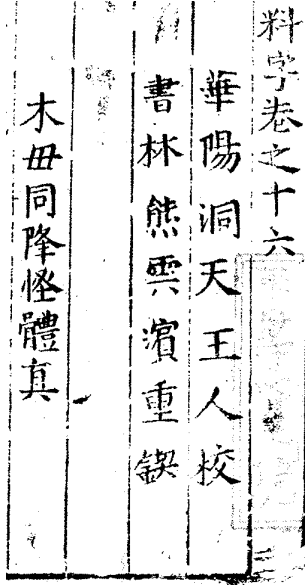
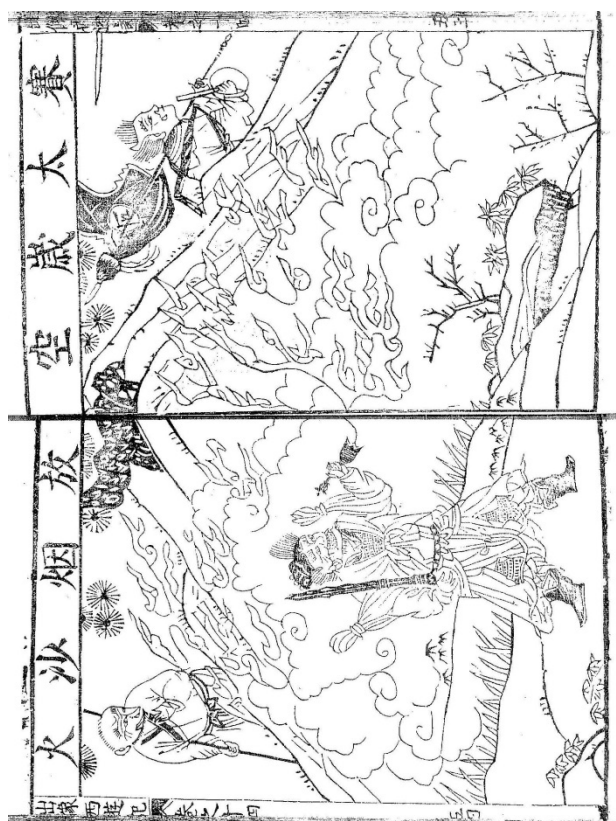
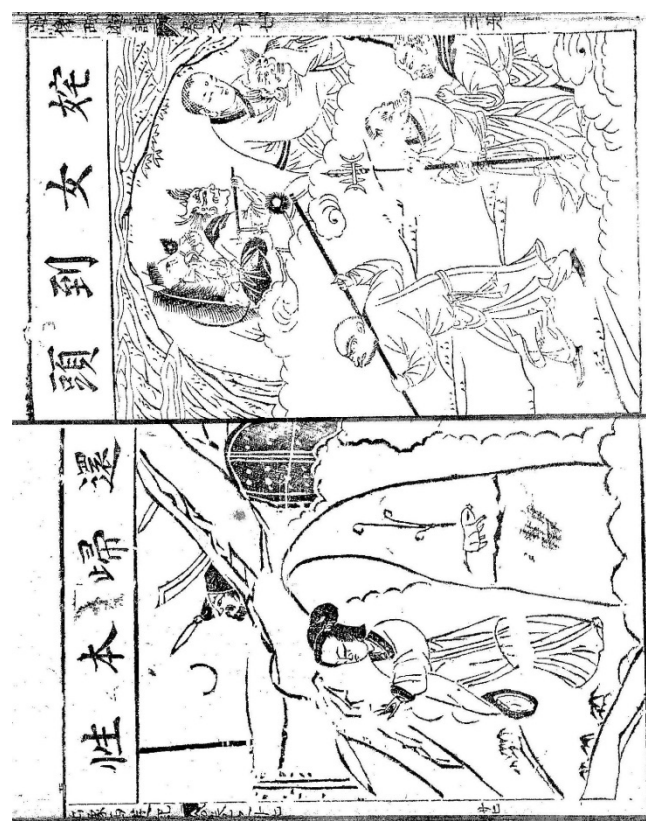


図3 天理世本巻16-1A（部分）

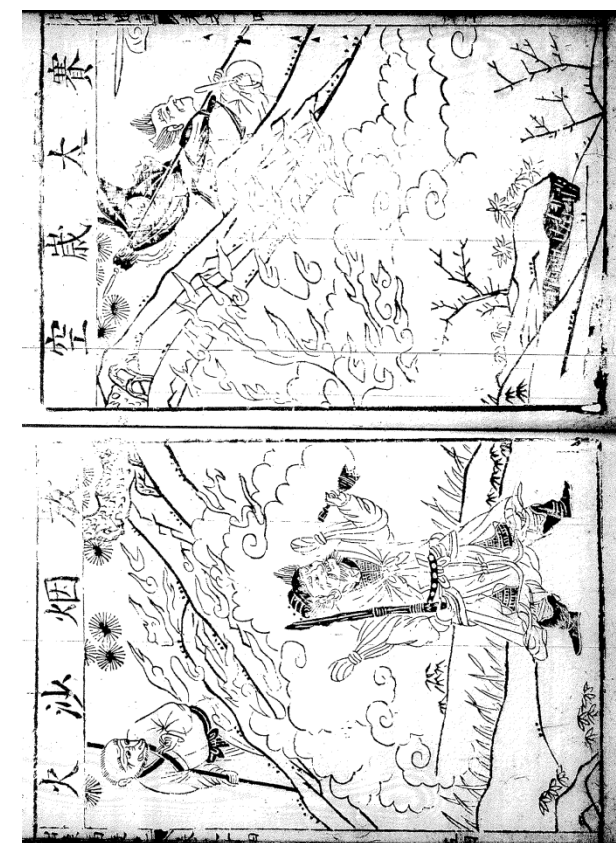
出像西遊記卷之十四  
 會國王。把那煩惱憂愁都且權解。使出个風流喜悅之容。與他  
 叙个夫妻之情。教他把鈴兒與你收貯。待我取便偷了。降了這  
 妖怪。那時都好帶你回去。重請鸞鳳。共享安寧也。那娘、依言。  
 這行者還作心腹小校。開了宮門。喚進左右侍婢。娘、叫有來  
 有去。快往前亭請你大王來。與他說話。好行者應了一聲。即至  
 剥皮亭。對妖精道。大王聖宮娘、有請。妖王大喜道。娘、常時  
 只罵。怎麼今日有請行者。道。那娘、問朱紫國王之事。是我說  
 他不要你了。他國中另扶了皇后。娘、聽說。故此沒了想頭。方  
 才命我來奉請。妖王大喜道。你却中用。待我勦除了他國。封你  
 為个隨朝的、宰。行者順口謝恩。疾與妖王來至后宫門首。那  
 娘、懽容迎接。就去用手相挽。那妖王喏、而退道。不敢、。  
 多承娘、下愛。我怕手疼。不敢相傍。娘、道。大王請坐。我與你  
 說。妖王道。有話但說不妨。娘、道。我蒙大王辱愛。今已二年。未  
 得共枕同衾。也是前世之緣。做了這場夫妻。誰知大王有外我  
 之意。不以夫妻相待。我想着當時。在朱紫國為后。外邦凡有進  
 貢之寶。君看畢。一定典后收之。你這里更无甚麼寶貝。左右穿  
 的是貂裘。吃的是血食。那曾見綾錦金珠。只一味鋪皮蓋毯。或  
 者就有些寶貝。你因外。我也不教我看見。也不典我收着。且如  
 聞得你有三个鈴鐺。想就是件寶貝。你怎麼走也帶着。坐也帶  
 着。你就拿典我收着。待你用時取出。未為不可。此也是做夫婦  
 一場。也有个心腹相托之意。如此不相托付。非外我如何。妖王  
 大咲陪禮道。娘、怪得是。怪得是。寶貝在此。今日就當付你收  
 之。便即揭衣取寶。行者在傍。眼不轉睛。看着那怪。揭起兩三層  
 衣服。貼身帶着三个鈴兒。他解下來。將此木綿塞了口兒。把一



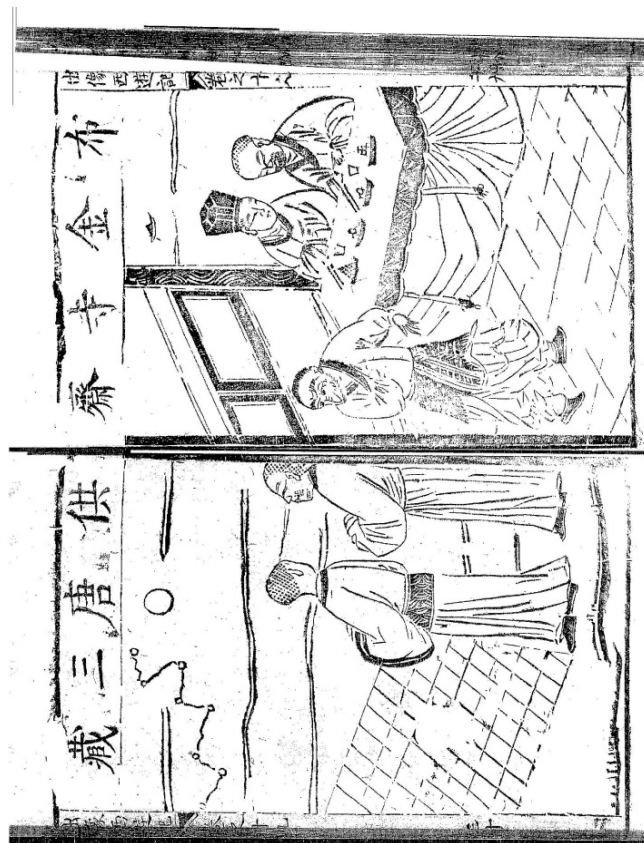
第二章图5 浅野世本卷14-53B54A (第70回第1图)



第二章图7 浅野世本卷17-36B37A (第83回第2图)

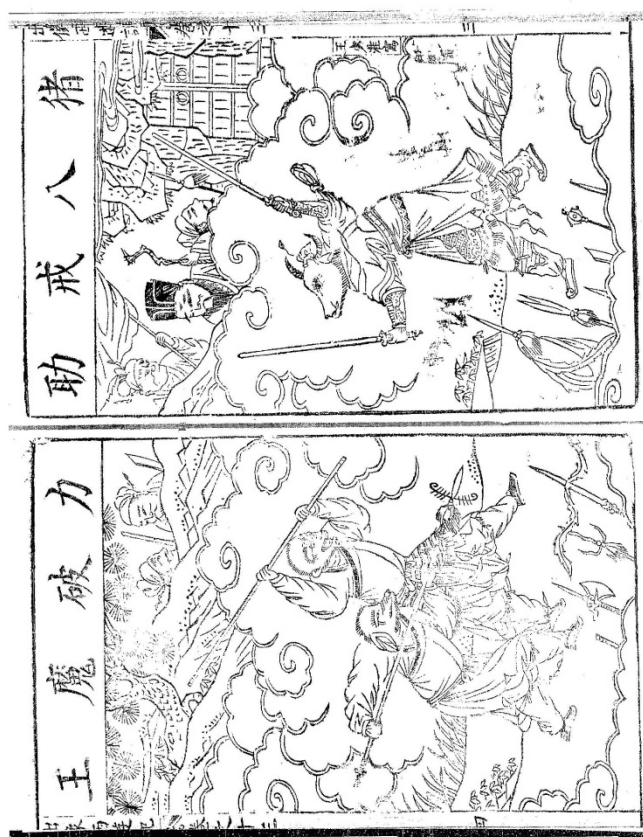


第二章图6 故宫世本卷14-53B54A (第70回第1图)



第二章图8 浅野世本卷19-29B30A (第93回第1图)

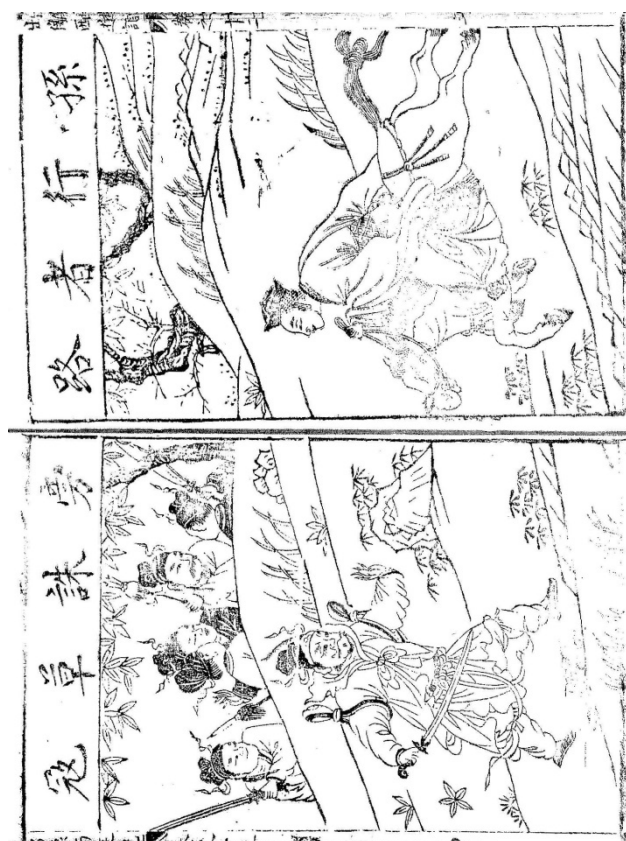




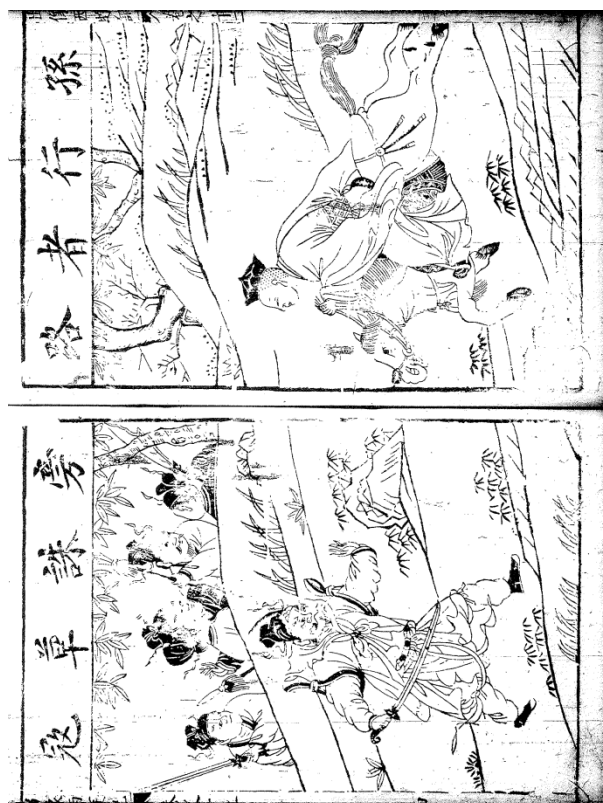
第二章图9 浅野世本卷13-3B4A (第61回第1图)



第二章图10 故宮世本卷13-3B4A (第61回第1图)



第二章图11 浅野世本卷12-3B4A (第56回第1图)



第二章图12 故宮世本卷12-3B4A (第56回第1图)

### 第三章 金陵唐氏世德堂主人考——二人の「唐光祿」——

#### はじめに

前章では、かつては金陵唐氏世德堂刊本『西遊記』として一括りにされることの多かった四本の伝本が、実は二版に分けられることを確認し、故宮世本・日光世本・天理世本は建陽の熊雲瀆による覆刻本であること、浅野世本には世德堂刊本の後修本である可能性があり、少なくとも画工名など全体的な傾向としては熊雲瀆覆世德堂刊本よりも良く世德堂初刻本の様相を伝えていることを論じた。

本章では、金陵唐氏世德堂の主人について考察する。序章に全文を引いた世德堂本（実は熊雲瀆覆世德堂刊本）の秣陵陳元之撰「刊西遊記序」の解釈にも大きく影響するこの問題については、先行研究が断片的な資料に基づく推測や論拠を明示しない形での言及に止まっており、はっきりしたことが分かっていなかった。そこで、本章では金陵唐氏世德堂刊本を経史子集を問わず幅広く調査した上で、世德堂主人の名・字・号や活動状況を解明したい。

また、拙稿「唐氏世德堂と周曰校万卷楼仁寿堂の章回小説刊本の覆刻及び後印の事例について」<sup>1</sup>では、他にも万暦二十年前後に上元王氏を画工とする見開き全面の挿画を伴って金陵で刊行された周

曰校万卷楼仁寿堂刊本『三国演義』十二卷（所謂周曰校乙本）、万卷楼仁寿堂刊本『大宋中興通俗演義』八卷附二卷、唐氏世德堂刊本『南北両宋志伝題評』南宋十卷北宋十卷の三種にそれぞれそっくりな覆刻本が現存することを明らかにし、同じく唐氏世德堂刊本『唐書志伝題評』八巻と唐氏世德堂刊本『東西両晋志伝題評』西晋四巻東晋八巻の二種は、後に版木が周氏大業堂の手に渡ったことも併せて示した（各版本の巻首題や所蔵機関、書誌的な詳細等については注1拙稿参照）。『西遊記』の熊雲瀆覆世德堂刊本も含めたこれら四種の覆刻本は全て刊年不詳で、『三国演義』は刊行者も不詳だが、『西遊記』は建陽宏遠堂主人熊雲瀆（雲瀆は号で名は体忠）の刊行、残る二種は建陽双峰堂三台館主人の余象斗の刊行である。

注1拙稿では、金陵の唐氏世德堂と周氏万卷楼の主人がいずれも江西撫州府金谿県出身の同郷の間柄であることを挙げつつ、世德堂と万卷楼が互いに分担しあっていたためにこれらの章回小説が同時に重複することなく刊行されていた可能性を指摘した。世德堂の活動実態を把握するべく、本章ではその点についても検討する。

## 一、「唐光禄」をめぐる

### (1) 世徳堂刊本章回小説と「唐光禄」

まず、本章「はじめに」に挙げた世徳堂の刊行した四種の章回小説刊本それ自体に刊行者の手掛かりを求めてみよう。いずれも各巻巻頭に「金陵世徳堂梓行」や「繡谷唐氏世徳堂校梓」等と見えるのみで主人の個人名は明記されないのだが、序が伝わらない『東西両晋志伝題評』を除く三種には、揃って序に「(唐)光禄」なる人物が刊行に関与した旨が記されている。序の年次順に見てみよう。

第二章で見た通り、世徳堂刊本『西遊記』そのものの序は失われているが、幸いなことに熊雲演覆世徳堂本の秣陵陳元之撰「刊西遊記序」が世徳堂刊本の序の文章を日付や署名まで全く忠実に伝えていると考えて良い。末尾に「時壬辰夏端四日也」と見え、それが万暦二十年と推定されていることも既述の通りだが、本章ではそれに問題が無いかどうかを確認する。さて、序章で全文を引いて触れておいた通り、この序は『西遊記』の作者が既に不明となっていたことを述べた上で、刊行の経緯について次のように記している。

唐光禄既購是書、奇之、益俾好事者為之訂校、秩其卷目梓之、凡二十卷數十萬言有餘、而充叙於余。(唐光禄がこの書物(旧本『西遊記』)を購入して価値を認め、好事家たちに供すべく校訂を加え、巻数や目録を整えて版木に刻んだところ、全体で二十

巻、数十万字に及び、私に序文を任せた。)

仮に日本での通説<sup>3)</sup>に従った訳を示しておいたが、中国では波線部の「俾」を使役に読むのが多数派となっている<sup>4)</sup>。その中で更に使役が掛かる「好事者」の行為を「秩其卷目」までだとする説、「梓之」までがそうだとの説、「為之訂校」だけだとの説に分かれており、もちろん「俾」を使役に読まない説もあって、これをどう解釈し、ここに見える唐光禄・好事者・秣陵陳元之と、各巻巻頭に見える校者の華陽洞天主人・刊行者の金陵世徳堂という、併せて五者の関係を如何に整理するかは、呉承恩説の是非を中心とする作者論争とも結び付いて、議論百出の大問題となっている<sup>5)</sup>。

もともと、波線部をどう解釈するにせよ、唐光禄なる人物が『西遊記』の旧本を購入して刊行に深く関わったという点については疑問の余地が無い。唐光禄が何者であるのかさえ明らかにすれば、乱立している諸説をかなり整理することが出来るはずである。

さて、問題の唐光禄については、世徳堂の主人またはその一族だと推定するのが日中問わず長年の定説である<sup>6)</sup>。しかし、当の世徳堂の主人がはっきりしておらず、それ以上のことは不明であった。そこへ近年、唐氏世徳堂の関係者には「光禄」を名乗る人物が確認出来ないとして、「光禄」は光禄寺卿か少卿の経験者を指すのではないかとの解釈を示し、北京光禄寺と南京光禄寺を通じてそれに該当

する唐姓の人物が唐鶴徵（唐順之の子）しかないことから、唐鶴徵こそが「唐光祿」だとする胡令毅氏の説が現れた<sup>7</sup>。

しかし、胡氏は触れていないが、「光祿」が刊行に関わった旨は、同じ世徳堂刊の『南北両宋志伝題評』と『唐書志伝題評』の序にも見えることが以前から指摘されている。まず、各巻巻頭第二・三行に「姑孰陳氏尺蠖齋評釋／繡谷唐氏世徳堂校訂（または校梓）」と記す世徳堂本『南北両宋志伝題評』の無名氏「叙鏤南宋傳志演義」が、次のように結ばれる。

……故知帝王徵應、神武多奇、一人之見斯狹、一史之據幾何。若其失而求之於野、傳志可盡薄乎。光祿既取鏤之、而質言鄙人。鄙人故拈其奇一二、首簡以見一斑、且以為好事者佐譚。（これらの例から帝王はその兆しとして多くの奇なる神懸かりな武功を示すと知れるが、人一人の見聞は狭く、正史一つでは抛り所に限界がある。もし正史に漏れた部分を野に求めるならば、伝志。とて全面的に軽んじることは出来まい。光祿が既にそれを入力して版木を作り、私にコメントを求めた。そこで私はその奇なる点について若干の例を挙げ、この序で述べて一端を示し、好事家の談義の一助としたのである。）

この直後に「豈癸巳長至泛雪齋叙」と署名があつて、癸巳は万暦二十一年と推定されている。磯部注3書と氏岡注3論文は共に陳元

之の「刊西遊記序」と併せてこの例を引き、「（唐）光祿」＝唐氏世徳堂の関係者、「叙鏤南宋傳志演義」の撰者＝姑孰陳氏尺蠖齋＝秣陵陳元之と解釈している。

更に、やはり各巻巻頭第二・三行を「姑孰陳氏尺蠖齋評釋／繡谷唐氏世徳堂校訂（または校梓）」とする世徳堂本『唐書志伝題評』の無名氏「唐書演義序」には次のようにある。

……載攬演義亦頗能得意。獨其文詞時傳正史、於流俗或不盡通、其事實時采譌誑、於正史或不盡合。因略綴拾、其額為演義題評。亦懲思光祿之志、書成叙之。……（そこで『唐書志伝』演義』を見れば、これも実に良く出来ている。ただ、その文章は時に正史の引用なので学の乏しい者には理解しきれないかもしれないし、その中身は時に妄言俗説を採用して正史と一致しない場合がある。そこで少しく編集し（た上で注釈を施し）、題して『唐書志伝』演義題評』と名付けた。そしてまた（本書を刊行しようという）光祿の志を勧め励まし、完成したところでこの叙をものした。）

末尾に「豈癸巳陽月書之尺蠖齋中」と記すため、この序は各巻巻頭に見える「姑孰陳氏尺蠖齋」の撰と考えて良からう。この「癸巳」が前掲『南北両宋志伝題評』のそれと同年であることには異論は出まい。陳澈注4論文と呉聖昔注4論文がいずれもこれを引き、この

序を単独で読んだだけでは解釈が難しい「光禄」を、陳元之「刊西遊記序」と併せて読むことで、世徳堂の主人を指すと判断している。妥当な見解と思われ、それに沿って言葉を補って訳した。

また、太田注3書は、序文中の「光禄」には触れないものの、前述の『南北両宋志伝題評』と『唐書志伝題評』の各巻巻頭の「姑孰陳氏尺蠖齋評釋」、及び周氏大業堂通修本『東西両晋志伝題評』の各巻巻頭第二行に「秣陵 陳氏尺蠖齋 評釋」とある（太田氏未見の同版の世徳堂本でも同じ）ことを挙げ、秣陵陳元之〱秣陵陳氏尺蠖齋〱姑孰陳氏尺蠖齋、という解釈を示している。陳澈注4論文も同様の指摘をしており、これも極めて妥当な判断であろう。また本論第二章では、世徳堂刊行の戯曲にも巻頭第二〱三行に「秣陵陳氏尺蠖齋註釋／繡谷唐氏世徳堂校梓」や「姑孰陳氏尺蠖齋重訂／繡谷唐氏世徳堂校梓」等と見えるものが複数あることを指摘した。これだけの例がある以上、陳氏尺蠖齋は陳元之であり、小説・戯曲の校注者として金陵唐氏世徳堂お抱えの人物であったと考えて良からう。その尺蠖齋陳元之の手になる「刊西遊記序」と「唐書演義序」に共に「（唐）光禄」の名が見え、もう一つ彼が「評釋」している世徳堂刊本『南北両宋志伝題評』の「叙鏤南宋傳志演義」にも「光禄」が刊行者として挙がっているからには、「（唐）光禄」はやはり唐氏世徳堂の主人だと考えるのが自然である。もしこの上で唐氏世徳堂

の主人がはっきり「光禄」を名乗る例が見つかれば、「（唐）光禄」とは世徳堂主人に他ならぬことの鉄証となろう。そして、先行研究では全く報告されていなかったが、そのような例は複数存在している。

## （2）二人の「唐光禄」

『宋丞相文文山先生指南摘録』四巻後録四巻（北京大学図書館、中央研究院傅斯年圖書館蔵）は、三欄に分かつ封面の左右に「宋丞相文文山／先生指南摘録」、中央の細い欄に「金陵唐氏世徳堂梓」と記し、各巻巻頭第二〱四行に低七格で「宋 文山文天祥 著／明 振龍郭一鶚 叅閱／明 玉予唐 晟 校梓」とあり（傍線部は行の中間に共有で一つだけ記される文字。以下の引用でも同じ）、末尾に「賜進士第文林郎南京河南／道監察御史同邑後學郭／一鶚汝薦甫拜書」とある「文文山先生指南摘録序」が次のように結ぶ。

……同鄉唐光禄君、雅慕氣節、欣然請梓之、以廣傳要。忠義之在人心萬古常新、匪獨阿所好於鄉之先正已也。余忝蕪陋而為之弁首。（同郷の唐光禄君が（文天祥の）氣節を慕い、欣喜として本書を刊行することを請い、広くその要訣を伝えんとした。これは忠義が人の心にあるということはいつまでも古びることはないというもので、単に同郷の者たちに好まれる先達におもねるだけではない。そこで私も文章下手を省みずこの序を書いた

のだ。)

つまり、廬陵(明代には江西吉安府廬陵県)の人である文天祥や郭一鶚と「同郷」である「唐光禄君」がこの書を刊行したというのだ。胡令毅氏が「唐光禄」だと看做す唐鶴徴は南直隸武進の人であり、江西人ではない。対して唐氏世徳堂は、「金陵唐氏世徳堂」の他に、前述の講史小説三種や戯曲のように「繡谷唐氏世徳堂」と自称することもある。この「繡谷」については、主人の号か名だという説(後述)や、金陵南京の異称だとの説<sup>10</sup>があつたが、江西撫州府金谿県の「錦繡谷」に由来する金谿の異称であることが近年になって明らかにされた<sup>11</sup>。となれば、郭一鶚の序に見える江西人と同郷の刊行者「唐光禄君」とは、各巻巻頭第四行に刊行者として記される「玉予唐晟」である可能性が高かるう。そして、同書の末尾に付された「跋文山先生指南録」は、末尾に「萬曆癸丑(四十一年)菊秋朔旦金谿郷後學光禄唐晟頓首跋」と署名し、その下に陽刻正方「光禄之章」印が印刷してある。よって、序に見える刊行者「唐光禄君」とは、間違いなくこの金谿出身の唐晟なる人物のことである。また、封面に「金陵唐氏世徳堂梓」とあるからには、所見の二本がいずれも後印本で封面が後印の際に付け加えられたものだということがない限りは、刊行者(つまり光禄唐晟)は金陵唐氏世徳堂の主人ということになるう。

もう一つ、『新刻沈漢陽先生随寓詩經答』七卷(中国国家図書館蔵)

は、各巻巻頭第四・五行の中間に「同社」と記し、その下に第二・七行に「己未會魁 漢陽 沈翹楚 著／甲辰會狀 琨阜 楊守勤 叅／經筵講官 袁雷 韓孫愛 訂／青瑣諫臣 益城 姚宗文 閱／己未進士 槐眉 袁弘勲 校／金陵光禄 玉予 唐 晟 梓」と見える。末尾に「皆萬曆己未(四十七年)冬之吉古臨年弟陳鍾盛稚徳父書于金陵世徳堂」と署名する「沈會魁詩經答題詞」には、「金陵光禄唐君業青細(金陵光禄唐君は家伝の学を修め)」や「唐君予弱息外舅翁也(唐君は私の娘の舅である)」等の句が見え、姻戚の唐君から自分と同年の進士である沈翹楚の著作への序を請われて引き受けた経緯を記している。これを前述の『宋丞相文文山先生指南摘録』と併せて考えれば、金陵光禄唐君＝金陵光禄玉予唐晟＝金陵世徳堂主人と見てよかるう<sup>12</sup>。各巻巻頭に見える「漢陽」は沈翹楚の号、「琨阜」は楊守勤の号、「益城」は姚宗文の号として知られるので、それらと並列される「玉予」も唐晟の号である可能性が高かるう。一方、「金陵光禄」の方は、「己未會魁」「甲辰會狀」「己未進士」といった科挙の実績や、「經筵講官」や「青瑣諫臣」(給事中の異称)という官職名と並んでいるから、この四文字で南京光禄寺を指しているように見える。唐晟以外の五人は、実際に科挙でその成績を挙げたことや<sup>13</sup>、その身分に就いていたことが確認出来るので<sup>14</sup>、素直に取

るならば唐晟も南京光禄寺の何らかの官にあったと見ることが出来るよう。

しかし、胡令毅注7論文によると、明代に光禄寺卿（従三品）と光禄寺少卿（正五品）のどちらかに任官した唐姓の人物は唐鶴徴ただ一人であるという。そして、胡氏は「這樣的簡称、通常只是用於卿和少卿」（六四頁）と述べて、陳元之の「刊西遊記序」に見える「唐光禄」は唐鶴徴に違いないと主張している。

だが、より官品の低い光禄寺の小官であっても、「姓＋光禄」で呼ばれる事例は確認されている。例えば、陳書録・紀玲妹両氏の考証によると、唐順之（他ならぬ唐鶴徴の父である）「任光禄竹溪記」に見える「余舅光禄任君」なる人物は、嘉靖十三年から十五年にかけて光禄寺署丞（従七品）を務めた任卿（字世臣、号竹溪）である<sup>15</sup>。

更に、周日校万巻楼の一族で金陵に住み万暦一桁の時期に数点の書物を刊行した周庭槐は、「子を以て貴」の封贈の制で鴻臚寺序班（従九品）を贈られたことによつて<sup>16</sup>、姜宸英撰「（周亮工）墓碣銘」の中で「鴻臚」と呼ばれている。鴻臚寺は光禄寺と並ぶ九寺の一角を占める官署であるから、おそらく九寺の全てにおいて、その官署に属する官位を持つてさえいれば、たとえ官品最下位の従九品であったとしても、敬称としてその官署名で呼ばれることがあったのであろう。

ならば、唐晟も南京光禄寺の低位の官にあったために他人から「光禄」と呼ばれ、自分でも「光禄」を名乗ったり「光禄／之章」の公印を使ったりしていた、と考えるのが最も自然ではないだろうか<sup>17</sup>。

唐晟と世徳堂の繋がりには『新刻夷堅志』十巻の紅葉山文庫旧蔵本（国立公文書館内閣文庫現蔵）でも確認出来る。封面に「辛丑（万暦二十九年）冬月／夷堅志／唐氏世徳堂梓」と記し、巻一第二／五行が「宋鄱陽洪邁著／明姚江呂胤昌校／繡城唐晟訂／唐景次」、巻二以降は第二／四行が「宋鄱陽洪邁著 明姚江呂胤昌校／繡城唐晟訂（巻四と巻八では「繡谷唐晟詮」／唐景次）となっている。「梓」や「刊」等と明記されていないから、これだけで唐晟や唐景が刊行者（＝世徳堂主人）だと断言は出来ないが、前掲二例と併せて考えれば、まず唐晟が世徳堂主人として刊行したと見てよからう<sup>18</sup>。また、明らかな唐晟と唐景の共同刊本に『耳談類増』五十四巻（北平図書館旧蔵で台湾故宮博物院現蔵）がある。封面を欠き書坊の屋号が見える箇所は無いが、金陵で初めて刊行する旨を記した「萬曆癸卯（三十一）年上澣王同軌撰」の「耳譚類増自叙」があり、各巻巻頭第二／四行を「黃岡王同軌行甫著／滁陽夏守成克家校／繡谷唐景伯成梓」とする。ここに見える字からして、二人は唐晟が長男、唐景が三男の兄弟なのだろう。

では、この唐晟こそ世徳堂刊本章回小説各種の刊行者「唐光禄」

だと考えて良いのだろうか。事はそう単純ではない。「光祿」と呼ばれる唐姓の世徳堂関係者は、何ともう一人いるのだ。

『歷朝翰墨選注』十四卷（尊經閣文庫、台湾国家図書館、上海図書館蔵）は、三欄に区切った封面の左右に「新鐫歷朝／翰墨選註」、中央の細い欄に「萬曆丙申（二十四年）春月金陵唐氏世徳堂梓」とあり、各巻巻頭第二、四行に「古鄞 屠 隆 道民父 註集／南昌 涂 山 子壽父 叅閱／繡谷 唐廷仁 國壽父 校梓」とあるから、唐廷仁（字国寿）なる人物が刊行した金陵唐氏世徳堂刊本である。この唐廷仁という名は、注1拙稿で触れた万曆辛卯（十九年）刊『新編簪纓必用翰苑新書』前集十二巻後集七巻続集八巻別集二巻（北京大学図書館「二本」、国会図書館等蔵）の總目末に「金陵 書肆 龍泉 唐廷仁 鐫行」という形で見えていた。周日校の姓名の上に記されている「對峰」は彼の号なので（字は應賢。注1拙稿参照）、それと並んでいる「龍泉」も唐廷仁の号だと考えられる。それを踏まえて『歷朝翰墨選注』に戻ると、末尾に「皆萬曆丙申新春吉旦南昌後學涂山子壽甫書」とある「叙翰墨選註」が次のように結ばれている。

……昧子家貧、少藏書、耳目儉嗇。乃以光祿龍泉唐君之請、手是編而吟唔之。雖昔陳驚座之十吏通供、劉南昌之百函俱廢<sup>19</sup>、弗啻也。爰命墨卿、書以傳讐。（私は家が貧しく、藏書も乏しく、

見聞も狭い。ところが光祿龍泉唐君の依頼を受け、この書物『歷朝翰墨選注』を校閲することになってしまった。公務の傍ら名文の私信を次々口述して十人の部下に書き取らせた新の陳遵や、朝から昼までに百通の返信を書いて一つの反故も出さなかった劉宋の劉穆之でさえ、これには舌を巻くであろう。今ここに刊行の運びとなったが、皆様のご笑覧に供するまでである。）

この「光祿龍泉唐君」は、先の「金陵光祿玉予唐晟」が「官名＋号＋姓＋名」であつたのと同じ要領で、「官名＋号＋姓＋敬称」だと思われる。となれば、これはまず確実にこの本の刊行者である唐廷仁（字国寿、号龍泉）のことであろう。

## 二、金陵唐氏世徳堂の主人をめぐる

### （1）先行研究

では、唐晟と唐廷仁とはどのような関係なのだろうか。それを確かめるために、まずは世徳堂主人について先行研究でどのようなことが言われて来たかを概観してみよう。

#### イ．唐繡谷説

長澤規矩也「明代戯曲刊行者表初稿」『書誌学』第七巻第一号、一九三六）は、世徳堂主人を「唐氏（繡谷） 金陵」とする。この表の体例から見て「繡谷」を地名ではなく名か号だと判断している



ようだが、前述の通り「繡谷」は江西金谿を指す地名で主人の籍貫であり、世徳堂に限らず金陵周氏万卷楼、金陵唐氏富春堂、金陵唐氏広慶堂、金陵周氏大業堂等の刊行物にも「繡谷×氏○○堂」という表記が非常に良く見られる。また、現在までに筆者の管見に及んだ百種以上の繡谷唐氏の刊行物の中に、姓を先にして「唐繡谷」と表記する例が一切確認出来ないという点からも、「繡谷」が名か号だとの説は否定出来る。

#### ロ・江湖散人繡谷陽川唐子説

田中謙二「解説」『京都大学漢籍善本叢書』第十四卷『荊釵記』所収、同朋社、一九八一）は、万曆十三年世徳堂刊『新刊重訂出相附釋標註節義荊釵記』四卷<sup>20</sup>の巻一卷頭第二～五行に「江湖散人陽川子釋／徽郡星源游子重訂／金陵書林世徳堂梓／鳳城思德李氏校書」とあり、卷二～四では第二行が「繡谷陽川唐子釋義」、第四行が「金陵世徳堂唐氏梓」にそれぞれ変わるのを根拠に、「世徳堂は明・万曆年間に唐氏（繡谷・江湖散人）が営んだ金陵の書肆」とする（二三頁）。おそらく世徳堂主人＝唐繡谷説を前提とした上での判断だろうが、「繡谷」が籍貫だと判明した以上、唐陽川はあくまでも「釋義」担当として「梓」担当の世徳堂唐氏とは別に記されているに過ぎないことになる。世徳堂主人と同一人物である可能性も排除は出来ないが、現状ではこの例だけでそう判断するのは早計に過ぎよう。

#### ハ・唐繡谷と唐晟説

張秀民著・韓琦増訂『挿図珍藏増訂版中国印刷史』（浙江古籍出版社、二〇〇六。張秀民著の初版は上海人民出版社、一九八九）二四四頁で明代の南京の書坊を列挙する中に「金陵唐繡谷世徳堂」と「金陵唐晟 亦称世徳堂」が見えるが、そのように記述した根拠が何かは明示されていない。ここには他に「金陵書肆唐廷仁」と「金陵唐龍泉」も見えるが、世徳堂とは結び付けておらず、「龍泉」が唐廷仁の号であることに触れずに両者を別人扱いしている。

#### ニ・唐富春説

杜信孚『明代版刻綜録』（江蘇広陵古籍刻印社、一九八三）は、「世徳堂」の項目に「明萬曆金陵唐富春世徳堂刊」と注記する版本四種、「明萬曆金陵唐富春世徳堂刊」と注記する版本十種、「明萬曆金陵書林唐氏富春堂刊」と注記する版本二種の計十六種を著録する。同書の増補版的な性格の杜信孚・杜同書『全明分省分県刻書考』（線装書局、二〇〇一）は「世徳堂 唐富春」という項目を立て、「金陵三山街書林唐富春世徳堂刊本」と注記する版本五種と「金陵三山街書林唐氏世徳堂刊本」と注記する版本十七種の計二十二種を著録する<sup>21</sup>。しかし、両書の注記は原本の通りを記したのではなく杜氏の整理を経ており、その過程での誤りや勇み足も散見され、甚だしくは両書で記載が異なる上にどちらも誤っている例まで複数あるので<sup>22</sup>、

非常に有用な工具書ではあるものの、利用の際はそのまま鵜呑みにはせず、原本の実態を確認する必要がある。筆者は現在までに両書の世徳堂の項に著録される版本は二種<sup>23</sup>を除いて原本・マイクロフィルム・デジタル画像・影印本のいずれかで全葉を確認したが、実際に世徳堂の名と唐富春の名や号が両方とも見える版本はただの一つも無く、富春堂主人唐富春（号対溪、字子和、後述）を世徳堂主人でもあると判断すべき根拠は全く見出せなかった。なお、両書とも唐廷仁（「字龍泉」とする）と唐晟にはそれぞれ別に項目を立て、世徳堂とは無関係扱いにしている。『全明分省分県刻書考』は更に唐晟と別に「唐玉子」の項目も立てるが、著録の版本を確かめると、明らかに「唐玉子」の誤りであった。

#### ホ・唐晟と唐景説

瞿冕良『中国古籍版刻辞典（増訂本）』（蘇州大学出版社、二〇〇九）。初版は齊魯書社、一九九九）が、「世徳堂②」の項目で「明万曆間金陵人唐晟字伯成、唐景字叔永的書坊名」とするが（一三四頁）、判断の根拠は示されていない。唐廷仁には別に項目を立てて「明万曆間金陵人、字龍泉、業書坊」とするが（七三八頁）、世徳堂との関係には触れていない。

#### ヘ・唐晟Ⅱ世徳堂主人、唐景Ⅱ富春堂主人説

邱禹・徐飛責任編輯『江蘇芸文志・南京卷』（江蘇人民出版社、一

九九三）は、唐廷仁は単に「字龍泉。明金陵人。万曆間刻書家。一作『繡谷龍泉唐廷仁』」（三二一頁）、唐晟を「字伯成。明金陵人。嘉靖、万曆間刻書家、書坊名『金陵書林唐氏世徳堂』、亦作『金陵唐繡谷世徳堂』。所刻書以小説、戯曲爲主」（三二三頁）とした上で、唐景を富春堂主人唐対溪と同一視して「字叔永、一字子和、号対溪。明金陵人。嘉靖万曆間金陵刻書家、書坊名『富春堂』、……明代南京書坊唐姓甚多、対溪『富春堂』是其最著者」とする（三四二頁）。しかし、同書も杜信孚氏の二書と同様の問題を抱えており、このまま鵜呑みには出来ない。

#### ト・唐世徳説

馬華祥『明代弋陽腔伝奇考』（中国社会科学出版社、二〇〇九）では、「世徳堂本只署堂名、不署堂主名字、原因可能有二……一是名字已在堂名中、就叫『世徳』。如富春堂本、堂名也是人名。二是世徳堂名声顯赫、天下尽知、就是不署名也無人不曉。世徳堂主哪裏知道時過竟遷、當時人都已作古、後人如何得識？書能存世、堂名也能靠書流伝。書商好利也好名、因而筆者推斷為第一種可能性較大」（一四九頁）との見解が示されている。馬氏は世徳堂刊本のうち、四種の戯曲刊本だけしか考察の対象とせず、この推論を提示している。しかし、前節で縷々紹介した通り、戯曲や小説以外のジャンルの世徳堂刊本には主人の名が明記されていることが少なくない。その中に主人の

名を「唐世徳」とするものは見つからないので、馬氏の推論はどちらも成立しないと断じて良からう。

## (2) 金陵世徳堂主人の名が見える版本

この問題に言及する論文は数多いが、概ね右のいずれかを前提としている。特に杜信孚氏の二書は影響力が強く、例えば磯部注<sup>3</sup>書三九七頁は『明代版刻綜録』に基づいて「唐富春世徳堂」と記す版本が多数あることを前提に論を進めるが、前述の通りそのような版本の存在は確認出来ない。右の諸先行研究は口を除いてどの版本の如何なる記載によつてその人物を世徳堂主人と判断したかを明記していないし、唐廷仁を世徳堂主人として扱うものが見られないという問題もある<sup>2,4</sup>。そこで、筆者が現在把握している刊行者の名が分かる唐氏世徳堂刊本をその判断の根拠とともに全て列挙し、それを元に考え直してみよう。

### A・唐廷仁（字国寿、号龍泉）による世徳堂刊本（五種）

A-1. 『新刊訓解直音書言故事大全』六卷（万曆十三年春刊）  
中国国家図書館蔵。また、その同版本が東京古典会の平成二十七年古典籍展観大入札会に出品されていた。封面は三欄に分ち、左右に「重刻古本明解／音釋書言故事」、中央の細い欄に「萬曆十三年春月世徳堂龍泉校梓」とある。末尾に「萬曆乙酉（十三年）春王正月吉旦／（低六格）銀潢逸叟書于世徳堂」と署名する「重刻古本

大全書言故事引」に、旧版は版本の摩滅が進み誤字も少なくないため「光祿君」が手ずから校訂して明瞭な版を作つて序を求めて来たとの旨を記す<sup>2,5</sup>。巻一卷頭に編集・訓解・訂正・校釋の各担当者の名が挙がるが、そこに刊行者名は見えない。大尾に「萬曆乙酉歲／世徳堂校梓」の蓮牌木記あり。序の「光祿君」とは、封面に見える世徳堂龍泉、つまり唐廷仁のことであろう。

A-2. 『地理叅贊玄機僊婆集』十二卷（万曆二十二年夏後序刊）  
蓬左文庫、北京故宮博物院蔵。封面は上下二層で、細い上層には右から横書きで「世徳堂」、下層は更に三欄に区切つて左右に「刻地理全／書僊婆集」、中央の細い欄に「金陵唐龍泉氏校梓」。無記名の後序（「仙婆集序」）の末尾に「明萬曆甲午（二十二年）夏五月吉」とある<sup>2,6</sup>。

### A-3. 『翰林筆削字義韻律鰲頭海篇心鏡』二十卷（万曆二十二年冬刊）

蓬左文庫蔵。封面は三欄に分ち、左右に「翰林筆削字義韻／律鰲頭海篇心鏡」、中央の細い欄に「金陵三山唐龍泉氏校梓」。「字義膺攬心鏡叙」の末に「皆萬曆甲午（二十二年）仲冬月漢陽漢冲蕭良有撰」。巻一卷頭第二～五行に「翰林院編脩漢冲蕭良有著／上饒瀘東余應奎訂／東汝紹東王廷極校梓／繡谷龍泉唐廷仁校梓」。巻二十大尾に蓮牌木記「萬曆甲午歲孟春月／世徳堂唐龍泉綉梓」あり<sup>2,7</sup>。

A—4.『歷朝翰墨選注』十四卷（万曆二十四年春刊）

前述の通り。

A—5.『新鐫二太史彙選註釋老子評林』五卷首一卷（万曆二十四年冬刊）

四年冬刊）

蓬左文庫蔵。首巻は『新鐫二太史彙選註釋老子評林』、巻一〜五は『新鐫二太史彙選註釋莊子全書評林』。封面は欄を区切らず左右に「鐫註釋老子／南華賽副墨」、間に小字で「萬曆丙申（二十四年）冬月唐氏世德堂校梓」。「鐫老莊叙」末に「崑萬曆丙申冬月穀旦漪園焦竑書」。首巻巻頭第二〜四行に「翰林 漪園 焦 竑 註釋／翰林 青陽 翁正春 評林／繡谷 龍泉 唐廷仁 校梓」、巻一卷頭第二〜四行に「太史 漪園 焦 竑 註釋／太史 青陽 翁正春 評林／繡谷 龍泉 唐廷仁 校梓」<sup>28</sup>。

B. 唐晟（字伯成、号玉予）による世德堂刊本（四種、うち一種は唐景と共同刊行、別の一種は後に唐景に版木が移る）

B—1.『新刻夷堅志』十卷（万曆二十九年冬刊）

唐景の名も見える。前述の通り。

B—2.『新刊訓解直音書言故事大全』六卷（万曆三十四年冬刊、

A—1の覆刻本）

中国国家図書館蔵。封面はA—1と同じく三欄に分かつが、その字様はA—1とは異なる。封面左右に「重刻古本明解／音釋書言故

事」、中央の細い欄に「萬曆丙午（三十四）年冬月世德堂玉予校梓」とあり。A—1とほぼ同文の「重刻古本大全書言故事引」があるが、その末尾の署名は「萬曆丙午仲冬吉旦／（低六格）銀潢逸叟書于世德堂」と年次を書き換えている。注25に原文を引いたくだりはほぼそのままだが、「光祿君」が「唐伯子」に変更されている<sup>29</sup>。巻一卷頭第二〜三行が「宋 廬陵 胡繼宗 編集 安成 陳玩直 訓解／明 金邑 李 寅 訂正 繡谷 唐 晟 校梓」となっている、A—1とは異なり巻一卷頭に刊行者名が見える。大尾には「萬曆丙午歲／世德堂校梓」の長方木記あり。「光祿君」から書き換えられた序の「唐伯子」とは、おそらく、この版本の「校梓」者であり、字が「伯成」の唐晟のことだろう。

B—2'.『新刊訓解直音書言故事大全』六卷（B—2の後印本<sup>30</sup>）

哈佛燕京図書館蔵。原本未見だが、沈津主編『美国哈佛大学哈佛燕京図書館蔵中文善本書志』（広西師範大学出版社、二〇一一）に掲載されている封面と巻一卷頭の書影を見る限り、いずれもB—2と同版の後刷りである。但し、封面の「萬曆丙午年冬月世德堂玉予校梓」のうち「玉」だけが「貞」に、巻頭の「繡谷 唐 晟 校梓」のうち「晟」だけが「景」に、それぞれ埋木改刻されている。してみれば、この版木を作成して最初に印行したのは唐晟であったが、後に版木の所有者が弟の唐景に代わり、それに伴って封面と巻頭の

刊行者名が改刻されたのであろう。封面で唐晟の号「玉予」に取って代わった「貞予」は、巻頭で唐晟に取って代わった唐景の号だと見て差し支えあるまい。『美国哈佛大学哈佛燕京圖書館藏中文善本書志』の解題（一二二四頁）の著録によると、「重刻古本大全書言故事」の署名や年次、その中の「唐伯子」に関する記載、及び大尾の長方木記は、いずれもB—2から変わっていないようである。

B—3. 『宋丞相文文山先生指南摘録』四卷後録四卷（万曆四十年秋跋刊）

前述の通り。なお、この書名は封面題により、巻首題は単に『指南録』や『指南後録』等となっている。

B—4. 『新刻沈漢陽先生随寓詩経答』七卷（万曆四十七年冬序刊）

前述の通り。厳密には刊行元の書坊として世徳堂の名が見える訳ではないが、光禄玉予唐晟の姻戚が世徳堂で序文を撰しているのが、唐晟による世徳堂刊本の一例と看做しても大過ないだろう。

### C. 唐景（字叔永、号貞予）による世徳堂刊本（一種）

C—1. 『文選詩集旁註』七卷目一卷（万曆二十八年序刊。巻首題は『文選詩集』）

広島市立中央図書館浅野文庫等蔵。封面中央に大字で「選詩旁註」、左下に小字で「世徳堂貞予氏鼎鏤」。刊行者の名はここにしか見えな

い（各巻巻頭は第二行に「梁昭明太子蕭統選 明虎林虞九章訂註」とあるのみ）。「刻選詩旁註叙」末に「萬曆庚子「二十八年」仲秋錢唐馮緬釋陸父頓首撰」とあり。注28前掲『二經旁注評林』に版式が酷似している。

### （3）唐景について

三人の世徳堂主人が確認出来たが、まずはこのうち一人だけ「光禄」と呼ばれた形跡が見られない唐景（字叔永、号貞予）についてもう少し掘り下げてみよう。前述の通り、唐景は字の關係から唐晟の三弟であると思われる、B—1や『耳談類増』には唐晟と共同で関わっている。世徳堂の名は出さずに唐景が関わった刊本も見てみると、まず万曆庚子（二十八年）秋序刊『漢壽亭侯誌』八巻を「唐貞予氏」名義で刊行している<sup>31</sup>。また、万曆四十年頃の周氏大業堂刊本と言われる『重刻京本増評東漢十二帝通俗演義志傳』十巻（宮内庁書陵部蔵）も、末尾に「雲間眉公陳繼儒書於白石樵」とある「東漢演義志傳叙」に「唐貞予氏復梓而新之、且属不佞稍増評釋」と見えるため、唐貞予と各巻巻頭に名が見える周氏大業堂との共同刊行であった可能性が指摘されている<sup>32</sup>。更に、中国国家図書館が四本所蔵する天啓間刊本『新鐫五福萬壽丹書』六巻のうち一本が、同館OPACに「書林唐貞予周如泉」刻本と著録されている<sup>33</sup>。

同じ版木で刷られたB—2からB—2'の間で世徳堂主人の名が

玉予唐晟から貞予唐景に変更されているところを見ると、二人がいずれも活動していた時期には主として兄の唐晟が世徳堂主人を務めていて、弟の唐景はそれを補佐する役割だったのかもしれない。唐晟の名が見える刊本は世徳堂名義ではないものを含めてもB—4が最も遅いものなので、天啓年間にも活動していた形跡のある唐景は、兄の唐晟が先に没するか引退するかした後、世徳堂主人の座とその版木とを引き継いだのではないだろうか。

#### (4) 唐晟・唐景兄弟と唐廷仁の関係について

では、唐晟・唐景兄弟と唐廷仁はどのような関係なのだろうか。特に、共に「光祿」と呼ばれた唐晟と唐廷仁は、果たして同一人物なのか、はたまた別人であるのか。

筆者が現在把握している年代の分かる唐廷仁刊本（世徳堂の名が見えないものも含む）のうち、早期のものは嘉靖四十五年刊？『新刊精選陽明先生文粹』六卷<sup>34</sup>、隆慶四年刊『新刊子史羣書論策全備摘題雲龍便覽』四卷<sup>35</sup>、万暦元年刊『春秋集註』三十卷首一卷<sup>36</sup>など嘉隆の境から万暦初期の刊行であり、最も遅いものは前掲『歷朝翰墨選注』や前掲『新鐫二太史彙選註釋老莊評林』など万暦二十四年の三種である。対して、同条件の唐晟刊本は、前掲万暦二十九年刊『新刻夷堅志』が最も早く、前掲万暦四十七年序刊『新刻沈漢陽先生隨寓詩經答』が最も遅い。なお、唐景刊本も前述の通りで万暦

二十八年が初である。

してみると、唐廷仁と唐晟・唐景兄弟の活動年代は、唐廷仁が嘉靖末ないし隆慶年間から万暦二十四年頃までの約三十年間、唐晟・唐景兄弟が万暦二十八年頃から天啓年間頃までの二、三十年間と、綺麗に分かれることになる。そして、どちらの活動も確認出来ない万暦二十五年から二十七年の間には、主人の名を明記しない世徳堂刊本の存在も、はつきりとは確認出来ない<sup>37</sup>。

また、金陵唐氏世徳堂の名が見える刊本（主人の名が記されるか否かは問わない）は、管見の限り刊年が分かる最も早いものが万暦十三年の前掲二種（主人の名が見えない『新刊重訂出相附釋標註節義荊叙記』と龍泉〔唐廷仁〕によるA—1『新刊訓解直音書言故事大全』）であり<sup>38</sup>、同じく最も遅いものが万暦四十七年の前掲『新刻沈漢陽先生隨寓詩經答』である。つまり、管見に及んだ範囲では、世徳堂の活動期間は唐廷仁の活動期間と唐晟・唐景兄弟の活動期間とで完全に覆い尽くせる<sup>39</sup>。

となれば、金陵三山街の書坊唐氏世徳堂は、嘉靖末ないし隆慶年間に唐廷仁が創業し、万暦二十五年から二十七年までの間に唐晟・唐景兄弟へと代替わりしていて、天啓年間頃にこの兄弟が活動を終えるとともに出版業を離れたと見るのが自然であろう。どちらも「光祿」と呼ばれているからと言って、唐廷仁（号龍泉、字国寿）が万

曆二十五年から二十七年までの間に唐晟（号玉予、字伯成）に改名したと考えるのは難しい。何故なら、第一に活動が六十年近くにも及んでしまい現実的でない。第二に、金谿唐氏の書坊には「唐廷瑞」や「唐廷揚」という者もあり、後者は崇禎年間にもその名前のまま活動している<sup>40</sup>。もし「唐廷仁」とその三弟とが万曆二十年代後半に揃って「唐晟」と「唐景」に改名したのであれば、同排行の「唐廷揚」も同時に日冠の一字名に改名したはずではないだろうか。そうはなっていないということは、この時期の金谿唐氏には、「廷」字を共有する二字名の世代と、日冠を共有する一字名の世代とが、初めから別々に存在したと考えるべきだろう。

よって、唐廷仁と唐晟とは、世代の異なる別人であることはまず間違いない。別人となれば、活動時期によって唐廷仁の方が数十歳年上だと推定することも許されよう。想像を逞しくすれば、唐廷仁は唐晟の父だったのではあるまいか。仮にそうではなかったとしても、唐廷仁の跡目を唐晟が継いでいる以上、決して遠縁ではなく、伯父や叔父などごく近い親戚だった可能性が極めて高かるう。

問題の「（金陵）光祿」については、世徳堂主人の異称として唐廷仁から唐晟へと世襲されたもののようにも思われ、本章の初出時にはその可能性も含めて疑義を存しておいた。しかし、前述の通り、唐廷仁が万曆十三年に刊行したA—1<sup>41</sup>から、万曆三十四年に唐晟

がそれを覆刻したB—2へと使いまわされた「重刻古本大全書言故事引」は、A—1では「光祿君」が刊行するとしていたくだりを、B—2では「唐伯子」が刊行すると改めている。もし唐晟が「光祿」の異称を唐廷仁から直接世襲していたのであれば、わざわざ「光祿君」を「唐伯子」に改める必要はなかっただろう。してみれば、唐晟は万曆三十四年から万曆四十一年（B—3の跋の年次）の間に南京光祿寺の何らかの官職を得て、その時点で初めて「光祿」と呼ばれることが可能になったのではあるまいか。そして、唐廷仁も万曆十三年より前に南京光祿寺の何らかの官職を得ていたであろう。

二代続けて同じ官署に官職を得るとするのは一見すると奇異に思えるが、前述の「任光祿」こと任卿は、弟の任道も光祿寺丞に就いていたという<sup>42</sup>。現に兄弟で光祿寺の官職に就いた事例が確認出来る以上、世徳堂主人の唐廷仁と唐晟が二代続けて光祿寺の官を得ていたとしても特別不思議ではあるまい。注17に引いた通り光祿寺の微官は金で手に入れやすいものだったので、或いは唐晟は意図的に先代と同じ官を求めたのかもしれない。

#### （5）富春堂との関係

ところで、右の推定が確かなら、唐景と富春堂主人唐対溪を同一人物とする説は成り立たなくなる。何故なら、唐対溪は早くは隆慶六年冬に『春秋集註』三十卷（尊經閣文庫蔵『片璧六經集注』の一）

を刊行し<sup>43</sup>、遅くは万曆三十二年に『新編古今事文類聚』前集六十卷後集五十卷統集二十八卷別集三十二卷新集三十六卷外集十五卷遺集十五卷目七卷（所在不明<sup>44</sup>）を重刻しており<sup>45</sup>、唐廷仁と同年配だと思われるからである。唐対溪が富春堂主人なのは『新刻出像音註增補劉智遠白兔記』二卷（中国国家図書館等蔵）が上巻巻頭第三行に「金陵 對溪 唐富春梓」、下巻巻頭第二行に「金陵 書坊 唐對溪梓」と記し、大尾に「金陵三山街唐／氏富春堂梓行」の蓮牌木記を持つことで確認出来る。よって富春堂は、世徳堂主人と同族の別人が営む書坊と見るべきだろう。封面中央に「金陵富春堂校」と見える刊年不詳の『新鐫出像評註百奇故事』四卷（尊經閣文庫蔵）の各巻巻頭第二～三行に「豫章後學從九梅應龍伯子父纂輯／金陵書坊對溪唐富春子和父校梓」とあるので、富春堂主人は対溪が号、富春が名、子和が字であろう。

#### （6）唐陽川について

前掲『新刊重訂出相附釋標註節義荊釵記』の「釋義」者で田中謙二氏が世徳堂主人と看做した江湖散人唐陽川は、管見の限り他の刊本には全く名が見えず、判断が難しい。だが、同じく世徳堂刊の小説・戯曲を「評釋」や「註釋」した尺蠖齋陳元之は、姓や籍貫からして世徳堂主人とは別人と考えられる。また、万曆二十七年序の『新刻顧會元註釋古今捷學舉業天衢』十卷（中国国家図書館蔵）は、「舉

業天衢凡例」末尾に「金谿周文翀謹識」、各巻巻頭第二～五行に「建業 顧起元 太初 彙纂／建業 陸翀之 希有 刪定／繡谷 周文翀 儀廷 編次／繡谷 周日校 應賢 刊行」（建業）は「呉郡」、「繡谷」は「金谿」とする巻も）とある。ここでも凡例を書き「編次」を担当した周文翀は、刊行者である万巻楼主人周日校とは同族ながら別人のようだ。これらの例からして、唐陽川も刊行者世徳堂主人（時期からして唐廷仁）とは同族の別人ではなからうか。

#### 小結

ここで最初の疑問に戻ろう。世徳堂刊本『西遊記』『南北両宋志伝題評』『唐書志伝題評』これらの序に見える刊行者（唐）光禄とは何者か。『西遊記』は壬辰、他二種は癸巳の序であった。右で得た金陵唐氏世徳堂の活動年代に照らせば、通説の通りそれぞれ万曆二十年と二十一年以外には考えられない。その時期に世徳堂の主人であったのは唐廷仁（字国寿、号龍泉）で、彼は万曆十三年の『新刊訓解直音書言故事大全』の序では「光禄君」、万曆二十四年の『歷朝翰墨選注』の序では「光禄龍泉唐君」と呼ばれているから、万曆二十～二十一年には「唐光禄」と呼ばれる資格を持っていた。となれば、これら三種の刊行者（唐）光禄とは、唐廷仁に他なるまい。解釈の割れている陳元之「刊西遊記序」は、この事実を念頭に再検



討することが望まれよう。

なお、この唐廷仁が周曰校と共同刊行した版本を三種把握している。一つは前掲『新編簪纓必用翰苑新書』で、万暦十九年の刊。もう一つは目録末に「萬曆丙戌〔十四年〕金陵／唐氏周氏刊行」の裸木記を持ち、「萬曆戊子歲（十六年）夏月穀旦西吳潯陽董份撰」の「史漢合編序」に「編既竣、金陵龍泉唐君、對峯周君遂梓以惠天下」とある『史漢合編題評』八十八卷附四卷（尊經閣文庫、上海圖書館等蔵）。最後の一つは『鐫國朝名公翰藻超奇』十四卷（北京大学圖書館、東京大学東洋文化研究所「存卷一至六」等蔵）で、卷一―七の卷頭第二―三行に「姑孰 野史徐宗夔 批選／繡谷 後學唐廷仁 校梓」とあり、卷八以降は更に第四行に「金陵 對峰周曰校 刊行」が加わる（「刊行」は卷七までの「校梓」に代わって第三・四行の間に共有で記される）。刊年不詳だが、凡例に「是集出自吳中凌氏家刻也」とあって万暦十年凌迪知刊本（内閣文庫等蔵）の重刊本と知れるから上限は万暦十年、前述の万暦二十四年唐廷仁世徳堂刊本『歷朝翰墨選注』の凡例に「本坊先刻名公翰藻」と見えるから下限は万暦二十四年である。これらの例から、同郷の唐廷仁と周曰校の間には、しばしば共同刊行を行う密接な提携があったことが窺える。常に唐廷仁の名が先に記されているが、彼の方が年長だったのだろうか。してみれば、世徳堂と万巻楼が共に万暦二十年前後に上元王氏画

の双面連式挿画を配した章回小説刊本を重複することなく次々と刊行したのは、それが唐廷仁と周曰校の従前からの協力関係に基づく共同企画だったからなのではあるまいか。少なくとも『西遊記』と『三国演義』を除く建陽の熊大木原作と見られる講史小説各種<sup>46</sup>については、両者がたまたま同時期に建陽からバラバラに原作を手に入れて重刊したと考えるよりも、連携があったと考える方がずっと自然であろう。前述のように貞予唐景も周氏大業堂と共同で章回小説を刊行していたらしいから、唐廷仁と周曰校の提携は次代にも引き継がれていたようだ。『唐書志伝題評』や『東西両晋志伝題評』の版本が周氏大業堂の手に移ったのも、こうした長年の縁によるものだったのではなからうか（これは或いは世徳堂の廃業時の出来事だったかもしれない）。

#### （補説）榮寿堂について

本章では挙がらなかった名だが、ここで第二章で問題となった金陵榮寿堂について考えてみたい。世徳堂刊本及び熊雲瀆覆世徳堂刊本『西遊記』の一部の卷頭には、大半を占める「金陵世徳堂梓行」ではなく、「金陵榮（榮）壽堂梓行」と見える。この版本における榮寿堂の役割は、世徳堂の共同刊行者であつたろうというのが主流の見方で、その場合は世徳堂と同族の唐氏だったのではないかの推測

もされているが、その根拠は得られておらず<sup>4</sup>、第二章で見た通り、世徳堂から榮寿堂に版木が移ったとか、その逆だとかする説もある。榮寿堂なる書坊が刊行に関わった版本は、先行研究と同様に筆者も見つけることが出来ていない<sup>48</sup>。

しかし、唐廷仁の字が「國壽」であることと、唐富春が自分の名を冠した「富春堂」という書坊名を用いていることを考え併せると、もしかすると「榮壽」は唐廷仁の同族同世代の人物の字で、その人物が「榮壽堂」という書坊名を使って、唐廷仁と共同で『西遊記』を刊行したのかもしれない<sup>49</sup>。

なお、同族同世代の書坊経営者同士による共同刊行で、かつ巻ごとに巻頭に掲げる刊行者の名が異なるという事例は、周氏万巻楼において複数見ることが出来る<sup>50</sup>。その上、その中には浅野世本のように刊行者名の欄が空白となっている巻を含むものもある<sup>51</sup>。従って、榮寿堂は、唐氏かどうかまでは確証が無いにせよ、世徳堂の共同刊行者であつたという点までは間違いないと見て良からう<sup>52</sup>。

<sup>1</sup> 拙稿「唐氏世徳堂と周曰校万巻楼仁寿堂の章回小説刊本の覆刻及び後印の事例について」(『中国古典小説研究』第十六号、二〇一一)。

<sup>2</sup> 同じく華陽洞天主人校本に属する『唐僧西遊記』と楊閩齋刊本とは、第二章で見た通り、共に熊雲瀆覆世徳堂刊本ではなく世徳

堂初刻本を底本としていた可能性が高いが、いずれも熊雲瀆覆世徳堂刊本とほぼ同文の序を持っている。本章の論旨に関わる箇所では、『唐僧西遊記』は後述の「唐光祿」を「余友人」に作るが、楊閩齋刊本では熊雲瀆覆世徳堂刊本と同じ「唐光祿」である。一方、楊閩齋刊本は署名の年次を「癸卯」とするが、『唐僧西遊記』は熊雲瀆覆世徳堂刊本と同じ「壬辰」である。してみると、世徳堂初刻本はどちらも熊雲瀆覆世徳堂刊本と同じ形であり、「余友人」は『唐僧西遊記』が、「癸卯」は楊閩齋刊本がそれぞれ独自に改めたものと考えるのが最も自然であろう。

<sup>3</sup> 太田辰夫『西遊記の研究』(研文出版、一九八四)二三九頁、磯部彰『西遊記』形成史の研究』(創文社、一九九三)三八八頁、氏岡真士「南宋王の神話」(信州大学『人文科学論集文化コミュニケーション』第三十四号、二〇〇〇)二二四―五頁等参照。太田氏と磯部氏は原文と要約を示すのみだが、氏岡氏は波線部の前半について「好事の者を益俾せんとして之が為に訂校し」という訓読を示した上で、「俾は裨に通じ使役ではない。世徳堂本『南宋志伝』の序が出版事情を記した後、以て好事の者の為に譚を佐く」と結ぶのも参照」と注を付している。

<sup>4</sup> 先行研究は枚挙に暇が無いが、例えば陳澈『西遊記』校者「華陽洞天主人」新考』(『明清小説研究』一九八五年第二期)、吳聖昔「陳元之不可能是『西遊記』作者——評『百回本(西遊記)作者臆断』」(『蘇州大学学报哲学社会科学版』一九九一年第三期)等。陳氏は明清の通俗小説の序跋では「好事者」は必ずしも常に読者を指して用いられるとは限らず、明らかに作者を指している用例も複数あることを指摘している(陳氏論文一一九頁)。

<sup>5</sup> 吳聖昔「世本陳《序》的信息价值和疑岐透視」(『明清小説研究』一九九五年第三期)がそれまでの諸説を整理しており参考になるが、その後も様々な説が出されている。

<sup>6</sup> 孫楷第『日本東京及大連図書館所見中国小説書目提要』(国立北

平図書館、一九三一）一四三頁に「據此則序爲唐氏世德堂主人作、世德堂本乃此華陽洞天主人校本元本也」とあるのが管見の限り最も早い指摘である。

<sup>7</sup> 胡令毅「論《西遊記》校改者唐鶴徵——讀陳元之序（一）」『昆明学院學報』第三二卷第一期、二〇一〇。陳元之序の波線部は「唐光祿順從好事者（建議）、爲之訂校」と現代語訳している。

<sup>8</sup> ここでは今日の用語で言うところの「通俗小説」ないしは「講史小説」の意で「伝志」という語が使われている。

<sup>9</sup> 「姑孰」（安徽太平府当塗県の異称）と「秣陵」（南京の古称）の相違については、後述する世德堂の「繡谷」と「金陵」の場合と同様に、前者が籍貫で後者が現住所なのだろう。

<sup>10</sup> 磯部彰『『西遊記』資料の研究』（東北大学出版会、二〇〇七）二〇九頁。

<sup>11</sup> 蘇子裕「明代戯曲出版物之最——江西人編選、出版的劇本」、江西省文芸学会二〇〇三年年會論文集、博政・文革紅「試析明清時期江西金溪部分儒生向刻書業的身份類型」『南昌航空大学学报社会科学版』第一一卷第三期、二〇〇九、文革紅「江西小説刊刻地——“雲林”考」、『明清小説研究』二〇一〇年第一期等参照。

<sup>12</sup> 序末の「昔萬曆己未冬之吉古臨年弟陳鍾盛稚德父書于金陵世德堂」という署名に関しては、陳鍾盛が世德堂の主人だという意味ではなく、世德堂の建物でこの序を書いたという意味に取れば良い。万巻楼や三台館など同時期の他の書坊でも、主人とは明らかに別の人物がこのような形で序跋に署名する例は間々見られ、さほど珍しい例ではない。例えば、本論第五章と第七章で取り上げる金陵万巻楼周如泉崇禎元年序刊本『圖像本草蒙筌』の序は、建陽劉氏喬山堂主人の息子である劉孔敦が、金陵の周氏万巻楼において撰している。

<sup>13</sup> 沈翹楚は万曆己未（四十七年）の進士第二甲第六十名で、その年の会元（会魁）であったことは先に引いた「沈會魁詩經答題詞」

に見えている。楊守勤は万曆甲辰（三十二年）の状元で、会元でもあったことは文淵閣四庫全書本『浙江通志』卷百四十に「慈谿人、甲辰會狀」と見える。袁弘勳は万曆己未（四十七年）の進士第三甲第六十二名。

<sup>14</sup> 韓孫愛は万曆辛丑（二十九年）の進士第二甲第二十一名で、沈德符『万曆野獲編』卷四「藩國随封官」に「先朝親王出閣、例選翰林二人侍講讀……至萬曆壬寅（三十年）、福王講讀、用韓孫愛、陳翔龍拜檢討」と見える。姚宗文は万曆丁未（三十五年）の進士第二甲第三十九名で、『明史』卷八十九に「（万曆）四十二年、給事中姚宗文點閱本營……」とある。

<sup>15</sup> 陳書錄・紀玲妹「唐順之《任光祿竹溪記》所記主人与創作時間考」『江海學刊』二〇一二年第二期。

<sup>16</sup> 周在浚撰「（周亮工）行述」、黃虞稷撰「（周亮工）行狀」、姜宸英撰「（周亮工）墓碣銘」（いずれも周亮工『賴古堂集』附録に収める）に見える。朱天曙編校『周亮工全集』（鳳凰出版社、二〇〇八）の「前言」参照。これについては第五章第三節でも述べる。

<sup>17</sup> 伍躍「中国の捐納制度と社会」（京都大学学術出版会、二〇一一）六一頁に『明史』の記載によれば、捐納出身の国子監生は、ただ州県の佐雜官や府の首領官、中央官庁の光祿寺や上林苑、あるいは衛所や王府の儒学の教職など、要するに低いポストに登用されるほかなかったことが分かる」との指摘があるから、唐晟は捐納等の手段によって監生の資格を得た上で南京光祿寺の從九品や未流入の微官を手にしていたのかもしれない。とはいえ、第五章で見る周氏大業堂は、主人の如山周文煒が南京国子監生から諸暨県の主簿に任官した経験を持ち、その長子で大業堂を継いだ周亮工に至っては進士に及第して戸部總督錢法右侍郎（正三品）まで昇進しているから、唐晟が正規のルートで任官していたとしても不思議はないだろう。

<sup>18</sup> 同版の高野山釈門院旧藏本（国立公文書館内閣文庫現蔵）、中国

国家図書館蔵本、北平図書館旧蔵本（台湾故宮博物院現蔵）も調べたが、これらはいずれも封面を欠く。なお、王重民『中国善本書提要』（上海古籍出版社、一九八三）が北平図書館旧蔵本の項に「晟・景則富春堂主人也」と記すが（二九五頁）、どの伝本でも封面以外に書坊名は見えず、他の唐晟・唐景刊本に富春堂の名が見える例も全く確認出来ない（後述）、王氏の言の根拠は不明である。おそらく、単に同族の世徳堂と富春堂とを混同しての誤記ではあるまいか。

<sup>19</sup> 底本通りに翻字したが、この故事の出典である『宋書』卷四十二「劉穆之伝」の記述は「嘗於高祖坐與齡石答書。自旦至日中、穆之得百函、齡石得八十函、而穆之應對無廢也」なので、「俱廢」では意味が逆になってしまう。これは直接には王世貞「尺牘清裁序」（『弇州四部考』卷六十四）の「陳驚座之十吏通供、劉南昌之百函俱發、流映前史、以為美談」を踏まえた表現だと思われるので、訳においては「俱發」で意味を取った。

<sup>20</sup> 光慶図書館旧蔵の原本は焼失し、それに基づく京都大学文学部蔵の影抄本で伝わる。封面左右に「鏤重訂出像註／釋荊叙記題評」、その中間に小字で「萬曆乙酉（十三年）冬月世徳堂校梓」とある。

<sup>21</sup> なお、「両書とも別に「富春堂」または「富春堂 唐富春」の項目も立てている。

<sup>22</sup> 例えば、『新刻出像官板大字西遊記』二十卷百回について、『明代版刻綜録』は「明萬曆二十年唐氏富春堂刊」と刊行者を誤っており、『全明分省分県刻書考』では「明萬曆二十二年江蘇省金陵三山街書林唐富春世徳堂刊本」となって更に刊年までをも誤っている。第二章で詳述した二版計四点以外に同名書の現存は確認されない。第二章で、どちらの記述も明らかに誤りである。

<sup>23</sup> 『新刊重訂出相附釋標注香囊記』と『新鏤出像注釋李十郎霍小玉紫簫記』いずれも『全明分省分県刻書考』が「唐富春世徳堂」ではなく「唐氏世徳堂」と注記しているもの。

<sup>24</sup> 但し、『中国古籍善本書目』（上海古籍出版社、一九八五／八九）や『中国古籍善本總目』（線裝書局、二〇〇五）は、共に幾つかの版本を「唐廷仁世徳堂刻本」と著録している。

<sup>25</sup> 原文「惜其版籍模滅、而字畫多魚豕之嫌。光祿君于琴牘之暇、手是編而考訂之、較之舊刻、尤瞭然著且明矣。一日劄氏告成、索余言爲之引」。

<sup>26</sup> 同名同卷数の崇正堂刊本（哈佛燕京圖書館蔵）がほぼ同文の序を前に配し、末尾を「明萬曆丁亥（十五年）夏五月初九日前翰林院編修橋李馮夢禎序」とする。崇正堂刊本には同年の序が他にも三つあるが、世徳堂刊本はそれらを収録しなかったり、年を省いて署名を変えたりしているので、世徳堂刊本は重刊本だと考えられる（但し、崇正堂本が直接の底本とは限らない）。また、封面左欄に「學古堂梓」と見える同名の十三卷本もあり（台湾大学圖書館蔵）、序文は崇正堂刊本にもある万曆丁亥の呂本のもののみを収める。その序の末尾に「閩書林 雲濱 熊体忠 重刻行」という刊記が見えるので、例の熊雲濱による翻刻本の版木を、学古堂なる書坊（詳細不詳）が手に入れての後印本と思しい。世徳堂と雲濱熊体忠が同名書を刊行しているという点は『新刻出像官板大字西遊記』と同じだが、こちらの熊体忠重刊本には崇正堂刊本と一致して世徳堂刊本とは異なる要素が多々見出せるので（例えば、崇正堂刊本と熊体忠刊本はいずれも巻一第一葉のみ他より一行多い半葉十一行二十二字になっているが、世徳堂刊本は明らかな脱文と引き換えに巻一第一葉も十行二十二字としている）、『新刻出像官板大字西遊記』の場合とは異なり、熊体忠重刊本は世徳堂刊本を底本としたものではなく、両者が別々に崇正堂刊本（またはその系統に属する版本）を重刊したということのようである。

<sup>27</sup> 尊経閣文庫に序のみがこれと同版で、他はそっくりながら異版の伝本がある（封面欠）。大岩本幸次「明代海篇類字書知見録」（『東北大中国語学文学論集』第九号、二〇〇四）は蓬左蔵本の方が

尊經閣藏本を修訂した覆刻本だと看做すが、尊經閣藏本には覆刻の過程で生じたとしか考えられない誤字や（例えば卷十二第一葉表上段二行目の陰刻見出し「韻律平聲」の「律」を尊經閣藏本のみ獸偏に誤る）、蓬左藏本の文字が尊經閣藏本では墨格となっている箇所が相当数ある。従って、覆刻本は尊經閣藏本の方である可能性の方が高いのではないだろうか。しかし、唯一同版である序はむしろ尊經閣藏本の方が僅かながら印刷が早いようにも見えるので、より慎重な検討が必要かもしれない。

<sup>28</sup> 『老子』『莊子』の各巻首題が一致する万曆二十二年書林唐聖澤刻本（未見、『中国古籍善本總目』による）の重刊本であろうか？なお、世徳堂はこれとは別に、同じく老莊合本だが注の異なる『二經旁注評林』（北京故宮博物院蔵、『莊子』序の年次が万曆甲午（十二年））も刊行している。

<sup>29</sup> 原文「惜其版籍縻滅、而字畫多魚豕之嫌。唐伯子於琴牘之暇、手是編而考訂之、較之舊刻、尤瞭然著且明矣。一日劄氏告成、索余言爲之引」。

<sup>30</sup> なお、『中国古籍善本書目』が同名で清華大学図書館蔵の「万曆三十四年唐氏世徳堂刻本」を著録するが、未見のためB-2なのかB-2'なのか不明。

<sup>31</sup> 国会図書館、蓬左文庫蔵。封面に「計圖像二十折／漢壽亭侯誌／唐貞予氏敬梓」とある。詳細は拙稿「唐貞予刊本『漢壽亭侯誌』及びその巻頭挿画について」（瀧本弘之編『中国古典文学挿画集成（十）・小説集（四）』所収、遊子館、二〇一七刊行予定）参照。  
<sup>32</sup> 小松謙『中国歴史小説研究』（汲古書院、二〇〇一）六八〜七〇頁。

<sup>33</sup> 索書号一五三五四。破損が激しいとのこととで閲覧の許可が下りず、著録の根拠を確かめられずにいる。なお、閲覧を許可された別の二本は、どちらもOPACの記載通り刊行者として見えるのは周如泉の名だけであった。

<sup>34</sup> 未見。『中国古籍善本總目』が「明王守仁撰、查鐸輯」の天一閣藏本を著録するが、「明王守仁撰、查鐸輯、嘉靖四十五年涇川查氏里仁堂刻本」という同書の原刊本らしき同版式の同名版本も著録されるので、「嘉靖四十五年」は唐廷仁の翻刻本が原刊本の記載を引き継いだものに過ぎないかもしれない。そうであれば刊行は嘉靖四十五年よりも大なり小なり遅れることになる。

<sup>35</sup> 『中国古籍善本總目』が浙江博物館蔵本を著録する。それ自体は未見だが、前集大尾に蓮牌木記「隆慶辛未（五年）依／仁齋重新梓」を持つ楊氏依仁齋刊本『子史詳摘備題通會大全』前集八巻後集十巻（尊經閣文庫蔵）がその増訂版と考えられるので（前集が同題で、目録が明らかに四巻本を増補したものである）、隆慶四年刊というのは信用出来そう。

<sup>36</sup> 二〇〇九年中国書店春季資料拍卖会のカタログ掲載の書影で蓮牌木記「萬曆癸酉歲「元年」春月／金陵唐廷仁繡梓」を確認した。他にも伝本が幾つか知られるが、いずれも未見。

<sup>37</sup> 三欄に区切った封面の左右に「重刻北京／原板耳譚」、中央の細い欄に「金陵世徳堂梓」とあり、各巻巻頭第二、四行に「黃岡王同軌行甫撰／上饒門生王嗣經校／金陵書坊世徳堂梓」と記す『新刻耳談』（十五巻存）五巻（台湾故宮博物院蔵）が万曆丁酉（二十五年）の王同軌自叙を持つが、これは「北京原板」の自叙であるから、世徳堂刊本自体の刊年は分らない。但し、前述の万曆三十一年序刊『耳談類増』がこれの増訂版なので、それより前に刊行されていたのはほぼ間違いない、この期間の刊行だった可能性はある。

<sup>38</sup> なお、磯部注3書は内閣文庫所蔵の『醫學綱目』四十巻（封面三欄に分け「新刻官板大字／醫學綱目／金陵世徳堂督梓」）を序の記述から嘉靖四十四年世徳堂刊本として紹介しているが（三九一頁）、これは同じ序を持つ嘉靖四十四年曹灼刊本（上海図書館等蔵）の覆刻本であり、嘉靖四十四年というのは底本の序の年次をその

まま覆刻したに過ぎない。従って、刊行が万暦十三年より早い可能性は十分にあるが、刊年は不詳とすべきである。

<sup>39</sup> 但し、天啓七年序の『一貫齋輯刻明便通書』四卷首一卷（北京大學圖書館藏）は唐氏世德堂刊本の可能性がある。封面は三欄に分け、「（二字分紙欠損）監選擇秘本／廸吉通書／世德堂藏板」（中央のみ大字）。「廸吉通書序」末に「時天啓丁卯（七年）春王正月上浣日金谿旭初王尚果因則甫識」、目録と巻一～三の巻頭第二行に「金谿旭初王尚果因則甫輯纂」とある。金谿人の編纂であるところを見ると、藏板者の世德堂が唐氏世德堂である可能性は十分に考えられるが、これが唐氏世德堂だとしても、前述の通り唐景が天啓年間にも活動していたようだから、唐晟・唐景兄弟より下の世代の経営者を想定する必要はないだろう。

<sup>40</sup> 『雲林醫聖增補醫鑑回春』八卷（尊經閣文庫等蔵）の各巻巻頭第六行または第八行に「金閨書林際雲唐廷揚梓行」、後跋末に「金谿龔廷賢書于仁孝堂崇禎五年春月吉旦」とある。

<sup>41</sup> 本章の初出時及び中国語版の発表時には、これを未見であった。

<sup>42</sup> 紀玲妹「唐順之《任光祿竹溪記》所記主人考論」（會議論文集『明代文学学会（籌）第九届年会暨二〇一三年明代文学国際學術研討會論文集・詩文卷』所収、二〇一三）が、万暦十八年『宜興縣志』巻八に収める任卿の小伝に「弟道、光祿寺丞、有才識、尤善成兄志」とある旨を指摘している（一七六頁）。

<sup>43</sup> 大尾に「隆慶壬申（六年）冬月／金陵唐對溪梓」の長方木記を持つ。

<sup>44</sup> 影印本『新編古今事文類聚』（中文出版社、一九八二）の底本が唐富春刊本の原刻と思しいのだが、この影印本は底本の所在を明記していない。なお、内閣文庫・慶應義塾図書館など多くの機関に、その覆刻と思しき、一部の葉の版心下部に「德壽堂梓」と見える本（刊年や刊行者に関する記載は同じ）が所蔵されている。

<sup>45</sup> 「重刻事文類聚」の末尾に「萬曆甲辰（三十二年）孟春之吉金

谿唐富春精校補遺重刻」とある。唐富春には他に籍貫を「繡谷」と記す刊本もあるので、金谿唐氏の一族と確認出来る。

<sup>46</sup> 大塚秀高「嘉靖定本から万暦新本へ——熊大木と英烈・忠義を端緒として」（『東洋文化研究所紀要』第百二十四冊、一九九四）参照。

<sup>47</sup> 磯部注3書三九七～三九八頁参照。

<sup>48</sup> 上海圖書館藏『筆疇』（請求記号線善七五九四四九）が明万暦榮壽堂刻本と著録されているのだが、原本を閲覧したところ、どこにも榮壽堂の名を見出すことは出来なかった。

<sup>49</sup> また、注44で挙げた「德壽堂」という書坊名が、他の唐富春刊本にも封面などに間々見られる。或いはこれも德壽という字のこの一族の人物が経営していた書坊なのかもしれない。德壽堂を富春堂と並んで唐富春の書坊名とする先行研究が多いが、『新編古今事文類聚』に唐富春の名だけが見える初刻本らしきものと、それに加えて德壽堂の名も見える覆刻本らしきものがあるところを見ると、唐富春は德壽堂とは別人ではあるまいか。

<sup>50</sup> 本論第五章参照。

<sup>51</sup> 封面中央に「周氏萬卷樓刊」とある『新刊古今醫鑑』八卷（内閣文庫「早印と後修の二本」、京都府立総合資料館蔵）は、巻一・三・四・五・六の各巻頭第二～四行に低十三格で「太醫院醫官金谿龔信編／（更に低五格）男 廷賢續編／金陵書林對峰周曰校刊行」（巻四・六は第四行「林」が「坊」とあるが、このうち第四行を巻七は「金陵書林竹潭周宗孔梓行」、巻八は「金陵書林前山周庭槐刊行」としており、更に巻二は第二～四行に文字が全く見えない。

<sup>52</sup> また、浅野世本の巻十六巻頭の第二・三行が空白となっているのは、世德堂・榮壽堂と並ぶ第三の共同刊行者の名が元々は入っていたが、その書坊が故宮世本の印刷までに版權を手放していたために削られたのかもしれない。前注に挙げた『新刊古今醫鑑』

の卷二第二、四行も同様である。仮にそうであれば、熊雲瀆覆世徳堂刊本で卷十六にのみ熊雲瀆の名が見えるのは、熊雲瀆が覆刻の底本に用いた世徳堂初刻本は既に卷十六の該当箇所が空白となっており、熊雲瀆はその空欄を利用して自分の名を入れたということになる。但し、第二章で述べた通り浅野世本には熊雲瀆覆世徳堂刊本を底本とした補版葉が含まれている可能性があるのも、もしも卷十六第一葉がそれに該当するのであれば、別の可能性を想定する必要がある。いずれにせよ憶測の域を出ないが、その場合は、まず熊雲瀆が覆刻時に卷十六にのみ自分の名を入れ（底本では元の刊行者名が入っていた箇所の一部を覆刻時に覆刻者の名に変える事例は珍しくない。本論第七章参照）、浅野世本の補版時にはいったん熊雲瀆覆世徳堂刊本の通りに覆刻してみたが、他の巻と刊行者名が異なることに気付いて削ったということになるのか。

## 第四章 李卓吾批評本系の版本について

### はじめに

第一章における聖僧歴難簿の検討の結果、世徳堂本<sup>1</sup>と同じ話柄の配列順序を採る百回本の中で初めて作品内容と聖僧歴難簿の矛盾を解消したテキストが李卓吾批評本であったということと、李卓吾批評本型の聖僧歴難簿が所謂清本全ての源流となっていることが明らかにになった。李卓吾批評本は百回本『西遊記』の展開史上において極めて大きな価値を持つテキストだったのである。

では、その李卓吾批評本系に属する諸版本の中における初刻本は一体どれであったのだろうか。また、汪象旭箋評本や陳士斌詮解本などの早い時期の清本が依拠した李卓吾批評本の版本はどれであったのだろうか。それらを把握することで、百回本『西遊記』がどのようなにして広まって行ったかを一層明らかにすることが出来るであろう。本章ではそれを目的とする。

李卓吾批評本系に属する版本は、李卓吾に仮託した批評を持つ文繁本である所謂『李卓吾先生批評西遊記』（以下では李卓吾評本と称す）と、その批評を受け継ぐ文簡本の閩齋堂刊本とである。

李卓吾評本は太田辰夫氏により甲本・乙本・丙本の三版に分類されている<sup>2</sup>。となれば、甲本・乙本・丙本のうちどれが最も李卓吾評本の初刻本に近いのかを探る作業が望まれよう。既に大陸の呉聖昔氏が甲本と乙本の先後を検討しているが<sup>3</sup>、丙本には一切触れていない<sup>4</sup>。そこで、本章では丙本も含めた三者の関係を明らかにしたい。

また、『三国演義』と『水滸伝』にも、李卓吾のものと称する批評を持ち、版式が李卓吾評本『西遊記』に酷似する版本が複数存在する。具体的には『三国演義』の劉君裕本・呉観明本・緑蔭堂本・堯光楼本・三槐堂本・宝翰楼本など<sup>5</sup>と、『水滸伝』の容興堂本各種<sup>6</sup>・百二十回本各種<sup>7</sup>・不分卷百回本各種<sup>7</sup>である。『西遊記』も含め、これらには(一)本文は各作品の文繁本に属す、(二)全百回または百二十回、(三)毎回二句の回目を持つ、(四)一葉の表裏各一幅の図を毎回一幅ずつ(容興堂本各種以外の『水滸伝』が該当) または二幅ずつ持つ、(五)本文は半葉十一行二十二字(容興堂本『水滸伝』各種のみ該当) または十行二十二字、(六)眉批か行間傍批の両方(『水滸伝』が全て該当) または一方と回末総批とを備える、(七)第一回第一行は書名、第二行



は回数、第三行は回目、第四行から正文に入る、(ハ)何らかの形で評者が李卓吾だと謳う、という共通点がある。以下、(一)～(ハ)を全て充たす版本を李卓吾評本四大奇書と総称する<sup>8)</sup>。

近年、金文京氏が注5担当項目で北京大学蔵本『水滸全伝』(百二十回本)・劉君裕本『三国演義』・内閣文庫蔵本『西遊記』(李卓吾評甲本)を「姉妹本」と推定し、それを承けて廣澤裕介氏がそれらの刊行の背景を考察されるなど、李卓吾評本四大奇書の横の繋がりを捉えようとする研究が現れ始めた。白話小説というジャンルや四大奇書という概念の形成・発展史を考える上で有用な、今後の進展が期待される分野と言えよう。

しかし、作品間の横の繋がりの考察は、各作品の諸版本の縦の關係が高い精度で確認された上でのものではなければ足元が揺らいでしまう危険を孕む。例えば、笠井注7論文で「北京大学蔵本『水滸全伝』は万曆四十二年袁無涯原刊本である」という通説が完全に否定され、それが実際には崇禎刊本だと示されたため、廣澤注9論文には既に修正を要する点が生じている。そして、廣澤氏は『西遊記』については太田説を鵜呑みにするのみで、甲本しか考察対象としていない。よって、本章では甲本・乙本・丙本の縦の關係の考察を進めると共に、李卓吾評本四大奇書としての横の視点からも各々の位置付けを考えてみたい。

## 一、李卓吾評本の伝本と分類

李卓吾評本『西遊記』は甲本・乙本・丙本の三版に分けられるという太田説は、氏が未見の版本も含めて有効である。そこで、本節ではまず三者共通の特徴を挙げ、次いで甲乙丙の順に個々の伝本を紹介し、最後に同系統の批評を持つ『○新刻全像批評西遊記』(本章の初出後に発見)及び閩齋堂刊本に触れる。なお、閲覧状況を特に断るもの以外は、全て原本閲覧の上で全葉の複写物を入手している。

### (1) 甲本・乙本・丙本の共通点

全て不分巻百回。四周单边、無界、白口、無魚尾、半葉十行二十二字で、版心葉数は回ごとに改める。毎回本文の後に数行の「總批」(「總評」と表記する回も)が二字下げで置かれ、更に「又批」が続く回もある。この三版は行款を同じくするので、基本的に同じ回の同じ葉の同じ行には同じ文字が並ぶ。巻首題は全て『西遊記』だが、甲本と乙本が行頭から空白無く記すのに対し、丙本は行頭から低七格の後に「西遊記」である。また、版心題も甲本と乙本は行頭から空白無く「西遊記」だが、丙本のみ低五格の後に「西遊記」である。なお、『李卓吾先生批評西遊記』という通行の書名は、三版に共通の目録題で(但し甲本の後修本に例外あり)、甲本と丙本では第百回の尾題でもある。乙本は甲本・丙本の第百回末葉を省略するため、尾

題は見えない。

## (2) 甲本

### ①国立公文書館内閣文庫蔵本(内閣李本)

封面欠。幔亭過客「題辭」、凡例、目録、図百葉二百幅、本文。原則行三字の眉批を持つ(ごく稀に行四字や行二字の眉批もある)。題辭の幔亭過客とは袁于令(一五九二―一六七四)の号で、署名の下にはその別号「白／賔」の陽刻正方印と「字／令昭」の陰刻正方印とが印刷される。図中に「卓然」(第二回裏)、「君裕刻」(第七回裏)、「湯維新摹」(第七十一回表)、「劉升伯刻」(第八十二回表・第八十五回表)、「旌德郭卓然鐫」(第百回表)という刻工名が見える。天一出版社『明清善本小説叢刊』上海古籍出版社『續修四庫全書』周文業編『古代小説数字化プログラム二〇〇八年版』に影印を収め、小野忍氏・中野美代子氏による岩波文庫邦訳の底本でもある。

### ②慶応義塾図書館蔵本(奥野李本)〔後修〕

奥野信太郎氏旧蔵。封面欠。幔亭過客「題辭」、目録、図百葉二百幅、本文。題辭と図は①と同版で、図中の刻工名も全て同じ。本文は基本的に①と同じ版木による後印だが、細かな修訂の施された葉があるほか、多くはないが異版の葉も混じっている。つまり、①の後修本である。目録は全葉が①と完全に異版で、現存の李卓吾評本で唯一目録題を『李卓吾先生批評西遊記眞本』とし、回目を全て本

文内でのそれに一文字の相違も無く一致させている<sup>10</sup>。題辭・目録・図を収める首冊が行方不明で、その部分は慶応義塾図書館所蔵のマイクロフィルムのみによった。

## (3) 乙本

### ③宮内庁書陵部蔵本(書陵部李本)

徳山毛利家旧蔵。封面、幔亭過客「題辭」、目録、本文。図は各回本文の前に一葉二幅ずつ挿入されるが、第二十六回以降は図を欠く。図柄は甲本と全く同じだが、①②に共通の匡郭の割れなどに注意して見比べると、極めて精緻な覆刻だと分かる。第二回裏と第七回裏には甲本と同じ刻工名が見えるが、先行版本の図中の刻工名まで覆刻する例は不分巻百回本『水滸伝』でも知られている(笠井注7論文参照)。本文も甲本とは異版で、批語が全て眉批ではなく行間の傍批となっている。しかし、本文の行款は甲本と同じで、字句の異同も少なく、字体はおろか文字の傾きまでしばしば一致する。批語もほぼ全て甲本に見えるものである。よって、基本的に甲本をかぶせ彫りした上で、眉批だけはかぶせ彫りはせずに全て行間傍批に移し変えたものだろう<sup>11</sup>。題辭も甲本の覆刻。封面は右から「李卓吾先生原評／西遊記／三行にわたる宣伝文」の三欄に区切り、中央上に龍鳳が向かい合う図柄の陽刻円印、右下に作中のキーワードの一つ「心猿／意馬」の陰刻長方印がそれぞれ朱で捺される。

#### ④故田中謙二氏蔵本（田中李本）

原本未見。小川環樹『中国小説史の研究』（岩波書店、一九六八）七四頁所載の封面と図一幅の書影を見たのみ。封面は③と同版で、印まで一致する模様。太田注2論文によれば③の同版本で、甲本と同じ図柄の百葉二百図が目録の次にまとめて置かれること以外全て③と同じ。しかし、より早く紹介した田中巖氏は、丙本と同じ「批點西遊記序」もあるとする<sup>12</sup>。憶測ながら、他の乙本の特徴からは太田氏の記述が正しいと考える方が理解しやすい。また、太田氏は図中の刻工名は第二回裏と第百回表に甲本と同じものがあるのみとするが、田中氏は逆に第七回裏のそのみ挙げる。こちらは他の乙本の状況から見て、実際にはその三箇所いずれにもあり、かつそれで全てと見て良さそうだ。

#### ⑤河南省図書館蔵本（河南李本）

#### ⑥中国歴史博物館蔵本（歴博李本）〔後修〕

⑤⑥はどちらも太田氏未分類で、筆者も共に原本は未見。両者を補配したと称する影印本（中州書画社、一九八三）を利用したほか、河南省図書館で⑤のマイクロフィルムを閲覧した（複写未入手）。また、『第三批国家珍贵古籍名録図録』（国家図書館出版社、二〇一二）に⑤の書影二点を収める。⑤のマイクロフィルム閲覧時に、影印本は⑤⑥が不規則に混在していること、⑤⑥はどうやら基本的に同版

で、しかも題辭・目録・図・本文の全てが基本的に③とも同版らしいことが確認出来た（封面は⑤⑥とも欠）。但し、第一回第一・二葉は三者の中で⑥のみが異版であり、他にも補版が疑われる葉が稀に存在した<sup>13</sup>。同版の葉の匡郭の傷の状態から見て印刷順は③⑤↓⑥であるから、⑥が後修本である。⑤の書誌事項はマイクロを見る限り封面を欠く点と図中の刻工名以外は太田氏の紹介による④と同じ。一方、補配影印本では③のように図が各回の本文の前に一葉ずつ配されており、⑥がそうなのか、影印の際の処置かは不明。図中の刻工名は、マイクロでも補配影印本でも第二回裏・第七回裏・第百回表に甲本と同じものがある。補配影印本の巻首には⑤の巻首には見えない「路／工」陽刻正方印があるので、⑥は路工氏の旧蔵書と思われる。

#### ⑦パリ国立図書館（フランス国立図書館）蔵乙本（パリ李本）

太田氏未分類で、磯部彰氏がこの系統に分類された<sup>14</sup>。原本未見で、所蔵館のウェブサイトにてダウンロード可能な全冊の白黒画像によった。封面、幔亭過客「題辭」、目録、図五十九葉百十八幅（第六十回以降欠）、本文（第一〜二回欠）。封面は右枠と中央枠が字様まで③④に酷似するもののそれとは異版で、左枠には宣伝文ではなく「金陵大業堂重梓」とだけあり、右下に陽刻正方「蘊古／堂／藏書」印が捺される。封面以外の箇所は③と同版。印刷は匡郭の傷な

どから見て③とほぼ同時期のように、強いて言えば③より僅かに早いかもしれないと感じた。図中の刻工名は第二回裏と第七回裏に甲本と同じ名が見える。

⑧ 磯部彰氏蔵本（磯部李本）〔後修〕

太田注2論文当時は未発見で、磯部氏がこの系統に分類された（磯部注14書第七章）。李氏朝鮮の文人朴氏の旧蔵で、朝鮮表紙に改装されており、本文のみ存。③⑤と⑥とで異なる第一回第一・二葉も含めて⑥と同版だが、版木の磨耗や損壊が大きく進んでおり、乙本が長期に渡り何度も印刷されていたことが窺える。

⑨ 中国国家図書館蔵本（国図李本）〔後修〕

太田氏未分類。本章初出時は未見だったが、後に原本の閲覧が叶った。複写はごく一部のみ画像データ入手。怡齋旧蔵。封面は欠。題辭、目録、本文（存第一〜十七、二十三〜二十五、四十三〜五十、七十〜七十四回。この範囲にも間々欠葉あり）。第一回第一・二葉は⑥⑧と同版。⑥では版木の裏表をなすこの二葉を大きな横割れが貫いているが、こちらではそれがまだ遙かに小さいので、乙本後修本三本の印刷順序は⑨↓⑥↓⑧と確定出来る。図中の刻工名は第二回裏と第七回裏に甲本と同じ名が見える。

⑩ 韓国某寺蔵本（韓国李本）

太田氏未分類。関寛東氏が近年韓国のある寺廟で発見されたもの

で、筆者原本未見。関氏のご教示によると、本文のみ存。関氏のご厚意により十枚ほどの写真を見せて頂いたところ、第一回第一・二葉を含むそれらは全て③と同版で、印刷は③より遅かった。

（4）丙本

⑪ 広島市立中央図書館（旧浅野図書館）浅野文庫蔵本（浅野李本）

浅野世本と共に広島藩浅野家の旧蔵。封面、禿老「批點西遊記序」、目録、図百葉二百幅、本文。封面は③④と同じ構成かつ同文だが異版で、右下と中央上の印は無く、左下に陰刻正方「書業／堂／圖章」朱印が捺される。図は甲本・乙本とは全く異なるもので、画工・刻工の名は見えない。本文も甲本とも乙本とも完全な異版で、原則行四字（稀に行三字や行二字）の眉批を持つが、改装された際の天地の裁断により大部分の葉で眉批の上二・三文字が失われている。版木の割れや印刷のかすれが激しい葉がところどころある後印本である。また、黄色味の強い竹紙の料紙に稀に陽刻長方「丘和義號／廠選料」朱印が捺されている。料紙を販売していた紙舗の印記であるが、詳細は未詳。

⑫ 広島大学中国文学語学研究室蔵本（広大本）

封面・序・目録・図・本文の全てが⑪と完全な同版で、版木の割れ目や印刷のかすれ具合の一致から印刷もほぼ同時期と見られる。しかも、料紙に稀に⑪と全く同じ紙舗印が捺されており、紙質も⑪

と同じと認めて良さそうなので、⑪と同じ紙舗から同時期に仕入れた紙で刷られたようだ。つまり、両者はまさに同時の印である。⑪⑫併せて一〇二八箇所確認出来る眉批のうち、⑫では判読出来るが⑪では印刷されていないものが五個あって、その逆は一個だけなので、⑫の方が僅かに早く刷られているかもしれないが、眉批の有無の差は必ずしも版本の問題ではなく、印刷時の墨の乗り具合や紙のたわみなどによる可能性もある。天地の裁断により眉批の上部が切れている点まで⑪と同様で、裁断後の外寸（二三・二×一五・三cm）も一致するので、⑪⑫は印刷から収蔵に到るまで長らく同経路を辿っていたと思しい。各冊後表紙表に「廿日市蓮教寺」と墨書し、現存する浄土真宗の寺院の旧蔵と知れるが、その前には⑪と共に広島藩浅野家の所蔵だったものかもしれない。但し、所蔵が分かれた後で一方もしくは双方が改装されたようで、現在の表紙の紙質や分冊の位置は⑪とは異なっている。太田注2論文は封面印も⑪と同じとするが、田中注12論文は封面は下三分の一が破れており印は確認不能とする。原本を実見したところ、確かに封面は田中氏の言う通りに破損しているが、残っている部分に⑪と同じ陰刻正方「書業／堂／圖章」朱印の左上隅と一致する断片が僅かながら確認出来た。太田氏はこれを⑪と同じ印と認めたと思われ、筆者もそのように看做して問題は無いと考える。なお、⑪より少し欠葉が多い。

#### （5）系統不明

#### ⑬東城書店出售本（東城李本）

『東城書店目録』百二十五号（東城書店、二〇一〇年十月）に「李卓吾先生批評西遊記図二冊、目録十一丁、図九十九丁」と著録されたもの。筆者が連絡した際には既に売れており、未見。現所在も未詳。掲載の書影一枚を見る限り甲本か乙本の図のようだが、写真が小さすぎてどちらなのかは判断が付かなかった。

#### （6）丁本

#### ⑭パリ国立図書館蔵『〇新刻全像批評西遊記』

本章初出論文の中国語補訂版の発表後に、潘建国氏がパリ国立図書館で発見されたもの。一冊のみを存する残本。丁本という分類名称は潘氏によるものではなく、筆者が今回新たに提唱するものである。行論の都合上、本章の補説において取り扱う。

#### （7）閩齋堂刊本

#### ⑮慶應義塾図書館蔵『新刻増補批評全像西遊記』

楊居謙刊本とも呼ばれる。奥野李本と同じく、奥野信太郎氏旧蔵で慶應義塾図書館現蔵。文簡本、上図下文、二十卷、巻首題『新刻増補批評全像西遊記』二十卷末に「崇禎辛未歲（四年、一六三二）閩齋堂楊居謙校梓」の単行蓮牌木記がある。禿老「批點西遊記序」、「新刻増補批評全像西遊記竊言標題目次」、本文。序は丙本と行款は

異なるが殆ど同文で、末尾に陽刻正方「禿老／批評」と陰刻正方「閩齋堂／楊氏居／謙校梓」が印刷される。各巻第二行にも「倣李禿老批評 閩齋堂楊居謙（巻によつては楊懋卿）校梓」と記し、李卓吾評本とほぼ同じ眉批（図中に刻まれ、スペース上の制約からか間々省略あり）と回末總批を持つ。刊行者懋卿楊居謙は楊氏清白堂や楊氏四知館の一族で、楊閩齋本の刊行者閩齋楊春元の息子かと推定されており、李卓吾評本を底本に楊閩齋本も参照しつつ省略・改訂したものと見られている（磯部注14書第六章参照）。

#### （8）諸本の関係についての先行研究

現時点で筆者が李卓吾批評本系だと確認している伝本は以上の十五本である<sup>15</sup>。

さて、太田注2論文は、乙本に属する田中李本につき「要するに内閣文庫本の模刻」だとし、丙本については浅野李本の封面印の「書業堂」を清代の蘇州の書店とみなして、それだけを根拠に「おそらく未知の明刊本を継承する清刊本であろう」と言っている。

③の項で述べた通り、乙本は確かに甲本に基づいて作られたものである。厳密には注11に記した通り内閣李本そのものが底本ではないが、乙本に関する太田説は大筋では正しいと言えよう<sup>16</sup>。

対して、丙本の扱いには問題がある。蘇州の書業堂は清代に限らず万暦から崇禎にかけても多くの書籍を刊印しているのだ<sup>17</sup>。よつ

て、丙本の刊行時期は全面的な再検討が必要である。

また、『孫目』・田中注12論文・太田注2論文はいずれも唯一「凡例」を存する内閣李本を筆頭に挙げており、これが最善・最古だろうというのが事実上通説化している。しかし、丙本と甲本・乙本の先後関係が本格的に考察されていないため、客観的根拠は乏しい。そこで、次節では甲本・乙本・丙本を図・眉批・本文・版式の四つの面から比較して、三者の先後関係や、『三国演义』や『水滸伝』の李卓吾評本との横の繋がりについて明らかにしてゆきたい。

#### 二、三者の先後関係と初刻本の様相

##### （1）図の比較から

丙本の図が甲本・乙本とは全く異なることは既に述べたが、丙本の図の大半が明らかに世徳堂本の図を模倣していることを磯部注14書第七章が指摘している。一例を挙げれば一目瞭然であろう（図1・2）。なお、『唐僧西遊記』の図も同じく世徳堂本の図を模倣したもののだが、そちらは全八十幅しかない。丙本の図は全二百幅で、『唐僧西遊記』には無い世徳堂本の図も多く模倣しているので、直接世徳堂本（初刻本か覆刻本かは不明）に拠ったものと見てよい。

磯部氏はこの指摘をした上で、なおも甲本の図の方が丙本に先行するとの立場を取る。しかし、李卓吾評本の本文が基本的に世徳堂

本を引き継いだものであることを踏まえれば、世徳堂本の図を直接参照すると思しき丙本の図が先行し、甲本の独自性が高い図はその後から登場したと考える方が自然ではないだろうか。

その推測の傍証となる例が、『三国演義』の李卓吾評本に見られる。その初期のものとされる呉観明本の図二百四十幅全てが、万曆十九年（一五九一）刊の周曰校乙本（またはその覆刻本の周曰校丙本）の図を、『西遊記』の丙本が世徳堂本の図を模倣するのと同じ手法で利用したものなのだ（図3・4）<sup>18</sup>。周曰校乙本『三国演義』と世徳堂本『西遊記』は同じ金陵で刊行され、刊年も一年しか違わず、版式も似通い、上元王氏を画工とする双面連式挿画を持つ点まで共通する<sup>19</sup>。そして、『三国演義』の李卓吾評本では、先行版本の模倣ではない独自の図を持つ『李卓吾先生批評三國志眞本』が後から現れて来る<sup>20</sup>。

となると、『三国演義』でも『西遊記』でも、李卓吾評本の初刻本の図は万曆二十年前後の金陵刊本（またはその覆刻本）の上元王氏の手になる図を模倣したもので、その後から独自の新たな図を持つ李卓吾評本が現れたのではないだろうか。つまり、図について言えば丙本が甲本・乙本より先行する可能性が高いということである。

## （2）眉批（乙本のみ傍批）の比較から

甲本・丙本・閩齋堂刊本の眉批、及び乙本の傍批の数は表1の通

りである。ここから推測出来る内閣李本・奥野李本・乙本の関係については注11で触れた。問題は甲本と丙本の関係だが、丙本の方がかなり眉批が多い。内訳を見ると、内閣李本に無く丙本にあるものが二一八個に上るのに対し、丙本に無く内閣李本にあるものは五八個に止まる。内閣李本が比較的状态の良い早印本なのに対し、丙本は二本とも後印本である上に、天地の裁断によって眉批の有無が確認不能な箇所も少なくない。よって、もし甲本と丙本を初印本同士で比べることが出来れば、眉批の数の差は更に広がるものと思われる。一般的に眉批・傍批の類は同系統のものならばより後の版本になるほど数が減る傾向にあるので、丙本の眉批の方が、約一六％も数が少ない内閣李本の眉批よりも、古い形をより良く留める可能性が高いと言って良いだろう。

また、『三国演義』の李卓吾評本では、呉観明本・劉君裕本など初期のものとされる版本はみな行四字の眉批を持ち、藝光楼本・三槐堂本など行間傍批のものはいずれも清代に入ってから現れたものである<sup>21</sup>。匡郭に守られずに版本の端にある眉批は、保管や運搬の過程で傷みやすい箇所であろうから、眉批が後継版本で匡郭の内側に移って行間傍批となるのは、版本の管理面から見て合理的な変化だと言える。

となれば、『西遊記』の李卓吾評本も同様の経過を辿ったのではない

かろうか。つまり、丙本を含む初期の版本の行四字の眉批は後印本では損傷が目立ったため、その翻刻本の甲本は眉批を行三字に減らして版木の上端から少しでも遠ざけることなるべく損傷を抑えようとし、その程度では効果が薄かった（奥野李本の眉批は大部分の葉が同版である内閣李本のそれよりも約二一％も数が減っている）ために、乙本は本文においては甲本を覆刻しながらも眉批だけはかぶせ彫りせず、全て行間傍批に変えることで損傷を避けた、といった経緯があったのではあるまいか。

以上、眉批も丙本の方が甲本に先行するものである可能性が高い。なお、閩齋堂刊本には、甲本には見えず丙本には見える眉批が一四六個ある一方で、丙本には無く甲本にはある眉批も三七個存在し、他本に全く見えない眉批も一七個ある。丙本と甲本で眉批の字句に異同がある場合、閩齋堂刊本は丙本に一致するのが一六例で、甲本に一致するものは一例だけなので、閩齋堂刊本の眉批は甲本より丙本に近い。本文の字句にも同様の傾向があつて、例えば閩齋堂刊本の聖僧歴難簿の末尾の二句の第一句「路逢十萬八千里」は、丙本や華陽洞天主人校本系の諸本と一致し、甲本や乙本の「路過十萬八千里」とは異なる（第一章表3・4参照）。よって、閩齋堂刊本が底本とした李卓吾評本は、⑪⑫よりも早く印刷されて眉批がより多く読み取れた丙本か、もしくは太田氏の言うような「丙本の祖本の明刊

本」だったと思われる。

### （3）本文の比較から

甲乙丙三者の本文には僅かながら文字の異同が見られる。ここでは異同箇所が十分あつて全体の傾向を良く反映している第十四回に限り、世徳堂本・丙本・甲本・乙本の異同箇所を全て示す（表2）。

まず、当然ながら、「李卓吾評本三者（丙本・甲本・乙本）が全て一致し、世徳堂本はそれとは異なる」例がこの回に限らず最も多い。他の回のそのような例としては、第一章で詳述した聖僧歴難簿の華本型と李本型の相違がこれに該当するほか、呉聖哲注3論文が指摘する甲本・乙本共通の世徳堂本に対する同詞脱文（先行版本で近接した行に複数回現れる同じ字句の間に挟まれた文章を後継版本が脱落すること。日本の書誌学や日本文学の分野では「目移り」と呼ばれている現象）二例と、韻文の中で世徳堂本の丁度一行分を脱落する一例は、全て丙本でも同様に脱文である。

その一方、「世徳堂本と丙本が一致し、甲本・乙本はそれとは異なる」例もかなりの数に上る。他の回の例としては、上記の聖僧歴難簿末尾の「路逢十萬八千里」もそうだし、もう一つだけ挙げると、甲本・乙本は共に第三回第六葉表第一行に二文字分のスペースに「相稱没」の三文字を詰め込む箇所があるが、丙本ではそこは「相趣」の二文字のみで、世徳堂本は丙本と一致する。



対して、「世徳堂本と甲本・乙本が一致し、丙本はそれとは異なる」例はごく少なく、しかもその殆どが丙本の単純な誤刻で、後継版本が推測で正しい字に戻せる類のものである。

つまり、丙本は世徳堂本と甲本の中間的な本文を持っているのだ。もし仮に丙本が「甲本を底本にしつつ、世徳堂本も参照して校訂を加えたもの」だとしたら、甲本が正しいのに丙本が世徳堂本と同じ単純な誤字を犯す例はまず現れないはずだが、実際にはそうした例がかなり見受けられる。逆に、世徳堂本と丙本は正しいが甲本と乙本では誤る例もある。よって、素直に世徳堂本↓丙本↓甲本↓乙本の順に本文が変遷したと考えれば良いだろう。もう一つ例を挙げて確認しよう。

A. 丙本第五回第五葉裏二〜六行目（図5）

閣按住雲頭輕輕移步入裡面只見那里

瓊香繚繞瑞靄繽紛瑶臺鋪彩結寶閣散氤氲鳳翥騰形

縹緲金花玉萼影浮沉上排着九鳳丹霞展八寶紫霓

墩粧綵描金桌千花碧玉盆桌上有龍肝和鳳髓熊掌

與脰唇珍羞百味般般美異果嘉穀色色新

B. 甲本・乙本第五回第五葉裏二〜六行目（図6）

閣按住雲頭輕輕移步入裡面只見那里

瓊香繚繞瑞靄繽紛瑶臺鋪彩結寶閣散氤氲鳳翥騰

騰形縹緲金花玉萼影浮沉上排着九鳳丹霞展八寶

紫霓墩粧綵描金桌千花碧玉盆桌上有龍肝和鳳髓

熊掌與脰唇珍羞百味般般美異果嘉穀色色新

改行は底本に従い、波線と網掛けは筆者による。ここは甲乙丙三者に異同がなく、世徳堂本は網掛けの三箇所では字句が異なるため、甲本と丙本が別々に世徳堂本を参照したとは考えられない。さて、丙本の「瓊香」からの行は二十一字分のスペースに二十三字も詰め込んでいる。通常行二十二字で韻文は一字下げるのが甲乙丙三者に共通の体例だが、ここでは波線部が韻文なので、そこを一字下げにしつつ各行の文字数が通常通りの甲本・乙本の形が正しい処理である。もし甲本が丙本に先行するとしたら、丙本は甲本と同じように彫れば良かったわけだから、このような不自然な改行になるはずがない。後発の甲本が丙本の不自然さを解消したと見て間違いあるまい。そして、丙本の不自然な改行の原因は、世徳堂本（熊雲瀆覆世徳堂刊本）の該当箇所を見ることで判明する。

C. 故宮世本卷一第五十二葉裏十一行目〜第五十三葉表三行目

瑶池不多時直至寶閣按住雲頭輕輕移步入裡面只見那

里瓊香繚繞瑞靄繽紛瑶臺鋪彩結寶閣散氤氲鳳翥翔形

縹緲金花玉萼影浮沉上排着九鳳丹霞展八寶紫霓墩五

綵描金桌千花碧玉盆桌上有龍肝和鳳髓熊掌與脰唇珍

羞百味般く美異果嘉穀色く新

こちらでも改行は底本の通りとした。世徳堂本は浅野世本も熊雲瀆覆世徳堂刊本も行二十四字で、韻文はやはり一字下げるのが体例である。ところが、ここでは韻文の始まる行の本来一字下げるべき箇所だけに直前の地の文の最後の一文「里」をねじ込んでおり、一見しただけでは韻文は次の行の冒頭「縹緲」からであるかのように見える。ということは、丙本の不自然な形は、世徳堂本（初刻本もしくは覆刻本）を直接参照したために韻文は「縹緲」からだど勘違いし、一旦以下のように彫ってしまった名残ではあるまいか。

D. 丙本訂正前の推定形

閣按住雲頭輕輕移步入裡面只見那里瓊香繚繞瑞

靄縹紛瑤臺鋪彩結寶閣散氤氳鳳翥騰形

縹緲金花玉萼影浮沉上排着九鳳丹霞辰八寶紫霓

墩粧綵描金桌千花碧玉盆桌上有龍肝和鳳髓熊掌

與腥唇珍羞百味般般美異果嘉穀色色新

こう彫ってしまった後で、試し刷りの際か初印本出售後に韻文は「瓊香」からだど気付いて、「閣按」からの行の下五文字を削り、その次の行全体を埋木改刻する、という最小限の手間で改訂したのが現在の丙本の形だ、と考えるのが最も合理的な解釈だろう。この葉全体を貫く版木の横割れが問題の「瓊香」からの行にだけ入って

いないことがこの推測の裏付けとなる（図5、第三行の「散」字の高さに注目）。

この例と前述の丙本の図が世徳堂本の図を模倣していることを併せて考えれば、丙本の版木は世徳堂本に直接依拠して作られた「李卓吾評本の初刻版」そのものであると推定される<sup>22</sup>。

なお、丙本と甲本・乙本で本文に異同がある場合、清本諸系統は大抵後者と一致する。例えば、またもや聖僧歴難簿末尾の二句の前半を例にとるが、丙本と閩齋堂刊本は「路逢十萬八千里」であったが、汪象旭詮解本系の諸本は甲本・乙本と同じ「路過十萬八千里」としている。清本諸系統は概ね甲本・乙本系統から出たようだ<sup>23</sup>。

（4）版式の比較から

甲本・乙本は第一回以外の第一行は全て回数を書すが、丙本では第一回の他にも十回ごとの第一行に書名またはその痕跡が見える。具体的には、第十一・三十一・四十一回の第一行は文字が全て削られて空白で、第二十一・六十一・七十一回の第一行は第一回と同じ「（低七格）西遊記」と残り、第五十一・八十一・九十一回の第一行が行頭から空白無く「李卓吾先生批評西遊記」となっている。

つまり、丙本は元々第一回から第九十一回まで十回おきに全て第一行に「李卓吾先生批評西遊記」という目録題・巻末題と同じ書名が記されていたが、現存の⑪⑫ではそれが一部を残して削られてい

ると考えられる。『三国演義』の李卓吾評本は管見の限り全て第一回から十回おきの第一行に必ず「李卓吾先生批評三國志」と書名を記している、という事実がこの推測の正しさを裏付けのたろう<sup>24</sup>。なお、甲本・乙本・丙本ともにこれらの葉も全て通常通りの半葉十行であるから、回数<sup>25</sup>の十の位が一である回においては、丙本の本文は甲本・乙本よりも常に一行ずつ後にずれていることになる。

また、丙本は⑪⑫共に第五十二回第三葉・同第四葉・第九十一回第六葉に「李卓吾批評西遊記」という版心題が残っている<sup>26</sup>。よって、他の千五百葉弱の版心題（低五格）西遊記は、「李卓吾批評」の五文字を削ったものと見てよい。『水滸伝』の容與堂本各種が版心題を「李卓吾批評水滸伝」としており、李卓吾の名の削られる前の丙本初版の状態と共通する。なお、初期の容與堂本は全ての回の第一行に「李卓吾先生批評忠義水滸伝卷之〇〇」と書名を記す。また、『三国演義』の李卓吾評本は管見の限り全て版心題が行頭から空白無く「三國志」であり、珍しく丙本と異なる。

つまり、現存の⑪⑫は共に、丙本初版の版本から李卓吾の名を削り取った後修本なのだ。以下、⑪⑫がいずれも広島県に伝わって来たことを鑑みて、この状態の後修本を仮に広島丙本と呼び、李卓吾の名が削られる前に刷られた丙本早印本（現存せず）と区別する。

甲本の行頭から単に「西遊記」という没個性な巻首題は、広島丙

本を底本として七文字分の空白を詰めたためにこうなったのであろう。版心題も同様である。もし甲本が丙本に先行するとしたら、丙本は書名を刻した十回ごとの行数をわざわざ底本より一行増やしたことになるが、営利出版物である通俗小説の重刊本でそのような手間とコストのかかる処置をするとは考えにくい。逆に、丙本を底本に甲本が作られたなら、刻字数を減らすことでコストカットを図ったと理解出来る。

#### （5）「竊言」と「凡例」について

ここで付言しておく、閩齋堂刊本の「批點西遊記序」の次に置かれる「竊言」は、前半は他のどの版本にも見えない文だが、後半が内閣李本のみ備える「凡例」全文と概ね一致する（但し「凡例」より末尾の数句が少ない条あり）。「竊言」は批評の意図の解説で、実際の批評の方向性と合致するので、李卓吾評初刻本には附されていたと考えられる。つまり、「批點西遊記序」と「竊言」は共に閩齋堂刊本の底本に備わっていたのだろう。そして、広島丙本を底本とする甲本が「竊言」の後半に当たる「凡例」を持つということは、広島丙本の状態となっても、早い時期の印本にはまだ「竊言」か「凡例」が備わっていたと考えられる。つまり⑪⑫は広島丙本の中でも後出の通修本で、それを欠いた状態で出售されたのであろう<sup>26</sup>。

### 三、それぞれの刊行時期

#### (1) 避諱による推定

本節では丙本・甲本・乙本それぞれの刊行時期の推定を試みる。まず、避諱を手掛かりに考えてみよう。明初以来殆ど行われていなかった出版における避諱は天啓五年頃より本格化し<sup>27</sup>、通俗小説でも天啓帝の諱「由校」と崇禎帝の諱「由檢」の「由」「校」「檢」を避ける箇所のある版本が多数知られている。

では『西遊記』においてはどうか。世徳堂本には「由」五九例、「校」三五例、「檢」二八例が見える。丙本の本文では「由」六〇例、「校」三四例、「檢」二八例で、世徳堂本の「校」が「枝」の誤字なのを訂正する一例を除き全て世徳堂本を踏襲し、「由」が一つ増えてさえている。世徳堂本に無い箇所では、眉批には用例が無いが、総批には「由」二例と「檢」一例がある。つまり、丙本はこれらの字を避けてはいない。

対して内閣李本では、第五回第一葉表・同第十葉裏・第二十回第一葉表で「由」が「繇」に、第十七回第九葉表・第二十回第十二葉表（二箇所）・第三十七回第十一葉裏で「校」が「較」に、第十回第九葉裏・第十六回第十三葉裏・第七十一回第三葉裏で「檢」が「簡」に、第九十四回第四葉表で「檢資」が「探視」に変わっており、いずれも埋木改刻の痕跡は見えない。つまり、丙本本文の「由」「校」

「檢」合計一二二例のうち一割弱の十一例のみとはいえ、甲本は版本が最初に彫られた時点で天啓・崇禎両帝の諱を避けているのだ<sup>28</sup>。となれば、甲本の版本は崇禎年間に彫られたものに違いない。対して、丙本の版本はまだ避諱がうるさく問われなかった天啓年間前半以前に彫られたものであろう。また、甲本を底本として作られた乙本の刊行は、当然早くても崇禎年間だし、或いは清代に下るかもしれない。前述の通り『三国演義』では乙本と同じ行間傍批形式の李卓吾評本はいずれも清刊本と見られるので、後者の可能性も十分にある。

#### (2) 李卓吾著作への禁令による推定

李卓吾批評と称する小説・戯曲は仮託に過ぎないと古くから言われ、本論序章に挙げた盛於斯『休庵影語』『西遊記誤』もそう証言する資料の一つだが、より同時代的な言説として重視されている銭希言『戲瑕』卷三「贗籍」は、『休庵影語』と同様に彼らが梁溪の人である葉昼の偽作だと断じた上で、「李卓吾の著作は数年前に彼が罪を得ると当局の命令で版本・書籍とも全て廃棄されたが、近年再び流行し始め、そこで初めて李卓吾批評と謳う小説・戯曲が現れ始めた」との旨を記している<sup>29</sup>。李卓吾著作への禁令発布と彼の入獄は万曆三十年閏二月で、翌月には獄中で自殺した『神宗実録』卷三百六十九。『戲瑕』には万曆癸丑（四十一年）八月朔の自叙がある。

つまり、右で伝えるのは概ね万暦三十年代の状況である。

表3は林海樞「李贄著作及評点、輯選諸書目録」<sup>30</sup>の挙げる李卓吾の著作またはその選評と謳う（仮託も含む）明刊本の数を刊年ごとに示したもののだが、万暦二十年代後半にはほぼ毎年確認出来る李卓吾の名を冠する書籍の刊行が、万暦三十年前半には全く確認出来ない。万暦三十五年以降は天啓三年まで再びほぼ毎年刊行が確認出来るから、この空白は錢希言の伝える当時の状況と合致すると言える。となれば、この空白期間は版本の伝存状況の偶然の偏りによるものではなく、当時の禁令の影響を反映するものと見て良いだろう。

以上より、李卓吾評本四大奇書の各初刻本の刊行は、禁令の影響が薄れた万暦三十年代中頃以降かつ『戲瑕』が出た万暦四十一年以前と推定する。実際、李卓吾批評を謳う小説・戯曲で刊年の手掛かりがある最も早い版本は、いずれも万暦三十八年と見られる「庚戌」の容興堂刊本『李卓吾先生批評忠義水滸傳』（所藏機関は注32参照、手掛かりは序末の署名の「庚戌仲夏日」、同『李卓吾先生批評北西廂記』（宮内庁書陵部等蔵、手掛かりは図中の落款の「庚戌夏日」、起鳳館刊本『元本出相西廂記』（中国国家図書館等蔵、手掛かりは序末の署名の「庚戌冬月」）である。

また、天啓三年を最後に刊年の分かるものが激減するのも当時の状況を反映していると思われる。というのも、顧炎武『日知録』卷

十八「李贄」によれば、天啓五年（一六二五）九月にも再び李卓吾の著作への禁令が出されているのだ<sup>31</sup>。顧炎武はこの禁令は結局は効果が無かったと言うが、表3を見る限り少なくとも一時的には効果を発揮したのではなからうか。なお、李卓吾著作への正式な禁令の記録は明代にはこの二回しか確認出来ない。

これらの前提を踏まえて、李卓吾評本『西遊記』各種の刊行時期を推測してみよう。まず、李卓吾評初刻本は万暦三十年代中頃（四十年の間の刊行らしい。一方、丙本は天啓・崇禎両帝の諱を避けないことから天啓前半以前の刊行と思われる。両者が同じものである可能性が高いという前節での結論は、この面からも無理は無い。

また、丙本の版本から李卓吾の名が削られたのは、天啓五年の禁令への対策だったのではあるまいか。万暦三十五年から天啓三年までは李卓吾の関与を謳う書籍がほぼ毎年刊行されているので、その時期にわざわざ約千五百箇所も李卓吾の名を削り取る必要があったとは思えない。天啓五年の時点で李卓吾著作が長らく当たり前に流通していたからこそ改めて禁令が出されたのだろう。最初の禁令も五年以内には効果が切れたようだし、表3からは漏れているが崇禎四年に「倣李禿老批評」と謳う閩齋堂刊本が刊行されているから、天啓五年の禁令が効果を発揮したのは長く見積もっても崇禎四年までの六年間だろう。李卓吾の名が削られた広島丙本の初印はこの期

間と推測される。

なお、容輿堂本『水滸伝』にも李卓吾の名がほぼ全て削り取られた残本が存在する<sup>32</sup>。これも丙本と同時期の処置であろう。『三国演義』にも筆者未見ながら呉観明本の李卓吾の名を「陳眉公」に変えただけの版本があるというし（金注5項目参照）、崇禎本『金瓶梅』が李卓吾評本四大奇書の条件を（一）（七）まで充たしながら李卓吾の名だけは謳わないのも、或いはこの禁令の影響かもしれない。天啓五年の禁令は、李卓吾評本四大奇書の流通にも実際にそれなりの影響を与えていたようだ。

しかし、崇禎年間には『西遊記』の内閣李本や北京大学蔵本『水滸全伝』などが刊行されているほか、『李卓吾先生批評三國志真本』や奥野李本も崇禎後期の刊印であった可能性がある。明朝最末期には禁令は最早全く効力を失い、李卓吾評本四大奇書は大量に流通していたと思われる。

### （3）出版関係者による推定

以上の推定刊年は、題辭の署名・図中の刻工名・一部の封面の書坊名と矛盾を来たさないだろうか。最後にそれを確認しておこう。

まず、甲本・乙本の題辭を書いた袁于令は、李卓吾評初刻本が出版されたと思われる万曆三十年代後半にはまだ十代の若輩で、巻頭を飾るほどの文名があったとは思えない。逆に、崇禎癸酉（六年、

一六三三）序刊の『劍嘯閣批評秘本出像隋史遺文』は袁于令自作の章回小説だし、やはり袁于令の作品『西樓夢傳奇』の上演を祁彪佳が崇禎五年から九年にかけて三度も見ている（『祁忠敏公日記』）など、崇禎年間には袁于令は通俗文壇の売れっ子であった。となれば、袁于令の題辭を巻頭に掲げる甲本は、やはり崇禎刊本だと考えるのが相応しかろう。

次いで図中の刻工名だが、劉升伯は泰昌天啓間の朱墨套印本『牡丹亭』（中国国家図書館等蔵）に、郭卓然は天啓七年序の金閶（蘇州の異称）葉敬池刊本『醒世恒言』（内閣文庫蔵）や天啓崇禎間の袁于令撰『劔嘯閣自訂西樓夢傳奇』（上海市歴史文献図書館蔵）等に、湯維新は崇禎三年序の金閶徐含靈刊本『翰海』（東京大学東洋文化研究所蔵）にそれぞれ名が見え、劉君裕に至っては万曆末から崇禎年間の全般に活動が確認出来る<sup>33</sup>。この四人が揃って参加した甲本が崇禎刊本だという推定にも問題はあまい。

なお、康熙三十五年（一六九六）の序を持つ陳士斌詮解本系諸本の中で最初期のものと見られる版本は、奥野李本よりも更に損傷が進んだ甲本の版本で刷られた図を持っている（本論第六章参照）。そのような伝本は管見の範囲で四本あるが、いずれも図の紙は序目や本文と均質なので、刊行者が甲本の版木を入手してその図を流用したものに違いない。つまり、甲本の図の版木は康熙中期になっても

まだまだ使用に耐えるものであった。甲本の本文の版本が使用に耐えなくなってきたから図の版本だけが新たに陳士斌詮解本の本文の版本と組み合わせられたのかもしれないし、まだまだ甲本の本文の版本も使えるけれども、新しく編まれた評語を持つ陳士斌詮解本の方が売れると見て甲本の精緻な図をそちらに配したのかもしれない。いずれにしても、そうなる前の康熙前半までは、甲本としての印刷が続けられていた可能性がある。注10で奥野李本の印刷下限を康熙前期辺りに置いたのは、これも念頭にあってのことである。

ところで、廣澤注9論文は劉君裕の名が見えるものこそ「李卓吾評本の初期版本」だと推定している。しかし、笠井注7論文で北京大学蔵本『水滸全伝』が崇禎刊本だと示され、今また『西遊記』の甲本も広島丙本を重刻した崇禎刊本だと判明した。となると、『水滸伝』と『西遊記』においては、劉君裕の関わった李卓吾評本は、新たな図を附すのを目玉とした第二世代の版本だと称すべきだろう。しかし、『三国演義』の劉君裕本は、周曰校乙本か同丙本の図の構図を引き継ぐ第一世代のものであるから、等しく劉君裕が刻図に参加しているとは言っても、『水滸伝』や『西遊記』の李卓吾評本とは図の性格は明らかに異なる。『三国演義』の李卓吾評本の中で劉君裕本がどのような位置付けにあるのか、より詳細な検討を俟ちたい。

残る封面の書坊名だが、浅野李本の「書業堂」は前述の通り万曆

から清代後期まで息長く活動した蘇州の書坊で、年代の特定には繋がらない。なお、版面の風格や、袁于令・郭卓然・劉君裕らの関与した小説戯曲が多く蘇州刊本であることなどにより、甲本も蘇州刊本と推測されていることを付言しておく<sup>34</sup>。

パリ李本の「金陵大業堂」については、序章で述べた通り百回本『西遊記』成立史に関する重要な証言をしている周如山の書坊だとの見方が示されている。大業堂については第五章で詳細に検討する。

#### 四、まとめ

以上、(一)李卓吾評本『西遊記』の初刻本は万曆三十年代後半の刊行と考えられ、「批點西遊記序」と「竊言」を両方持っていたらしいこと、(二)丙本の版本は世徳堂本を直接参照した痕跡を留めており、李卓吾評初刻本のそれである可能性が極めて高いこと、(三)現存の丙本は共に天啓五年の李卓吾著作への二度目の禁令を受けて版本からその名が削り取られた「広島丙本」であり、その中でも刷りが遅い通修本であること、(四)甲本は広島丙本を底本とした崇禎年間の翻刻本であること、(五)乙本は眉批を全て傍批に変えた以外は甲本の覆刻で、清刊本の可能性もあること、(六)閩齋堂刊本が依拠した李卓吾評本は現存の丙本より印刷が早いものであること、(七)所謂清本は主に甲本・乙本系統から出たこと、などを示した。今後は従来のように

李卓吾評本『西遊記』を一括りにすることなく、研究目的に応じて使い分けるようにすべきであろう。

#### （補説）丁本について／潘建國氏の発見を承けて／

本章第一節（6）で触れた通り、本章初出論文の中国語補訂版の発表後に、潘建國氏が李卓吾批評本系に属する新たな版本をパリ国立図書館で発見された<sup>35</sup>。それは第八十六〜九十回のみを存する残本で、筆者は原本未見だが、パリ李本と同様に同館ウェブサイトから白黒画像をダウンロードした。この版本についての詳細は潘建國注<sup>35</sup>論文を参照されたいが、各回末に李卓吾評本各種と同じ総評が見え、丙本と非常に似ているがやや簡略化された挿画を持ち、眉批は広島丙本に見えて甲本・乙本に見えない条を複数有するが、広島丙本よりは少ない。広島丙本の状態になる前の丙本の早期印本を主要な底本とし、世徳堂本も適宜参照して作られた翻刻本であろうというのが潘氏の見解で、筆者も概ね異論は無い。

この版本は第八十六回第一行に「○新刻全像批評西遊記」という巻首題があり、版心を「（低三格）批評西遊記（隔二格）卷十八（隔五格）葉数」としているが、巻首題の「○新刻全像」のすぐ右の匡郭が不自然に消えており、この五文字は埋木改刻されたものと見られる。してみれば、広島丙本の場合と同様に、巻首題は元々「李卓

吾先生批評西遊記」、版心題は「李卓吾批評西遊記」であったが、天啓五年の禁令への対策として現在の形に改められたのであろう<sup>36</sup>。ということは、丁本の初刻本の刊年は、丙本と同じく万曆後期から天啓前期までの間に絞ることが出来そうだ。

潘氏はこれを巴黎本と通称しているが、パリ国立図書館には乙本に属するパリ李本もあるので、その呼び方では紛らわしい。後修本であるパリ蔵本『○新刻全像批評西遊記』には李卓吾の名は見えなくなっているが、甲本・乙本・丙本と同系統の評語を持ち、元々は李卓吾の名を明記していたと考えられる版本であるから、甲本・乙本・丙本と並ぶ新たな李卓吾評本と認めて、新たに丁本という分類を立ててこの本を入れることにしようだろうか。丁本は丙本の翻刻本ではあるが、甲本の覆刻本である乙本を別立てにしている以上、一版ごとに一名称を与えて丙本と丁本も別立てとすべきであろう。現在確認されている丁本はこの存一卷の残本一つのみだが、潘氏が指摘するように、筆者が本章注<sup>15</sup>で疑義を呈した大英博物館蔵本が丁本である可能性は十分にある。調査の及ぶ機会を俟ちたい。

#### 小結

さて、第二章と本章とで、第九回に江流和尚故事を持たないという共通点を持つ所謂明本に属する百回本の諸版本の、筆者が現時点



で把握している全ての伝本の位置付けを一通り定めた。明本に属する百回本のうち、清代に版木が作られた可能性があるのは李卓吾評乙本だけであり、それとて崇禎刊本である甲本の覆刻本である。

従って、第九回を江流和尚故事としない現存の百回本は全て明代に編まれた本文を持ち、現存の明代に編まれた百回本は全て第九回を江流和尚故事とはしない、という対応関係が認められると言う意味では、「明本」という呼称は一応実情に即したものと言えそうだが、但し、乙本が清初刊本である可能性が少なからずある以上、この意味で「明刊本」と言ってしまうのは避けた方が良くかもしれない。同様に、第九回を江流和尚故事とする百回本を総称するなら「清本」と呼んでおく方が無難であり、「清刊本」は避けた方が無難だろう。また、李卓吾評乙本は後印本・後修本の伝存状況からして相当に長い期間に渡ってかなりの数が印刷されていたようであるから、仮に崇禎年間のうちに版木が作られていたとしても、乙本が主に流通したのは清代前期から中期にかけてであったと考えて良からう。崇禎刊本たる李卓吾評甲本も、康熙前半までは印刷が続いていた可能性を指摘した。丙本の通修本である⑪⑫とて、天啓五年の禁令に対応して書名を改刻して「広島丙本」となった後に、総評の一部などに更なる削除が施されたものであるから、印刷は清初に下ってもおかしくはない。つまり、明本とはいっても、李卓吾評本は清代に入っ

て清本系の諸版本が現れると途端に流通が途絶えてしまうという訳では決してなく、明末清初から清代中期にかけて非常に広く読まれたテキストであったと考えるべきであろう。

<sup>1</sup> 第二章での検討で世徳堂初刻本に近い要素をより多く残すと看做した浅野世本は前半を欠くため、本章では断りの無い限り熊雲濱覆世徳堂刊本である故宮世本を用いる。

<sup>2</sup> 太田辰夫『西遊記の研究』（研文出版、一九八四）第十四章「明刊本西遊記考」（初出は『神戸外大論叢』十九巻一号、一九六八）参照。

<sup>3</sup> 吳聖昔「李評本二探」《西遊記》版本秘録之一（『明清小説研究』一九九五年第二期）。甲本・乙本とも影印本のみにより検討している。

<sup>4</sup> 孫楷第『中国通俗小説書目』（以下『孫目』と略称）が初版（国立北平図書館、一九三三）・改訂版（作家出版社、一九五七）・重訂版（人民文学出版社、一九八二）のいずれにおいても甲本と丙本を同版扱いして区別しないためか、本章の初出以前には日本以外では殆ど知られていなかった。

<sup>5</sup> 本章初出時からの研究の進展により、今日では版本の通称としては不適と看做されつつあるものも含まれるが、新たな呼称が定着するまでには至っていないので、便宜上初出時と同様に石昌渝主編『中国古代小説総目・白話卷』（山西教育出版社、二〇〇四）の金文京担当「三国志演義」項目で使われる呼称に従っておく。

<sup>6</sup> 数種の異版が存在することが知られる。高島俊男『水滸伝の世界』（大修館書店、一九八七）十三「一番いいテキスト」参照。

<sup>7</sup> 容與堂本とは異なる共通の批評を持つ百二十回本各種と不分巻百回本各種は、互いに覆刻の関係で繋がっている。笠井直美「北

京大学図書館蔵『忠義水滸全傳』——「万曆袁無涯原刊」情報の一人歩き——」(『名古屋大学中国語学文学論集』第二十一輯、二〇〇九) 参照。

<sup>8</sup> 所謂崇禎本『金瓶梅』は(一)(七)は充たすので、これに準ずる性格のものとも見ても良いかもしれない。また、管見の限り四大奇書以外の章回小説には(一)(八)を全て充たす版本は無い。

<sup>9</sup> 廣澤裕介「明末江南における李卓吾批評白話小説の出版」(『未名』二十四号、二〇〇六)。

<sup>10</sup> 目録と本文とで回目が完全に一致する『西遊記』の木版本は管見の限り他に無い。なお、『三国演義』には『李卓吾先生批評三国志真本』と題し、他の李卓吾評本とは図も眉批も異なる新種の版本がある(北京師範大学図書館、イェール大学図書館、台湾大学図書館等蔵。金注5項目を初めとして従来は宝翰楼本と呼ばれていたものだが、近年の研究でその呼称には些か問題があることが明らかになって来ている。本論第五章注115参照)。してみると、その流行と同時期に甲本の版木を手に入れた書坊が、最低限必要な修版や補版を行った他に、それにあやかうと目録だけは完全に改め、新版に見せかけて印行した後修本が奥野李本なのだろう。西陵天章閣刊本『李卓吾先生批點西廂記真本』(慶應義塾大学附属研究所斯道文庫、天理大学附属図書館等蔵)に崇禎十三年の序があるので、『李卓吾先生批評三国志真本』の初刻や奥野李本の印行も概ね崇禎順治間、下がっても康熙前期辺りまでと見ておきたい。

<sup>11</sup> よって、本文を重視すれば覆刻本と称せるし、批評を重視すれば翻刻本ということになる。なお、目録は内閣李本と同系統で、傍批の数も内閣李本の眉批より約一四%少ないが、奥野李本の眉批よりは多い。一方、本文の字句が内閣李本と異なり奥野李本と一致する箇所が複数ある。よって、乙本の底本は内閣李本より後かつ奥野李本より前に印行された甲本と思われる。

<sup>12</sup> 田中巖「西遊記の伝本」(『横浜大学論叢・人文科学系列』第八卷第三号、一九五七)。

<sup>13</sup> 本章の初出論文とその中国語版では巻一第一・二葉は⑤⑥が同版で③のみ異版としてしまったが、その後出版された『第三批国家珍贵古籍名録図録』(国家図書館出版社、二〇一二)掲載の⑤の巻一第一葉の書影は明らかに③と同版で⑥とは異版であった。筆者のマイクロ閲覧時の見誤りと思われるので訂正する。

<sup>14</sup> 磯部彰『西遊記』資料の研究(東北大学出版会、二〇〇七)第七章「明末清初『西遊記』諸刊本と絵画について」。

<sup>15</sup> このほか、李時人「『西遊記』版本叙略」(同氏『西遊記考論』所収、浙江古籍出版社、一九九一)は「英国大英博物館也藏有一残本、僅存三、五、八、十三等卷」とも記し、曹炳建「『西遊記』現存版本系統叙録」(『淮海工学院学报(社会科学版・學術論壇)』第八卷第一〇期、二〇一〇)も原本未見のままそれを踏襲する。Robert K. Douglas「Supplementary catalogue of Chinese books and manuscripts in the British Museum」(the British Museum, 1903) 六〇頁に「邱長春」の作として「西遊記 Se ye w ke. "An Account of the Adventures of Heuen Tsang in the West" [1750?] 8°. 15271.e.13. Imperfect, containing only Keuen 3, 5, 8, 13」と著録されるもの(筆者未見)を指すと思われるが、ここからは李卓吾の評があるとの情報は読み取れない。李時人前掲論文は中国国外所蔵の版本は大半を未見のまま著録しているため情報に誤りが非常に多いのだが(その多くは日本語の読解力の限界によると思われる)、もしこれが正確な情報であれば、分巻本ということは甲本・乙本・丙本ではありえず、閩齋堂刊本か、補説で述べる丁本か、或いは未知の李卓吾批評本系版本かのいずれかということになる。また、二〇〇九年八月に孔夫子旧书网の在線拍賣に封面に「道光七年重鐫」吳承恩先生原著／李卓吾先生批評」等と記すものが出品されたこともあるが、道光

刊本が吳承恩原著と記すことを怪しむまでもなく、中州書画社影印本に黒で刷られた歷博李本の路工氏の蔵書印が巻首にそのまま見えており、明らかな贋作であった (<http://www.kongfz.cn/detail.php?b=his&itemId=3249108>、二〇一一年一月二十日閲覧、二〇一六年三月時点ではリンク切れ)。

<sup>16</sup> なお、吳聖昔注3論文は『明清善本小説叢刊』所収影印本と中州書画社影印本を比較して、両者は全く同じ活字のセットを使つて別々の時期に刷られた関係にあると判断している。だが、影印本のみによるため判定が難しかったのだろうが、両者とも明らかに互いに異版の関係にある木版本であつて、活字印本ではない。

<sup>17</sup> 瞿冕良『中国古籍版刻辞典(増訂本)』(蘇州大学出版社、二〇〇九)参照。

<sup>18</sup> なお、金注5項目や廣澤注9論文が吳観明本に先行する可能性があるとする劉君裕本の図は、細部の意匠は時折異なるが構図は全て吳観明本と同じで、どちらが周曰校乙本または同丙本を直接参照した先行する図なのかは俄かには判じ難い。劉君裕本には本章第三節でも触れる。

<sup>19</sup> 拙稿「唐氏世徳堂と周曰校万卷楼仁寿堂の章回小説刊本の覆刻及び後印の事例について」『中国古典小説研究』第十六号、二〇一一)参照。

<sup>20</sup> 梁瀟嫻『李卓吾先生批評三国志真本』(宝翰楼本)の挿絵について——合戦場面の図を中心に——(瀧本弘之編『中国古典文学挿画集成(六)・全相平話五種/三国志演義(宝翰楼本)』所収、遊子館、二〇〇八)参照。

<sup>21</sup> 本章の初出論文とその中国語版の公刊後に三槐堂本(イエール大学図書館蔵)を見つけたところ、封面に「雍正乙巳年(三年)夏鐫」及び「古吳(三槐堂/三樂堂/三才堂藏板)」と見えるが、中身は所謂藜光楼本であつた。その所謂藜光楼本は、刊年末詳ながら、康熙刊の所謂緑蔭堂本より本文の系統上新しいと見られて

いる(中川論『三国志演義』版本の研究』(汲古書院、一九九八)参照)。三槐堂本が所謂藜光楼本の初印本であるのか、或いは既存の版木を入手して付け替えたのかは今後の検討課題であるが、いづれにしても行間傍批を持つこの版は清刊本には違いない。

<sup>22</sup> 理論上は他に「丙本はDの形の李卓吾評初刻本を一旦そのまま重刻し、後からAの形に改めた」という推定も出来るが、重刻時に放置したものをわざわざ後から改めるとは考えにくく、可能性は低からう。

<sup>23</sup> 但し、清代に新しく編まれた唯一の文繁本である張書紳註本には、甲本や乙本ではなく丙本と一致する箇所が多い。

<sup>24</sup> いずれも十回ごとに書名は記すが、そこで巻を分かつわけではなく、あくまで不分巻である。丙本初版も同様であつたろう。

<sup>25</sup> 第五十二回第三・四葉は一枚の版木の表裏に彫られたもの。第九十一回第六葉の版木の裏面だったはずの同第五葉は、⑪⑫とも欠葉。

<sup>26</sup> この推測は、甲本には備わる事項が⑪⑫に共通して欠ける例が他にもあることから裏付けられる。例えば、⑪⑫は第七十五・八十一・八十五・八十六回の回末総批を欠くが、甲本・乙本・閩齋堂本は前二者には総批がある(但し、閩齋堂刊本の第八十一回総批は甲本より一文少ない)。後二者は欠く甲本が前二者のみを補つたとは考えにくいので、⑪⑫より早印の広島丙本には前二者があり、それが甲本の底本となつたのであろう。⑪⑫の前二者は甲本では文字が見える行が空白なので、丙本の版木には李卓吾の名が削られ広島丙本となつた後にも更なる削除があつたと分かる。

<sup>27</sup> 井上進「明末の避諱をめぐって」『名古屋大学東洋史研究報告』二十五号、二〇〇一)参照。

<sup>28</sup> なお、総批は丙本の文字を引き継ぐ上、丙本の「出」を「由」に誤る箇所である。また、泰昌帝の諱「常洛」は丙本・甲本どちらも避けない。

<sup>29</sup> 原文「數年前、溫陵事敗、當路命毀其籍、吳中鈔藏書板竝廢。

近年始復大行、於是有李宏父批點『水滸傳』『三國志』『西游記』『紅拂』『明珠』『玉合』數種傳奇及『皇明英烈傳』、竝出葉筆、何關於李？」。

<sup>30</sup> 林海權『李贄年譜考略』（福建人民出版社、一九九二）付録三。

<sup>31</sup> 原文「天啓五年九月、四川道御史王雅量疏、奉旨、李贄諸書、怪誕不經、命巡視衙門焚毀、不許坊間發賣、仍通行禁止。而士大夫多喜其書、往往收藏、至今未滅」。

<sup>32</sup> 上海圖書館藏。第五十一回途中から第五十五回途中までのみ存。『古本小説集成』に影印を収める中国国家図書館蔵本や、その後修本である内閣文庫蔵本と同版の通修本で、「李卓吾先生批評忠義水滸傳卷之〇〇」だった巻首題は全て行頭から空白無く「水滸傳卷之〇〇」に改刻され、巻末題の「李卓吾先生批評忠義」の部分と版心題の「李卓吾批評」の部分、及び回末総批の「禿翁」「李和尚」「卓吾」が全て削られて空白になっている。

<sup>33</sup> 瞿冕良注17書、金注5項目、廣澤注9論文、笠井注7論文、李國慶『明代刊工姓名索引』（上海古籍出版社、一九九八）など参照。

<sup>34</sup> 『孫目』、蘇興「談《李卓吾先生批評西遊記》的版刻」（『文獻』第二十七期、一九八六）、李時人注15論文など参照。

<sup>35</sup> 潘建國「新見巴黎藏明刊《新刻全像批評西遊記》考」（『文学遺産』二〇一四年第一期）。

<sup>36</sup> 潘氏注35論文にも注記されているが、この巻首題と版心題をめぐる問題に限っては、筆者の発見である。潘氏はこの論文の公刊に先立ち、二〇一三年八月の第十二届中国古代小説戲曲文献暨數字化学術研究会でその内容を口頭発表された。その研討会には筆者も列席しており、潘氏の會議論文に掲載されていた書影によって潘氏が気付いておられなかったこの点に気付き、後日私信にてお知らせしたという経緯がある。

図1 世徳堂本『西遊記』(浅野世本)  
卷十三第三葉裏・第四葉表

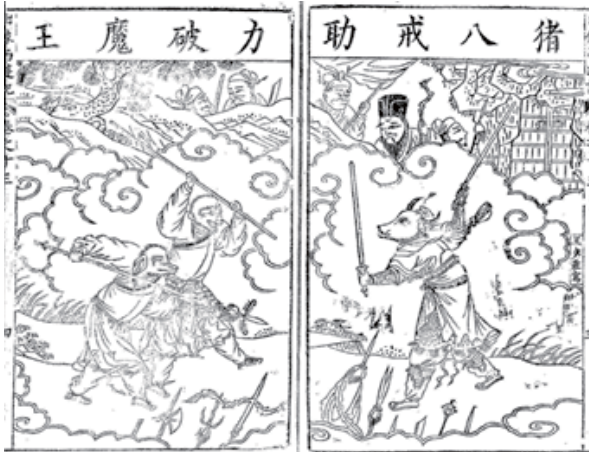


図2 浅野李本第六十一回第一図



掲載画像底本所蔵元

図1 / 2 / 5 . . . 広島市立中央図書館浅野文庫  
図3 / 4 . . . 名古屋市蓬左文庫  
図6 . . . 国立公文書館内閣文庫

図3 周曰校丙本『三国演義』  
卷七第十五葉裏・第十六葉表

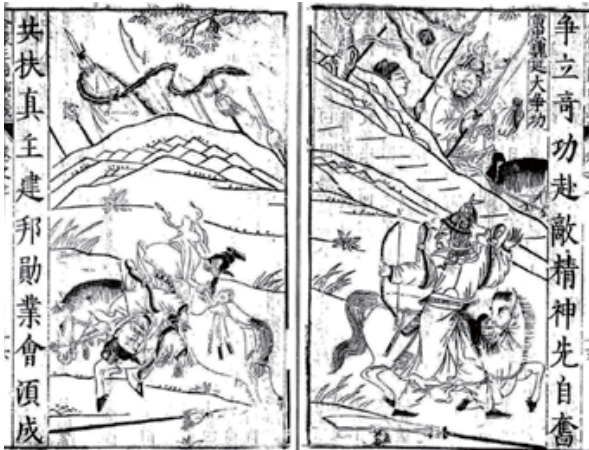


図4 吳観明本第六十二回第二図



図5 浅野李本第五回第五葉裏

身一變就變做赤脚大仙模樣前奔瑤池不多時直至寶閣按住雲頭輕輕移步走入裡面只見那里  
瓊香繚繞瑞雲縹緲粉瑤臺鋪彩結寶閣散氣風扇着騰騰形  
縹緲金花玉夢影浮沉上排着九鳳丹霞展八寶紫霓  
環粧絳橘金桌千花碧玉盆桌上有龍肝和鳳髓熊掌  
與腥屠珍羞百味般般美異果嘉祥色色新  
那裡鋪設得齊齊整整却還未有仙來這大聖點看不盡  
忽聞得一陣酒香撲鼻忽轉頭見右壁廂長廊之下有幾  
個造酒的仙官盤糟的力士領幾個運水的道人燒火的  
童子在那里洗缸刷甕已造成了玉液瓊漿香膠佳釀大

図6 内閣李本第五回第五葉裏

身一變就變做赤脚大仙模樣前奔瑤池不多時直至寶閣按住雲頭輕輕移步走入裡面只見那里  
瓊香繚繞瑞雲縹緲粉瑤臺鋪彩結寶閣散氣風扇着騰騰形  
縹緲金花玉夢影浮沉上排着九鳳丹霞展八寶紫霓  
環粧絳橘金桌千花碧玉盆桌上有龍肝和鳳髓熊掌  
與腥屠珍羞百味般般美異果嘉祥色色新  
那裡鋪設得齊齊整整却還未有仙來這大聖點看不盡  
忽聞得一陣酒香撲鼻忽轉頭見右壁廂長廊之下有幾  
個造酒的仙官盤糟的力士領幾個運水的道人燒火的  
童子在那里洗缸刷甕已造成了玉液瓊漿香膠佳釀大

表1 眉批(乙本のみ傍批)数の比較

丙本	甲本		乙本	閩齋堂本	四種 総計
	内閣李本	奥野李本			
1028	868 丙-218+58	687 内-189+8	748 甲-133+5	769 甲乙丙-334+17	1103

※「A-x+y」は「Aにはあるがその本には無い眉批(傍批)がx個、Aには無いがその本にはある眉批(傍批)がy個」あることを表す  
※閩齋堂本欄「甲乙丙」は「甲本・乙本・丙本のうち一つ以上に見える評」の総数(1086)  
※「四種総計」は「甲本・乙本・丙本・閩齋堂本のうち一つ以上に見える評」の総数



表2 世徳堂本・丙本・甲本・乙本 本文異同表 (第14回のみ)

回・葉・行	世徳堂本	丙本	甲本	乙本	備考
14-1a-3	詩曰	なし	なし	なし	世本のみ見える
14-1a-7	一粒	一粒	一粒	一粒	世本の誤字を丙本以降訂正
14-1a-8	萬个	萬法	萬法	萬法	世本より丙本以降の方が勝る
14-1a-9	所迦葉	釋迦葉	釋迦葉	釋迦葉	世本意味不通で丙本以降改める
14-1b-6	凍餓	凍餓	凍餓	凍餓	世本の誤字を丙本以降訂正
14-2a-1	朔腮	朔腮	朔腮	朔腮	丙本の誤字を甲本以降引き継ぐ
14-2a-2	録	緑	緑	緑	世本の誤字を丙本以降訂正
14-2b-2	一救	一救	一救	一人	意味はどちらでも通る
14-2b-4	願	願	願	願	世本と丙本の誤字を甲本以降訂正
14-2b-10	依言道	依言	依言	依言	世本の衍字を丙本以降削除
14-2b-10	走遭	走一遭	走一遭	走一遭	丙本以降文字を補う
14-3a-4	呢吽	唵吽	唵吽	唵吽	世本の誤字を丙本以降訂正
14-3a-10	監押	監押	監抑	監抑	意味はどちらでも通る
14-4a-2	相	像	像	像	通用字
14-4a-6	我再與你	我與你再	我與你再	我與你再	丙本以降語順を変更
14-5a-1	幾珠	幾點	幾點	幾點	丙本以降量詞を変更
14-5a-2	斑爛彪	斑爛彪	斑爛虎	斑爛虎	甲本以降若干ニュアンスが変わる
14-5b-2	再縫	再縫	去縫	去縫	意味はどちらでも通る
14-5b-9	那隻虎	那虎	那虎	那虎	丙本以降量詞を削除
14-5b-9	讓你自在	讓你自在	讓你自在	讓你自在	丙本以降「讓」の対象を補う
14-6a-2	諒於	量於	量于	量于	世本の誤字を丙本以降訂正
14-6a-4	見到	若到	若到	若到	意味はどちらでも通る
14-6a-7	十山	千山	千山	千山	世本の誤字を丙本以降訂正
14-6b-6	臺	臺	擡	擡	世本と丙本の誤字を甲本以降訂正
14-6b-7	方然	方然	方才	方才	意味はどちらでも通る
14-6b-9	不犯天光	不犯天光	不犯天光	不等天亮	乙本のみ若干の変更
14-6b-10	就行	就行	便行	便行	意味はどちらでも通る
14-8a-2	唐生	唐姓	唐姓	唐姓	世本の誤字を丙本以降訂正
14-9b-10	鼻唄愛	鼻唄愛	鼻唄愛	鼻唄愛	世本と丙本の誤字を甲本以降訂正
14-10b-6	禍	禍	禍	禍	世本の誤字を丙本以降訂正
14-11a-9	入了	入了	八了	八了	甲本の誤字を乙本も引き継ぐ
14-11b-3	上不	上不得	上不得	上不得	世本の脱字を丙本以降訂正
14-11b-3	𦉰	𦉰	𦉰	𦉰	甲本の誤字を乙本も引き継ぐ
14-11b-7	但	但	畧	畧	意味はどちらでも通る
14-12a-5	大王	大唐王	大唐王	大唐王	丙本以降の方が若干読み易い
14-12a-5	拜活佛	拜佛	拜佛	拜佛	意味はどちらでも通る
14-12b-9	默	點	默	默	丙本のみ字形の類似から誤刻
14-13a-4	云	云	雲	雲	通用字
14-13b-2	那是	那是	因是	因是	意味はどちらでも通る
14-13b-7	話兒	畫兒	畫兒	畫兒	世本の誤字を丙本以降訂正
14-15a-5	吃个兒	吃些兒	吃些兒	吃些兒	世本の単数形を丙本以降複数形に
14-15b-8	巳此	巳此	已是	已是	意味はどちらでも通る
14-16a-9	𦉰	教	教	教	「さけぶ」意なので丙本以降の誤字
14-16b-9	綿布	綿布	綿布	綿布	世本の誤字を丙本以降訂正

※「回・葉・行」は「回数―葉数(a:表、b:裏)―行数」を丙本準拠で示す。この回では甲本・乙本も同じ。

※異体字のみの相違は除いた。よって、世徳堂本と丙本の間で頻出する「裡」から「裏」、「个」から「個」、「咲」から「笑」、「烟」から「煙」などのような相違はこの表には含めない(なお、世徳堂本のこれらの字が全て丙本以降で書き換えられているわけではなく、そのまま残ることも少なくない)。

※字句が誤っている方を網掛けにした。どちらでも意味が通る場合は世徳堂本と異なる方を網掛けとする。

表3

李卓吾の名を冠する  
明刊本の年ごとの  
刊行点数

嘉靖 45 年 (1566)	1
万暦 9 年 (1581)	1
14 年	1
18 年	3
24 年	1
25 年	1
27 年	3
28 年	4
29 年	1
35 年	1
36 年	1
37 年	2
38 年	3
39 年	1
40 年	2
41 年	1
42 年	2
43 年	1
45 年	1
46 年	3
47 年	1
48 年	1
上記以外の 万暦年間 (1573～ 1620 途中)	18
天啓元年 (1621)	1
3 年	1
上記以外の 天啓年間 (1621～ 1627)	8
崇禎 13 年 (1640)	1
上記以外の 崇禎年間 (1628～ 1644)	2
その他明末	2
明(時期不 詳)	26

林海樞「李贄著作及  
評点、輯選諸書目録」  
に基づき作成。表に見  
えない年は全てゼロ。

## 第五章 周氏万卷楼と周氏大業堂の関係について——周如山をめぐる——

### はじめに

拙稿「唐氏世徳堂と周曰校万卷楼仁寿堂の章回小説刊本の覆刻及び後印の事例について」<sup>1)</sup>において、いずれも万暦二十年（一五九二）前後に金陵で刊行された、周曰校万卷楼仁寿堂万暦十九年刊『新刊校正古本大字音釋三國志通俗演義』十二卷（周曰校乙本『三國演義』・万卷楼仁寿堂〔万暦前期〕刊『新刊大宋中興通俗演義』八卷附二卷・唐氏世徳堂壬辰〔万暦二十年〕序刊『新刻出像官板大字西遊記』二十卷・同癸巳〔万暦二十一年〕序刊『南北両宋志伝題評』（巻首題：『新刊出像補訂叅采史鑑南宋志傳通俗演義題評』十卷『新刊出像補訂叅采史鑑北宋志傳通俗演義題評』十卷）・同『新刊出像補訂叅采史鑑唐書志傳通俗演義題評』八卷・同〔万暦前期〕刊『東西両晋志伝題評』（巻首題：『新鏤重訂出像註釋西晋志傳通俗演義題評』四卷『新鏤重訂出像註釋通俗演義東晋志傳題評』八卷）という六種の章回小説版本につき、前四者に覆刻本が存在することと、後二者の版本が後に周氏大業堂の手に渡ったことを示した<sup>2)</sup>。

また、本論第三章では、世徳堂の創業者は江西撫州府金谿県の人で嘉靖末期ないし隆慶年間に金陵三山街で刻書を始めた唐廷仁（字国寿、号龍泉、別称光禄）であり、万暦二十年代の後半に唐晟（字

伯成、号玉予、別称光禄）・唐景（字叔永、号貞予）兄弟に代替わりして、この第二世代を最後に天啓年間頃に活動を終えたと推定した。更に、唐廷仁と周曰校がしばしば共同出版を行う提携関係にあったことや、唐貞予と周氏大業堂の間にも提携があった可能性などを指摘した。

だが、周曰校万卷楼仁寿堂と周氏大業堂を同族と看做す根拠は、注1拙稿や本論第三章では示せていない。また、注1拙稿も含め、先行研究では周曰校の書坊名や活動期間に不明瞭な点が残っており、周氏大業堂に至っては主人が誰であるのかも定説を見ない。

序章で触れた通り、その大業堂主人として取り沙汰される人物の中に、周如山という人物がいる。盛於斯『休庵影語』『西遊記誤』条において、「此様抄本、初出自周邸、及授梓時訂書、以其數不滿百、遂増入一回、先生疑者、得毋是乎？」という百回本成立史に関わる証言をしている人物も周如山と言った。もし『休庵影語』の周如山が本当に大業堂主人で、しかも万卷楼と血縁となれば、万卷楼は世徳堂と提携関係にあったのだから、周如山が証言している「及授梓時訂書」というのが、世徳堂刊本の刊行時のことである可能性が生じないだろうか。そこで本章ではそれらの課題の解決を図りたい。

## 一、 周曰校と万卷楼・仁寿堂をめぐる

### (1) 対峰周曰校<sup>3</sup>——万卷楼主人にして仁寿堂主人

注1拙稿では、複数の周曰校刊本の封面・刊記・巻首等の記述を総合して、周曰校は「曰校」が名で字が「應賢」、「對峰」は号、「萬卷樓」と「仁壽堂」は共にその書肆名であると結論付け(六四頁)、籍貫が江西撫州府金谿県であることも指摘した(八一頁)。これら諸点について、ここでは紹介出来なかった例も交えて、改めて一通りの根拠を示しておこう。

まず、名と字と籍貫については、癸巳〔万曆二十一年〕序刊『新纂事詞類奇』三十卷(蓬左文庫等蔵)の巻一卷頭第二〇五行に低十格で「武進徐常吉士彰父輯／秣陵焦 竝弱侯父訂／平原陸伯元幼辛父次／繡谷周曰校應賢父勒」とあって、共に進士に及第しており他の資料によって籍貫・名・字が確認出来る徐常吉や焦竝の籍貫・名・字と「繡谷」「曰校」「應賢」がそれぞれ並んでいるのが最も分かり易い例である。このような各巻の巻頭に記される刊行者情報は、同じ高さに並んで記されている字句が必ずしも同じ事項を示しているとは限らず、例えば籍貫と号が同じ高さに記されるような場合もある。しかし、この例では全員について「××父」という標識によって「××」が字であることが明示されているし、周曰校の名・号・

籍貫のいずれも以下に見る他の例からも確認出来るので問題は無い。

江西金谿の人であることは、『勸戒圖説』四卷(蓬左文庫蔵)の巻

一第一葉表の全面を占める刊記に「萬曆癸巳(二十一年)三月穀旦

／後學 江西永新劉漢卿考訂／(以下の行低四格)陝西寧夏李 賁

考訂／浙江壽昌劉懋豫考訂／直隸昌平李友蘭考訂／江西金谿周曰校

重刊／秣陵上元王希堯謹書」(第二〇五行の「考訂」は第三行と第四

行の中間に一つだけ記す)という形で明記されている。前の例と併

せると周曰校自身が籍貫を「繡谷」としたり「江西金谿」としたり

していることになるが、後述の万曆癸未(十一年)刊『新刊東垣十

書』など、同じ書物の中で「繡谷」と「金谿」を混在させている例

もある。「繡谷」とは江西撫州府金谿県的美称であることが指摘され

ているので<sup>4</sup>、これらの例と併せて考えれば、周曰校が籍貫として

記す「繡谷」が江西金谿を指すことは決定的に明らかだと言えよう。

なお、世徳堂や富春堂を営んだ唐氏一族も江西金谿の人で、自らの

籍貫を頻繁に「繡谷」と記している(本論第三章参照)。

「対峰」と号したことは、『増定國朝館課經世宏辭』十五卷(国立

公文書館内閣文庫)「二本、うち一本は続集十五巻も備える」、蓬左

文庫等蔵)の序の後に置かれる「萬曆庚寅(十八年)孟夏金陵／後

學對峰周曰校勒／於萬卷樓」との隸書の刊記や、三欄に分かつ封面

の左右に「萬 曆 辛 卯(十九年) 冬 月／金 陵 周 對 峰



刊」、中央に大字で「翰苑新書」と記す『新編簪纓必用翰苑新書』前集十二巻後集七巻続集八巻別集二巻（北京大学図書館「二本、うち一本封面欠」、国立国会図書館「封面欠」等蔵）の総目末にある「（低五格）金陵 書肆 龍泉 唐廷仁 對峰 周曰校 鐫行」との裸刊記などによって分かる。

右に挙げた『増定國朝館課經世宏辭』の隸書刊記の次行には陽刻正方「周曰／校印」と陰刻正方「萬卷／樓主人」の二印が刻されており、周曰校が万巻樓主人として活動していたことが裏付けられる。また、『新編簪纓必用翰苑新書』の方からは、周曰校の書坊が金陵にあったこと、同書が世徳堂主人龍泉唐廷仁との共同刊本であることも読み取れる<sup>6</sup>。

また、『新編簪纓必用翰苑新書』は、殆どの葉の版心下部に「仁壽堂刊」とある。王重民『中国善本書提要』（上海古籍出版社、一九八三）三六四頁など、これを周曰校とは別の書坊と見る説もあったが、大尾に「萬曆丁酉（二十五年）／春金陵書／林周氏萬／卷樓重鐫」との長方木記がある『新刻京臺公餘勝覽國色天香』十巻（内閣文庫蔵）<sup>7</sup>が、各巻下層の巻頭第二、三行に低二格で「撫金 養純子 吳敬所 編輯／書林 萬卷樓 周對峰 綉鏤」（巻四は「綉鏤」を「繡鏤」に作る）と記す一方で、巻六のみ第三行を「書林 仁壽堂 周對峰 綉鏤」としていることなどにより、仁壽堂も周曰校の書坊名

と見ることが出来る<sup>8</sup>。

周曰校の活動期間については、注1拙稿に「周曰校刊本には刊年不詳のものも多いが、現時点で筆者が確認出来た範囲で刊年が分かる最も早いものは万曆十一年、遅いものは万曆二十八年である」と書いたが（六四頁）、その後の調査で刊行のより早い周曰校刊本を見つけており、後述する。

また、注1拙稿では「萬卷樓」と「仁壽堂」のいずれにも周曰校以外の同族と思われる人物が名乗って出版を行っている例があることも紹介した上で、「萬卷樓」が周氏一族の共用ないし世襲の屋号であり、それとは別に各人が「○○堂」を名乗っていた可能性や、「仁壽堂」も周氏一族共用の屋号であった可能性もあると推測したが（六四頁）、それ以上考察を進めることが出来なかった。これについては本章全体を通して検討してみたい。

## （2）敬素周希旦——もう一人の仁壽堂主人

まずは周曰校以外の仁壽堂主人の問題から見てみよう。注1拙稿でも触れた通り、医書の叢書である『新刊東垣十書』（台湾国家図書館等蔵）は、全体の首巻を兼ねる『脈訣』一卷以外の収録各書の各巻巻頭に見える刊行者名は、「明 繡谷 周氏 曰校 刊」（『辯惑論』巻上中下、『蘭室秘蔵』巻上中、『此事難知集』巻上）、「金谿 周曰校 刊行」（『湯液本草』巻上中）、「繡谷 周曰校 刊行」（同巻下）、

「明 金谿 周氏 曰校 刊」(『脾胃論』卷上中下)、「明 繡谷 對峯 周氏 刊」(『蘭室秘藏』卷下)、「金谿 周曰校 刊」(『局方發揮』)、「繡谷 周曰校 刊」(『醫經滄海集』)『格致餘論』となっており、表記は一定しないものの、全て対峰周曰校の名を書坊名は出さずに記している。

しかし、『脈訣』にだけは周曰校の名が見えず、その代わり巻頭第二・四行に低五格で「元紫虛真人崔 撰句／元東垣老人李杲校批／明書林周氏希旦刊傳」と見え、巻末に「萬曆癸未(十一年) 孟夏金陵／仁壽堂周敬素刊行」という裸刊記がある。また、この台湾国図蔵本には、左右三欄に分けて「元紫虛真人撰／東垣十書／大業堂梓」(中央大字、左は下寄せ)と記す白紙藍印の封面が附されており、中央上に魁星朱印、左下の「大業堂梓」に重ねて「本衙藏板／翻刻必究」の双边陽刻長方朱戳がそれぞれ捺されている。

真柳誠『『東垣十書』解題』の初出<sup>10</sup>ではこの「周氏希旦」と「周敬素」を周曰校のことだと解釈しているが、周希旦ないし周敬素の名が見える他の版本を見るに、それには賛同出来ない。

まず、「萬曆壬子(四十年) 歲春月之吉鍾山甄偉撰」と末尾に署名する「西漢通俗演義叙」を持つ『重刻西漢通俗演義』八卷(宮内庁書陵部蔵)は、三欄に分かつ白紙濃藍印の封面の左右に大字で「重刻官板西／漢通俗演義」、中央に下寄せで「大業堂重校梓」と刻し、

中央上に魁星朱印、中央下「重校梓」の三文字を重ねて「醉耕／堂／藏板」の陽刻正方朱印がそれぞれ捺されている。更に、巻二の第六・八・十三・十四・三十六葉の版心下部には「仁壽堂」と見える<sup>11</sup>。そして、巻一卷頭第二・四行に低十四格で「鍾山居士 建業甄 偉 演義／繡谷後學 徹弦周世用 訂訛／金陵書林 敬素周 希旦 校鈐」とある。これにより、周希旦と周敬素は確かに同一人物だと言える。

また、『象山先生全集』六卷(北京大学図書館蔵)は、「萬曆乙卯(四十三年) 夏金谿後學傳文兆識」と末尾に署名する「重刻象山先生全集叙」に同書は友人の「周希旦氏」が金陵で刊行するものだと旨が見え<sup>12</sup>、各巻巻頭第二・五行に「(低二格) 宋文安公金谿陸九淵子靜 著／(低八格) 宋門人傅子雲季魯 編次／(低八格) 明後學傳文兆維行 校閱／(低九格) 金陵周希旦元宰 梓行」とある(巻五のみ第五行「金陵」を「金谿」に作る)。「希旦」が他の三人の名と、「元宰」は字とそれぞれ並んでいるから、おそらく「希旦」が名で「元宰」が字であり、この本には見えない「敬素」は号と見るのが妥当であろう。

これによって、周曰校(字応賢、号対峰)と周希旦(字元宰、号敬素)は、それぞれ名・字・号が一揃いずつ別々に判明したことになる。『新刊東垣十書』に両者の名が共に見える以上は、同一人物が

ある時点で改名したとは考えられない。また、同時期に活動した建陽余氏双峰堂三台館主人の余象斗（字仰止、号文台、別号仰止子、三台山人など）<sup>13</sup>は「余象鳥」や「余世騰」という偽名も使ったとされる。これらの偽名は刊行者の「余象斗」と隣り合う行に批評者として並んで記されることもあるが、いずれも余象斗の字である「仰止」や号である「文台」を冠していることが偽名と看做される根拠である<sup>14</sup>。対して、周曰校と周希旦の場合はどちらも刊行者として記される名だし、「曰校・応賢・対峰」と「希旦・元宰・敬素」の組み合わせが崩れて互いに入り混じる例は目下のところ見出せないの  
で、同一人物と看做すべき積極的な根拠は無く、別人と考えておく  
のが穏当であろう。

本論第三章で万暦後半の唐氏世徳堂には玉予唐晟と貞予唐景の共同刊本・唐晟単独の刊本・唐景単独の刊本の三種があることが確認出来ているから、周氏仁寿堂とて対峰周曰校と敬素周希旦の二人が同時期に経営に参与していたとしても何らおかしくはない。それぞれ「書林 仁壽堂 周對峰」や「金陵仁壽堂周敬素」とはつきり署名する例がある以上、両者はいずれも仁寿堂の経営に関わっていたと認めるべきであろう。『重刻西漢通俗演義』の封面に見える大業堂や醉耕堂と周希旦仁寿堂の関係はひとまず措き、第二節で検討する。  
なお、周希旦の名・字・号のいずれかが見える刊本は、右の三種

以外には把握していない。そのため、万暦十年代初頭と四十年代前半とに出版活動を行っていたことは分かるが、その間の約三十年間の活動状況は一切不明である。近い時期に南直隸寧國府旌德県の人で嘉靖四十一年の進士の周希旦（字汝魯）がいるが、仁寿堂主人とは籍貫も字も異なるので、別人だろう。

また、現在筆者が把握している限りでは、周氏仁寿堂刊本に見える刊行者の個人名は周曰校と周希旦のみである。そして、管見の及んだ範囲で周氏仁寿堂の名が見える最も早い刊本は、刊行者の個人名は見えず序末に「萬暦元年孟秋月／周氏仁壽堂刊行」の蓮牌木記を持つ万暦元年刊『本草蒙筌』十二卷（内閣文庫蔵）であり、同じく最も遅いものは前述の万暦四十年序刊『重刻西漢通俗演義』である。

### （3）周曰校の活動年代と周曰校甲本『三国演義』の刊年

周曰校の活動年代は、近年の『三国演義』の版本研究において注目の話題となっている。周曰校の名が見える『三国演義』の版本は前述の周曰校乙本・周曰校丙本の他にもう一つあり、周曰校甲本と通称されている。甲本は中国社会科学院に存巻六・七・九の残本があるのみで刊年の手掛かりは無いのだが、甲本を底本とする朝鮮翻刻本が近年発見された。その朝鮮翻刻本は、現存最古の『三国演義』刊本だとされる所謂嘉靖本（嘉靖壬午本や張尚徳本などとも呼ばれ

る)と同じ修髯子「三國志通俗演義引」を備えるが、その末尾の署名の年次は、嘉靖本が「嘉靖壬午(元年)」であるのに対して、「嘉靖壬子(三十一年)」となっている(周曰校乙本・丙本も朝鮮翻刻本に同じ)。この年次によつて周曰校甲本は嘉靖三十一年に刊行されたと見る劉世徳氏の説<sup>15</sup>と、周曰校甲本は万曆十九年刊の周曰校乙本よりも刊行が遅れるとする陳翔華氏の説<sup>16</sup>と、周曰校甲本は周曰校乙本に先行するが刊年は万曆十年前後までしか遡らないだろうとする中川諭氏の説<sup>17</sup>が入り乱れているのだ。

客観的に見て、中川注17二〇一二年論文における本文の比較によつて、周曰校甲本が周曰校乙本に先行することはほぼ証明されている。そこで、問題となるのは周曰校が嘉靖三十一年に既に活動していた可能性があるのかどうかである。中川注17二〇一二年論文は、「もし周曰校甲本の刊行年が嘉靖三十一年であつたならば、(中略)周曰校が嘉靖・隆慶年間に出版した書物はなぜ一つも現存していないのであろうか。あるいは、嘉靖三十年頃から万曆十数年までの約四十年間、周曰校はなぜまったく活動していないのであろうか」(六九頁)と述べて周曰校甲本は嘉靖三十一年刊とする劉世徳注15論文に疑問を呈しているが、周曰校に他にどんな刊本があつたのかの具体例はあまり挙げておらず、活動年代も「万曆年間に活躍していた書肆であり、嘉靖年間にはまだ活動しておらず、書籍の出版も行つ

ていなかったはずである」(同前)という大雑把な推定に止まっている。

陳翔華注16論文は周曰校の活動年代をより綿密に絞り込んでいる。即ち、陳氏所見のものと伝聞によるものとを併せた十七の刊本の封面や刊記の字句を引用した上で、周曰校の活動が確認出来るのは万曆十一年から万曆三十四年の間だとする。

しかし、陳氏の挙げる十七例のうち、最も刊年の遅い万曆三十四年序刊『新刻全像海剛峯先生居官公案』四卷(台湾国家図書館、東京大学東洋文化研究所仁井田文庫、中国国家図書館等蔵)は、周曰校刊本の例とするには問題がある。同書は各巻巻頭第二、三行に低十二格で「晋人義齋李春芳編次／金陵萬卷樓虛舟生鐫」とあり、末尾に「(低一格)萬曆丙午歲(三十四年)夏月之吉晋人義齋／(低二格)李春芳書于萬卷樓中」と署名する「新刻海剛峯先生居官公案傳序」にも金陵の虚舟生が刊行したとの旨が見えるものの<sup>18</sup>、対峰周曰校の名はどこにも見えないのだ。虚舟生が誰の号なのかは不明で、周氏であるかどうかさえも定かではない<sup>19</sup>。後述の如く周曰校以外の人物が刊行した周氏万巻楼刊本もあるので、これを周曰校の活動年代の根拠とするのは不適当であろう。また、前述の通り仁寿堂も対峰周曰校と敬素周希旦の二人が名乗っているから、周氏万巻楼の活動年代・周氏仁寿堂の活動年代・周曰校の活動年代の三者は区別

して考える必要がある。

そこで、管見に及んだ中から周曰校自身が確かに刊行に関わったと認められる刊年の最も早い版本と、同じく最も遅い版本とを紹介して、陳翔華氏の唱える周曰校の活動年代に些か補正を加えたい。

まず最も早い版本だが、陳氏が挙げる万曆癸未（十一年）刊『卓氏藻林』八卷（アメリカ国会図書館蔵、筆者未見）に先行するものを一点見つけることが出来た。即ち、左右五欄に分かつ封面の中央に「周氏萬巻樓刊」と記し<sup>20</sup>、「（低二格）萬曆丁丑（五

年）春月吉旦／賜進士第資政大夫刑部尚書侍／經筵奉／命 藉田  
充九卿官 大閱分閱前南京／（低二格）戸兵部尚書叅贊機務都察院  
右都／（低二格）御史扶溝三川劉自強書」と末尾に署名する「古今  
醫鑑序」、「中憲大夫知江西南康府事／（低七格）鄢陵水山劉巡書」  
と末尾に記す同名序、「（低二格）崑／（低二格）萬曆四年歲次丙子  
孟冬之吉／（低六格）金谿後學龔廷賢書于有恒堂」と末尾に署名す  
る自序「敘古今醫鑑弁首」を持つ『新刊古今醫鑑』八卷（内閣文庫<sup>21</sup>、  
京都府立総合資料館蔵）である。巻一・三・四・五・六の各巻頭第  
二、四行に低十三格で「太醫院醫官金谿龔信編／（更に低五格）男  
廷賢續編／金陵書林對峰周曰校刊行」（巻四・六は第四行「林」が「坊」  
とあるが、巻七はこのうち第四行を「金陵書林竹潭周宗孔梓行」、巻  
八は同じく「金陵書林前山周庭槐刊行」としており、巻二はこの三

行に文字が全く見えない。巻七に見える竹潭周宗孔<sup>22</sup>と巻八に見え  
る前山周庭槐<sup>23</sup>はいずれも万曆初頭に単独でも刻書を行っている  
ことが確認出来るので、周曰校とは別人と見ておくべきであろう。  
従って、同書は周曰校・周宗孔・周庭槐の三者による共同刊行の周  
氏万巻樓刊本ということになる。序文は三つとも刊行の経緯に触れ  
るものだし、周宗孔も周庭槐も万曆一桁の時期に刻書を行っている  
ので、実際の刊行も序の年次からほどなくと思われ、万曆五年序刊  
と称して良いだろう。

一方、周曰校自身が刊行したことが確かな最も遅い刊本は、管見  
の限りでは陳翔華注<sup>16</sup>論文と同じで、封面上層に「皇明十二朝正史」  
と横書きし、その下に三欄に区切って「萬曆庚子歲（二十八年）  
／昭代典則／萬巻樓刊行」（中央は大字、左右は每字隔二格）と見  
え、各巻巻頭第二、四行に「（低三格）賜進士太子少保刑部尚書晉江  
黃光昇編輯／（低十四格）吳郡陸翀之校閱／（低十四格）金陵周曰  
校刊行」と記す『昭代典則』二十八卷（広島市立中央図書館浅野文  
庫、台湾国家図書館「二本、封面欠」等蔵）である<sup>24</sup>。

なお、杜信孚『明代版刻綜録』（江蘇広陵古籍刻印社、一九八三）  
及びその実質的な増補版に当たる杜信孚・杜同書『全明分省分県刻  
書考』（線装書局、二〇〇一）は、これより刊年の遅い「金陵三山街  
周曰校萬巻樓書林刊本」を合計三種著録しているが、いずれも従う

べきではない。まず万暦三十九年刊とされる『藥性歌括雷公炮製大全』十巻は大いに疑わしい<sup>25</sup>、万暦三十四年刊とされる『新鑄<sup>マ</sup>全像海剛峯先生居官公案』四巻に周日校の名が見えないのは前述の通り。残る崇禎元年（一六二八）刊とされる『本草蒙筌』十二巻は、前述した万暦元年周氏仁寿堂刊本ではなく、三欄に分かつ双边の封面左右に「重刻増補圖像／本草蒙筌<sup>土産藥性  
炮製俱全</sup>」、中央に「（低三格）萬卷樓周如泉刊行」と記し、「<sup>26</sup> 崑／崇禎改元之中和月既望／潭陽劉孔敦若樸子漫書于金／陵萬卷樓」と末尾に署名する「重刻本草蒙筌序」を持つ『圖像本草蒙筌』十二巻（内閣文庫、東京大学総合図書館、早稲田大学図書館等蔵）を著録したものであろうが、刊行者は対峰周日校ではなく周如泉なる人物である。

従って、周日校の確実な活動年代は、万暦五年から万暦二十八年の間ということになる。刊行者として周日校の名が明記されている書物は、別人による覆刻本や翻刻本を除いた上でなお三十版近くを確認しているが、右に挙げた以外で刊年の分かるものは、いずれも万暦十一年から同二十七年の間に収まっている。前述の刊行者の個人名を記さない万暦元年周氏仁寿堂刊『本草蒙筌』が周日校の刊行したものである可能性も考えられるし、万暦三十四年序刊『新刻全像海剛峯先生居官公案』の刊行者「<sup>27</sup> 盧舟生」が周日校晩年の別号であったというような可能性も否定は出来ないので、ひとまず少し幅

をもたせて、周日校の活動年代は概ね万暦初頭から万暦三十年前後までと見ておこう。嘉靖三十一年が孤立しているという中川氏の指摘は、間の空白期間こそ約二十年と少し縮まったが、確実な活動期間における出版点数の多さを踏まえれば、そこから大きく外れる嘉靖三十一年に周日校刊本があった可能性は一層低くなったと言えるう。

周日校が万暦五年にも活動していると判明した以上、周日校甲本『三国演義』の刊年が万暦一桁に遡る可能性も一応視野に入れるべきではあるうが、万暦十九年以降陸續と刊行された周日校乙本『三国演義』を始めとする周氏万卷樓や唐氏世徳堂の他の章回小説刊本とそう大きく間が空くとも考えにくいので、概ね万暦十年代前半の刊と見る中川説が最も妥当であろう<sup>26</sup>。

#### （4）万卷樓の後継者たち——玉印周文煥と如泉周文燿

続いて、先ほど登場した周如泉など、周日校以外の人物による万卷樓刊本について検討してみよう。

『新刊醫林狀元濟世全書』八巻は、唐本は完本の現存が知られておらず、大尾に「寛永十三丙子（一六三六）仲春吉旦／（低約八格）雕開／二條玉屋町村上平樂寺」の蓮牌木記を持つ和刻本（尊経閣文庫、京都大学附属図書館富士川文庫、早稲田大学図書館等蔵）によって伝わっている<sup>27</sup>。「…… 崑／萬暦丙辰（四十四年）夏金谿龔

廷賢自叙」と末尾に記す「濟世全書序」を備え、底本そのままに覆刻したと思しき三欄に区切った封面の左右に大字で「鏤雲林龔先生／新編濟世全書」、中央に下寄せで「金陵萬卷樓周玉印刊」とあり、各巻の巻頭第十二行に刊行者名を記すが、巻一と巻四では「金陵書坊萬卷樓存義堂玉印周文煥刊行」、それ以外の巻では「金陵書坊萬卷樓存義堂如泉周文燿刊行」<sup>28</sup>となっている。従って、この和刻本の底本は、玉印周文煥と如泉周文燿の二人が共同で刊行した万曆四十四年序刊の金陵萬卷樓存義堂刊本だったと推定される。

また、「題武科韜畧全書叙」の末尾に「崑／萬曆疆圉大荒落（四十五年）應鍾之吉／嘉興御冷錢士升撰」とある『精選詳註武科三場韜略全書』五卷<sup>29</sup>（内閣文庫蔵）は、左右三欄に分かつ封面の右下枠外に耳格を設けて「金陵萬卷樓周如泉刊行」と記し<sup>30</sup>、序と凡例と目録は全葉の版心下部に「萬卷樓刊」とあり、各巻巻頭第七行に「秣陵武學生如泉周文燿校鐫」と見える。

右の二例から、万曆末期には同族同排行であろう玉印周文煥と如泉周文燿の二人が金陵周氏万巻樓を經營していたことが窺い知れるが、両者が刊行したより早いものに、万曆三十年重刊『新刊萬病回春』八巻（内閣文庫蔵）がある。やはり同排行と思われる成印周文憲との三者共同刊行で、左右五欄に分かつ封面の中央には毎字隔半格で「萬曆壬寅仲春周成印重刊」とあるが<sup>31</sup>、各巻巻頭第七行に記

される刊行者名は、巻一・二・七・八は「金陵書坊成印周文憲刊行」、巻三・四は「金陵書坊玉印周文煥刊行」、巻五・六は「金陵書坊如泉周文燿刊行」となっている。「……萬曆丁亥（十五年）春正月庚寅金／谿龔廷賢序」と結ぶ自序「萬病回春序」や「萬曆十六年歲次戊子孟秋／之吉／（一行空白）／周藩海陽王崑湖勤煥撰」（署名の下に陽刻正方「海陽／王章」大印を刻す）と結ぶ「萬病回春後序」<sup>32</sup>などがあり、「萬曆戊子秋月歸安鹿門茅坤撰」と末尾に署名する「萬病回春序」には、撰者龔廷賢の姻戚である「對峰周君」に序を請われたと見える<sup>33</sup>。よって初刻本は万曆十六年序刊の周曰校刊本と推定されるが、現存は知られない<sup>34</sup>。また、慶長古活字本を始めとして周曰校刊本を底本とする和刻本が古活字でも整版でも何種類も残っているのだが、それらの中には中央に「萬曆丁酉（二十五年）歲秋月吉旦周對峰刊行」と記した左右五欄に分かつ封面を持ち、自序を除いた序跋計三篇の年次が一律に「丁酉」ないし「萬曆二十五年」となっているものが少なくない<sup>35</sup>。してみると、初刻本の他にも一つ周曰校自身の手による万曆二十五年重刊本が存在したと推定されるが、これも筆者未見。周文憲・周文煥・周文燿三者の万曆三十年重刊本は、序の年次を見るに、おそらく初刻本を底本としたものだろう<sup>36</sup>。

周文憲・周文煥・周文燿の三者とも、この万曆三十年重刊本『新

刊『萬病回春』では単に「金陵書坊」とするのみで、はっきりと万卷楼を名乗ってはいない。しかし、周文煥と周文燿が万曆四十四年には万卷楼を名乗って刻書を行っていること、同書が万卷楼主人であった周曰校が二度刊行していたものの重刊本であること、周曰校は万曆二十五年から二十七年までは毎年複数の刻書を行っている（陳翔華注16論文参照）のに対して、万曆二十八年の一種を最後に活動が確認出来なくなることなどを踏まえると、周曰校は万曆二十年代末に世を去るか隠居するかしており、それを期に周氏万卷楼は「文」字輩の世代に代替わりしたという可能性が高そうだ。「文」字輩はおそらく周曰校の子姪輩に当たるだろう<sup>37</sup>。先ほどは万曆三十四年序刊『新刻全像海剛峯先生居官公案』の刊行者「虚舟生」が周曰校晩年の別号であった可能性にも含みを持たせたが、仮にそうであったとしても、それはご隠居が久しぶりに仕事に手を出してみたという程度のこと、万曆三十年代にも現役バリバリの主人として万卷楼の経営を担っていたということではあるまい。

周曰校と「文」字輩との連続性は、万曆三十年重刊『新刊萬病回春』の内閣文庫蔵本が各冊一卷の装丁となっており、それぞれ表紙の左肩に刷題簽、その右に縹色の紙に刷った正方形の目録題簽（巻一内寸・八・七×七・九cm）を貼付していることから窺える。何故なら、各巻一冊の装丁で刷題簽と縹色の刷目録題簽をこの位置

に貼るという手法は、万曆十九年刊の周曰校乙本『三国演义』に見られたものだからだ<sup>38</sup>。また、封面上層に横書きで「萬曆乙未（二十三年）季冬吉」、左右三欄に区切る封面下層の左右に大字で「翰苑彙選歷／朝故事統宗」、中央に「金陵周氏萬卷樓鐫行」とあり、巻一卷頭第四行に低六格で「金陵 書林 對峰 周曰校 刊行」と記す『新鐫翰林攷正歷朝故事統宗』十卷（中国国家図書館蔵「欠卷九・十」）も、外題の他にその冊に収める数卷分の目録も記した巨大な刷題簽が各冊の表紙に貼られている<sup>39</sup>。更に、前述の万曆四十四年序刊の周文煥・周文燿万卷楼存義堂刊『新刊醫林狀元濟世全書』を底本とする村上平樂寺和刻本（例示の三伝本とも）や、万曆二十五年周曰校重刊『新刊萬病回春』を底本とする和刻本の多く<sup>40</sup>、更には当の万曆三十年周文憲・周文煥・周文燿重刊『新刊萬病回春』を底本とする無刊記の和刻本（堺市立中央図書館蔵）なども、いずれも刷題簽と正方形の目録題簽（但し紙の色は白）を各冊表紙に貼付している。してみると、これは周氏万卷楼刊本に二世代続けて多く見られた形式であり、それを底本とする和刻本にも影響を与えていたと考えて良からう。

右の「文」字輩の三者のうち、如泉周文燿は崇禎初年にも万卷楼主人として活動していることが確認出来る。即ち、先に挙げた『圖像本草蒙筌』十二卷（内閣文庫、東京大学総合図書館、早稲田大学



図書館等蔵）は、封面中央に「萬卷樓周如泉刊行」とあり、崇禎元年に劉孔敦が金陵万卷樓で書いた「重刻本草蒙筌序」を持つ崇禎元年序刊本であった。この劉孔敦序には旧版の版本は傷んでいる上に誤謬もままあるので自ら増訂して刊行するとの旨が記され<sup>41</sup>、各巻巻頭第四行にも低十三格で「潭陽後學劉孔敦 若樸 増補」と見える。

王重民『中国善本書提要』（前掲）は同書のアメリカ国会図書館蔵本（筆者未見）を著録し、「増補」とは原本には無かった薬物の図を補い、また熊宗立『歷代名医図』から主要な人物を選んで巻首に付したのだと指摘している（二五八頁）。王氏は特に言及していないが、増補の対象となった底本は、前述の万暦元年周氏仁寿堂刊『本草蒙筌』だったようだ<sup>42</sup>。この点からも万卷樓主人だけではなく仁寿堂主人でもあった対峰周曰校と如泉周文燿の連続性が窺えよう。王氏は続けて「萬卷樓爲周曰校在金陵所設書坊、如泉疑是曰校子姪輩、蓋崇禎初曰校已下世、時如泉主坊事也」との推測を示している。如泉の名が文燿であることや代替わりの時期など前述した別の例から補える点も多いが、正しい推測であったと言えるよう。

なお、王氏は更に「又劉孔敦建陽人、疑爲喬山堂劉龍田之子姪、時乃兄孔敦已成進士、喬山堂或已不繼續刻書業、故孔敦爲周氏幫忙也」とも記す。方彦寿『建陽刻書史』（中国社会出版社、二〇〇三）

三一九～三二五頁によれば、劉孔敦は万暦年間を中心に多くの刻書を行った喬山堂主人劉大易（字龍田、号煥文、一五六〇～一六二五）の三男で、天啓五年（一六二五）の進士劉孔敬（字若臨）が孔敦の長兄である。劉孔敦は次兄だが、こちらに進士及第の事実を確認出来ないのが、王氏が「時乃兄孔敦已成進士」とするのは「……兄孔敬……」の誤であろう。それはともあれ、余象斗の姻戚であったと思われる劉龍田<sup>43</sup>の息子が、崇禎初年に金陵万卷樓において周氏仁寿堂刊本の増補を手掛け、その際に建陽の先達である成化間の熊宗立の著作を利用していたというのは、金陵の書坊と建陽の書坊の関係を考える上で非常に興味深い事例である。これについては第七章で改めて掘り下げる。

#### （5）王重民説の再検討①——繼志齋は周曰校の書坊名か？

ところで、王重民氏は前掲『中国善本書提要』の『李卓吾遺書』十二種二十四卷（北京大学図書館蔵）の項目において、同書が八行十八字本と九行十八字本とが混在している叢書で、八行本には「萬卷樓刻」とあるものと「繼志齋刻」とあるものが一つずつあると著録した上で「繼志齋與萬卷樓并爲周曰校經營坊名」と述べ、更に九行本には「秣陵陳邦泰校梓」と見えるものが一つあると著録して、「疑此九行本均爲陳邦泰據周氏八行本翻刻者」との推定を示している（四二五頁）。

王氏は更に、書名葉（原文ママ。封面のことらしい）に「燕超堂藏板」、卷二十二末の牌記に「秣陵陳大來校梓於繼志齋中」とあるという『卓吾先生李氏叢書』十一種二十三卷（北京大学図書館蔵）の項目において次のように述べている（四二四頁）。

陳大來即陳邦泰、曾刻李贄著作爲十二種、據此牌記與刻書行款、疑是時繼志齋原刻八行版與陳刻九行版均已毀、故又據繼志齋原本翻刻爲此本。陳大來所經營之書坊當名爲燕超堂、蓋自周曰校書業經營衰落以後、陳氏燕超堂收買繼志齋、故是書牌記兼用二坊名也。

だが、『中国善本書提要』は周曰校が万卷楼主人であった根拠は前述の『増定國朝館課經世宏辭』の刊記と印記を著録することで挙げているが（四七八頁）、周曰校が繼志齋主人でもあったという根拠はどこにも挙げていない。繼志齋を周曰校の書坊名の一つとして挙げる先行研究は少なくないが、何故そのように看做し得るのか具体的な根拠を示したものは皆無であり、筆者は周曰校が繼志齋名義で刊行した版本は一つとして見たことがない。してみれば、繼志齋も万卷楼と同様に周曰校の書坊名だというのは、あくまで『李卓吾遺書』と『卓吾先生李氏叢書』に見える複雑な状況を理解するための王氏の推測であり、それが無批判に踏襲されて来たに過ぎないのではあるまいか。

一方、万暦間の繼志齋と言えば、大來陳邦泰が金陵で営み、多くの戯曲を刊行した書坊として言及されることが多く、その活動状況は根ヶ山徹「陳氏繼志齋と『綴白裘合選』」（『山口大学文学会誌』第四十九号、一九九九）に詳しい。根ヶ山氏は所見の大來陳邦泰刊本の刊記の年次が万暦二十六年から同四十年までの範囲に収まることから、「繼志齋が出版に携わったのは、万暦の中期から末年に至る約十五年から二十年の間であつたろうと考えられる」としている（七〇頁）。大來陳邦泰の名と繼志齋の名は、王氏が引く『卓吾先生李氏叢書』卷二十二末の「秣陵陳大來校梓於繼志齋中」や、根ヶ山氏の挙げる『重校義俠記』二卷（北京大学図書館蔵）の序末の「（低二格）壬子（万暦四十年）清明日陳大來手書重／（低二格）梓于繼志齋中」など、複数の版本においてはつきりと結び付いているのが確認出来る。対して、大來陳邦泰が燕超堂名義で刊行した版本は、これまた管見の限り見当たらないのである。

北京大学図書館所蔵の『李卓吾遺書』と『卓吾先生李氏叢書』を実見したところ、王氏の著録通りではあつたが、万卷楼と繼志齋の関係は、初めから周氏万卷楼と陳氏繼志齋が共同で分担刊行していたとか、周氏万卷楼の版木を陳氏繼志齋が手に入れて増補したとかいった可能性も考えられ、王氏のように考えなければ説明が付かない状況ではない。

根ヶ山氏の考証した陳氏繼志齋の活動年代は、初期は本節で得られた周曰校の活動年代の晩期と重なるし、末期は周氏「文」字輩が万卷樓主人として活動している最中である。してみれば、王氏の「周曰校の書坊の経営が衰退した後に大来陳邦泰が周氏から繼志齋を買い取った」という推測は成立し難い。よって、繼志齋は最初から大来陳邦泰の書坊であって、周曰校の書坊名の一つではなかったと見ておくべきだろう<sup>44</sup>。燕超堂が大来陳邦泰の書坊名だというのも疑わしい。

#### (6) 王重民説の再検討②——周曰校は太学生であつたか？

王重民『中国善本書提要』は、周曰校に關してもう一つ裏付けが取れない指摘をしている。『皇明大政紀』二十五卷のアメリカ国会図書館蔵本（未見）の項目において、封面に「萬曆壬寅歲（三十年）博古堂刻行」とある同書は秣陵の周時泰が金陵博古堂主人として刊行したものであることを示した上で、次のように述べているのだ（一〇八頁）。

余觀是書版式、極似周曰校萬卷樓所刻『昭代典則』。郭正域序是書亦云……「周生時泰<sup>45</sup>取朱職方・閔茂才所校豐城雷公禮所述洪武迄正德之『大政紀』、與洧川范公守己所續紀嘉・隆者梓之」、正域曾官南國子祭酒、呼時泰爲周生、則似時泰曾遊太學。據『昭代典則』祝世祿序、曰校亦曾遊太學、而曰校所識之朱職方、應

即校是書之朱錦矣。然則曰校與時泰、刻書同、交遊同、又同遊太學、余因疑其族屬極相近、萬卷樓與博古堂之營業關係、亦極密切也。

同名同卷数の北京大蔵本や東大東文研蔵本を見る限り、確かに同書の版式や字様は前掲の周曰校万曆二十八年刊本『昭代典則』に良く似ており、周時泰と周曰校が同族だったのではないかとの推定には異論は無い。また、周時泰が太学生（南京国子監生）であつたという点も、南京国子監祭酒を務めたことのある郭正域が万曆壬寅の序で「周生時泰」と呼んでいるという根拠が説明されているし、『中国善本書提要』の『穀城山館詩集』二十卷文集四十二卷（台湾故宫博物院現蔵）の項目には葉向高序に「歳甲辰（上原補……万曆三十二年）、余過穀城、公出其所梓詩命余序之。余謂公文何以不傳？公曰……力不任梓耳。余至白門、以告太學生周時泰；時泰請任斯役」とあると著録され（六四二頁）、明末刻本『新刻蒐集羣書記載大千生鑑』六卷（北京大学図書館蔵、未見）の項目では卷首に「南太學博古堂敬竹周時泰梓行」と見えるとする（三八六頁）ので、博古堂主人であつたという点と共に全く問題は無い。周時泰は「敬竹」と号したようだが、これは周希旦の号「敬素」と一字目が一致している。活動年代も重なるので、同世代の同族であつた可能性が高からう。問題は王氏が周曰校も太学生だつたとしている点である。『昭代典

則』の祝世祿序からそれが読み取れるとするのみで、具体的にいかなる記述によって太学生だと判断したのかは明示されていない。『昭代典則』の祝世祿序は、万暦二十八年周曰校刊本として著録されるアメリカ国会図書館蔵本（未見）の項目において「閩中恭肅黃公、起端簡之後、故有史材。撰述成一家言、名曰『昭代典則』。吾鄉周氏、見而悦焉、屬之剞劂。介武車駕朱職方問序不佞、余故從周氏之請、爲恭肅直序之」と引かれているのだが（一〇七頁）<sup>46</sup>、右の王氏の引用からは、刊行者「周氏」が武車駕と朱職方の二名（車駕と職方は共に官職）を通じて祝世祿に序を求めて来たこと、豫章（江西南昌府南昌県の古名に基づく異称）の人である祝世祿と同郷であったこと<sup>47</sup>などが分かるくらいで、周曰校が太学生であったという情報は得られまい。また、所見の諸伝本によって序の全文を見渡しても、刊行者に関する記述は他には全く見当たらなかった。

従って、『昭代典則』の序によって周曰校が太学生であったことが分かるというのは、王氏の誤記だと言わざるを得まい。また、『中国善本書提要』の他の項目にも、それを示す根拠となり得るような著録は見当たらない。そして、目下のところ筆者は周曰校が太学生であったことを示す資料は発見出来ていない。となれば、今後新たに確たる根拠が見つからない限りは、周曰校が太学生であったと認めるべきではなからう。

逆に、少なくとも万暦十九年の時点では周曰校は布衣であったと思わせる記述を見つけている。前掲『新編簪纓必用翰苑新書』の「皆／萬曆辛卯（十九年）秋日五岳山人沔／陽陳文燭撰」と結ぶ「翰苑新書序」に、同書は「梓人周曰校」が鈔本を入手し、それを底本として初めて刊行するものだと言われているのだ<sup>48</sup>。本論第三章で見た通り同書の共同刊行者であった唐廷仁は万暦二十四年唐廷仁世徳堂刊『歷朝翰墨選注』の序で「光祿龍泉唐君」と呼ばれているし、前述の通り周時泰も自らの刊本の序で「周生時泰」や「太學生周時泰」と呼ばれている。それを踏まえれば、周曰校がこの時点で官職を持っていたり太学生であったりしたならば、わざわざ「梓人」とは書かれないのではないだろうか。

#### （7）第一節まとめ

本節で万暦前期から金陵で刻書を行っていることを確認した対峰周曰校（万巻楼・仁寿堂）・前山周庭槐（万巻楼）・竹潭周宗孔（万巻楼）・敬素周希旦（仁寿堂）は、活動時期の近さやほぼ対等な立場で共同刊行を行っている例があることから見て、同族同世代ではないかと思われる。名や字や号の一字を揃えたり、或いは共通の部首を使うといった、同排行であることを示す分かり易い標識は彼らの間には見られないが、同排行でも共通の文字や部首を持たない例も皆無ではないし、父親ごとに共通の文字が異なるような例もある。

そんな中で、確認出来る活動年代が万暦三十年以降とやや遅れて現れる敬竹周時泰（博古堂）と、万暦十一年・四十年・四十三年の三回の活動が確認出来る敬素周希旦の号の一字目の共通は際立っており、両者は同排行で比較的親等が近かったのではないかと思わせる。そこで、仮にこの五人を第一世代と呼ぶことにしよう。

対して、万暦後期から崇禎年間にかけて周曰校の次代の万巻楼主人として金陵で刻書を行っていることが確認出来た玉印周文煥・如泉周文耀と、その二人との共同刊本がある成印周文憲は、三人とも「文」で始まる二字名で、かつ二人が名の二字目に火偏を使い、二人が号の二字目を揃えているという風に、名・字・号から同排行であることが見てとれるようになっていく。活動時期からして彼ら「文」字輩は第一世代の子姪輩に当たると思われ、第二世代と仮称しておく。第一世代と第二世代の間に具体的な血縁関係が確認出来るかどうかについては本章第三節で見ることにして、次節では先に周氏大業堂について考察してみよう。

## 二、周氏大業堂をめぐって

### （1）先行研究と問題点

周氏大業堂の主人には、杜信孚『明代版刻綜録』（前掲）に始まる周如山説と、張秀民『中国印刷史』（上海人民出版社、一九八九）に

始まる周希旦説がある。瞿冕良『中国古籍版刻辞典（増訂本）』（蘇州大学出版社、二〇〇九）は万暦間の大業堂主人として両者の名を共に挙げてその刊本を列挙し、更に康熙年間にも子孫の活動があるとしているが、辞典の性格上、両者を主人と看做した根拠や各刊本の書名以外の書誌情報は全て割愛されている（二六頁）。これに対し、許振東・宋占茹「明代金陵周氏家族刻書成員与書坊考述」（『河北大学学报（哲学社会科学版）』第三十六卷第二期、二〇一一）は、両者とも主人と認める瞿氏の処理に問題があることは明らかだと批判して、前述の宮内庁書陵部蔵『重刻西漢通俗演義』についての孫楷第『中国通俗小説書目』改訂版（作家出版社、一九五七）の著録を根拠に、大業堂主人は周希旦であつて周如山ではないと断じている<sup>49</sup>。

しかし、たとえ周希旦が確かに大業堂主人であつたとしても、それをもって同時期に周如山も大業堂名義で活動していた可能性を否定することは出来ない。それは本論第三章で見た唐氏世徳堂や、本章前節で見た周氏仁寿堂や万暦後期の周氏万巻楼などの例から明白である。よつて、周如山説の是非は、あくまで周如山の名が見える大業堂刊本が実際にあるかどうかによつて判断しなければならない。

また、崇禎十三年（一六四〇）の進士で、『印人伝』『尺牘新鈔』『因樹屋書影』等の撰者として名高い周亮工（字元亮・伯安・減齋など、号樸園・陶庵・櫟下先生など、一六二二〜一六七二）<sup>50</sup>につ

いての研究が近年盛んになっているが、その中で亮工の父の周文煒こそが大業堂主人として刻書を行った周如山その人であるとの説が唱えられている<sup>51</sup>。周文煒については、『文淵閣四庫全書』所収『江西通志』卷八十二所引『江南流寓志』に

周文煒、字は赤之、本と金谿<sup>も</sup>の人にして、大梁に生まる。生平<sup>ひと</sup>孤<sup>ひと</sup>り己が意を行ひ、屹立して移らず、曰く、「吾固より坦然たるものなり」と。因りて自ら坦然と號す。南雍に入り、選に就きて暨陽の簿を得るも、官を謝して歸り、秦淮に室を築きて曰く、「壯にしては五洩の遊人と為り、老ひては秦淮の釣叟と作らば願ひ足れり」と。子の亮工、號は樸園、庚辰の進士なり。中外を揚歷すること二十年、文章を能くし、尤も士を愛す。故に人士咸<sup>み</sup>な之に嚮往す。<sup>52</sup>

と見え、また黃虞稷『千頃堂書目』卷二十八「別集類・崇禎」に著録する「周文煒『詩數』」に対する黃虞稷の自注に「號如山、江寧人、亮工之父」とある。両者を総合すると、字を赤之、号を坦然とも如山とも言い、祖籍は江西金谿で、大梁（河南開封府祥符県の古名に基づく異称）で生まれ、南京国子監生（南雍は南京国子監の異称）の資格によって暨陽（浙江紹興府諸暨県の異称）の主簿となったが、官を辞して金陵に帰り、その後は在野で過ごした人物ということになる。江寧とは南京城内の南半分を含む県の名なので、『千頃堂書

目』の注は祖籍でも出生地でもなく、定住地をもって江寧の人と言っているであろう。

陳聖宇氏は注<sup>51</sup>所掲論文でこの周文煒を大業堂主人とされている周如山と同一人物と看做した上で、『明代版刻綜録』を中心とする複数の先行研究の記載によつてその刊行した版本を列挙する。だが、陳氏は誤りも多い『明代版刻綜録』の記述を無批判に受け入れており、諸版本を実見して本当に周如山の名が見えるかどうか確認する作業は必ずしも行っていないらしい。そこで、その作業を行いつつ、大業堂主人とされる周如山と、周亮工の父の如山周文煒とが、本当に同一人物なのかを検証してみよう。

## （2）大業堂刊本と如山周文煒

『明代版刻綜録』が「周如山大業堂」刊本として著録する七種のうち、万曆二十一年刊とされる『新刊出像補訂叅采史鑑唐書志傳通俗演義題評』八卷（東北大学附属図書館、中国国家図書館等蔵）は、注1拙稿で詳述した通り万曆二十一年序刊の唐氏世德堂刊本の版本を大業堂が入手して後印したもので、各巻巻頭第三行に低十四格で「繡谷周氏大業堂校訂」<sup>53</sup>（巻五以降「訂」を「梓」に作る）とあるが、刊行者の個人名は見えない。

万曆刊本とされる『李卓吾先生批評西遊記』は、本論第四章で詳述したパリ国立図書館蔵の李卓吾評乙本以外に該当するものが考え

られないが、三欄に区切った封面に「李卓吾先生原評／西遊記／金陵大業堂重梓」（中央大字、左は下寄せ）とあり、右下に「蘊古／堂／藏書」の陽刻正方小印が捺されるのみで、やはり刊行者の個人名は見えない。また、長らく万暦刊本と看做されていた同書は、実際には万暦三十年代の同名刊本（李卓吾評丙本）を翻刻した崇禎刊本（李卓吾評甲本）の更なる覆刻本であること、従って刊行は早くても崇禎年間で清代に下る可能性もあることを、本論第四章で論証した。

万暦四十六年刊本とされる『東西晉演義』十二巻も、注2拙稿で詳述した世徳堂刊大業堂通修本『新鏤重訂出像註釋通俗演義東西兩晉志傳題評』西晉四巻東晉八巻（北京大学図書館、中国国家図書館等蔵）を指すことは確実であるが、三欄に区切った墨印の封面に「新刻全像／東西晉演義／大業堂梓」（中央大字、左は下寄せ、左右每字隔一格）、各巻巻頭第三行に低十一格で「繡谷 周氏大業堂 校梓」<sup>54</sup>（西晉巻二・四にはこの行無し）とあるものの、刊行者の個人名は見えないし、刊年も印年も手掛かりとなる記載が無く、「万暦前期」刊〔万暦天啓間〕修〔明末〕通修と推定出来るに止まるものである。万暦刊本とされる『山海經釋義』十八巻も、「萬暦己未歲（四十七年）春月之吉哉生明龍巖山人／瀘郡趙維垣書」と末尾に署名する「山海經釋義跋」を持つ台湾国家図書館蔵本「二本、一本は跋欠」

を見る限り、一部の葉の版心下部に「大業堂」と記すだけで、刊行者の個人名は見えない。

しかし、万暦刊本とされる『袁中郎全集』二十四巻は、『梨雲館類定袁中郎全集』二十四巻に三欄に区切る封面の中央に下寄せで「大業堂周如山刊」と明記する伝本があり（台湾国家図書館「請求記号一二八八三」、上海図書館「請求記号T四五三〇六四―七五」等蔵）<sup>55</sup>、各巻巻頭第五行には下寄せで「南雍周文煒如山鑄」とし、その上方に大篇目を記す。前述の通り周亮工の父の如山周文煒は南京国子監生から諸暨県の主簿となっていたから<sup>56</sup>、同書の刊行者である大業堂主人「南雍周文煒如山」と同一人物であることはまず間違いない。万暦丁酉（二十五年）夏五月甘園浄居士題」と末尾に記した「原序」があるが、刊行時に書かれたものではないので、刊年の手掛かりにはならない。但し、周文煒は天啓三年には諸暨県に赴任しているので<sup>57</sup>、万暦二十五年から天啓三年の間の刊行ということと言える。

『明代版刻綜録』が周如山大業堂刊本だとする残る二種は未見だが<sup>58</sup>、他に『家傳太素脉秘訣』二巻（ベルリン州立図書館蔵）も、欄を分けない白紙濃藍印の封面の右半分に大字で「太素脉」とあり、左半分には五行に及ぶ告白を載せ、その末に「大業堂周如山謹識」と見える。更に、封面左下には前掲『重刻西漢通俗演義』の封面と

同一の陽刻正方「醉耕／堂」／藏板」朱印が捺され、各巻巻頭第二、四行には「青城山人 張太素 述／汀州醫官 劉伯詳 註／太學生 周文煒 梓」とある。これも刊年不詳ながら、周文煒が太学生を名乗る以上、天啓三年以前の刊行だということは分かる。

右に挙げた『梨雲館類定袁中郎全集』も『家傳太素脉秘訣』も封面にはつきり「大業堂周如山」と明記しているから、如山周文煒が万暦後期ないし天啓初期に大業堂主人として活動していたことは間違いないと確認出来た。また、両書とも自らが南京国子監生であることも明記しているので、周亮工の父と同一人物であることも確かめられた。

### (3) 醉耕堂主人周亮節——周希旦大業堂主人説の再検討

では、敬素周希旦と如山周文煒の二人がいずれも大業堂主人として活動していたと見れば良いのだろうか。直ちにそうとは断じられない。問題は敬素周希旦の方である。

確かに、前述の通り宮内庁書陵部所蔵の万暦四十年序刊『重刻西漢通俗演義』は、封面には「大業堂重校梓」、巻首には「金陵書林 敬素周希旦 校鋟」と見える。また、台湾国家図書館所蔵の万暦十一年刊『新刊東垣十書』も、全体の封面には「大業堂梓」、開頭に置かれる『脉訣』の巻首には「明書林周氏希旦刊傳」と見える。しかし、どちらの例においても敬素周希旦の名と大業堂の名は白紙（濃）藍

印の封面と巻首という別々の場所に見えており、同じ箇所「大業堂周希旦（敬素）」等と明記されているわけではない。前述の通り『重刻西漢通俗演義』には他にも封面に醉耕堂の藏板印が捺され、版心下部に仁寿堂の名が見える葉もある。『新刊東垣十書』でも、敬素周希旦は『脉訣』巻末の刊記で「金陵仁壽堂周敬素」と大業堂ではなく仁寿堂を名乗っているし、『脉訣』以外では各巻巻頭に記される刊行者は全て周曰校なのである。更に言えば、筆者の経験に基づく印象では、白紙藍印の封面が流行するのは概ね万暦末期から康熙前期にかけてであり<sup>59</sup>、そこから多少前後に外れる例はもちろんあるにしても、万暦十一年というのは些か早すぎる感がある。

してみれば、敬素周希旦が万暦年間に仁寿堂名義で活動していたのは確かであるから、書陵部蔵本『重刻西漢通俗演義』も台湾国図蔵本『新刊東垣十書』も「敬素周希旦仁寿堂刊本（後者の場合は敬素周希旦・対峰周曰校仁寿堂刊本）」の版木を如山周文煒大業堂が入手し、封面を白紙（濃）藍印のものに変えて後印したものであるという可能性も考えられるのではあるまいか。そこで、『重刻西漢通俗演義』の封面と『家傳太素脉秘訣』の封面に共に捺される「醉耕／堂／藏板」という藏板印から両書の印行年代の手掛かりが得られないか考えてみよう。

実は、醉耕堂とは周亮工の弟である周亮節（一六二二—一六七〇）



の堂号で、周亮節はその名義で刻書も行っていたことを陸林氏が指摘している<sup>60</sup>。陸氏は周在浚等輯『賴古堂尺牘新鈔二選藏弃集』<sup>61</sup>卷八「周亮節」の条に「靖公、河南祥符籍、江西金谿人、『醉耕堂集』と見えることを挙げた上で、「順治辛丑年（十五年）大梁周亮節新鐫」の『傷寒六書纂要辯疑』の巻首に同年冬月の「醉<sup>マ</sup>子<sup>マ</sup>」の序があり、そこに陰刻の「周亮節」印が刻されていることを根拠に、書坊醉耕堂の主人が周亮節であることは明らかだと論じている（一二三頁）。筆者の管見に及んだ『新刻傷寒六書纂要辯疑』四卷（プリンスン大学東亜図書館蔵）は封面と序を欠いており、陸氏の著録を確かめることは叶わなかったが、巻一巻頭第二・三行に低九格で「閩中童養學壯吾氏 纂輯／大梁 周亮節靖公氏 較閱」と記し、全葉の表面版心下部に「醉耕堂」とあるので、これだけでも醉耕堂と周亮節の関係は概ね窺い知れた。陸氏の示す序末の署名と印とを考え併せれば、周亮節が醉耕堂主人として刻書を行っていたことは確かに疑いあるまい<sup>62</sup>。

但し、陸氏がこれに続けて、「大業堂重梓」だという哈佛燕京図書館所蔵の『梨雲館類定袁中郎全集』の封面に「醉耕堂藏板」印が捺されているのを根拠として、「醉耕堂」とは周文煒・周亮節の父子共用の書坊名であったと判断している点には異を唱えたい。筆者はこの哈佛燕京蔵本は未見だが、沈津『美国哈佛大学哈佛燕京図書館中

文善本書志』（上海辞書出版社、一九九九）の著録を見る限り、前述の筆者所見の同名台湾国図蔵本及び上海図書館蔵本と同版ながら封面が異なるものようである<sup>63</sup>。してみれば、封面に「大業堂重梓」（傍点筆者、以下同）とある哈佛燕京蔵本は、単に「大業堂周如山刊」とある台湾国図蔵本などよりも後刷りに相違あるまい<sup>64</sup>。そして、台湾国図蔵本や上海図書館蔵本の「大業堂周如山刊」とある封面には、いずれも「醉耕堂藏板」印は捺されていない。となれば、哈佛燕京蔵本は如山周文煒大業堂刊本の版木をその次男周亮節が引き継ぎ、自らの営む醉耕堂の蔵板本として印行したものと理解すべきであって、如山周文煒が大業堂名義の他に醉耕堂名義でも刻書を行っていたという根拠にはなるまい<sup>65</sup>。

右のように考えたいのは、『梨雲館類定袁中郎全集』の封面の相違を合理的に説明出来るという理由の他に、前述の通り周亮節には『醉耕堂集』という詩文集があったと伝わるからでもある。個人の別集の題名として用いる堂号は、撰者個人を特定し得るものでなければ意味が無かるう。してみれば、醉耕堂というのは父から引き継いだ堂号ではなく、周亮節自身が初めて名乗ったものでなければならぬ。

となれば、前述の『家傳太素脉秘訣』も、『梨雲館類定袁中郎全集』の哈佛燕京蔵本と同様に如山周文煒大業堂が刊行した版木を靖公周

亮節醉耕堂が継承して印行したもので、そのために「大業堂周如山謹識」とある封面に「醉耕／堂／藏板」印が捺されているのだと考えれば良からう。周亮節は天啓二年生まれであるから、印年は早くても崇禎末期がいいところとなる。

また、封面に「大業堂重梓」とある『梨雲館類定袁中郎全集』の哈佛燕京藏本や傳斯年図書館藏本は、実際に版を改めたのではなく旧来の版木で後印しただけであったから、白紙濃藍印で「大業堂重校梓」と記す封面に「醉耕／堂／藏板」印が捺されている宮内庁書陵部藏の万曆四十年の序を持つ周希旦刊『重刻西漢通俗演義』の場合も、実際に大業堂による重刊本ではなく、既存の版木による後印に過ぎない可能性を考慮に入れるべきだろう。そして、そう考える場合、第一世代の仁寿堂主人敬素周希旦が万曆四十年代に刊行し、その版木が第二世代の大業堂主人如山周文煒に渡って、それを更に第三世代の醉耕堂主人周亮節が継承して崇禎末期以降に印行した後印本が書陵部藏本である、というすっきりとした理解が可能になる。ごく一部の葉の版心下部に「仁壽堂」とあるのも、これなら周希旦仁寿堂による刊行時には多くの葉に見えていたものを大業堂が版木を手に入れてから削り、その削り漏らしが僅かに残っているのだと理解することが出来て得心が行くし<sup>6</sup>、書陵部藏本は全体的に版木の大きな横割れが目立ち、刊行からそれなりの時間を経て

の印であることは疑い無いので、筆者はこの理解こそが正しいものだと考える。つまり、書陵部藏本『重刻西漢通俗演義』の「大業堂重校梓」の封面は周文煒に版木が渡って以降に附されたに過ぎず、巻首に見える刊行者敬素周希旦が大業堂も名乗っていたことを示す資料として扱ってはならない。

こうなってみれば、白紙濃藍印で「大業堂梓」と記す封面を持つ万曆十一年刊『新刊東垣十書』の台湾国図藏本も、実際に大業堂が版木を起こしたと正直に受け止める必要は無く、周希旦・周曰校仁寿堂刊本の版木を万曆末期以降に如山周文煒（またはその子孫）の大業堂が継承し、当時流行の白紙濃藍印の封面を新たに附して印行した後印本だと理解すれば良からう。

#### （4）前山周庭槐——元祖大業堂

ここまでで如山周文煒が大業堂主人として活動していたこと、敬素周希旦は大業堂を名義での刻書を行っていた訳ではないと考えるべきであることを確認したが、実は大業堂とはそもそも周文煒の父の堂号であったことが、朱天曙注57論文や陳聖宇注51論文などで指摘されている。

その根拠を確認しておく、まず黄虞稷『千頃堂書目』卷十「簿録類」に「周廷槐『大業堂書目』二卷」が著録され、「金谿人」という黄虞稷の自注が附されている。この前後に著録されるのは「祁承

燦『澹生堂藏書目』八卷」や「徐煥『徐氏家藏書目』七卷」といった個人の蔵書目録であるから、周廷槐『大業堂書目』二巻も同様に違いなく、従つてこの大業堂とは周廷槐の堂号（書齋名）だと理解出来る。

更に、『千頃堂書目』の撰者黄虞稷は、周亮工の長男である周在浚（一六四〇〜？）との共著『徵刻唐宋秘本書目』一卷（『昭代叢書』辛集等所収）があつたり、周亮工の没後に「溫陵門人黄虞稷撰」との署名でその事績を述べた「行状」（前掲『頼古堂集』附録所収）を書いていたり、周亮工父子と非常に関係の深い人物なのだが、その「行状」の冒頭には次のように見える。

先生の姓は周氏、諱は□□<sup>ママ</sup>、字は元亮、河南開封府祥符縣の人なり。先世は金谿の櫟下に居る。因りて自ら櫟園と號し、學者は之を稱へて櫟下先生と曰ふ。始祖の宋の進士匡、本と金陵に家するも、撫州軍事に參ずるを以て、撫の金谿に畱居す。先生が大父 鴻臚寺序班に封ぜられし前山公、諱は庭槐、始めて大梁に遷る。先生が父 布政に封ぜられし如山公、諱は文煒に<sup>およ</sup>迫びて、復た金陵に居す。太淑人に封ぜられし朱氏を娶り、先生を生む。

故に先生は大梁に籍するも、實は白下なり。<sup>67</sup>

宋代の先祖が金陵から撫州金谿の櫟下に、周亮工の祖父の庭槐（号前山）の代に金谿から大梁に、父の文煒（号如山）の代に大梁から

また金陵（白下は古地名に基づく金陵の異称の一つ）に、という周氏代々の転居の歴史が述べられているが、ここには亮工の祖父（つまり如山周文煒の父）は前山周庭槐だとある。

この周庭槐と、同じ黄虞稷の手になる『千頃堂書目』に見える大業堂の周廷槐とが同一人物であろうという訳だ。『千頃堂書目』の周廷槐は金谿の人とあつて籍貫が一致するし、「行状」と同じ『頼古堂集』附録に収める姜宸英「墓碣銘」では「公の祖 鴻臚寺序班を贈られし廷槐に至り、大梁に遊びて之を樂しみ、因りて籍を開封に占め、遂に開封の人と爲る」<sup>68</sup>と、周亮工の祖父の名を「廷槐」に作っている。その上で周文煒が大業堂名義で刻書を行っているのだから、『千頃堂書目』の周廷槐とは、確かに周文煒の父周庭槐と同一人物であるに相違あるまい。

そして、前山周庭槐と言えば、本章第一節（3）で見た通り、万曆五年序刊の周氏万卷楼刊『新刊古今醫鑑』を金陵において対峰周曰校・竹潭周宗孔と三者共同で刊行していた人物である。ついに万卷楼と大業堂の繋がりが見えて来たが、注23に挙げた通り周庭槐は自身単独でも刻書を行っている。その際に大業堂を名乗っている例は現時点では見つけていないが、ここで注目すべきは、磯部彰「閩齋堂刊『新刻増補批評全像西遊記』の版本」（『東北アジア研究センタ―叢書』第十九号、東北アジア研究センター、二〇〇六）の次の

指摘である。

建陽の版本は、例えば余象斗のように、その父親の書齋名や堂号を継承して、雙峰堂余象斗という称呼方法の他、自らの開発した堂号の三台館を並用することによって、その家督の継承、宗族での位置を示すことが慣例であつたらしく、閩齋堂の楊居謙も、また年代から見て父親の書齋名もしくは堂号を継承したと考えられる。つまり、楊閩齋と称した楊春元の子供であつたと推定されるのである（四頁）。

双峰堂の名で刻書を行った余象斗の父は、名を孟和・号を双峰と言ったことが、注13前掲『刻仰止子參定正傳地理統一全書』の巻十二「余仰止墓父母地」や、清末鈔本『書林余氏重修宗譜』不分卷（福建省圖書館蔵）<sup>69</sup>などによって確認出来る。双峰余孟和の刻書活動は確認されておらず、一方で双峰堂名義の刻書は余象斗の弟たちも行っているのでは<sup>70</sup>、磯部氏の指摘の通り、余象斗兄弟が父の号を書坊名に用い始めたものらしい。また、閩齋楊春元は盛んに刻書を行っているが、いずれも建陽楊氏累代の書坊名たる「清白堂」名義か、或いは書坊名を記さずに個人名「楊春元」や「楊閩齋」などでの刊行かであつて、「閩齋堂」という書坊名は楊居謙が初めて使つたものようである。

これらの例に照らせば、大業堂という書坊名は、如山周文煒が父

の前山周庭槐の堂号を継承して使い始めたものだったのであるまいか。余象斗兄弟や楊居謙がいずれも「大業堂」に相当する父の堂号をそのまま書坊名としたのではなく、「前山」に相当する父自身の号に「堂」を付けて書坊名としている点は異なるが、一脈通じるものが認められるだろう。前山周庭槐に現在知られていない大業堂名義での刊本があつたのではない限り、父の号を引き継いで書坊名とする習慣は、建陽特有のものではなかつたということになる。

#### （5）清代の大業堂——周亮工・周在浚・周在延・周麟举

本節（3）の注65で、大業堂名義での刻書業が如山周文煒の長男亮工を経てその子や孫へと相続されていと予告しておいたが、ここでその具体的な状況を紹介しよう。

その前に、周亮工及びその子孫たちには、大業堂名義で刊行した坊刻本の他に、進士に及第し高官に昇った一流士大夫としての周亮工の家刻本も存在するので、まずそれを確認しておく。周亮工はその詩文集が『賴古堂集』であることから分かる通り賴古堂という堂号を持つが、息子たち（上から在浚・在揚・在延・在建・在都・在青の六人兄弟<sup>71</sup>）を中心とする「在」字輩（第四世代）の面々は、亮工の晩年から没後にかけて、盛んにその著作を整理して賴古堂名義で刊行している。例えば、前述の『賴古堂尺牘新鈔二選藏弄集』は、全葉の表面版心下部に「賴古堂二刻」とあり、各巻巻頭第二く

四行に「(低十一格) 周在梁<sup>72</sup>園客／(低八格) 豫儀 周在浚雪客鈔／(低十一格) 周在延津客」と見える。注50前掲『周亮工全集』に影印される『閩小紀』『頼古堂名賢尺牘新鈔』『頼古堂尺牘新鈔三選結隣集』などは、いずれもこのパターンに当たる。

一方、周亮工の大業堂名義での出版物には、例えば左右三欄に分かつ封面に「頼古堂重訂／廣金石韻府／大業堂藏板」(中央大字)とあり、「廣金石韻府序」の末尾に「康熙九年(一六七〇) 歲次庚戌禊日／ 櫟下周亮工撰于頼古／ 堂」と記す朱墨套印本『廣金石韻府』五卷(北京大学図書館、哈佛燕京図書館<sup>73</sup>等蔵)がある。「周亮工大業堂」と明記まではしていないが、序を撰し封面右に自らの堂号を掲げる周亮工が刊行に関わっているのは確かであり、大業堂主人だった周文煒が没した順治十六年より刊行が遅い大業堂藏板本である以上、この例をもって周亮工が父から金陵書坊大業堂を継いでいたと見ても大過あるまい。また、周亮工は他にも第一節(4)で触れた『万病回春』を康熙七年に大業堂名義で重刻した上で序文を撰しており、これについては第三節で詳述する。

なお、周亮工は他に遙連堂という名義でも刻書を行っていた<sup>74</sup>。例えば、毎葉の版心下部に「遙連堂」とあり、巻首第二・五行に「南陵 盛於斯此公 著／豫章 甘文奎大猷／浚儀 周亮工元亮 訂／武林 洪秉銓玉衡」とある『休菴集』二卷(『叢書集成統編』第一七

三冊所収影印本、底本所在不明)がある。同書には末尾に「順治五年歲在戊子浚儀周亮工元亮氏／ 題於樵川之詩話樓」と署名する「南陵盛此公遺稿序」も収める。この盛於斯とは、紛れもなく『休庵影語』の撰者その人に他ならない。『休庵影語』の中にも周亮工に宛てた手紙が複数収められており、この二人が非常に親しい友人関係にあったことが窺える。してみれば、『休庵影語』で百回本『西遊記』の成立過程について語っている周如山とは、周亮工の父である如山周文煒、即ち金陵周氏大業堂主人に他ならないであろう。

また、周亮工の息子たちも大業堂名義での出版活動を行っている。例えば、白紙藍印の封面天頭に「翰林 館課」と横書きし、枠内を左右三欄に区切って「王荆石 沈蛟門兩先生叅定原本／經世宏辭／大業堂藏板」(中央大字、左欄下寄せ)とし、左下に陽刻正方「本衙／藏板」朱印を捺して、「例言」末に「癸卯(康熙二年)陽月既望豫儀周在浚雪客識」と記した『經世宏辭』十卷(内閣文庫蔵)である。これも「周在浚大業堂」と明記する訳ではないが、祖父と父の例から周在浚が大業堂主人として刊行したものと見て差し支えあるまい。右記の周亮工の大業堂名義での出版二例よりも刊行が早いので、父子で活動期間が重なることになる。或いは、周亮工の二例も、頼古堂名義の家刻本と同様に、刊行の実務は周在浚ら息子たちが担っていたとも考えられる。また、同書には第一節で前述の万曆十八年周日校

万卷楼刊『増定國朝館課經世宏辭』十五卷の覆刻と思しき葉が多い。周曰校万卷楼刊本が備える詩歌の巻を削っており、共通する巻でも収録篇数が減っているが、「例言」でそのことに触れているので、周曰校万卷楼刊本を底本とする節略本と見て問題なからう<sup>75</sup>。万卷楼と大業堂の間の継承関係を窺わせる重要な事例であり、特に、注75に引いた「例言」のうち「敢へて妄りに先輩の成せし書を刪るに非ざるなり」という文句は、周曰校が周在浚の同族の先輩に当たるところを明示する重要な証言である。同時に、直系の先祖ならば曖昧に「先輩」とはせずに血縁関係を明示する可能性が高いから、周曰校が周庭槐く周文煒く周亮工く周在浚と続く大業堂の血統の直系の先祖という訳ではないことをも窺わせるものとしても注目すべきだろう。周在浚から周庭槐まで遡る血統は既にはっきりしているから、この証言から確認出来るのは、周庭槐と周曰校が前節での推定通り別人であることと、周庭槐は周曰校の同族ではあるが、父や祖父や息子や孫など直系の親族ではないということである。やはり活動年代から両者は同世代と判断しておいて良いだろう。

また、在浚の弟の在延（一六五三？）も大業堂名義の刻書に關わっている。『朱子四書語類』五十二卷<sup>76</sup>（北京大学図書館蔵）は、双辺で欄を分かつため封面の左右に大字で「朱子四書／語類大全」、中央に下寄せて「金陵大業堂梓」と記し、中央上に魁星朱印、中央

下に陽刻正方「本衙／藏板」朱印を捺す。そして、「重刻朱子四書語類序」の末尾に「康熙戊午（十七年）六月朔日大梁後學／周在延謹識於師經堂」、四書それぞれの最初の巻の巻頭第二行に低十四格で「金谿後學周在延重校」とある。これも「周在延大業堂」のように明記されている訳ではなく、封面と序及び巻頭とに別々に名が挙がる形ではあるが、父や兄の例を考え併せれば、封面の大業堂とは即ち刊行者の周在延であつたか、そうでないにしても「在」字輩の誰かではあつたと見てまず問題あるまい。自序の末尾では「周在延謹識於師經堂」と署名しているが、師經堂というのが周亮工の賴古堂や周亮節の醉耕堂に相当する周在延個人の持つ堂号なのだろう。

更に、大業堂名義での刻書は周亮工の孫の代にも行われている。『歷科廷試狀元策』十卷（北京大学図書館蔵）は、欄を分けない封面の中央に大字で「狀元策」、左下に「大業堂重梓」とあり、「歷科狀元策序」の末尾に「康熙歲次丙戌（四十五年）桂月祥符周麟／舉默嘿氏重訂」という刊記がある。康熙十四年の時点で周在浚に「曾舉」と「仲舉」、周在延に「留舉」という息子があつたと伝わるので<sup>77</sup>、周亮工の孫たち（第五世代）は「舉」字輩と知れる。よって、この周麟挙は康熙十四年以降に生まれた周亮工の孫であろう。巻一卷頭第二、四行には「（低九格）巳丑狀元<sup>マ</sup> 漪園 焦 竑 編集／（低九格）巳丑榜眼 曙谷 吳道南 校正／（低七格）國朝甲戌狀元 芝

山 胡任輿 増訂」とある。北京大蔵本は、漫漶の進んだ葉と、それとは明らかに字様が異なり印刷良好な葉とが混在しており（巻一巻頭は後者）、明末刊本の後修本であろうと推測される。

右の康熙四十五年〔後修〕『歴科廷試狀元策』が、現在管見の限りにおいては周氏大業堂が刊印した書物として最も年代の遅いものである。結果として、本節冒頭で触れた大業堂は万暦間の主人の子孫が康熙年間にも活動しているとの瞿冕良『中国古籍版刻辞典（増訂本）』の記述が裏付けられる形となった。より詳しく言えば、大業堂名義の刻書を行っている人物は全て第二世代の如山周文煒の直系の子孫であり、文煒の曾孫の代までの活動を確認することが出来た。

#### （6）如泉周文煒と大業堂

これまでで、大業堂はおそらく如山周文煒が父の前山周庭槐の書齋名を自らの書坊名として使い始めたものであり、万暦後期から天啓初期にかけては如山周文煒、康熙前半にはその長男周亮工及び亮工の長男周在浚と三男周在延、康熙後半には亮工の孫であろう周麟举が大業堂名義での出版活動を行っていたことが明らかになった。しかし、大業堂の封面を持つ本の巻頭に彼ら以外の周氏の個人名が記される例は、実はまだ他にもある。

その一つが、『新鐫五福萬壽丹書』六篇（中国国家図書館「四本、うち二本未見」<sup>78</sup>）である。封面は二欄に区切り、幅広の右に大

字で「福壽丹書」、左に下寄せて「大業堂藏板」とある。「天啓甲子（四年）仲夏上浣銀臺文林郎筠／（低五格）陽伯受敷 祜拜書」と末尾に署名する「福壽丹書序」があり、第一篇に当たる「安養篇」の巻頭第二〇七行には低七格で「豫章雲林如虚子龔居中纂／南州友人實實子喻龍德鑒定／虎林門人中正子傳世方忝訂／莆陽門人清介子朱邦廉彙成／同邑門人廣惠子鄭之僑增補／金陵書林（隔三格）周如泉 刊」<sup>79</sup>とある。つまり、封面には「大業堂藏板」とあつて、巻首には周如泉の名が刊行者として挙がっているのだ。この周如泉とは、前節で見た第二世代の万巻楼主人の一人で、万暦後半から崇禎初年にかけての活動が確認出来た如泉周文煒と同一人物であろう。中国国家図書館のOPAC<sup>80</sup>によれば、同館が所蔵する四本の明版九行二十字本『新鐫五福萬壽丹書』のうち、筆者所見の二本と未見の請求記号一四一〇九八とは天啓間周如泉刊本だが、残る請求記号一五三五四は天啓間書林唐貞予・周如泉刊本であるという。もしこの著録が正しければ、「大業堂藏板」の封面を持つ三本は、天啓間に世徳堂貞予唐景と万巻楼如泉周文煒が共同刊行した本の版木が、後に周文煒直系の大業堂主人のうち誰かの手に帰して印行されたものかもしれない。もっとも、著録の真偽を確かめられていない現段階では憶測に過ぎないし、名からも号からも如山周文煒と同排行と推測される如泉周文煒は、もし周文煒の兄弟であれば父の書齋名を

引き継いで大業堂を名乗る資格を持っていることになるので、この例だけでは何とも言い難い。如泉周文燿については本章第三・四節で再考する。

### (7) 蓋印周文卿——光霽堂主人

大業堂の封面を持つ本の巻頭に別の周氏の個人名が記されるもう一つの例が、『新刊醫林狀元壽世保元』十巻の内閣文庫蔵本である。白紙濃藍印の封面を三欄に区切って「太醫院龔雲林著／壽世保元／大業堂重校梓」（中央大字、左は下寄せ）と記し、中央上に魁星朱円印、左下に「本衙藏板／翻刻必究」の双辺長方朱戳を捺す。各巻巻頭第二・五行には低十二格で「太醫院吏目金谿雲林龔廷賢子才編著／（更に低八格）男 龔定國全校／（同前）男 龔安國全校／（更に低二格）南雍太學生蓋印周文卿光霽堂鐫」と見える（第三・四行の「男」と「全校」は両行の中間に一つのみ記す）。

これと同版でやや印刷が早く、封面が異なる一本を尊経閣文庫が所蔵する。封面は本文共紙の墨印で、三欄に区切って左右に毎字隔半格で「祛病延年日暖杏林存造化／回生起死風高橋井仰神功」との宣伝文句を配し、その間に欄を分けずに「太醫院龔雲林著／壽世保元／光霽堂鐫」（中央大字、左は下寄せ）と記す。また、尊経閣蔵本は「崑／萬曆四十三年歲次乙卯春王正／月上浣之吉太醫院吏目金谿／雲林龔廷賢撰」と末尾に記す「壽世保元自叙」を持つが、

内閣文庫蔵本はこれを欠く。

要するに、尊経閣蔵本は万曆四十三年序刊の蓋印周文卿光霽堂刊本で、内閣文庫蔵本はその版木を使った大業堂による後印本である。よって、敬素周希旦仁寿堂刊『重刻西漢通俗演義』や同『新刊東垣十書』の版木を継承したのと同じく、大業堂が周氏一族の営む別書坊の刊行した版木を入手して後印した一例と捉えれば良からう<sup>81</sup>。因みに、尊経閣蔵本は各冊一卷で、毎冊の表紙に上下三層で上層に「壽世保元」、中層に巻数、下層にその巻の目録を記した刷題簽を貼付している。約二・六×四・二cmと大きさは一般的なものだが、刷題簽に目録を記すという点は第一節（4）で確認した周氏万巻楼刊本の特徴と一致し、両者が近い関係にあったことを窺わせてくれる<sup>82</sup>。

因みに、貞享二年（一六八五）洛陽青堂淺野久兵衛重惟刊『新鐫註釋出像皇明千家詩』四巻（京都大学人文科学研究所等蔵）の巻一巻頭第二・三行に低八格で「雲林汪萬頃徹可父 選註／南雍周文卿以忠父 校梓」とあるので、周文卿の字は以忠であったと知れる<sup>83</sup>。

周文燿と周文卿の密接な関係を示す例としては、筆者は原本未見ながら、『新刊醫林狀元壽世保元』とは逆に、巻首には如山周文燿の名が刊行者として記され、光霽堂の封面と朱戳を持つ本も現存するらしい。即ち、劉奉文『《国色天香》周文燿刻本補考』（『明清小説研



究』一九九一年第一期)の引く、『新刻京臺公餘勝覽國色天香』十巻の東北師範大学図書館蔵本(未見)である。巻一卷頭第二、三行に低二格で「撫金 養純子 吳敬所 編輯／大梁 周文煒 如山甫 重梓」と記し<sup>84</sup>、封面は天頭に横書きで「公餘勝覽」、枠内は左右三欄に分ち「撫金吳敬所編輯／國色天香／光霽堂梓行」(中央大字、左は下寄せ)、右下に長方朱戳「江南省狀元境內光霽堂周氏書林發兌」が捺され、下に判読不能朱方印二つがあるという。具体的な刊年の手掛かりは無いとのことだが、劉氏は明版の初印本と判定している。

同書には同版ないし覆刻と思しき刊年不明の伝本が非常に多いが、封面は多種多様である。例えば、アメリカ国会図書館蔵本の封面は、左欄以外は東北師範大学図書館蔵本と同文だが、左欄は下寄せで「敬業堂梓行」とあり、右下に卷子本を開いた形をあしらった朱戳「江南狀元境內／懷德堂周氏書／坊發兌」(この位置に判読不能の方印二つをあしらう)が捺されている。東京大学東洋文化研究所双紅堂文庫蔵本はその覆刻本だが、封面は三欄に分けて左右に大字で「京臺新鐫公餘／勝覽國色天香」、中央に下寄せで「■堂重校梓」(■は墨格)とある。底本の所蔵元が不明の影印本『中国風流小説叢書第七輯・国色天香(上・下)』(鬼磨子書房、一九八〇)は封面以外は東文研双紅堂文庫蔵本と同版で、封面は天頭に横書きで「公餘勝覽」、枠内は左右三欄に分ち「京臺新鐫／國色天香／同德堂藏板」(中央

大字、左は下寄せ)というものである。

劉氏は「江南省狀元境內光霽堂周氏書林發兌」の朱戳に注目し、周亮工が万曆四十年に金陵狀元境で生まれている<sup>85</sup>ので周文煒が金陵狀元境に住んでいたことがあるのは確かだとして、この朱戳を持つ東北師範大学図書館蔵本を周文煒光霽堂の原刊原印本と看做し、敬業堂など他の書坊名の見える封面を持つ本は周文煒自身の印行したものではないと断じている(一六三頁)。

だが、劉氏は前掲王重民『中国善本書提要』によってアメリカ国会図書館蔵本の封面と巻首の記述を確認しているものの、王氏が右下の朱戳を著録していないため、その存在は知らない状態での推論と思われる。「敬業堂梓行」と記されたアメリカ国会図書館蔵本の封面にも「江南狀元境內／懷德堂周氏書／坊發兌」の朱戳が見えるということは、敬業堂というのも周氏の営む書坊であったか(王氏は周文煒の書坊名だと即断しているが、その当否は明らかではない)、少なくとも周氏と関わりの深い書坊だったことは確かであろう。また、劉氏の著録する東北師範大蔵本の長方朱戳の特徴と、アメリカ国会図書館蔵本の朱戳とは非常に良く似ているので、周氏光霽堂と周氏懷德堂の間にも繋がりがあったものと思われる。なお、注73で述べた通り、前掲康熙九年序の『廣金石韻府』の哈佛燕京蔵本の封面には、「大業堂藏板」の文字に重ねて、より印刷の早い北京大蔵本

には捺されていない「懷徳／堂／圖書」印が捺されている。これも周氏懷徳堂で、大業堂の版木を継承して印行したのであろう。

因みに、狀元境は秦淮河に面した夫子廟のすぐ裏手の通りなので、前引『江南流寓志』の如山周文煒が官を辞してから「秦淮に室を築」いたとの記述と一致し、確かに周文煒が住んでいた所だと考えて良い。周亮工が生まれたのは周文煒が官に就く前であるから、遅くとも文煒が太学生となった頃には既に狀元境に居していたものと思われる。また「(周亮工)年譜」には「今居る所の宅」の一角に亮工の産室があると見えるから(注85参照)、亮工の没後もその長子在浚を始めとする一族はそこに住んでいたようだ。狀元境は清代後期には江右(江西を指す)の人が営む書坊の集積地として知られており<sup>86</sup>、明代以来の書坊の集積地として名高く唐氏世徳堂や唐氏富春堂も店を構えた三山街<sup>87</sup>からもほど近い位置にある。どうやら周氏大業堂は狀元境にあったと考えて良さそうだ。

『新刻京臺公餘勝覽國色天香』の光霽堂の封面を持つものと敬業堂の封面を持つもののどちらが先行するのかは、片方を未見であるためこれ以上は論じようがない。ただ、前述の『新刊醫林狀元壽世保元』の例を考えれば、周文煒と周文卿の間に密接な関係があったことは読み取れる。例えば、仮に劉氏の説が全て正しければ、光霽堂の経営には如山周文煒と蓋印周文卿の二人が共に関わっている。

たことになる。その場合、光霽堂とは余象斗における三台館のような、周文煒が父の書齋名を継承した大業堂とは別に自ら付けた書坊名であったと考えれば良からう。また、仮に光霽堂の封面を持つものの方が後印であれば、『新刊醫林狀元壽世保元』の場合とは逆に、如山周文煒が刊行した版木が蓋印周文卿光霽堂に渡って東北師範大学図書館蔵本が印行されたということになる。その場合、敬業堂が周文煒が自ら名乗った書坊名だった可能性が浮上してくる。いずれ現時点ではどちらとも言えない。

また、同書は本章第一節に挙げた周曰校万卷楼刊『新刻京臺公餘勝覽國色天香』の重刊本である。序末の署名からは年次が削除されており、底本が万暦十五年初刻本であったか、それとも万暦二十五年重刊本であったかは未詳だが、いずれにしても周曰校万卷楼と周文煒の繋がりを示唆する事例と言えよう。

#### (8) 周曰校から大業堂へ

大業堂が周曰校万卷楼刊本を後印ないし覆刻したと思われる類例として、他に三欄に分かつ封面の左右に「新刻官板／保赤全書」、中央に下寄せで「大業堂梓行」とある『保赤全書』二卷(アメリカ国会図書館蔵)がある。同書は卷上巻頭第二、五行に「(低十三格)醫生 李時中 増補／ 邑令沈堯中刊于陽春堂(隔二格)庠生 管 櫟 編輯／(低十三格)醫生 施文舉 校正／(低二格)原痘(隔九格)」

金陵 周曰校 刊行」とあり、「保赤全書引」の末尾には「崑／萬曆乙酉（十三年）仲夏之吉／賜進士第文林郎嘉禾沈堯中／執甫書于陽春堂」と署名する。

前掲王重民『中国善本書提要』は「此本版式、不似周曰校所刻書、……疑周曰校曾翻沈堯中本、此又大業堂翻周本也。若大業堂亦爲周氏所有、則當是周氏購得沈堯中原版、又竄入己名者也」と推定している（二七二頁）。確かに同書の字様は周曰校刊本にはあまり見られないものだし、卷上巻頭の署名の仕方を見ても、既に二行目に「邑令沈堯中刊于陽春堂」とありながら五行目にも「原痘」という篇目の下に「金陵 周曰校 刊行」と記すのは大いに不自然で、卷下巻頭では五行には篇目のみで周曰校の名は見えないことも考え併せれば、周曰校が沈堯中陽春堂刊本に自分の名を入れて翻刻しないし後印した可能性は高い。

また、この本は漫漶や断版など版木の損傷が非常に進んでいて、版木の制作から十年や二十年での印ではなさそうである。してみれば、王氏の推測とはやや異なり、「万曆前期」の周曰校翻沈堯中刊本（ないし沈堯中刊周曰校印本）の版木を如山周文煒ないしその子孫の誰かが相続し、版木の状態から推しておそらく清代に入ってから大業堂名義で印行したものである可能性が高いように感じる。

もちろん王氏の第一の案のように大業堂が更に翻刻したものであ

って、その版木が傷んでからの大業堂自身による後印本という可能性も完全に否定は出来ないが、いずれにしても周曰校自身が大業堂名義で印行したものだと思えるべきではない。前述の周文煒重刊『新刻京臺公餘勝覽國色天香』や周在浚大業堂節略重刊『經世宏辭』そして本章次節で詳述する周亮工大業堂重刊『重刻萬病回春原本』などと並んで、清初には如山周文煒に始まる大業堂の家系が周曰校万巻楼の版木や版權を相続していたことを示す一例として理解するのが適切であろう。

## （9）第二節まとめ

本節では周氏大業堂の刻書活動と、その歴代の主人について考察した。その結果、大業堂とは元々は第一世代で周氏万巻楼名義での刻書に加わったこともある前山周庭槐の書齋名であり、それを書坊名として用いるようになったのはその子の如山周文煒であると考えられること、大業堂名義での刻書はその子で崇禎十三年に進士に及第した周亮工、亮工の子の在浚や在延、更には孫の麟舉へと引き継がれて康熙後半までは続いていること、大業堂は夫子廟の裏手の状況に位置していたらしいことなどが分かった。また、万巻楼名義での刻書を行っていた如泉周文燿にも大業堂名義で活動していた可能性が残っている。

庭槐の代に金谿から祥符に籍を移していたことと、文煒の代以降

原則として金陵に定住したことが相俟って、周氏大業堂の刊本は刊行者の籍貫を大梁（祥符）としたり金陵としたり、また稀に祖籍によって繡谷（金谿）としたりという状況が生じている。第一節（3）で見た通り庭槐は金陵で刻書を行っているが、それが祥符に行く前なのか後なのかは次節で検討する。

更に、大業堂の「重梓」や「梓」を謳う封面を持つ本の中には、実際には第一世代の敬素周希旦仁寿堂や第二世代の蓋印周文卿光霽堂、或いは唐氏世徳堂などといった、別の書坊の刊行した版本を使つた後印本に過ぎないものが少なくないことも分かつた。そうした他書坊から手に入れた版本の一部は、如山周文煒大業堂自身による刊本の版本の一部と共に、文煒の次男の周亮節が営んだ書坊である醉耕堂へと引き継がれて利用されている。大業堂が周曰校万卷楼刊本の翻刻や後印も複数手掛けていることも考え併せれば、万暦年間に多くの人物が活動した周氏一族の刻書業は、清初には周庭槐に始まる大業堂の家系に収斂されていったと見ても良いだろう。

### 三、周氏万卷楼から周氏大業堂へ

#### （1）第二世代「文」字輩の血縁関係

万暦後期から崇禎年間にかけて、成印周文憲・玉印周文煥・如泉周文燿という「文」字輩の三人が第二世代の周氏万卷楼主人として

活動したことを第一節で示した。第二節で見た大業堂主人の如山周文煒と、光霽堂主人の蓋印周文卿は、名や号から判断して彼ら三人と同排行に相違あるまい。如泉周文燿には大業堂主人としても活動していた可能性があり、如山周文煒には光霽堂主人としても活動していた可能性があるなど、「文」字輩の間には互いの書坊名が錯綜しているように見える事例もある。

彼らのうちの何人かの関係について触れた先行研究に、陳聖宇注<sup>51</sup>論文と朱天曙注<sup>57</sup>論文がある。陳聖宇氏は大業堂主人として周文煒・文煥兄弟、万卷楼主人として周曰校と周如泉を挙げて<sup>8</sup>、「如」字が共通することや、周文煒に「與泉弟」（前掲『頼古堂尺牘新鈔二選藏弄集』巻八）という手紙があることを根拠に、周如泉を如山周文煒の弟か従弟であろうと推測し、大業堂が万卷楼刊本を翻刻や後印した例や、周文煒と周文煥が編輯した書物を万卷楼が刊行している例<sup>9</sup>があるとして、大業堂と周如泉万卷楼の間には極めて密接な関係があったと指摘する。更に、周在浚（周亮工）行述」（前掲『頼古堂集』附録）の

珀十一公は號二十四前山公諱庭槐を生む。不孝孤の曾大父爲り、先伯祖文卿公を以て文林郎鴻臚寺序班に封ぜらる。前山公大梁に遊び、遂に焉に家す。喻太夫人を娶り、三子を生む。長は即ち先封公誥封嘉議大夫福建布政使司左布政使如山公なり。<sup>90</sup>

という一段を引いて、「先伯祖文卿公」が「周在浚の父である周亮工の伯父」であり、喻氏の生んだ三人の子の長男が如山周文煒であるからには、周文卿は周文煒の異母兄であろうと考察している。

一方、朱天曙氏は、周亮工の祖父である前山周庭槐の息子は文煒・文卿・文煥の三人で、文煒がその中の長男だとしているが、その三人を前山周庭槐の子であると看做した直接の根拠は挙げていない。文卿と文煒の関係に関しては、陳聖宇氏の分析に軍配が上がる。

本章第一節で周如泉の名が文燿であることを確認した現在、筆者は如山周文煒・玉印周文煥・如泉周文燿の三人が同母兄弟であったと考えている。その根拠は、陳聖宇注<sup>51</sup>論文が引く、康熙六年の周亮工序を持つ劉思敬『葛詢錄』（中国国家図書館蔵）に収める周文煒の伝記の中の

父の應槐、數しば家の山に火光の熾然たるを夢み、子孫當に文を以て顯るべしと謂ひ、因りて諸子に名づくるに文を以てし、咸みなな火に従はしめ、公に字して赤之と曰ふ。<sup>91</sup>

との記述である。文煒・文煥・文燿という名はいずれも「文」と火偏の文字の組み合わせであり、まさしくこれと符合する。つまり、文煒の正妻喻氏の生んだ三人の名にだけ火偏が付き、蓋印周文卿は陳氏の考察の通り文煒・文煥・文燿の異母兄に当たるのである。これなら周文卿は周在浚の父の伯父だし、周庭槐は喻氏以外の生ん

だ子である文卿の功績によって文林郎（正七品陞授の散官）・鴻臚寺序班（従九品の官位）に封贈されることが可能で<sup>92</sup>、庭槐の正妻喻氏の子は三人で、その三人とも「文」と火偏の字を組み合わせた名前となる。この推測の傍証として、周亮工には「周亮工」年譜「行述」「行狀」などの『頼古堂集』附録の諸篇からは存在が知れず、それ故に朱天曙注<sup>57</sup>論文でも触れられていない周亮輔という弟がいたという指摘があることを挙げたい<sup>93</sup>。どうやら、『頼古堂集』附録に収める周亮工の伝記では、必要の無い限り嫡出子しか記載しない方針が採られているようだ。周文卿の場合は、亮工の祖父庭槐への官位の封贈に触れる関係で名前を出さざるを得なかったものの、喻氏の子ではないので数には入っていなかったということではあるまいか。

文煥と文燿の兄弟順は不明だが、この二人が共同で刊行している『新刊醫林狀元濟世全書』の封面には文煥の名だけが挙がっている。嫡出子の中では文煥が次兄で文燿が末弟であろうか。また、玉印周文煥・如泉周文燿の二人と共同で刻書を行ったことがあり、玉印周文煥や蓋印周文卿と号の一字を共有する成印周文憲は、文煒・文煥・文燿の従兄弟ないしは異母兄弟ということになる。小曾戸洋氏が推測していたように周曰校の子であった可能性も考えられるが、第一世代には周希旦や周宗孔らもいるので、誰の子であつ

たかは定かではない。

この第二世代「文」字輩の五人のうち、蓋印周文卿と如山周文煒は書坊を営む傍ら太学生でもあり、如泉周文燿は武学生でもあったことが、これまでに引いた彼ら自身の刊本の巻頭署名から知れる。更に、前述の通り周文煒は天啓三年に諸暨県の主簿に赴任しているし、周文卿も周庭槐に封贈されている鴻臚寺序班の官に就いたらしい。捐納によるものもあるかもしれないが、第一世代で太学生であったことが確認出来たのは活動開始の時期が第二世代と変わらない敬竹周時泰だけであつたのに比して、教育水準が上がっていると言つて良からう。第三世代では周亮工がめでたく進士に及第しているから、周氏一族は三世代かけて非常に順調に科擧の階段を昇り詰めたと言えよう。

## (2) 万卷楼グループ——金谿周氏の統合ブランド

前節において、第二世代の万卷楼主人として活動していた玉印周文煒と如泉周文燿が、大業堂名義での刻書を始めた如山周文煒の同母弟であつたことを確認した。彼らの父に当たる前山周庭槐は、第一節(3)で見た通り、万曆五年序刊『新刊古今醫鑑』を金陵において対峰周曰校・竹潭周宗孔と三者共同で刊行している。同書の封面には「周氏萬卷樓刊」と見えるが、この万卷楼とは万曆十八年の時点で「萬卷／樓主人」印を使っている周曰校だけを指し、残る二

人は万卷楼とは別書坊の主人として刊行に参画したと考えることも一応は出来るだろう。しかし、第一節(4)で前述の万曆四十四年序刊『新刊醫林狀元濟世全書』では玉印周文煒と如泉周文燿の兄弟がいずれも「金陵書坊萬卷樓存義堂」を名乗っていることを踏まえれば、万曆五年の時点では対峰周曰校・竹潭周宗孔・前山周庭槐の三者がいずれも万卷楼の経営に関わっていたという可能性も想定出来よう。周曰校ではなく周庭槐の息子である文煒と文燿の二人が万卷楼を継いでおり、特に如泉周文燿は万曆後期から崇禎初年まで長期に渡つて万卷楼主人として活動していたことを踏まえれば、後者の可能性の方が遥かに高いのではあるまいか。

そもそも、万卷楼というのは金谿周氏<sup>9,4</sup>が宗族単位で所有する蔵書楼全体の名で、その下に個人単位ないし父子兄弟など親等のごく近い数人単位で管理される仁寿堂や博古堂や大業堂や存義堂や光霽堂や遙連堂や頼古堂や醉耕堂や懷德堂などといった書斎があり、一人の人物が複数の書斎の管理に関わることもあつて、それらの書斎や万卷楼そのものが時として書坊名としても機能していたと考えるべきかもしれない。

このように考えれば、同世代と思しき対峰周曰校と敬素周希旦と共に仁寿堂を名乗つて刻書を行っていること(第一節(1)(2))、異母兄弟に当たる如山周文煒と蓋印周文卿の間で大業堂と光霽堂と

いう書坊名が錯綜しているように見えること（第二節（7））、仁寿堂から大業堂、大業堂から醉耕堂、光霽堂から大業堂、大業堂から懷徳堂などといった、同族ではあるが別名の書坊への版木の継承が多く認められること（第二節（3）（7））、大業堂が万卷楼刊本を翻刻や後修している例が間々見られること（第二節（5）（7））などの背景が理解しやすくなるし、玉印周文煥・如泉周文燿兄弟の「金陵書坊萬卷樓存義堂」という署名も、言わば「金陵書坊万卷楼グループの一員である存義堂」とでもいうような意味に捉えれば良いことになる。

実際の刻書の状況を見ると、第一世代は万曆初頭には互いに協力しあいつつ活動していたが、万曆十年代から二十年代には万卷楼主人を名乗り仁寿堂名義でも活動していた周曰校の刻書点数が突出して多く、万卷楼が一族の刻書業の中心を担っていた。第二世代が活動し始めた万曆後期にはまだ「万卷楼」が一族の統合ブランドとして機能していたようだが、やがて新規の刻書も既存の版木を利用しての後印も周庭槐の直系子孫ばかりが目立つようになり、庭槐の書齋の堂号に由来する「大業堂」が徐々に「万卷楼」に変わって一族の出版業を代表するブランドを担う形に変わって行ったようだ。周氏万卷楼名義で刊行された清刊本は目下管見に及んでいないので、万卷楼から大業堂へのブランド名の変更は、崇禎年間には完了した

のであろう。

要するに、大業堂は万卷楼の実質的な後継書坊であると言って良いだろう。これは、第二世代の中で特に活発に出版を行ったのが周庭槐の息子の如山周文煥と如泉周文燿であったことに加えて、文煥の子の周亮工が崇禎末期に進士となったことが大きく、庭槐の家系が宗族内における優位を確立したことによるのではないだろうか。

そして、康熙七年大業堂重刊『重刻萬病回春原本』に附される周亮工「重刻萬病回春原本序」からは、右の推測をかなりの程度まで裏付ける証言が得られる。それについて詳しく検討してみよう。

### （3）康熙七年大業堂重刊本『重刻萬病回春原本』について

その序の中身を見る前に、まず康熙七年大業堂重刊本『重刻萬病回春原本』それ自体について触れておこう。実は、康熙七年大業堂重刊本の現存は確認出来ておらず、それどころか周亮工「重刻萬病回春原本序」を持つ他の刊本も見つけていない。

にもかかわらず何故康熙七年大業堂重刊本『重刻萬病回春原本』の存在とその序の中身が分かるかと言うと、康熙七年大業堂重刊本の封面・「重刻萬病回春原本序」・「増訂便攷醫學善本總目類方」の三者を鈔写したものが、東京大学総合図書館鵜軒文庫所蔵の万治三年（一六六〇）林伝左衛門尉刊本『新刊萬病回春』八卷（請求記号V一―一八六三）の第一冊の初めに合綴されているからである<sup>95</sup>。

この和刻本自体は「明末」蘇州葉龍溪重刊本の系統を引くものなのだが<sup>9</sup>、本文に朱筆で校勘の書き入れがある。おそらく康熙七年大業堂重刊本を校勘に用い、そのついでに封面と前付を移録したのであろう。同書には各冊首に陽刻長方「名陽／堀氏藏」朱印が捺されているが、第一冊では鈔写部分にしか捺さないもので、尾張藩医を務めた堀家の誰かによる移録か、堀家以前の所蔵者による移録のどちらかである。

まず封面について見ておくと、天頭に横書きで「康熙七年重鐫」とあり、短辺の枠内は三欄に区切るが、右欄と中央欄は併せても全体の半分弱の幅しかなく、「龔雲林先生著／萬病回春原本」と記す（中央大字）。左欄が半分強を占め、長文の告白が記されている。告白の内容は後述する「重刻萬病回春原本序」の⑤の段落と重複するので、句読点を附さずに原文のみ挙げておくと、「是書原本可稱盡善乃有虎林奸賈攘竊增名善本謬稱重訂託／名王宇泰先生後識難誣仍標龔雲林所著如斯假借猶屬市中心但藥／物輕重確有折衷擅易名數戕生匪細因舊板撰刪茲特重刻告世要／與原本略無隻字稍異總以別於善本之流離無窮耳識者辨之／（低十六格）大業堂周府識」となっている。

#### （4）周亮工の証言

続いて問題の「重刻萬病回春原本序」全文の訓読を掲げよう。行

論の都合上、筆者において六つの段落に分けて示す。

①予が先世 藏書甚だ富み、蓋し萬卷樓の云ひ有り。其の事を始むるを溯るに、嘉隆の時に當り、風氣初めて開き、文教乍めて啓くも、古今珍異の書は、猶ほ未だ盡くは世に於て行はれず。而して先大父 荊榛草昧の中從り、創めて剞劂を行ひ、遂に一時に致し難きの藏をして、以て家に傳へ戸に奉るを得しむ。今に至りて事を始むるの功を推すに、必ず此の萬卷樓本を曰ふ。故に凡そ予が家傳に属す書は、海内群な自る所を知り、誣る可からざる所なり。

②其の書は尊經翼傳自りする外は、惟だ經濟に關わり民生に利する者のみ、始めて急ぎ流播を為すこと有り。而るに醫方は能く人を生かすを以て、尤も切要と為す。因りて予が郷の龔雲林先生に、廣く為に論著を搜討して書を成すを属し、之に先んずるに『壽世保元』を以てし、之に次ぐに『萬病回春』を以てし、之に次ぐに『古今醫鑑』を以てし、又之に次ぐに『雲林神殼』を以てし、皆 海内の宗則為り。今に至るも尚ほ『普渡慈航』一書の、未だ出ずに遑あらずして以て世に告ぐるもの有るなり。

③夫れ雲林先生は、昔の華陀・秦越人なり。予が先大父に於て外昆季為り、嘗て之と偕に汴に遊び、道は遂に汴に於て大ひに行はる。又金陵に遊び、道は更に金陵に大に行はれ、至る所神



醫の目有り。

④其の是の書を成すや、生平の心力を殫竭せり。而して予が先祖の雲林先生を延くや、亦た餘力を遺さずして之を奉ぜり。猶ほ記す、先君子が先大夫（父の誤か）の始めて經營に事ふるに述ぶるや、予が伯叔の輩に属して、魚魯を較正せしむ。維れ伯暨（およ）叔曰く、「此れ何ぞ人事に與（あ）からん、而して此を以て自ら瘁れんや」と。先祖曰く、「是の書の利濟の功は、天下の後世に在るなり。吾が後世の子孫、科名を以て大いに家聲を振るはす者有らば、咸な是の書に於て始めて之を基とするのみ。小子其れ之を識せ」と。

⑤數十年を越ゆるに、乃ち虎林の奸賈有り、其の事を成すを利とし、公に攘竊を為し、遂に『回春』一書を用て、増すに「善本」の名を以てし、初め王宇泰先生の重訂に託し、久しくして人の其の偽なるを識（し）るや、則ち又易ふるに雲林を以てし、奸詭百變、情形知る可し。予は其の市中心の總て罔利に帰するを原（ゆ）し、重く懲艾を加ふるに忍びず、姑く寛弛を與ふるを難しとせず。但し妄りに薬名を易へ、分數を竄するに任すは、其の失は僅かに數字に在るも、其の害は生を傷むるに至り、遂に天下に利するの書をして、而して天下に禍するの本（た）為らしむ。豈に予が先世の貽謀垂世の意ならんや。予因りて盡く改正を加へ、一方一名、

全て厭舊に従ひ、識（し）して原本と曰ふ。庶はくは疴を抱きて求むる者をして、温涼は投を誤るに至らざらしめ、君臣は節（みだ）を紊（う）れること無からしめて、而して弈世咸な其の福を食（は）まんことを。天下の覽者、其れ亦た慎みて緇素を辨じ、而して世を惑はすの書が為に中る所無からんことを。予因りて其の始末を述べ、天下の為に之を正告す。

⑥康熙七年戊申、管理江南江安等處督糧道・前總督京省錢法戸部右侍郎・都察院協理院事左副都御史 雲林の周亮工撰。<sup>97</sup>

#### （5）署名の検討

まずは⑥の段、即ち末尾の署名から確認しよう。この直後に占二行で陽刻正方「周印／亮工」回文印と陰刻正方「左執／法右／司農」印とが写されている。陰刻印の「左執法」は都察院協理院事左副都御史の、「右司農」は總督京省錢法戸部右侍郎の古名に基づく雅称である。「（周亮工）年譜」によれば、周亮工は順治十一年に「都察院左副都御史」、同十二年に「戸部總督錢法右侍郎」に任ぜられており、その後失脚して罷免されたこともあるが、康熙五年には「江南江安督糧道」となつて、康熙八年十月に弾劾されて職を去るまで在任している。つまり、右の署名の官歴は全く正確なものである。

また、籍貫を「雲林」と記しているが、これは金谿の地名であり<sup>98</sup>、ここでは金谿の異称として用いられているものと考えられる。第二

節（４）で見た通り、周亮工は祖先が金陵から金谿に移住し、祖父の前山周庭槐が祥符に移住して籍を移し、父の如山周文煒は金陵に定住している。そのため、祖籍によれば金谿、現在の籍によれば祥符、出生地や居住地によれば金陵の人ということになり、周亮工はどれを称することもあった。ここでその中から「雲林」を選んでるのは、『万病回春』の撰者である龔廷賢が金谿の人で雲林と号していた<sup>99</sup>のに因んでのことと考えられる。

このように官歴にも籍貫にも問題は無いから、この序は鈔写者による偽作ではなく、確かに康熙七年大業堂重刊本『萬病回春原本』から移録されたものと認めて良いだろう。注97に挙げた通り眉上に校勘書き入れが見られるので、この序を備える版本は康熙七年大業堂重刊本の他にも存在していた可能性がある。

#### （６）周氏万巻楼の創業時期

では、①の段から順に内容を見て行こう。①ではまず周亮工の祖先が蔵書に富んで万巻楼と称されたことを述べる。どうやら先ほど推定した通り、万巻楼とは本来は周氏の蔵書楼の名であったと見て良いようだ。続いて、今は亡き周亮工の祖父、つまり前山周庭槐が嘉靖・隆慶の間に万巻楼の名の下に刻書業を始めたこと、万巻楼本は広く流通し、周氏一族の出版物は非常に有名であることが述べられる。

周亮工のこの言を信じるならば、万暦五年から万暦二十八年までの活動が確認出来て万暦十八年に「萬卷／樓主人」印を使っている対峰周曰校は、嘉隆間に書坊としての万巻楼を創業した前山周庭槐からいずれかの時点で事業を引き継いだということになる。但し、周庭槐の嫡孫の言うことであるから、実際には第一世代の周庭槐・周曰校・竹潭周宗孔らが共同で創業したものを、自らの祖父が一人で始めたかのように潤色している可能性も考えられる。もっとひどければ、周曰校や周宗孔らが先に始めていたものを、後から参加した周庭槐の手柄にしてしまっているということも考えられなくはない。しかし、いずれにしても、はつきり万巻楼主人を名乗る周曰校の他に、周庭槐も万巻楼の経営に関与していたことを示す証言として受け取ることは問題あるまい。そうであれば、この二人と共同で万巻楼刊本を出版している周宗孔も同様だと認めて良からう。

また、権威付けのために創業を早く吹聴するのは良くあることだろうが、逆にわざわざ遅く吹聴することはまずあるまい。つまり、「嘉靖時」と言わずに「嘉隆時」と言っているということは、隆慶の創業だと言っているようなもので、仮に嘉靖だったとしても末期の数年が良いところであろう。そして、これまでに見た金谿周氏一族の刊本で最も早いものは、刊行者の個人名を記さない万暦元年周氏仁寿堂刊『本草蒙筌』であった。隆慶は六年までしかないから、

周氏が刻書を始めたのが万暦元年から十年と遡らない嘉靖と隆慶の変わり目頃だという記述は、事実在即していると見て良いのではあるまいか。

つまり、金谿唐氏と並んで明末清初の金陵を代表する書坊として知られている金谿周氏は、宋元以来連綿と続いていた建陽の余氏や劉氏などのように数百年の歴史を持つ老舗だったわけではなく、隆慶年間頃の創業で、万暦初年に急激に事業を拡大した新興勢力だったのである。周亮工のこの証言によって、第一節(3)で見た周曰校甲本『三国演義』を嘉靖三十一年刊とする説は、もはや完全に成立し得なくなったと言って良からう。

#### (7) 金谿周氏の出版活動と龔廷賢の医書

②の段では、万巻楼が正統な経書の他に経世済民に関わる書物を多く刊行しており、特に医書に力を入れ、同郷の龔雲林先生に編集を委嘱して、順に『寿世保元』『万病回春』『古今医鑑』『雲林神殻<sup>ママ</sup>』を刊行して好評を博したこと、『普渡慈航』だけは刊行予告まではしたものの出版は出来ずじまいであることを述べている。

金谿周氏一族(周氏万巻楼グループ)が医書の刊行に力を入れていたのが事実であることは、これまでに挙げた諸例に占める医書の割合の高さからも明らかであろう。金谿周氏は万巻楼の周曰校甲・乙本『三国演義』や『新刊大宋中興通俗演義』など、大業堂の封面

を持つ『李卓吾先生批評西遊記』『重刻西漢通俗演義』『重刻京本増評東漢十二帝通俗演義志傳』『東西兩晋志伝題評』など、そして醉耕堂の『康熙前期』刊『四大奇書第一種』六十巻<sup>100</sup>。(中国国家図書館、京都産業大学附属図書館小川文庫蔵)などといった章回小説も多数刊印しており、多くがその小説の重要版本であるため、周氏一族の書坊は章回小説研究の角度から注目されることが多い。本章もまたそうした視点から周氏一族の刻書に関心を寄せたものであるが、これらは周曰校甲本『三国演義』を除けば全て万暦十年代末以降の刊行であるから、章回小説は周氏万巻楼グループの経営が軌道に乗って十分に安定してから手を伸ばした分野だったと思われる。

これに対して、医書は周氏万巻楼グループの草創期からの押しも押されもせぬ主力商品であった。本章で確認出来た最も早い金谿周氏刊本である万暦元年周氏仁寿堂刊『本草蒙筌』からして医書であるし、同じく最も早い万巻楼刊本も、第一世代の対峰周曰校・竹潭周宗孔・前山周庭槐が共同刊行した万暦五年序刊『新刊古今醫鑑』であった。また、古典の医書も比較的早い時期から出しており、第一節(2)等で取り上げた万暦十一年周希旦・周曰校仁寿堂刊本『新刊東垣十書』もそうだし、万暦十二年には『重廣補註黃帝内經素問』二十四巻と『新刊黃帝内經靈樞』二十四巻を周曰校が刊行している(共に台湾故宮博物院蔵)<sup>101</sup>。医書は第三世代の周亮節醉耕堂に

至るまで継続的に刊行され続けており、周亮工の言う通り、医書こそが周氏万卷楼グループの主力商品であったと言つて良い<sup>102</sup>。

そして、その中でも特に目を引くのが、第一節(4)で見た通り周曰校の姻戚であった龔廷賢の編んだ医書である。これまでに挙げただけでも、第一世代の対峰周曰校・竹潭周宗孔・前山周庭槐が共同刊行した万暦五年序刊『新刊古今醫鑑』を始め、周庭槐が刊行した万暦十一年跋刊『新刻種杏仙方』、万暦十六年序刊の周曰校初刻本があったと考えられる『新刊萬病回春』、第二世代に移つて万暦四十三年序刊の蓋印周文卿光霽堂刊『新刊醫林狀元壽世保元』、玉印周文煥・如泉周文燿が万卷楼存義堂名義で共同刊行した万暦四十四年序刊『新刊醫林狀元濟世全書』などは、いずれも龔廷賢書き下ろしの周氏刊本であった。龔廷賢の編んだ医書は、他に『新鏤雲林神穀』四卷、『新刊魯府禁方』四卷、『雲林醫聖普渡慈航』八卷<sup>103</sup>の三書が知られるが、『新鏤雲林神穀』の初刻本はやはり周曰校刊本だし<sup>104</sup>、『新刊魯府禁方』も魯王府の官刻本の刊行作業を周曰校が請け負つたもの<sup>105</sup>、残る『雲林醫聖普渡慈航』は周氏の刊行ではないが、周曰校と提携関係にあった世徳堂主人龍泉唐廷仁と同排行の同族と思しき際雲唐廷揚によつて崇禎年間に刊行されている<sup>106</sup>。

これだけの数が立て続けに刊行されているということは、姻戚のよしみで採算度外視で出版してやつたというのではなく、それだけ

良く売れたということであろう。その売れ行きのほどは、『万病回春』に初刻本の他に万暦二十五年周曰校重刊本、万暦三十年成印周文憲・玉印周文煥・如泉周文燿重刊本、そしてこの周亮工序を持つ康熙七年大業堂重刊本があったことから想像に余りある。周氏万卷楼グループが短期間に急成長を遂げるに当たつては、事実上の専属作家となつていた龔廷賢の量産する医書が大きく貢献していたと考えて良いだろう。

右に挙げた諸版本の刊年や、注104に挙げた「雲林神穀序」や注105に挙げた「魯府禁方序」の記述などからすると、周亮工が万卷楼の既刊だとする四書の刊行順は『古今医鑑』『万病回春』『雲林神穀』『寿世保元』であつたはずだし、周氏一族が刊行した龔廷賢の医書は少なくとも他に三点あるが、その程度は記憶に頼つて書いた結果の些細な誤りと看做しておけば良く、序文全体の信憑性を揺るがすものではあるまい。

周亮工の挙げる四種の初刻本は、『新刊古今醫鑑』を除いていずれも万卷楼の名は明記していなかった。周亮工がそれらも含めて万卷楼の刊本として扱っているということは、やはり万卷楼というのは元々周氏一族の書坊全体のブランド名として機能していたと理解すれば良いのだろう。

また、『普渡慈航』だけは用意はあつたが刊行出来なかつたとの証

言も貴重である。前述の通り同書は崇禎年間に金閫（蘇州）において際雲唐廷揚によって刊行されているのだが、周亮工はその事実を把握していなかったのかもしれない。或いは、知ってはいたが周氏一族が刊行したものではないので触れなかったとも考えられる。それはさておき、貴重だと言うのは、周氏にも刊行の用意はあったことを仄めかしている点である。

というのも、崇禎五年跋刊の唐廷揚刊『雲林醫聖普渡慈航』は、参閱者王肯堂・序の撰者葉向高・賛の撰者吳道南が全て天啓末年までに死去しているために、偽書説も存在するからだ<sup>107</sup>。小曾戸洋氏は「本書のもととなった未定稿類が早くから用意されていたとみれば、一概に矛盾とはいえないであろう」（注107解題四頁）と述べて偽書説を退けているが、周亮工のこの証言は小曾戸氏の説の裏付けとなり得るものであろう。

小曾戸氏は『雲林醫聖普渡慈航』を真作と認めた上で、同書の崇禎元年の自序で「九十歳翁」と自称していることや、崇禎五年に自跋を書いていることなどを踏まえ、王重民『中国善本書提要』（前掲）二六八頁が引く『金谿縣志』の「廷賢行醫凡六十年、卒年九十三」という記述なども併せて、龔廷賢の生没年を一五二二～一六一九とする王立氏らの説を退け、「いま筆者は龔廷賢の生没年をおよそ一五三九～一六三二年と推定しておく」（六頁）としている。従うべき見

解であろう。

#### （8）前山周庭槐と如山周文煒の生年

③の段では、まず龔廷賢が周庭槐の外昆季、つまり姓の異なるいところであったことが記されている。龔廷賢は周曰校の姻戚であることが分かつているから、これによって周庭槐と周曰校の間に確かに血縁関係があったことが裏付けられる。また、前述の通り周庭槐の名は庭槐と書かれることもあったが、或いは母方のいとこ同士で排行を揃えていたのであろうか？ 常識的には考えにくいことだろうが、周曰校や周庭槐ら第一世代の名は排行が揃っていないことを踏まえると、もしやと思わせるものが無いでもない<sup>108</sup>。

続けて、周庭槐が汴（河南祥符）に移住した際に龔廷賢も同行していたこと、その後でまた金陵に移り住んだことが述べられている。これにより、周庭槐はまず金谿から祥符に移住し、その後で金陵にやって来て刻書を始めたことが知れる。

周庭槐は万曆五年・同九年・同十一年に金陵で刻書を行っている（注23参照）、前述の通り周文煒は祥符で生まれている。そして、許振東注49論文では、黎士弘「周如山先生朱太夫人雙壽序」（『託素齋文集』卷二）の周如山夫婦が「壬辰（順治九年、一六五二）」に「太翁與太君年上下、七十同時舉慶」という記述を引いて、如山周文煒とその同い年の妻朱氏の生年は万曆十年（一五八二）であると考

察している<sup>109</sup>。ということは、実際には庭槐が金陵で刻書を初めてからも、祥符に戻る時期もあったということだろうか。

ところで、この如山周文煒の妻の朱氏については、許振東注49論文が指摘するように、周在浚「(周亮工)行述」に「如山公娶故明胙城王朝适公女朱太淑人」と見える。明の胙城王朝适の娘だとのことだが、この胙城王というのは周王府の分家筋である。してみれば、『休庵影語』における周如山の「初出自周邸」云々という発言は、周王府とのパイプによって得た情報である可能性もあろう。

なお、周亮工「祭靖公弟文」(前掲『頼古堂集』卷二十四)によれば、周亮工と同腹の兄弟姉妹は姉二人・弟一人(亮節)・妹二人で、長姉は周亮節が没した康熙九年(一六七〇)の前年春に享年七十で没している<sup>110</sup>。つまり、周文煒の嫡出の最初の子供の生年は万曆二十八年(一六〇〇)、周文煒が十九歳の時と知れる。一方、「(周亮工)年譜」によると、周亮工は二十四歳で結婚し、嫡男の在浚は二十九歳の時に生まれている<sup>111</sup>。

周庭槐は生没年とも不明だが、仮に二十五歳で嫡男の周文煒が生まれたと仮定すれば嘉靖三十七年(一五五八)生まれとなる。不確かな推論ではあるが、嘉靖十八年(一五三九)前後の生まれと推定されている龔廷賢よりも一回り以上若かった可能性が高いと言って良からう。

## (9) 周庭槐の金言

④の段では、まず金陵で龔廷賢が『万病回春』を編んだ際に周庭槐の助力があったことを述べる。第一節(4)で見た通り、周氏一族は万曆十六年序刊の周日校初刻本・万曆二十五年刊の周日校重刊本・万曆三十年刊の周文憲・周文煥・周文燿重刊本と、『万病回春』を僅か十五年の間に三回も刊行している。この中に周庭槐の名が明記されたものは無いが、彼は刊行者の同族にして編者のいところであるから、陰で作業に何らかの協力をしていてもおかしくはない。

続いては、周亮工の亡父(周文煒)が初めて刻書業に参加した際に、文煒を始め第二世代(「文」字輩)の者たちが庭槐から『万病回春』の校正を命ぜられた逸話を記す。こんな作業が出世の役に立つのかと洩る「文」字輩の面々に対して庭槐は、いずれ子孫から科挙で名を成す者が出るとすれば、済民に利するこの書を刊行した功德こそが土台となるはずだと論じたという。

話の流れからすると、これは第二世代が少年期にあった時のことである可能性が高からう。それならば周庭槐が助力の一環として自分の息子や甥たちに校正を手伝わせたのだということで話が繋がるし、まだ少年で挙業に熱心であった息子や甥たち<sup>112</sup>が、科挙に益さず榮達に繋がらない医書の校正作業を洩るのに対し、万巻楼の創業者たる庭槐が書坊の経営者としての心構えを説いて諭したのだと

理解出来るからだ。本章の初出論文では周文煒の生年がはっきり分かっていなかったため、これは万曆十六年初刻本の刊行時のことかと推定していたが、その時点では長男の周文煒がようやく七歳であるから、それでは流石に早すぎるだろう。よって、これは万曆二十五年刊本か万曆三十年刊本のどちらかの校正時の逸話のようだ。

また、周庭槐がここまで重要性を強調した書物だからこそ、周氏は僅か十五年の間に三度も刊行したのではあるまいか。初刻本の万曆十六年はおろか、第二世代が三度目の刊行を行った万曆三十年にさえもまだ生まれていなかった周亮工がこの話を知っているということは、周文煒を始めとする第二世代の面々にとつて、周庭槐のこの言葉はよほど印象的な金言だったのであろう。

#### (10) 汪淇蝸寄還読齋——虎林の奸賈

⑤では、それから数十年を経て、虎林（杭州）で「善本」との角書を加えた海賊版が現れたことを述べる。最初は「王宇泰先生重訂」と偽り、それが露見すると今度は龔廷賢の名を出して販売を続けていたという。周亮工は、その食欲さについては敢えて罰しようというつもりはないが、勝手に葉の名を改めたり配合を変えたりするのは命に関わる問題であり、杭州刊本が天下に利する書物たるべき『万病回春』を天下を害する書物に変えてしまっている現状は亡き祖父の意にも反することであるから捨て置けず、そのために自ら全面的

に校訂し、全て旧版の通りにしたものを「原本」との角書を加えて刊行することにしたとの経緯を述べる。前掲の封面告白にもほぼ同じ意味のことが述べられているが、なるほど話の筋は通っている。周亮工ほどの地位ならば、単に金儲けのためならもっと効率の良い方法が他に幾らでもあったろうから、これは宣伝文句であるのみに止まらず、ある程度本気で言っている面もあるのかもしれない。

ところで、周亮工が口を極めて罵っている杭州刊本というのは現存するのだろうか。「王宇泰先生重訂」を謳うものは見つけていないが<sup>113</sup>、それが偽書と露見した後に龔廷賢名義に改めて売り続けたという版本は見つけることが出来た。即ち、「萬病回春例言」の末尾に「（低二格）崧／康熙元年一陽月冬至日西陵後學憺漪子汪 淇右子氏識于孝／（低二格）友堂別業」と署名し、各巻巻頭第二、四行の間の界線上に低二格で「金谿 太醫院雲林龔廷賢子才甫編輯／錢塘後學憺漪子汪 淇右子氏重定」とあり、全葉の版心下部に「蝸寄」と見える『増定便攷萬病回春善本』八卷（内閣文庫蔵「欠巻七」）である。白紙藍印の封面も下四分の一ほどを欠損するものの残っている。天頭に「醫 家 必 讀」と横書きし、左右三欄に区切つて右欄に「龔雲林先生著」、中央に大字で「萬病回春善□」、左に小字で三行の告白を記し（告白末の署名の有無は欠損により不明）、左上に陽刻楕円「欣賞」朱印、右下に陰刻正方「還讀／齋」朱印を捺す。

この封面印の「還讀齋」と版心に見える「蝸寄」は、いずれも安徽休寧出身の汪洪（字右子、号儋漪子）、即ち百回本『西遊記』の汪象旭箋註本の評者である汪象旭その人が明末清初に杭州で営んだ書坊の名である<sup>114</sup>。つまり、同書は封面題も巻首題も「善本」の二字を含み、封面に「龔雲林先生著」と掲げる杭州刊本ということになり、周亮工の指摘する特徴に合致する。康熙元年序刊であるから年代の辻褄も合い、周亮工を怒らせたのは同書に相違あるまい。

同書を万曆三十年周文憲・周文煥・周文燿重刊本や万曆二十五年周日校重刊本を底本とする古活字本などと比べると、見易さを考慮してか処方箋に示す原料の排列順を変えていることが多く、分量の注記で「二」を「一」に誤るなどの誤刻も皆無ではない。しかし、万曆三十年周文憲・周文煥・周文燿重刊本にも誤刻と思われる箇所はあるし、『万病回春』は建陽の余氏萃慶堂が万曆十七年余泗泉刊本（研医会図書館蔵）・万曆三十三年余泗泉後修本（早稲田大学附属図書館蔵）・崇禎七年余繼泉刊本（東北大学附属図書館蔵）など何度も翻刻しているのを始め、前述の蘇州葉龍溪重刊本などもあり、翻刻本の版種は非常に多い。数ある翻刻本のうち汪洪の杭州刊本だけが非難された理由は、第七章において詳しく考察することとしたい。

#### 四、金陵万卷楼と金閶大業堂

##### （1）残された問題点

以上、本章では明末清初に金陵において非常に活発な出版活動を行った周氏万卷楼と周氏大業堂の考察を中心に据えつつ、金谿周氏が金陵で営んだ書坊の活動状況や、その刊本の書誌について論じて来た。筆者の出発点の一つは両書坊が重要な章回小説版本を多く出していることであつたが、両者の間に継承関係が確認され、更には醉耕堂までもがこの列に連なることが判明したことで、今後の章回小説研究に資する点は少なくないものと信ずる。また、大業堂嫡流の周亮工が、万卷楼に代表される一族の刻書の創業時期を嘉隆間だと証言していることが分かったのも収穫であつた。そして何より、本論文全体の趣旨からは、『休庵影語』に見える周如山が大業堂主人如山周文煒に他ならないと判明したことが重要である。

しかし、明末清初に金陵で刻書を行った周姓の人物は甚だ多く、筆者の調査の及んでいない者も相当な数に上る。例えば、許振東・宋占茹「明代金陵周氏家族刻書成員与書坊考述」（第二節（1）前掲）では、いずれも前掲『中国印刷史』『明代版刻綜録』『全明分省分県刻書考』の三書に明末に金陵で出版を行ったとして名が挙がっている人物を全て抽出して、以下の二十六人を挙げている（一〇六頁）。

周如山（大業堂）、周敬泉（大有堂）、周如溟（文斐堂）、周頤、周文煥、周文華、周前山、周庭槐、周誉吾、周玉堂、周敬吾、



周敬松、周曰校（万巻楼）、周桂山、周昆岡、周時翰、周四達、周竹潭（嘉賓堂）、周希旦、周近泉、周樂泉、周樂軒、周如泉、周宗孔、周宗顔、周用

周前山と周庭槐、周竹潭と周宗孔がそれぞれ別に数えられているから、他にも同じ人物の名・字・号を別人として数えている例はありそうだが、それにしても本章で調べの及んでいない人物が相当数いることが分かる。もちろん右に列举されている人物が全て金谿周氏の同族とは限らない。しかし、「文」字輩ではないかと疑われる者もいるし、敬素周希旦や敬竹周時泰と同じ「敬」を一字目に持つ者が多いのも目を引く。『全明分省分県刻書考』を根拠とする周竹潭が嘉賓堂主人であったというのが本当なのかという問題もあつて、なお検討すべき課題は多い。

そんな中で本章の最後に触れておきたいのは、金谿周氏が金陵以外の地でも刻書活動を行っていた可能性である。文革紅注4二〇一〇年論文は、懷徳堂が『焦氏説楮』七卷（筆者未見）では「南京周氏懷徳堂」、崇禎十二年刊『地理大全』（筆者未見）では「金陵懷徳堂」、乾隆五年の『唐陸宣公集』二十二卷（筆者未見）では「雲林懷徳堂梓」と名乗っていることを挙げて、周氏懷徳堂は金陵の他に金谿にも支店を構えていたと推測している（二一五頁）。これは「繡谷唐氏世徳堂」のように主人の姓を修飾する地名ならば籍貫と解釈す

れば良いが、地名が書坊名に直接かかる場合は主人の籍貫ではなく書坊の所在地と解釈すべきだとの見地からの説である。まずそれを認めるか否かという問題があるうが、仮に認めるにせよ、挙がつているのは年代不明の清版・崇禎十二年・乾隆五年の三例で同時期のものではないから、支店を構えていたのではなく移転したなどの可能性もあろう。より厳密な検証を要する説ではないかと感じる。

だが、万巻楼や大業堂が金陵で活動していたのと同時期に、万巻楼や大業堂が別の地名を冠するかのように見える版本の存在が認められる。これについて略述して本章の結びとしたい。

## （2）石城万巻楼——金陵のどこにあつたか

『葉相國選訂百子類函』四十卷（内閣文庫蔵）は、枠内を区切らずに「葉相國選訂／百子類函／金陵萬卷樓校刊」（中央大字、左は下寄せ）と記す封面を持ち、「葉臺山先生百子類函序」の末尾に「岿／萬曆壬子（四十年）孟夏望日之吉玉茗堂／清遠道人臨川年弟湯顯祖謹／撰」と署名される。そして、卷一巻頭第二、五行に低六格で「東閣大學士福清葉向高進卿甫選訂／玉茗堂主人臨川湯顯祖義仍甫校正／玉茗堂門人後學周大賚仁父甫叅閱／（更に低五格）石城萬卷樓周氏校刊行」とある。

万曆四十年序刊の周氏万巻楼刊本だということまでは良いとして、問題は「石城萬卷樓周氏」だ。もしこれが「萬卷樓石城周氏」

であれば、「石城」は万卷楼主人の号と解釈することも出来る。しかし、この語順となると地名と取るのが素直だろう。

ではこれはどこを指すのか。江西贛州府に石城県があるが、同じ江西でも周氏の籍貫である撫州府金谿県とはかなり距離があり、周氏に縁の地とは言えそうにない。封面には「金陵萬卷樓」とあるのだから、金陵の地名として解釈出来るならそれが一番素直だろう。

宋代から南京城内には石城坊という通りがあったというから、そのことかもしれない。もしそうだとすると、周文煒が居を構えた状況からは地下鉄一駅分ほど距離がある。或いは、「石頭城」に由来する金陵自体の異称だという可能性もあるかもしれない。そちらの場合は、特に気にするほどのこともないということになる。諸賢のご教示に俟ちたい。

なお、周日校の代に万卷楼が金陵のどこで活動していたかを明示する資料は今回見つけれなかった。ただ、一つだけ気になる資料がある。『新鍔全像包孝肅公百家公案演義』六卷（ソウル大学校奎章閣蔵）の卷二巻頭に「饒安育元堂完熙生校編／金陵萬卷樓周對峰繡梓」とあり、「叙百家公案小説」の末尾に「聖天子御極歲在丁酉（万曆二十五年）□正月饒安完熙生書于□山萬卷樓」という署名が見えるのだ（□は破損により読み取れない）。この「□山萬卷樓」というのは、おそらく万卷楼の所在地を言うのであろう。万曆間の金陵の

書坊の所在地で「□山」と言えば、まずは「三山」が疑われるところである。三山街にあったと確認出来る唐氏世徳堂としばしば共同出版を行っている点からも、周日校万卷楼が三山街にあった可能性は十分にあるように感じる。しかし、先に見た「石城」や、周文煒以下の大業堂の家系は状元境に住んでいた事実との整合性が取れるのかどうか、今後の課題としておきたい。

### （3）金閶大業堂と「呉郡」周如泉

一方、明末清初の金閶（蘇州の異称）に大業堂を名乗る書坊があったことは確かである。左右三欄に分けて「李卓吾先生評次／三国志／繡繪全像（隔三格）金閶大業堂藏板」（中央大字）と記した封面を持つ『三国演義』の図のみの残本が京都大学文学部図書館に所蔵されているのだ。梁蘊嫻『李卓吾先生批評三国志真本』（宝翰楼本）の挿絵について——合戦場面の図を中心に——（瀧本弘之編『中国古典文学挿画集成（六）・全相平話五種／三国志演義（宝翰楼本）』所収、遊子館、二〇〇九）に指摘される通り、京大文学部図書館にはもう一本『三国演義』の図のみの残本があり、こちらは封面も含めて図以外を全て欠いているため封面題も巻首題も刊行元も分からないが、右の金閶大業堂藏板本と同版先刷りで、第一葉は両者異版となっている。従って、金閶大業堂藏板本は封面欠の残本の後修本ということになる。なお、梁氏は更に封面欠の残本の図が北京師範

大学図書館所蔵の『李卓吾先生批評三国志真本』（筆者未見）のそれと完全に同版であることを指摘している<sup>115</sup>。本論第四章でも見た通り『李卓吾先生批評三国志真本』は概ね崇禎刊本であろうと推定されるから、金閭大業堂蔵板本は「清初」後修と見ておけば大過あるまい。

また、枠内を区切らずに右半分に「潘海虞先生彙集／輿圖備考全書」（二行目大字）と記し、左半分には三段に分けて大まかな編目を記し、左下隅に「三吳大業堂重梓」と記す墨印の封面を持つ『彙輯輿圖備考全書』十八卷（台湾国家図書館等蔵）もある。台湾国家図書館蔵本は左下に「本衙藏板／翻刻必究」の朱戳、中央上に魁星朱印印を捺す。「（低二格）岢（隔四格）岢／順治七年歲次庚寅菊／月楚黃通家友生李／長庚頓首拜撰」と末尾に署名する「輿圖備考全書序」があるが、この「順治七年」は版築居刊本の「崇禎六年」を埋木改刻したもので、同書は各巻巻頭の「繡谷傅昌辰少山氏較梓」と版心下部の「版築居」を削り取った後修本であることを、王重民『中国善本書提要』（前掲）がアメリカ国会図書館蔵本によって指摘している（一八八頁）。台湾国家図書館蔵本にも王氏の指摘する改刻の特徴が見える。封面で「重梓」と謳いながら実態は他書坊の刊本の後修に過ぎないというのは本章第二節で見た通り金陵周氏大業堂の常套手段であつたし、元の刊行者が繡谷（金谿）の人なので、金

谿人のネットワークによって版木を入手したと考えればすんなり理解出来る。よって、この「三吳大業堂」というのは周氏大業堂である可能性が大いに高からう。問題は「三吳」がどこを指すかである。三吳というのは時代によって指す範囲の変わる語であり、広義には江南一帯を指して金陵も含み得る。だが、狭義に用いる場合は、蘇州及びその近隣地域を指すことが多い。金陵の意味であれば周氏大業堂はいつも通り金陵なり秣陵なりの分かり易い呼称を用いるはずで、わざわざ三吳などという紛らわしい表現は使わないだろう。従って、先の金閭大業堂の例と併せて、蘇州でも周氏大業堂が活動していたことを示す例と見るべきだと考える。

では、周氏一族には、特に大業堂名義での刻書を行う周庭槐の直系子孫たちの中には、明末清初に蘇州で活動していそうな人物は見つかるだろうか。うってつけの人物がいる。庭槐の子にして大業堂名義での刻書を始めたと思しき如山周文煒の同母弟に当たる、如泉周文燿である。第三章第一節で触れた通り、周文煒が周文燿に宛てたと思しき「與泉弟」という手紙が残っているが、同居している弟にわざわざ手紙など書かないだろうから、これは周文煒が周文燿と別れて暮らした時期があることを示唆しよう。そして、前掲『賴古堂尺牘新鈔二選藏弃集』巻八に収める「與泉弟」の全文は、以下のようなものである。

人にして収閉の年に當たるも、猶ほ名に務め開發するは、大いに不祥なり。少年の人に一點の少年の氣無く、春にして秋の令を行ふや、尚ほ且つ不可なり。老年の人に一點の老年の氣無く、

冬にして春の令を行ふや、危ふいかな危ふいかな。<sup>116</sup>

これはおよそ壮年期の作という雰囲気ではなく、老境に差し掛かってなお第一線で頑張ろうとする弟をたしなめる手紙に見える。してみれば、この手紙は彼らが老境に入った崇禎順治間に、この兄弟が離れて暮らしていたことを示唆するものと受け取れるだろう。

そして、『雙井軒手授易經心訣』四卷（加賀市立中央図書館聖藩文庫蔵）に、双边の間に各辺一頭ずつ龍を描いた白紙朱藍套印の封面が残っている。枠内は左右三欄に区切り、「（藍）雙井軒手授（隔二格、朱）<sup>本衙藏板 翻刻必究</sup>（朱、大字）易經主意心訣／（藍、下寄せ）吳郡周如泉繡梓」と記している。「吳郡」と言えば蘇州の古名に基づく異

称であるから、この表記は如泉周文燿が蘇州に移住し、そこで出版活動を行っていたことを表すと受け止めるべきだろう。してみれば、先に見た金閶大業堂や三吳大業堂というのも、如泉周文燿本人か、或いはその子や孫の営む書坊であった可能性が高からう。どうやら周文燿は金陵万卷楼主人から金閶大業堂主人に転じていたようだ。

同書には刊年の手掛かりになるような記載は無いが<sup>117</sup>、本章第一節（3）（4）で見たように、如泉周文燿は崇禎元年に「萬卷樓周

如泉」を名乗って劉孔敦が金陵万卷楼で増補校訂に当たった『圖像本草蒙筌』を刊行しているから、蘇州でこれを印行したのは崇禎年間以降のことであろうか。但し同書の「雙井軒手授易經心訣凡例」の末尾に「（低三格）（六字格破損）□□元建氏<sup>118</sup>書于秣陵之萬卷樓」とあるので、周文燿は蘇州でも金陵の本家に滞在する文人と連絡を取りつつ刻書に当たっていたか、金陵で作った版木を蘇州まで持って行ったかのどちらかであろう。となると、『圖像本草蒙筌』も蘇州にいながら金陵と連絡を取りつつ刊行した可能性も無いとはいえず、移住の時期を明らかにすることは現時点では難しい。また、前述の通り前山周庭槐が金陵で刻書を始めた後にその長男の如山周文煒が祥符で生まれていることを踏まえると、一度移住してそれっきりという訳では無く、幾つかの拠点を往復していた可能性もありそうだ。

そもそも、如泉周文燿が蘇州に進出する前から、周氏万卷楼グループは蘇州の書坊と何らかの繋がりがあったと思われる。そのことは、今回確認出来た最初のコピー本金陵周氏万卷楼刊本である万曆五年序の周曰校・周宗孔・周庭槐刊本『新刊古今醫鑑』に、「萬曆戊子年（十六年）姑／蘇會文堂刊行」との蓮牌木記を持つ後修本がある（注21参照）ことから窺える。このような明末清初における地域の異なる書坊同士の交流の実態については、第七章で考察する。

1 拙稿「唐氏世徳堂と周曰校万巻楼仁寿堂の章回小説刊本の覆刻及び後印の事例について」『中国古典小説研究』第十六号、二〇一一。

2 各版本の詳細は、『西遊記』については本論第二章、他の世徳堂刊本三種については、拙稿「金陵唐氏世徳堂刊本講史小説三種と上元王氏の双面連式挿画について」(瀧本弘之編『中国古典文学挿画集成(九)・小説集(三)』所収、遊子館、二〇一四)参照。

3 本章では、姓名と号が判明した人物については、必要に応じてこのように「号+姓+名」の形で表記する。

4 蘇子裕「明代戯曲出版物之最——江西人編選、出版的劇本」(江西省文芸学会二〇〇三年年會論文集、博孜・文革紅「試析明清時期江西金谿部分儒生向刻書業的身份類型」(《南昌航空大学学报社会科学版》第十一卷第三期、二〇〇九)、文革紅「江西小説刊刻地——“雲林”考」『明清小説研究』二〇一〇年第一期)等参照。

5 以下では単に内閣文庫と称す。

6 周曰校と唐廷仁の共同刊本は、本論第三章において他に万曆十四年刊同十六年序刊『史漢合編題評』八十八卷附四卷と「万曆前期」刊『鐫國朝名公翰藻超奇』十四卷の二例を確認した。

7 封面中央に每字隔一格で「(低二格)周氏萬巻樓重刊」、「刻公餘勝覽國色天香序」の末尾に「崑／萬曆丁亥(十五年)夏九紫山人謝友可撰／于萬巻樓」とあるため、まず周氏万巻楼万曆十五年刊本(未発見)があり、それを自ら重刊したものと見られている。

8 周曰校の名と仁寿堂の名が共に見える版本には、他に周曰校(各巻巻頭)と仁寿堂(版心下部)が見える『新刊官板批評正百將傳』(中国国家図書館蔵)や、周曰校(封面と各巻巻頭)・万巻楼(序末刊記)・仁寿堂(版心下部)と三者全てが別々の箇所に見える周

曰校乙本『三国演義』などがある。なお、後者の覆刻本である周曰校丙本でもこの点は同じである。

9 残る『此事難知集』巻下と『外科精義』巻上下には刊行者名は見えない。

10 初出は『和刻漢籍医書集成』第六輯(エンタプライズ、一九八九)。なお、真柳氏ホームページ掲載の補訂版では、本章の初出論文を引いて改めている(<http://square.unin.ac.jp/mayanagi/pape01/ouen10sho.html>)。二〇一六年三月一日閲覧。

11 注1拙稿注19では「六・八・九・十三・十四の各葉」としてしまったが、訂正する。

12 原文「友人周希旦氏孝友人也、慕先生之高致、乃求全集而刻之金陵、以廣其傳」。

13 余象斗の名・字・号の組み合わせについては従来諸説あったが、林桂如「余象斗の小説と日用類書」(東京大学人文社会系研究科博士論文、同題でコンテツワークスよりオンデマンド出版、二〇一〇)の注7において、崇禎元年序刊の余応虬・余応科刊『刻仰止子參定正傳地理統一全書』十二巻首一卷の目録に「明西一余象斗著字仰止、同書の積大艤(林氏は「積天艤」に、本章初出時には「積天麟」にそれぞれ誤読していた。詳細は拙稿「萃慶堂の歴代主人について——建陽余氏刻書活動研究(1)——附『書林余氏重修宗譜』『書坊文興公派下世系』第37世までの翻刻と校訂」(『中国古典小説研究』第十九号、二〇一六)の注28参照)「刻地理全書叙」に「潭陽余居士号文台者」とそれぞれ明記されていることが指摘された。同書は余象斗本人の著作をその存命中に息子(余応科)と甥(余応虬)が刊行したもので、全面的に信を置くべきであろう。なお、林氏は同書を単に内閣文庫蔵とのみ記しているが、内閣文庫は同書の早印本と通修本とを所蔵している。その他の伝本の状況も含めた詳細については、本注前掲拙稿の注27を参照されたい。

<sup>14</sup> 陳翔華「略論余象斗与其批評三國志伝」(『三國志演義古版叢刊五種』第一冊所収、中国全國圖書館縮微複製中心、一九九五)参照。

<sup>15</sup> 劉世徳『三國志演義』朝鮮翻刻本試論——周曰校刊本研究之二『文学遺産』二〇一〇年第一期)参照。

<sup>16</sup> 陳翔華「周曰校刊『三國志通俗演義』の初刻年代問題」(『南開學報(哲学社会科学版)』二〇一三年第一期)参照。

<sup>17</sup> 中川論「周曰校刊『三國志演義』について」(『東北大学中国語学文学論集』第十六号、二〇一一)、同「周曰校刊『三國志演義』の甲本・乙本・丙本」(『林田愼之助博士傘寿記念三國志論集』所収、汲古書院、二〇一二)。

<sup>18</sup> 原文「余偶過金陵、虚舟生為予道其事若此、欲付諸梓、而乞言於予」。

<sup>19</sup> なお、台湾国家圖書館藏本と東文研仁井田文庫藏本には、三欄に分かつて左右に「全像海剛峰／居官公案傳」、中央に下寄せて「煥文堂重校梓」と記した封面が付いている。中国国家圖書館藏本は封面欠。他に『古本小説集成』(上海古籍出版社)所収影印本があり、その底本(所蔵元不明)は上記三者と同版の別本で、こちらにも封面は欠いている。これら四本はいずれも版木の損傷が進んでおり、上梓からかなりの時間を経ての印と思しい。煥文堂の封面を持つ二本は、封面には「重校梓」とあるが、その通り煥文堂が虚舟生万巻楼刊本を重刊した訳ではなく、虚舟生万巻楼刊煥文堂印本なのかもしれない。

<sup>20</sup> 外側の左右には毎字隔半格で「醫貫古今滿腔生意天人化／功垂宇宙一點恒心父子傳」との宣伝の対聯を、内側の左右には大字で「龔氏父子新編／古今醫鑑八卷」との封面題を記す。

<sup>21</sup> 請求記号三〇一―九七。内閣文庫には他に大尾に「萬曆戊子年(十六年)姑／蘇會文堂刊行」との蓮牌木記を持つ後修本(請求記号三〇一―四)もある。両者の封面は同版で修も入らず、各巻卷

頭の記載にも変更は無い。三〇一―九七は三〇一―四には無い後付を存するほか、本文大尾は三〇一―四とは版が異なり、三〇一―四で蓮牌木記のある位置は、全て通常の界線のみが刻された無字の行になっている。

<sup>22</sup> 大尾に「萬曆二年金陵周竹潭梓」との単行蓮牌木記を持つ『徽郡海嶽許先生精選今古文宗』六卷(国立国会図書館蔵)や、「(低二格)崑／(低一格)萬曆歲次乙酉(十三年)仲夏吉旦／賜進士及第翰林院脩撰養淳朱國祚謹書」と末尾に署名する序を持ち各巻巻頭第二、七行に低五格で「翰林院編脩 石樓 楊起元 精選／翰林院侍讀 洪陽 張 位 叅閱／翰林院脩撰 養淳 朱國祚 編次／翰林院檢討 師竹 王祖嫡 同編／古郢 後學 元用 王桂 校正／金陵 書坊 竹潭 周宗孔 繡梓」と記す『皇明百大家文選』十七卷(内閣文庫蔵)ほか、万曆前期に金陵において単独で刊行した本が幾つか残っている。

<sup>23</sup> 他に大尾に「萬曆癸未(十一年)仲春金谿雲林山人龔廷賢書」と見え、各巻巻頭第二、三行に低七格で「金谿 雲林 龔廷賢 編輯／金陵 前山 周庭槐 刊行」と記す『新刻種杏仙方』四卷(北京故宮博物院蔵)と、四周花欄の封面を上下二層に区切り、上層には「萬曆辛巳(九年)寅望周庭槐白」と結ぶ告白を載せ、下層は更に三欄に区切つて左右に大字で「新刻古今／詩韻釋義」、中央に「金陵書肆周前山梓」と記す『古今詩韻釋義』五卷(プリンストン大学東亜図書館蔵)、及び封面中央に「善慶堂重梓」とあつてその上に陽刻正方「稽古／齋」朱印を捺し、各巻巻頭第四行に「金陵書肆前山周庭槐刊行」(「書肆」は卷三以降では「書林」に作る)と記す『新刻增補古今醫鑑』八卷(京都府立総合資料館蔵)の三書を単独で刊行しているのが確認出来た。なお、『新刻增補古今醫鑑』の封面に見える善慶堂や稽古齋が周庭槐の書坊名か、それとも周庭槐の刻した版木を後に入手した別人の書坊名かは不明。<sup>24</sup> なお、同書には同款式同字様かつ各巻巻頭の刊行者名も同じだ

が全葉が異版で、封面の左右が「萬曆辛丑歲（二十九年）／萃慶堂刊行」（毎字隔二格）となっている覆刻本が存在する（東京大学東洋文化研究所等蔵）。詳細は第七章参照。

<sup>25</sup> この通りの巻首題を持つ版本は見つけないが、『太醫院補遺本草歌訣雷公炮製』八卷附『藥性詩歌便覽』（哈佛燕京圖書館蔵）が三欄に区切った封面の左右に大字で「藥性歌訣雷公炮製大全」、中央に「萬曆丁亥歲（十五年）周對峰刊行」と記しており、封面題が杜氏の著録する書名と酷似する周曰校刊本である。上下二層で、十五行七字の上層が『藥性詩歌便覽』十一行二十字の下層が『太醫院補遺本草歌訣雷公炮製』で、下層卷一・二・八の各第二・三行に低七格で「上饒 瀘東 余應奎 補遺／書林 對峰 周曰校 重刊」と記している。おそらく杜氏は同書の刊年と巻数を誤記したか、或いは別に各巻巻頭に見える周曰校の名をそのまま残しつつ十巻本に改編した万曆三十九年の後修本か翻刻本があつて、それを著録したかのいずれかであろう。後者であっても、注<sup>24</sup>に挙げた余氏萃慶堂覆周曰校刊『昭代典則』のように実際の刊行者は周曰校とは別人という可能性も考えられる。杜氏の両書には誤りが少なくないので、この著録だけによって周曰校が万曆三十九年に出版活動を行っていたと考えるべきではない。

<sup>26</sup> なお、筆者は社会科学学院蔵の周曰校甲本を実見しているが、写刻体の本文の字様は他の周曰校刊本を含む万曆前期の金陵刊本に良く見られるものだという印象を受けた。

<sup>27</sup> 薛清録主編『中国中医古籍総目』（上海辞書出版社、二〇〇七）によれば、明刻本の残本が中国中医科学院圖書館に蔵されるところだが、未見。

<sup>28</sup> 卷二のみ「耀」を「耀」に誤る。

<sup>29</sup> 卷一・二と卷上中下があり、両者の目録が別々に存在する。

<sup>30</sup> 枠内左右には大字で「新刻詳註武場／急用輯畧全書」、中央には「三場策論○急出擬題○古今名將○國朝武功／○九邊形勝○興

地來歷○四夷出處○攻守謀辨／○馬射步射○鎗鉞拳棍○火藥舟車○戰陣機關」と大まかな篇目（中身と完全には一致しない）が記されている。

<sup>31</sup> 外側の左右には毎字隔半格で「醫演軒岐肘後千方皆奏効／心同天地人間萬病盡回春」という宣伝の對聯を、内側の左右には大字で「鏗儒医龔先生／新編萬病回春」と書名を記す。

<sup>32</sup> 自分には嘉靖三十五年の海陽王龔封以来どんな医者も治せなかった持病があつたが、万曆十四年五月にそれを悪化させた際に龔廷賢の処方では忽ち全快したこと、龔廷賢の著作は既に『古今医鑑』と『種杏仙方』の二書が刊行されていたことなどを述べている。海陽莊格王朱勤煊は嘉靖三十五年龔封、万曆二十三年薨（『明史』卷百「太祖二十六子世表一」）。

<sup>33</sup> 原文「梓既竣、龔君之嫻對峰周君、千里肅幣屬序於余」。

<sup>34</sup> 小曾戸洋『万病回春』解題（『和刻漢籍医書集成』第十一輯、エンタプライズ、一九九一）参照。

<sup>35</sup> 元和六年二條梅寿重刊古活字本（東京大学総合図書館蔵）、天和二年刊横小本（同）ほか多数。

<sup>36</sup> 僅か十五年の間に同じ書坊が同一書を三度も刊行するというのは異例に思えるが、同書は「数ある廷賢の著書のうち、最も著名で流布したものである。中国では生存中に少くとも六版を重ね、日本でも生存中に数版、また初版より百年の間に何とおよそ二〇回も重刻された。このようなことは他に全く例のないことである」（小曾戸注<sup>34</sup>解題一頁）という記録的ベストセラーであり、他に建陽の余氏萃慶堂も、周曰校初刻本を早くも翌年に翻刻した万曆十七年余泗泉刊本（研医会図書館蔵）、万曆三十三年余泗泉後修本（早稲田大学附属図書館蔵）、崇禎七年余繼泉刊本（東北大学附属図書館蔵）などを繰り返し刊印していることが確認出来る。

<sup>37</sup> 小曾戸注<sup>34</sup>解題は、万曆三十年重刊本の各巻巻頭に周文憲の他

に周文煥と周文燿の名も見えることには触れぬまま、「文憲は周曰の跡を継いだ子であろうか」とする（四頁）。

<sup>38</sup> 注1拙稿五九頁参照。なお、注1拙稿では未見だったイエール大蔵本は、原本を閲覧して各冊に元の刷題簽と刷目録題簽を忠実に鈔写したと思しき縹色の書題簽と書目録題簽が貼られているのを確認した。イエール大蔵本も北京大蔵本もそれぞれ改装済みだが、どちらも原装は各巻一冊で各冊の前表紙に刷題簽と縹色の刷目録題簽が貼られていたと見て良からう。北京大蔵本の目録題簽は内寸一〇・三×九・五cm（巻六で測定）。

<sup>39</sup> マイクロフィルムでしか閲覧出来ておらず、色は未確認。題簽は表紙の上部三分の二を占める大きさで、上層に横書きで「故事統宗」、下層が目録。

<sup>40</sup> 例えば注35前掲天和二年刊横小本の東京大学総合図書館蔵本など。刷題簽は残っていないくても、注35前掲元和六年二條梅寿重刊本の同前蔵本のように、手書きの題簽と目録題簽を備える伝本も多い。

<sup>41</sup> 原文「因見『蒙筌』一書行世已久、板籍蒙壞、中間不無舛謬。余不忍其湮没、乃闕者補之、斷者續之、詳增精繕、付之剞劂」。

<sup>42</sup> 仁寿堂刊本は薬物の図も巻首の「歴代名醫圖」も無く、本文の字句は周如泉刊本と概ね一致する。

<sup>43</sup> 方彦寿『建陽劉氏刻書考（下）』『文献』一九八八年第三期）二一九～二二〇頁参照。

<sup>44</sup> 因みに、各巻巻頭第二～三行に低十一格で「星源游氏興賢堂重訂／繡谷唐氏世德堂校梓」と記す『新刊重訂出相附釋標註裴度香山還帶記』二巻の台湾国家図書館蔵本は、三欄に区切った左右に「鐫重校出像／點板還帶記」（還帶二字は手書き）、中央に「（低二格）繼志原板」とする封面が付いており、唐氏世德堂刊本の版木を繼志齋が入手して印行したものと思われる（こ

れと同版で手書きの部分は「竊符」と書かれた封面が、提綱末に「（低十三格）秣陵陳大來校鐫」の刊記を持つ大谷大学図書館蔵の神田喜一郎旧蔵『重校竊符記』二巻に付いている。前述の通り唐氏世德堂と周氏万卷楼の間には提携関係があったので、唐氏世德堂から陳氏繼志齋への版木の譲渡が認められる以上、陳氏繼志齋と周氏万卷楼の間にも何らかの交流（例えば共同刊行や版木の譲渡など）があったという可能性は十分に考えられる。

<sup>45</sup> 書誌事項が王氏の著録と一致する北京大学図書館蔵本と東京大学東洋文化研究所蔵本「封面欠」（両者は同版）は、いずれも「周生時泰」の箇所を「復有周生時泰者」とする。

<sup>46</sup> 書誌事項が一致する前出の広島市立中央図書館浅野文庫蔵本や台湾国図蔵本によって原文を確認したところ、王氏のこの引用は「史材」と「撰述」の間、「昭代典則」と「吾郷周氏」の間、「不佞」と「余故」の間の三箇所省略があり、特に三つ目の省略はまるまる二葉分にも及ぶ。注24所掲覆刻本の序でも同様なので、アメリカ国会図書館蔵本の序がいずれとも別版の節略されたものでない限りは、あたかも一続きの文章であるかのような形で引用している王氏の著録には問題がある。

<sup>47</sup> この場合の「吾郷周氏」とは県レベルの同郷ではなく、同じ江西人という意味に取れば良からう。本論第三章で見た通り、江西吉安府廬陵県の人である郭一鶚にも、江西撫州府金谿県の人である唐晟を「同郷唐光祿君」と称した万曆末期の用例がある。

<sup>48</sup> 原文『翰苑新書』此宋人書也、原無梓本。……華亭徐相公録有全本、而武進徐給事中得之、梓人周曰校重價購焉、出示余。と

謂此書不可不傳、而門人許秀才以忠工校讐之役、書成請余敘首簡」。<sup>49</sup> なお、本章初出論文の執筆時には未見だった許振東「17世紀小說書坊主周文煥及其家族刻書活動」（『南開學報（哲社会科学版）』二〇一三年第五期）では、許氏は如山周文煥を大業堂主人とする説に転じている。



<sup>50</sup> 字と号は朱天曙編校整理『周亮工全集』（鳳凰出版社、二〇〇八）の朱天曙「前言」参照。生没年は康熙十四年（一六七五）周在浚刻本『賴古堂集』二十四卷（同全集所收影印本によった）の附録に収める「年譜」（以下「周亮工」年譜と称す）による。周在浚は周亮工の長子であるから、この年譜の記述には基本的に信を置くことが出来るよう。なお、本章第二節で挙げる周氏一族の生没年は、全てこの「周亮工」年譜による。

<sup>51</sup> 陳聖宇『周亮工研究』（南京大学博士論文、二〇〇七）参照。なお、関係箇所が同氏のブログに「周文煒及周氏家族刻書研究小議」と題して二回に分けて節録されている（二〇〇八年六月十五日アップロード、URL: [http://blog.sina.com.cn/s/blog\\_4b06656c01009xy.html](http://blog.sina.com.cn/s/blog_4b06656c01009xy.html)、二〇一三年十一月二十一日閲覧）。

<sup>52</sup> 原文「周文煒、字赤之、本金谿人、生於大梁。生平孤行己意、屹立不移、曰…（吾固坦然者也）。因自號坦然。入南雍、就選得暨陽簿、謝官歸、築室秦淮曰…（壯為五洩遊人、老作秦淮釣叟於願足矣）。子亮工、號樸園、庚辰進士。揚歷中外二十年、能文章、尤愛士。故人士咸嚮往之」。

<sup>53</sup> 「繡谷唐氏世德堂校訂（梓）」から埋木改刻したもの。

<sup>54</sup> これも「繡谷 唐氏世德堂 校梓」から埋木改刻したもの。

<sup>55</sup> 封面左右には「梨雲館類之／袁中郎全集」。台湾国家図書館には同版とされるもう一本があるが未見。上海図書館請求記号三五四四一〇―二二は同版と確認出来たが、封面を欠く。

<sup>56</sup> 先に引いた『江南流寓志』の他にも、姜宸英（周亮工）墓碣銘」（注50前掲『賴古堂集』附録所収）に「鴻臚生子文煒、即公父。國子監生、任諸暨簿」、黃虞稷（周亮工）行狀」（同前）に「如山公以太學生主暨陽簿」とある。

<sup>57</sup> 「（周亮工）年譜」に、天啓三年のこととして「随封公（周文煒を指す）赴浙江諸暨主簿任」とある。但し、康熙刊『諸暨縣志』十二卷（内閣文庫蔵）の卷六「職官志」には、周文煒が諸暨縣主

簿となつたのは天啓二年とある。朱天曙注50「前言」や同氏「周亮工家世考」（『中国文化研究』二〇一一年秋之巻）は単に天啓三年任官とのみ記しているが、天啓二年に任命され、赴任が翌年になったとも考えられる。また、「（周亮工）年譜」には天啓五年のこととして「封公以公事恒與令左、久之、左遷王府官、遂拂衣還白下」とあり、辞職の年も判明する。

<sup>58</sup> 万曆刊本と著録される『編注醫學入門』七卷首一卷と、万曆三十二年刊本と著録される『新鐫翰林考正歷朝故事統宗』十卷附『仁君考實』一卷の二種。なお、『新鐫翰林考正歷朝故事統宗』十卷には、前述の万曆二十三年周日校万巻樓刊本がある。これの刊年と刊行者を誤って著録したか、実際に大業堂による後印本か翻刻本があつてそれを著録したかのどちらかであろう。

<sup>59</sup> 井上進「出版の明末清初」（同氏『明清學術變遷史——出版と伝統學術の臨界点』所収、平凡社、二〇一一）一七一一―一七三三頁は、天啓崇禎間にさまざまな意匠を凝らした装飾的な封面が流行したこと、康熙中年以降には「たいていは白紙ないし黄紙、あるいは本紙と同じ竹紙に書名等を墨印するだけとなる」ことを指摘している。但し、ここで問題としている白紙藍印の封面については、「藍印ないし墨印の書名や書肆名等に朱鈴を組み合わせただけのものとなれば、これはむしろ一般的と言つてよいだろう」として、墨印のものと特に区別せずに論じている。

<sup>60</sup> 陸林「周亮工参与刊刻金聖歎批評『水滸』、古文考論」（『社会科学戦線』二〇〇三年第四期）参照。

<sup>61</sup> 注50前掲『周亮工全集』が康熙間賴古堂刊本を影印する。

<sup>62</sup> 周亮節醉耕堂刊本には、他にも「…… 崑／崇禎甲申（十七年）菊月穀旦／中議大夫資治尹加光祿寺少卿仍掌太／醫院院使事通家友弟陸彬頓首拜撰」と末尾に署名する「審視瑤函弁言」を持ち、各巻巻頭第五行に低一格で「大梁周靖公亮節較梓」と見え、本文全葉の版心下部に「醉耕堂／藏板」とある『傅氏眼科審視瑤

函』六卷首一卷（内閣文庫蔵）がある。この本には黄紙墨印の封面があり、天頭に「審 視 原 本」、枠内を左右三欄に区切つて右に「林陵傳仁宇先生纂輯  
廣陵林長生先生較補 煥文堂藏板」、中央に大字で「眼科大全」と記し、左に三層に分けて篇目を示している。注19で述べた通り煥文堂の封面は万曆三十四年序の虚舟生万巻楼刊『新刻全像海剛峯先生居官公案』の一部伝本にも附いているので、虚舟生万巻楼はやはり周氏万巻楼であり、煥文堂がある時点で周氏一族の版本の一部を入手していた、という可能性も考えられそう。そうすると煥文堂自体が周氏であつたかもしれないが、現時点ではその当否を確認出来る資料は見つけていない。

<sup>63</sup> 封面に関する著録は「此本有扉頁、刊『袁中郎全集。梨雲館類定。大業堂重梓』。并鈐有『醉耕堂藏板』印。按、所云『重梓』、非也。此當爲大業堂得板重印之本」（七五六頁）。

<sup>64</sup> 実際に、哈佛燕京藏本と同じものらしき封面を持ち、本文は台湾国家図書館蔵本などと同版でやや後刷りの伝本が、中央研究院傅斯年図書館に所蔵されている。封面は墨印で左右三欄に分けて「梨雲館類定／袁中郎全集／大業堂重梓」（中央大字、左は下寄せ）とあり、左上に陽刻楕円「爲世／所寶」朱印、右下に陽刻正方「長春／閣」蔵書朱印が捺されているが、醉耕堂の印は見えない。

<sup>65</sup> なお、「大業堂重梓」の封面は、もし醉耕堂蔵板となつてからの制作であれば「大業堂重梓」ではなく「醉耕堂藏板」と彫つておけば良さそうなどところなので、周亮節醉耕堂の蔵板本となる前に既に作られていた可能性が高い。注64に挙げた傅斯年図書館蔵本の封面には醉耕堂印が見えないこともその推測の傍証となり得よう。如山周文煒の代のうちに何らかの原因で封面を取り換えたとか、或いは周亮節は初め大業堂名義で活動していて「大業堂重梓」の封面を作つたが、後に自ら醉耕堂を興して独立し（大業堂の刻書業は兄の周亮工を経てその子や孫へと相続されている。詳細後

述）、その際に大業堂の刊行した版本の一部を醉耕堂の蔵板本として譲り受けたとかいった可能性が考えられそう。

<sup>66</sup> 前述の『新刊出像補訂叅采史鑑唐書志傳通俗演義題評』は、現存する唐氏世德堂刊本では多くの葉の版心下部に「世德堂刊」とあるが、その版本が周氏大業堂に渡つてからの後印本では「世德堂刊」はただ一箇所を除いて全て削られて（注1拙稿参照）、というこの推定と全く同様の例を実際に確認することが出来る。

<sup>67</sup> 原文「先生姓周氏諱□□、字元亮、河南開封府祥符縣人。先世居金谿之櫟下。因自號櫟園、學者稱之曰櫟下先生。始祖宋進士匡、本家金陵、以叅撫州軍事、畱居撫之金谿。先生大父封鴻臚寺序班前山公諱庭槐、始遷大梁。迨先生父封布政如山公諱文煒復居金陵。娶封太淑人朱氏、生先生。故先生籍大梁、而實白下也」。

<sup>68</sup> 原文「至公祖贈鴻臚寺序班廷槐、遊大梁而樂之、因占籍開封、遂爲開封人焉」。

<sup>69</sup> 二〇一六年三月一日現在、ウェブサイト「ファミリサーチ」内で白黒画像が閲覧可能で、それを参照した（URL: <https://familysearch.org/pal:/MM9.3.1/TH-1961-32068-746-94?cc=1787988&wc=M9W3-QMX:873637787#uri=https%3A%2F%2Ffamilysearch.org%2Frecords%2Fwaypoint%2FM9WS-H5V%3A2016036899%3Fcc%3D1787988>）。詳細は注13拙稿参照。

<sup>70</sup> 例えば、巻一卷頭下層第九行に低七格で「雙峰堂（隔二格）次台（隔二格）余象實（隔二格）領刻」と記し、大尾に「萬曆癸巳年（二十一年）孟春月旦／建邑書林余怡台梓行」との蓮牌木記を持つ『新鐫翰林脩撰焦翁二狀元庭訓四書發筆文梯』五卷（加賀市立中央図書館聖藩文庫蔵）がある。この二人が余象斗の弟だということは、前掲『書林余氏重修宗譜』第七冊「書坊文與公派下世系」第二十葉裏（第二十一葉表に「孟和公／繼安公之子／位戊二／號双峯／妣刘氏合／塋東門湖尾／平地掌中台／生子四／象斗／象箕／象聖／象

賢」とあることによつて確認出来る。なお、官桂銓「明小説家余象斗及余氏刻小説戯曲」(『文学遺産』増刊十五輯、一九八三)は、同じ葉の「象箕公／孟和公次子／位三二／諱怡台／妣鄭氏／生子六／思敬／應騰出繼／胞弟象聖公／名下為爲嗣／應灝／應濤／應饗／應潤」及び第一冊「歷代仕宦」第十葉裏の「三十四代、諱怡台、字象箕、官參軍、孟和公次子」との記述を引いて、余象箕が名怡台・字象箕である以上、余象斗も名文台・字象斗だったと推定している。しかし、注13で見た通り、余象斗の存命中にその息子と甥とが刊行した版本に余象斗は字仰止・号文台だと明記されている。更に、右に引いた『四書發筆文梯』では刊行者余象聖が複数の箇所ですら「怡台 象聖」と称しており、「怡台」は次男象箕の名ではなく、三男象聖の号として扱われている。兄の諱を弟が号とすることはあり得まい。息子や当の本人がリアルタイムで刊行した版本の記載と、数百年後に刊行された族譜のどちらに信を置くべきかは言うまでもない。よつて、余象斗兄弟は長男は名が象斗・字が仰止・号が文台、次男は名が象箕(また、別の資料により号が億台と判明する。注13拙稿三五頁参照)、三男は名が象聖・号が怡台、四男は名が象賢・号が次台と理解すべきである。なお、『書林余氏重修宗譜』は余象斗の末弟の象賢について彼自身の項では「應賢公／孟和公四子／(中略)／生子二／應時／應登／……」と記すが、親子で名に同じ文字を使うはずがないので、「應賢公」は明らかに「象賢公」の誤りである。

<sup>71</sup> 「(周亮工)年譜」による。なお、次男在揚は夭折している。

<sup>72</sup> 前掲『賴古堂集』附録に収める、周亮工の事績を述べた周在浚「行述」の記述から、在梁は亮節の息子と知れる。朱天曙注57論文参照。

<sup>73</sup> 北京大蔵本と同版だが刷りはやや遅く、封面には北京大蔵本には捺されていない魁星朱印(中央上)と陰刻正方「懷德／堂／圖書」朱印(左下)が捺されている。

<sup>74</sup> 劉乾「試談周亮工遙連堂所刻書」(『文物』一九八三年第九期)参照。

<sup>75</sup> 「例言」には「是書係余家藏本」、「余家鐫刺古籍甚富、其與是編并勝而尤為廣備。多是編所未見者、則有『經世宏猷』『歷朝館課』二書、其來舊矣」、「是編之後原附詩歌目、今敦崇實學、不事虛華。故另加定正、別為一集。非敢妄刪先輩成書也」、「是編所載皆翰苑諸公之作、原本附以名臣奏議數篇。為數不多、且館閣臺省不宜紊亂、愚意當另加搜羅、別為一集以行、容當續出」、「是編原板鐫自隆萬年間」などと見える。また、『經世宏辭』はこの二版以外の存在は確認出来なかった。

<sup>76</sup> 巻首題は単に『朱子語類』とする。『四庫全書總目』卷三十七に江西巡撫採進本がこの題で著録され、「國朝周在延編。在延祥符人、後流寓於江寧。其書乃於『朱子語類』中專取四書諸卷刊行、別無增損、亦無所考訂發明」とある。

<sup>77</sup> 周在浚「行述」(注72前掲)に「孫三。曾舉・仲舉、在浚出。畱舉、在延出」(「在浚」と「在延」は小字)とある。

<sup>78</sup> 九行二十字本で、所見のものは請求記号〇五五四六と同一八六九八(存三篇)の二本。いずれもマイクロフィルムでの閲覧なので、封面が墨印か藍印かは不明。未見のものは請求記号一四一〇九八および同一五三五四。他に請求記号一四〇三八〇が同名で九行十九字本の明版と著録されているが、未見。

<sup>79</sup> 他の篇では第四行ないし第四〇五行に篇により異なる「閲訛」「訂正」「叅訂」「較正」などの担当者の名前が加わり、その分それ以下の行が左にずれる。

<sup>80</sup> URL: [http://opac.nlc.gov.cn/F/5TTTSC15DC8S3YCS4DLHAS5ITDTF85MDCJRY5T634SNH982GP-08653?func=file&file\\_name=find-m。](http://opac.nlc.gov.cn/F/5TTTSC15DC8S3YCS4DLHAS5ITDTF85MDCJRY5T634SNH982GP-08653?func=file&file_name=find-m。)二〇一三年十一月二十四日閲覧。

<sup>81</sup> なお、『新刊醫林狀元壽世保元』は、卷三第七十三葉の版心下部に「如山」と見える。版心下部に文字が見えるのはこの一葉のみ

であるが、他の葉と同程度に版木の損傷が進んでいるため、補版とは考えにくい。周氏とは無関係の刻工名である可能性もあるが、各巻巻頭に見える刊行者が蓋印周文卿であるから、同排行の如山周文煒を指す可能性も無いとは言えまい。もしそうであれば、初めから蓋印周文卿の単独刊行だった訳ではなく、如山周文煒も協力しての出版だったことになるが、いずれ推測の域を出ない。

<sup>82</sup> なお、内閣文庫蔵本は各冊一巻ではあるが、表紙が換えられており、刷題簽ではなく書名と冊次のみを記した書題簽が貼付されている。

<sup>83</sup> この和刻本の封面には「萃慶堂刊」とあるが、これは金谿周氏の書坊名ではなく、万暦年間の余彰徳（字以誠、号泗泉）及びその子孫が建陽で営んだ書坊の名である。萃慶堂は前述の『百将伝』『万病回春』『昭代典則』などしばしば周氏の金陵刊本を翻刻や覆刻しており、その詳細は本論第七章で述べる。

<sup>84</sup> この記述は後述の同版ないし覆刻の諸本でも同様で、空格の位置はそれらに従った。なお、ここには「周文煒 如山甫」とあるから、「如山」は号ではなく字として扱われているようだ。周亮工の「減斎」なども資料によって字と明記されたり号と明記されたりしているのので、当時は字と号の区分は曖昧だったのかもしれない。

<sup>85</sup> 「（周亮工）年譜」に「明萬曆四十年壬子四月初七日子時、朱太淑人生公于金陵狀元境祖居。今所居宅廳事之右食舊菴、即産公室也」とある。

<sup>86</sup> 道光年間の進士である甘熙『白下瑣言』巻二に、「書坊皆在狀元境、比屋而居。有二十余家、大半皆江右人。雖通行坊本、然琳瑯滿架、亦殊可觀。廿餘年來、為浙人開設網莊、書坊悉變市肆、不過一二存者。可見世之逐末者多矣」とある。

<sup>87</sup> 明・胡心麟『經籍会通』（同『少室山房筆叢』所収）巻四に「凡金陵書肆、多在三山街及太學前」とある。

<sup>88</sup> 文煒と文煥が兄弟だということも含めて、それぞれの根拠は挙げておらず、周文煒以外の人物の号や字（周如泉の場合は名と字）、及び活動年代にも触れていない。

<sup>89</sup> 『中国古籍善本總目』（線装書局、二〇〇五）一〇七七頁に「明周文煥、周文煒輯 明萬卷樓刻本」として『新刻天下四民便覽萬寶全書』三十二巻存三十一巻（嘉興市図書館蔵）が著録されており、これを指すと思われる（筆者未見）。著録の通りであれば、周文煒も万巻樓の経営に関与していた可能性があるだろう。

<sup>90</sup> 原文「珀十一公生琥二十四前山公諱庭槐。為不孝孤曾大父、以先伯祖文卿公封文林郎鴻臚寺序班。前山公遊大梁、遂家焉。娶喻太夫人、生三子。長即先封公誥封嘉議大夫福建布政使司左布政使如山公」。

<sup>91</sup> 原文「父應槐數夢家山火光熾然、謂子孫當以文顯、因名諸子以文、咸從火、字公曰赤之」。なお、陳氏も指摘するが、周文煒の父の名は前掲『頼古堂集』附録の諸篇では「庭槐」ないし「廷槐」と表記されているので、「應槐」は誤字と思われる。

<sup>92</sup> 封贈の制度については『大明会典』巻八に詳しく、子が七品以上の所定の官品に進んだ時や、その他所定の功績を挙げたりした際に、父は自分が称号として持つ官位が子より高ければ一階級昇進し、子より低ければ子と同じ官位を称号として与えられるのが原則であったらしい。なお、生前に与えられるのが「封」、没後に与えられるのが「贈」であるが、周庭槐の場合は黄虞稷「行状」と周在浚「行述」には「封」、姜宸英「墓碣銘」では「贈」とあるので、どちらであったのかはつきりしない。また、正七品陞授の散官である文林郎と従九品の官位である鴻臚寺序班とは釣り合いが取れないし、『大明会典』によれば従九品への任官では父への封贈は行われないはずなのだが、周庭槐が封贈された明末の時点では制度が幾らか変わっていたのであろう。なお、周文煒の嘉議大夫（正三品初授の散官）・福建布政使司左布政使（従三品の官位）

は、子の亮工が順治十年に福建布政使司左布政使に昇った際に封ぜられたものと考えられる。

<sup>93</sup> 文革紅注4二〇一〇年論文が、金陵飲醇<sup>マ</sup>刊『增補武經備旨』(江西省圖書館藏、未見)の序に「余自甲辰(康熙三年)秋、隨長兄櫟園備兵山左、下帷于幽然台榭……」とあり、序末に「繡谷周亮輔印」が刻され、巻首には「金谿周亮輔猶庵增注」と記すと紹介し、これによって周亮輔を櫟園周亮工の弟であったとしている。

「(周亮工)年譜」によれば、康熙三年には周亮工は確かに山左(山東の異称)の青州で海防の任に当たっている。なお、博政・文革紅注4論文では、同書の封面には「金谿周猶庵先生纂著」とあり、序末の署名は「康熙五十四年歲在丙戌花朝之吉金谿過客周亮輔猶庵氏題于金陵細柳書屋」であることも挙げている。但し両論文とも亮輔という弟の存在が周亮工の伝記からは確認出来ないことには触れない。また、周亮工の同母兄弟が姉二人、第一人(亮節)、妹二人だったことは、後述の周亮工自身の文章から確認出来る(注110参照)。

<sup>94</sup> 前山周庭槐は金谿から祥符に籍を移しているが、対峰周曰校・竹潭周宗孔・敬素周希旦・敬竹周時泰ら第一世代の他の面々が自称する籍貫は専ら金谿(繡谷)ないし金陵(秣陵)であり、祥符(大梁)の人を名乗る例は確認出来ない。してみれば、籍を移したのは庭槐とその直系子孫(大業堂系)に限られると思われる。そのため、第一世代の全員をも包括する一族全体の呼称としては金谿周氏が相応しかろう。大業堂系も含めて、この一族の刊行した書物の著者や校訂者には金谿の人が非常に多く、金谿人としての人脈を存分に活用していたことが窺える。

<sup>95</sup> 従って、『重刻萬病回春原本』とは康熙七年重刊本の序から採った題であって、巻首題ではない。

<sup>96</sup> この和刻本は上注文の二層本で、各巻下層巻頭第七行に低十

一格で「閨門 書林 葉龍溪重刊」とある。上層の注は日本で加えられたもので、それを持たない下層と同款式の和刻本(正保四年刊本、慶安四年刊本など)もある。小曾戸注34解題参照。

<sup>97</sup> 原文「重刻萬病回春原本序」予先世藏書甚富。蓋有萬卷樓云。溯其始/事。當嘉隆之時。風氣初開。文教乍啓。古今珍/異之書。猶未盡行於世。而先大父從荊榛草昧/中。創行剞劂。遂使一時難致之藏。得以家傳/戶奉。至今推始事之功。必曰此萬卷樓本。//故凡屬予家傳書。海內群知。所自不可誣也。/其書自尊經翼傳外。惟有關於經濟利民生/者。始急為流播。而以醫方能生人。為尤切要。/因屬予鄉龔雲林先生。廣為搜討論著成書。/先之以壽世保元。次之以萬病回春。次之以古今/醫鑑。又次之以雲林神殼。皆為海內宗。則至今/尚有普渡慈航一書。未遑出以告世也。天(夫)の誤だろ(う)雲林先/生。昔之華陀秦越人也。於予先大父為外昆季。嘗/偕之遊汴。道遂大行於汴。又遊金陵。道更大行/金陵。所至有神醫之目。其成是書也。殫竭生平/之心力。而予先祖之延雲林先生也。亦不遺餘力而/奉之矣。猶記先君子述先大夫(父)の誤か)始事經營也。屬予//伯叔輩。較正魚魯。維伯暨叔曰。此何與人事。而以此/自瘝乎。先祖曰。是書利濟之功。在天下後世矣。吾後/世子孫。有以科名大振家聲者。咸於是書始基之/矣爾。小子其識之。越數十年。乃有虎林奸賈。利其成/事。公為攘竊。遂用回春一書。增以善本之名。初託/王宇泰先生重訂。久而人識其偽。則又易以雲林。奸詭百變。情形可知。予原其市心。總歸罔利。不忍重/加懲艾。不難姑與寬弛。但妄易藥(本文では「妄」だが、眉欄で「藥」に訂正)名。任竄分數。其/失僅在數字。其害至於傷生。遂使利天下之書。而/為禍天下之本。豈予先世(本文は「世」を脱するが、眉欄に朱で「一本貽字上有世字」とある)貽謀垂世之意乎。予因盡/加改正。一方一名。全從厥舊。識曰原本。庶使抱疴而/求者。溫涼不至誤投。君臣無虞素節。而弈世咸食//其福

也。天下之覽者。其亦慎辨縞素。而無為惑世之書所中也乎。予因述其始末。為天下正告之。／康熙七年戊申。管理江南江安等處督糧道前總督／京省錢法戶部右侍郎都察院協理院事左副都御史雲林周亮工撰（文中の句点は原本で文字の右下に朱で附されているものをそのまま示したが、書き下し文ではこれに拠らずに新たに句読を切った。また、／は改行、//は次半葉への改行、『は次葉への改行を表す）。

<sup>98</sup> 文革紅「江西小説刊刻地——「雲林」考」（注4前掲）参照。

<sup>99</sup> 第一節（4）で見た万曆三十年周文憲・周文煥・周文耀重刊『新刊萬病回春』の各巻巻頭第二行に低八格で「太醫院醫官金谿雲林龔廷賢子才編輯」とあり、第二節（7）で見た『新刊醫林狀元壽世保元』の二種の封面には共に「太醫院龔雲林著」とある。第二節（4）で見た通り、周亮工も祖先が住んだ金谿の櫟下という地名に因んで自ら櫟園と号し、他人からは櫟下先生と呼ばれていたというから、龔廷賢も出身地の小地名をそのまま号としたのである。他の刊本の署名と照らし合わせても、名廷賢・字子才・号雲林・籍貫金谿という理解で問題無い。

<sup>100</sup> 清代後期に『三国演義』の通行本としての地位を確立する所謂毛宗崗本のうち、現存最古の版本と見られている。

<sup>101</sup> 前者の巻首の半葉分のデジタル画像を除き未見。因みに、前者は巻一卷頭第九行に低十四格で「繡谷書林周曰校刊行」（「曰校」は小字）と記す同名刊本が内閣文庫にも蔵され、巻首は台湾故宮本と同版だが、封面を欠いていて刊年の手掛かりが無い。内閣文庫は別に四周花欄の枠内を三欄に分ち左右に「新刊官板補註／黃帝內經素問」、中央に「萬曆甲申（十二年）夏月周氏對峯刊行」とある封面を持つ『素問鈔補正』十二卷（欠卷十二）を蔵するが、同書は封面以外に刊行者名や書坊名は見えず、中身も『素問』そのものではなくその節略本である。もしかすると、この封面は右に挙げた現在封面を欠く『重廣補註黃帝內經素問』に附されている

たものが混入したのかもしれない。更に、『重廣補註黃帝內經素問』には『素問鈔補正』に附いているものと同意匠の封面を持つ風月堂莊左衛門寛文三年跋刊本があるが、その中身は各巻巻頭第六行に低七格で「明（隔四格）熊宗立 句讀」と記す、右に挙げた二種の内閣文庫蔵本のどちらとも異なる『素問』であり、この封面を巡る状況は非常に錯綜している。また、『新刊黃帝內經靈樞』にも巻一卷頭第二行に低八行で「繡谷書林周曰校重刊」と記す京都風月莊左衛門刊本があるが、こちらは封面の付いたものは未見。いずれにしても、周曰校が『素問』と『靈樞』を刊行していたことは確かである。

<sup>102</sup> この他にも挙業書、類書や尺牘を始めとする実用書、『昭代典則』のような史部の書などの刊行点数が多く、章回小説は数の上ではそれらに比べて突出している訳ではない。なお、章回小説と並ぶ売れ筋であったはずの戯曲は皆無に近く、同じく金谿の人が金陵で営む唐氏富春堂（主人は唐富春、字子和、号対溪）が江西ゆかりの弋陽腔の戯曲を主力商品とし（馬華祥『明代弋陽腔伝奇考』（中国社会科学出版社、二〇〇九）一一五頁によると、富春堂の刊行した弋陽腔の戯曲刊本は現存するものだけで二十二種に上り、明代において最も多くの弋陽腔戯曲を手掛けた書坊だという）、唐氏世徳堂もかなりの数の戯曲を刊行しているのと対照的である。一方、富春堂や世徳堂の刊本には医書が少ないから、共同での刊本もあるなど協力的な関係にあった周氏万卷楼グループと唐氏グループは、互いに得意分野の棲み分けを行っていたのであろう。

<sup>103</sup> 巻首題は『雲林醫聖增補醫鑑回春』であるが、目録題及び巻二以降の巻首題は全て『雲林醫聖普渡慈航』であり、自序と自跋の題も共に『普渡慈航』なので、巻二以降の題を採った。

<sup>104</sup> 左右五欄に分けた封面の中央に「萬曆庚寅歲（十八年）秋月吉旦周對峰刊行」、大尾の長方木記に「萬曆辛卯歲（十九年）書／林周對峰鐫行」とあり、各巻頭第二〜五行に「（低三格）太醫院醫官

金谿雲林龔廷賢子才編著／（低十四格）男懋陞全校／（低十格）門生同邑吳濟民全校／（低十格）金陵書林周曰校刊行」（「全校」は第三行と第四行の中間に一つだけ記す）と見える慶長八年古活字本（宮内庁書陵部蔵）がある。「崑／萬曆辛卯春月上吉歸安鹿門山人茅坤撰」と末尾に記す「雲林神穀序」に既刊の『古今医鑑』と『万病回春』に続く龔廷賢の著作をその縁戚の周曰校が刊行することになったとの旨が見えるので（原文「太醫雲林龔君、少則精其業、居大梁之都、名燁燁。在諸薦紳間、所撰有『古今醫鑑』『萬病回春』二書、已膾炙海內。而最後有『神穀』若干卷、遠近競慕而繕寫之、至湧洛陽之價。其姻對峯周君、圖付剞劂、而丐敘於不佞」、古活字本の底本となった万曆十九年刊の周曰校刊本が初刻本であつたと考えられる。現存の唐本だけでも複数の版種があり、伝本も少なくないが、初刻本と考えられるものは未見。第七章も参照。

<sup>105</sup> 唐本・和刻本を通じて、慶安元年小嶋弥左衛門刊本（内閣文庫「三本」、東北大学附属図書館「三本」等蔵）の1版しか現存が知られていない。小嶋弥左衛門刊本には「崑／萬曆甲午歲（二十二年）仲春之吉／魯王三畏書於存心殿」と末尾に記した「魯府禁方序」があり、序末の署名の直後に陽刻正方「魯府／圖書」と同「丹書／金冊／之封」の二つの大印を刻す。各巻巻頭第二、六行には「（低五格）太醫院吏目臣金谿龔廷賢 編／（低五格）魯府良醫 臣古燕劉應泰校正／（低八格）本府醫生臣陳時務同校／（低八格）本府醫生臣王 璽同校／（低八格）金陵書林 周曰校督刊」（「臣」は全て小字、「本府醫生」と「同校」はいずれも第四行と第五行の中間に一つだけ記す）と見える。してみると、この和刻本の底本は、少なくとも形の上では万曆二十二年序刊の魯王府による官刻本であり、その刊行作業を周曰校が請け負っていたことになる。版種が少ないのも、本当に官刻本として少数出版されたのみで広く伝わらなかったためかもしれない。なお、魯王三

畏序は、癸巳（万曆二十一年）秋に妃の張氏が病に罹り、魯府の藩医では治せず広く名医を求めたところ、金谿の龔廷賢が的確な処方では治癒させたので、天下第一の名医と認めて「医林状元」の称号を与えたこと、龔廷賢には既に『医鑑』『萬病回春』『仙方』『神穀』の四著があること、魯府の収集した秘方と龔廷賢の知識とを併せて新たに『魯府禁方』四巻を刊行することにしたことなどを述べている。当時の魯王は嘉靖二十八年襲封、万曆二十二年薨の魯恭王朱頤坦である（『明史』卷百一「太祖二十六子世表二」）。

<sup>106</sup> 唐本は初刻本（内閣文庫、尊経閣文庫等蔵）のみ知られ、それを底本とした元禄九年（一六九六）和刻本（内閣文庫「二本」等蔵）がある。初刻本は「……著者何／人九十歳翁著醫鑑諸書金谿之雲林老／叟是也時崇禎元年仲春日書于仁孝／堂中」と結ぶ「普渡慈航自序」を含む四つの序と「……金谿龔廷賢書于仁／孝堂／崑／崇禎五年春月吉旦」と結ぶ「普渡慈航跋」を備え、各巻巻頭第六または八行に「金谿書林際雲唐廷揚梓行」とある。自跋にはこれまでに十編の医書を上梓したと見え（原文「乃編一書、又編一書、以至十編也……曰先十種災木若屬贅、復今再仍之」、もしこれが概数でなく実数だった場合、ここに挙げた以外に更に二書が刊行されていたことになる）。

<sup>107</sup> 小曾戸洋『「濟世全書」解題——付・『普渡慈航』および龔廷賢の生没年について』（『和刻漢籍医書集成』第十二輯、エンタプライズ、一九九一）参照。なお、既存の偽書説には根拠は示されておらず、関係者の没年は偽書説の根拠として小曾戸氏が推定したものである。

<sup>108</sup> もし仮にそうであれば、やはり金谿の人で嘉隆の境に金陵で刻書を始め、周曰校と協力関係にあった世徳堂主人龍泉唐廷仁も、やはり同世代の姻戚で排行を揃えていたという可能性も浮上して来る。全く想像の域を出ていないが、今後の検討課題としたい。また、唐廷仁の同年輩の同族の対溪唐富春も、対峰周曰校と号の

一字目が揃い、二字目が互いに対を成している。

<sup>109</sup> 本章初出時には許氏注49論文を未見で、周文煒を隆慶年間から万曆初年頃の生まれと推定したが、許氏の指摘が正しからう。なお、「(周亮工)年譜」により、周文煒の没年は順治十五年(一六五八)と知れる。

<sup>110</sup> 原文「獨痛父母生我同胞兄弟姊妹六人、第三妹先没、二姊亦繼亡、去歲之春老孀姊又以七十病卒矣。今弟又云亡、四妹遠在汴上、弟之凶問四妹尚不知、何日聞之?」。

<sup>111</sup> その間に女兒が生まれていたかどうかは確かめられなかった。

<sup>112</sup> 本章第一節で前述の通り、周文卿と周文煒は南京国子監生に、周文燿は武学生になったことが知れるので、第二世代の者たちはまずは科挙や武挙による栄達を志していたのだろう。

<sup>113</sup> 王宇泰先生の重訂を謳う龔廷賢医書の版本は、『古今医鑑』には存在する。即ち『王宇泰先生訂補古今醫鑑』十六巻で、所見の唐本は乾隆五十九年(一七九四)瀛經堂重刊本(東北大学図書館蔵)のみだが、それ以前に明暦や寛文の和刻本もある。もともと、「善本」という角書は見えないので、周亮工の非難している王宇泰の重訂を騙った『万病回春』と姉妹品という訳ではないかもしれない。むしろ、汪淇が『古今医鑑』に実際に王宇泰重訂本があるのに目を付けて『万病回春』の王宇泰重訂本を偽撰した可能性もある。

<sup>114</sup> Ellen Widmer “Hsi-yu Cheng-tao Shu in the Context of Wang Chi's Publishing Enterprise”『漢学研究』第六巻第一期、一九八八)、陳恩虎「刻書家汪洪生平考」『文献』二〇〇五年第三期)、文革紅「汪洪「蝸寄」及其所刻書籍考」『文献』二〇〇六年第三期)等参照。

<sup>115</sup> 梁氏はこれによって封面欠残本を「これは『李卓吾先生批評三國志真本』であると判明した」(三六頁)とするが、その判断は些か慎重さを欠くだろう。何故なら、『西遊記』の李卓吾評甲本と同

版の図が陳士斌詮解本の初期版本に附されているという例がある(本論第六章参照)ように、封面欠残本の本文部分が全く別の版本だった可能性もあるからだ。附言すれば、梁氏は所見の『李卓吾先生批評三國志真本』のいずれからも刊行元の書坊は分からないとしながらも、同名書を「宝翰楼刻本」と著録する先行研究が複数あるという理由によって『李卓吾先生批評三國志真本』を一律に宝翰楼本と呼称しているが、これは一層慎重さに欠ける感がある。先行の著録の対象となった本と梁氏所見の本が同版だとは限らないし、同版であったとしても梁氏所見の本の印行者が宝翰楼であったとは限らないからである。

<sup>116</sup> 原文「人當収閉之年、而猶務名開發、大不祥也。少年人無一點少年氣、春行秋令也、尚且不可。老年人無一點老年氣、冬行春令也、危哉危哉」。これで全文だが、おそらく抄録であろう。

<sup>117</sup> なお、聖藩文庫にはこれと同じく本文が上下三層の『詩經心訣』八巻があり、巻一・四・六・八の各巻頭の上層第二・四行に低四格で「永福 黃文煥 維章父 裁定／古臨 何大掄 元士父 纂著／綉谷 周文燿 汝映父 梓行」(「纂著」は巻四・六では「輯纂」。「綉」は巻八では「繡」とある。これにより、如泉周文燿は字が汝映だと知れる。封面は欠くものの、「詩經心訣引」の末尾に「天啓□卯歲八月既望永福黃／文煥維章甫題于金陵之萬／巻樓」、「詩經心訣序」の末尾に「天啓丁卯(七年)秋月眷友弟李□旻／本仁父謹識」とあり、天啓七年序刊である。『雙井軒手授易經心訣』の刊行も前後数年以内であろう。

<sup>118</sup> 「雙井軒同訂易經心訣姓氏」の最後に「纂著／繡谷 王元建道真」(「道真」は小字)とあるので、破損箇所にはおおよそ「繡谷王道真」くらいの文字があったと推測出来る。



## 第六章 清本諸系統の版本について

### はじめに

本章では、いずれも清代に編まれ、第九回を江流和尚故事とするという共通点を持つ、百回本『西遊記』の清本諸系統のそれぞれについて版本の問題を見る。但し、伝本の数が少なく全ての版種を個人の手で網羅的に調査することが可能だった明本の場合とは異なり、清本は数百では到底済まないであろう膨大な伝本が残っているから、どれだけの版種があるのかをしかと定めることでさえ、個人の手に余る作業となる。そこで、各系統ごとに適宜照準を絞って、目睹し得た版本から得られた知見をまとめる方針を採りたい。

#### 一、汪象旭箋評本系

成書年代の順に、まずは通常『西遊証道書』と呼ばれる、汪象旭箋評本系から見て行こう。

##### (1) 汪氏蝸寄刊本(初刻本)

この系統には、箋評者である汪象旭自身が営む書坊から刊行された、明らかに初刻本と分かるものがある。即ち汪氏蝸寄刊本『鐫像

古本西遊證道書』不分卷百回(国立公文書館内閣文庫、京都大学人文科学研究所、中国国家図書館「後修」蔵)である。三本とも同版で印刷時期にも大差は認められないが、鄭振鐸氏旧蔵の中国国家図書館蔵本は、聖僧歴難簿で他の二本が「(空二格)難行七十難」としていた二字分の空格に「滅法國」の三字を埋木で補っている。

目首第二、三行に「鍾山 黄太鴻笑蒼子 同箋評／西陵 汪象旭 懽漪子 同箋評」(傍線部は行の中間に共通で一つだけ記す、以下同)、第一回首第二、三行には「西陵 殘夢道人汪懽漪 箋評／鍾山 半非居士黄笑蒼 印正」とあり、殘夢道人・懽漪子こと汪象旭と、半非居士・笑蒼子こと黄太鴻の二人が評注を担当したと示されているが、前者は汪淇(字右子)が後に象旭と改名したこと、後者は崇禎十三年の進士黄周星(字九烟)であることが分かっている<sup>1)</sup>。

本文毎葉の版心下部に「蝸寄」とあるが、前章でも見た通り蝸寄還読齋は汪淇即ち汪象旭が杭州で営んだ書坊で、毎葉版心下部に「蝸寄」と記すのは汪氏蝸寄還読齋刊本に良く見られる特徴である<sup>2)</sup>。

胡念翊が画工を務めた半葉全面式の図を巻頭に十六葉有し(表が図、裏が賛の形式なので計十六幅)、構図にはしばしば李卓吾評甲本

または乙本の図の影響が窺えるが、その単純な模倣ではない。本文は半葉九行二十六字、注文双行同。内匡郭一九・九×一〇・四 cm（京大人文研蔵本）という縦長な版面になっている。

汪氏蝸寄刊本の百回本『西遊記』展開史上の意義は、何と云ってもまず第一に第九回を江流和尚説話とする改編を施したことである。この処理については、本論の序章に引いた通り、第九回冒頭の評で汪象旭自身が「大略堂釋厄傳古本」に拠って補ったとの旨を述べている。この大略堂釋厄傳なるものがある本であったかは様々な議論がなされて来たが、各種の尺牘集によって確認出来る汪象旭の交友関係に注目して、これは大略堂なる書坊が刊行した釋厄傳という意味では無く、汪象旭と親しく交際のあった査望（堂号大略堂）が所蔵していた釋厄傳という意味であろうとする Ellen Widmer 注 2 論文の見解が有力である。江流和尚故事を有し釋厄傳に類する書名を持つ版本と言えば分則本の朱鼎臣編本が連想され、それと見て良いかどうか議論されているが、本論文では分則本の位置付けは留保することとしているので、その議論にも踏み込まないでおく。

なお、Widmer 注 2 論文では、汪洪の営んだ書坊である蝸寄還読齋の活動状況も詳細に検討して、汪氏蝸寄刊本『鐫像古本西遊證道書』を康熙二年刊本と推定している。これも従うべき見解であろう。

第九〜十二回の改編と並ぶ百回本『西遊記』展開史上で果たした

汪氏蝸寄刊本のもう一つの大きな役割として、作者を金末元初の道士の長春真人丘処機であるとする内容の、末尾に「天曆己巳翰林學士臨川邵／庵虞集撰」と署名する「原序」を載せ、かつ別に「丘長春真君傳」も載せて、丘処機を作者として喧伝したことが挙げられる。もちろんこれは丘処機の旅行記である『長春真人西遊記』と章回小説を混同したに過ぎないが、清本の多くが作者の名を丘処機と明記し、清代において丘処機作者説が大勢を占める状況へと繋がって行く。なお、作者が丘処機だというのが誤りだという点の良いとしても虞集の序自体は作者を勘違いした上での真作ではないかとする太田辰夫氏と、それに疑義を呈する磯部彰氏の論争が行われたことがある<sup>4</sup>。これに関しては磯部氏の疑念がもつともであると感ずるし、虞集序を虞集の真作と認める論は、この論争をおそらく踏まえていないであろう大陸の研究者らによっても否定されている。

この汪氏蝸寄刊本の本文が李卓吾評本を底本として省略を施した文簡本であることは、既に吳聖哲氏が李卓吾評本の脱文を引き継ぐという確かな根拠を挙げて明らかにされており、本論第四章では聖僧歷難簿末尾の「路過十萬八千里」が李卓吾評丙本とは異なり甲本・乙本と一致することから、李卓吾評本の中でも甲本・乙本のどちらかが底本だと思われることを指摘した。では、そのどちらが汪氏蝸寄刊本の本文の底本となったのかまで明らかにすることは出来

るだろうか。甲本と乙本の間にはあまり異同が無く、しかも蝸寄刊本が文簡本であるためなかなか確認しづらいのだが、手掛かりになりそうな事例を幾つか甲本と乙本に共通する回数・葉数・行数によって挙げて、

・第十四回第二葉裏第二行

甲本と蝸寄刊本の「救我一救」に対して乙本は「救我一人」。

・第十四回第六葉裏第九行

甲本と蝸寄刊本の「不犯天光」に対して乙本は「不等天亮」。

・第三十回第六葉表第一行

甲本「那三十年前」に対して乙本と蝸寄刊本は「那十三年前」。

・第五十七回第十一葉第一行

甲本「不是空勞一場神思也」に対して乙本「不是空勞一場

思也」、蝸寄刊本は「不是空勞神思也」。

といった傾向が見出せる。第三十回の例を除いて蝸寄刊本は甲本の方に一致しており、例外である第三十回の例も、少し前に「十三年」という設定が見えているので、乙本と蝸寄刊本がそれぞれ独自に誤りを正すことは十分に可能であったと言える<sup>7</sup>。第十四回の二例などは乙本に拠らず甲本に拠ることが明確な事例であるから、蝸寄刊本が底本とした李卓吾評本は甲本であった可能性が高からう。

(2) 蔡元放重訂本（九如堂刊本）

吳聖昔『《西遊証道書》雜考二題』（『文教資料』一九九五年第二期）において、孫楷第『中国通俗小説書目』（初版：国立北平図書館、一九三三。改訂版：作家出版社、一九五七。重訂版：人民文学出版社、一九八二。以下『孫目』と略称）が劉一明解本の序に引かれるが未見との旨だけ記して項目を立てる「蔡金注西遊記」なるものに当たる版本として、封面天頭に「聖嘆外書」、同梓内右欄に「西陵儋漪子箋註／秣陵蔡元放重訂」、同左欄に「（大字）繡像西遊証道書／（小字）文盛堂藏板」とある浙江図書館蔵本が紹介されたものである。蔡金とはこの封面に見える蔡元放と金聖歎のことであるという吳氏の指摘は、この本を未見の田中巖氏によっても予想されていたことであり、確かなものと認めて良からう。

筆者所見の伝本は『西遊証道大奇書』二十卷百回（浙江図書館、パリ国立図書館蔵）で、両者は同版である。但し、封面が異なり、パリ蔵本の封面は天頭に「聖嘆外書」、梓内三欄に分ち右から「秣陵蔡元放増評／（大字）西遊証道／（大字）奇書（小字）懷德堂藏板」とする。印刷の状態からすると浙江蔵本がやや先でパリ蔵本はそれに遅れると思われるので、この版本を所有したのは文盛堂が先で、懷德堂はその後であろう。但し、毎葉版心下部に「九如堂」とあるので、文盛堂も版本の刊行者ではなく、九如堂刊本の版本を

入手したに過ぎないかもしれない（九如堂と文盛堂に何らかの関係があつて初版時からこのような封面であつた可能性もなしとしないが、未詳）<sup>10</sup>。

「増評證道奇書序」があり、末尾に「……乾隆十五年歲次／庚午春二月金陵野雲主人題／于支瞬居中」と記す。野雲主人は蔡元放の号として知られるものの一つなので、乾隆十五年序刊本と認めて良からう。但し、前述の如く筆者所見の二本はいずれも刊行者とは別の書坊による後印本の可能性が高く、印刷時期は更に下るはずである。また、「讀法」首第二／三行に「西陵憺漪道人汪象旭原評／金陵野雲主人蔡宙愍評」、目首第二／三行に「聖嘆外書（隔六格）西陵汪憺漪子評／蒼子別集（隔六格）雲林市隱散人較」、各卷首第二行に「聖嘆外書（隔六格）西陵汪憺漪子評」とある。

また、巻頭に表図裏賛の十七葉があり、第一葉表は陳士斌詮解本系の一部に見えるのと同じ構図の玄奘の肖像、第二／十七葉表は汪氏蝸寄刊本の構図を踏襲した模刻で、李卓吾評本各種や蝸寄刊本などの明末清初刊本の図に比べると格段に劣るが、乾隆刊本の図としては上々の出来映えである。本文も半葉九行二十字（注文双行同）という明刊百回本にも見られなかったほどゆったりとした行款で、方匠体の字様も通俗小説の乾隆刊本としては精刻であるから、製作に十分な資金を投じた高級志向の版本であつたようだ。

あちこちで記される「聖嘆外書」というのはもちろん金聖歎を指し、陳士斌詮解本系の版本の中にも「金聖歎加批」との宣伝文句が見えるものがある。しかし、他の人物の評と区別して金聖歎のものと称する独自の評を掲げる版本というのは知られていない。よって、これは単なる偽託と見て良いだろう。

各回の回前評語は基本的に汪氏蝸寄刊本のそれを踏襲したものであるから、蔡元放が単独で蝸寄刊本を底本として編んだ評注本であると予想される。しかし、第一回第一葉表に見える「釋厄二字、着眼。不能釋厄、不如不讀西遊記」という小字双行注は、李卓吾評丙本・甲本・乙本に共通する最初の眉批（乙本では傍批）と同文で、蝸寄刊本には見えないものであるから、李卓吾批評本系の何らかの版本も参照してその評語も採り入れているようだ。

また、聖僧歷難簿を見ると「拯救駝羅第五十七難」の「拯救駝羅」は陳本型歷難簿の特徴であるし（但し配列は李本型歷難簿のまま）、「搬運車遲三十三難」と「城裡遇災六十三難」も陳本型聖僧歷難簿及び張書紳註本系と一致する（第一章表4・5参照）。よって、蝸寄刊本の単純な翻刻ではなく、何らかの李卓吾批評本や陳士斌詮解本、場合によっては張書紳註本とも対校した上で、評語にも本文にも適宜改訂を施していたものと判断される。なお、後述の通り張書紳註本の自序の年次は乾隆十三年であるから、もし乾隆十五年自序の蔡

元放重訂本が張書紳註本を参照していたとしたら、刊行されたばかりの新版をいち早く手に入れて対校に使っていたことになる。

### (3) 羊頭狗肉諸本

序章で述べた通り、書名は陳士斌詮解本のものだったはずの『西遊真詮』としながら、実際の中身は汪象旭箋評本を更に簡略化した文簡本であるという羊頭狗肉の十卷本・八卷本・六卷本などが、清代を通して多数刊行されている。第一章表5の李本型の聖僧歴難簿の比較表には、この系統を代表して、黄紙墨印の封面天頭に横書きで「繡像真詮」、左右三欄の枠内を「懺漪子評／西遊記／懷新樓梓行」（左欄下寄せ）とする『西遊真詮』十卷（東京大学東洋文化研究所双紅堂文庫蔵。無窮会図書館や神戸市立中央図書館吉川文庫等にも同版本あり）の聖僧歴難簿を載せておいた。巻首題に反して陳本型歴難簿の影響は全く見られず、汪象旭箋評本系のそれを更に簡略化したものであることが窺えるであろう。

この双紅堂文庫蔵本は、封面こそ「懺漪子評」と「西遊記」で陳士斌詮解本系の要素は全く見せていないが、目首第二・五行に「嘉平 金人瑞 聖歎／西陵 汪象旭 懺漪 全評閱／山陰 陳士斌 悟一子 全評閱／溫陵 李 贄 卓吾」と記している。第三・四行の中間に一つだけ記される「全評閱」は無論四人全員にかかるから、

実在する李卓吾批評本・汪象旭箋評本・陳士斌詮解本を対校し、更に前述の通り存在しないはずの金聖歎評本なるものまで使っていると称していることになる。しかし、第一回首にこそ蝸寄刊本に見える汪懺漪評を載せているが、他の回にはいかなる評語も全く見えない。陳士斌詮解本系に属する版本の影響が認められるのは、巻頭にまとめられる半葉の表全面に登場人物を描く図（裏に贄を付す）が、陳士斌詮解本系のうち上海古籍出版社蔵本などと同系統の図であるという点くらいである。

この系統の羊頭狗肉本は版種がかなり多いようで、全容は掴めていないが、所見の主なものだけ幾つか列挙しておきたい。なお、以下に挙げる十卷本・八卷本・六卷本の各種は、いずれも巻首題を『西遊真詮』とし、目首第二・五行に前述の記載があり、実際には僅かに第一回首に汪懺漪の評が見えるばかりである点、本文は汪象旭箋評本系の更に簡略化が進んだものである点が共通する。また、殆どのものは、汪氏蝸寄刊本にあった例の虞集序も備えているが、署名や年次まで汪氏蝸寄刊本のそれと同じとは限らない。

十卷本だけでも複数の版があり、例えば東京大学東洋文化研究所倉石文庫蔵本や北京大学図書館蔵本は、双紅堂文庫蔵本も含めて互いに異版である。このうち注目すべきは北京大学図書館蔵本で、双

紅堂文庫蔵本と互いに覆刻の関係にあるのだが（但し、一方がもう一方を直接覆刻したものかどうかは未詳）、上下二層で狭い上層に横書きで「世徳堂」、下層に「新鐫西遊記（以下欠損）」とする刷題簽が残り、封面下層左欄にも「世徳堂梓行」とあるのだ（天頭と右欄・中央欄の文字は双紅堂文庫蔵本に同じ）。当然のこととして、現存最古の百回本を刊行した唐氏世徳堂との関係の有無が気になるのである。しかし、既に第三章で見たように、その唐氏世徳堂は明末の天啓年間辺りを最後に活動が確認出来なくなる。この北京大学図書館蔵本は、陳士斌の名を出している以上は明らかに康熙後半以降の刊であるから、世徳堂という書坊名は偶然の一致に過ぎず、唐氏世徳堂と直接の関係は無いだろう<sup>11</sup>。本文系統の上でも、この版本は世徳堂本とは大きくかけ離れている。

筆者所見の六卷本は、上海図書館に黄紙墨印の封面天頭に横書きで「嘉慶丙子年（二十一年）新鐫」、同枠内に「懽漪子批評」（大字）繡像西遊／（大字）真詮（小字分二行）宏道堂／藏板」とする巾箱本、河南省図書館に黄紙墨印の封面を左右三欄に分ち「懽漪子評／（大字）繡像西遊／（大字）真詮（小字）善成堂梓」とする巾箱本がある。いずれも十巻本の人物図の一部を模刻して巻頭に備える。なお、後者は虞集序の年次を「萬曆己未（四十七年）」に作るが、その由来は不明。

筆者所見の八巻本は、復旦大学図書館に封面左下を「西泰山／藏版」とする（他の欄の文字は双紅堂文庫蔵本に同じ）巾箱本、河南省図書館に封面天頭に横書きで「光緒丁未（三十三年）新刻」、左右三欄の枠内に「聖歎外書／繪像西遊記／有益堂行」とする巾箱本がある。この二本とも、虞集序には年次も署名も無くなっている。なお、このうち前者は、寧稼雨氏が未知の版本として紹介した寧氏自身の家蔵本（筆者未見）<sup>12</sup>と書誌情報が同じであるから、おそらくそれと同版ではないかと思われる。

なお、寧氏注12論文によると、『西遊真詮』という書名の六巻本には他に首都図書館所蔵の大文堂刊が、同じく八巻本には他に吉林省図書館所蔵の武林三益堂刊本があるらしいが、いずれも寧氏も未見のことと詳細は未詳。しかし、六巻本や八巻本の形態を採る陳士斌詮解本は先行研究の著録にも筆者の所見にも入ったことはないので、それらもおそらくこの羊頭狗肉本の一種であろう。

汪象旭箋評本系の本文を持つ羊頭狗肉本にはまだまだ多数の版種があるものと思われるが、目下のところこの程度しか把握出来ない。しかし、八巻本の有益堂行本の刊年として封面に見える光緒三十三年と言え一九〇七年であるから、二十世紀初頭に至ってもまだこの系統の木版本が刊行され続けていたことが分かった。この羊頭狗肉本系諸本は、清代においては本物の『西遊真詮』こと陳士

斌詮解本系諸本と並んで、非常に流行したものと云って良いだろう。所見の六卷本や八卷本はいずれも巾箱本で、十卷本も版型は小さめのものが多い。また、実質的に評が省略されており、本文も簡略化が進んだ杜撰なものである。大版のものから巾箱本までバリエーションに富み、その大半がきちんと評を備えている陳士斌詮解本系と比べると、一回り社会的階層の低い読者層を対象として刊行されていた系統であつたかも知れない。

## 二、陳士斌詮解本系

文簡本である陳士斌詮解本系（所謂西遊真詮）は、百回本『西遊記』の諸系統の中でも最も版種に富むものと見られ、康熙中期に登場した後、清末まで通行本の地位を確立していた系統である。しかし、あまりにも伝本が多すぎて網羅的な調査が簡単には望めないことや、最も版種に富むと言っても通行本の宿命で杜撰なものも多いことなどから、全容の把握は進んでいない。例えば、寧氏注<sup>12</sup>論文は先行研究での言及や各地の公的機関の館蔵目録などから十八種類の版を列挙しているが、原本未見のまま目録に著録された情報を集めたに過ぎないため、前節で見た「巻首題は『西遊真詮』だが中身は汪象旭箋評本系」の羊頭狗肉本が少なからず混じってしまったている（例えば、前述の北京大学図書館蔵世德堂刊十卷本『西遊真詮』

を、巻数を二十卷に誤りつつ含めている）。

この点、同じく清代の通行本と認識されている『水滸伝』の金聖歎本や『三国演義』の毛宗崗本と良く似た状況だが、先行研究において金聖歎本では貫華堂刊本、毛宗崗本では醉耕堂刊本が、それぞれ初刻本もしくはそれに最も近い版本だという共通理解は概ね得られているのに対して、陳士斌詮解本は一体どれが最も初刻に近いのかという問題でさえ殆ど検討されることが無いままとなっている。

筆者も諸系統の全容まではとても把握できていないが、初刻本の問題に関しては一定の知見を得ることが出来たので、本節ではこの系統の初刻本はどれかという問題に焦点を絞って検討したい。

### （1）十行二十二字諸本の版本問題

さて、殆ど検討されることが無い問題だとは言ったものの、太田注<sup>1</sup>論文が、この系統に属する版本を十行二十二字の甲本、十一行二十四字の乙本、十行二十四字の丙本の三種に大きく分類している。

ただ、李卓吾評本の甲本・乙本・丙本が一名称が一版を指す用語であつたのとは異なり、太田氏はこの系統では甲乙丙それぞれの中に更に版の相違を認めている。筆者は甲本・乙本などと言う場合には一つの名称を一つの版に一对一で対応させるべきだと考えているので<sup>13</sup>、この陳士斌詮解本系の分類については太田氏の甲本・乙本・丙本の称には拠らず、ひとまず十行二十二字諸本・十一行二十

四字諸本・十行二十四字諸本と呼んでおきたい。

太田氏は甲乙丙の称が刊行順を表すと明言はしていないが、図を持たない十行二十二字の静嘉堂文庫蔵本にのみ、殆どの伝本にある康熙丙子（三十五年）の尤侗序以外に、他の伝本には見られない末尾に「康熙甲戌（三十三年）中秋上浣山陰悟一子陳士斌允生甫自識」と署名する「眞詮自序」があることを指摘して、その全文を引いた上で、

静嘉堂本の特色としては悟一子の自序を有する点が第一にあげられる。ことによると原刊本には作者自序のみを有し、尤侗の序は再版本に至って初めて加えられたものであるかも知れない。もしそうであれば、他本にあるごとき図像は原刊本にはなかったものかとおもわれる。

と述べている（二頁）。太田氏はこの静嘉堂蔵本を初刻本に比較的近いものと考えていたと受け止めて良いだろう。太田氏は続けて、

静嘉堂本に近いものとして無窮会蔵本がある。第一冊を欠き、本文第一回からはじまっている。版式は同じであるが、上欄の評は静嘉堂本よりも少く、同版ではない。以上二本をいまかりに甲本と名づける。

とする（三頁）。「甲本」についての太田氏の言及は以上である。

太田氏は、十行二十二字諸本を少なくとも現存諸本の中では早期

のものと見て、右の見解を示された。しかし、管見の限りでは、この十行二十二字諸本は太田氏以外には全く言及されたことが無い。

例えば、『古本小説集成』に影印を収める陳士斌詮解本系の版本は、同書の徐朔方「前言」によると「上海古籍出版社所藏乾隆四十五年庚子（一七八〇）刊本」だが、これは十一行二十四字で、太田氏の言う「乙本」の一種である。徐氏は版本をめぐる問題については最初に「此書有清乾隆庚子（一七八〇）刊本。芥子園刊本、内封有「長春真人證道書」字樣、実与『西遊證道書』同一系統」と言うのみで、他の版本には一切触れていない。実際に影印されている上海古籍出版社蔵本の封面は「悟一子批點西／遊真詮」だし、芥子園の文字も見えないので、どうも徐氏は影印の底本とは別の本のことを言っているらしい。また、「実与『西遊證道書』同一系統」というのは、確かにそういう封面を持つ伝本はあるが<sup>14</sup>、その本文や評語は汪象旭箋評本系のもではなく、陳士斌詮解本系のものであるから（両系統は第一章で確認した通り聖僧歷難簿の類型が全く異なるなど本文系統を異にするものだし、評語も明らかに別系統である）、実際にはこれも異なる系統間での書名の混乱の一例と解釈すべきである。おまけに、影印からは上海古籍出版社蔵本を乾隆庚子刊と看做すべき根拠も見出せないで、徐氏の記述は相当に混乱しているようである。これは単に徐氏の杜撰に起因する問題だという訳ではなく、一



九九〇年代半ばの時点でも、この系統の版本についてはそれほどまでに説明が進んでいなかったのだということを示しているとは受け止められまいか。

近年に至っても、曹炳建注1書第九章ではこの系統の版本問題には全く踏み込んでおらず、『古本小説集成』影印本によって尤侗序の内容や批評の特徴を些か検討するに止まっている。

では、十行二十二字系諸本の伝本について実際に確認してみよう。太田氏の挙げる二本の他、筆者はこれまでに上海図書館で一本、中央研究院傅斯年図書館で一本、中国国家図書館普通古籍館で残本二本（請求記号XD七三一「存第五十二回」とXD五五一九「存序、目、図」。以下請求記号で呼び分ける）という、総計六本の十行二十二字本を閲覧している。

最初に断っておくべきこととして、太田氏が異版と看做した静嘉堂蔵本と無窮会蔵本は、実際は同版であった。無窮会蔵本で眉批が減っているのは、第四章で見た李卓吾評甲本の中での内閣李本と奥野李本の眉批の相違と同じく、多くは版本の摩耗のため、一部は版本が差し替えられたためである。どうも太田氏は補版葉を以て両者を異版と認め、多くの葉は同版であることを見落とされたようだ。無窮会蔵本は雍正帝の諱を避けて「眞」の末二画を削り取っているので、雍正以降の後修本に違いない。また、それにもかかわらず補

版葉で「眞」を避けていないことがある。「眞」は原版補版を問わず版心題「西遊真詮」に見える文字であり、補版葉以外の千数百葉ではその末二画をほぼ全て削っているから、その作業時に補版葉が含まれていたなら、その「眞」も同時に欠筆させられたはずである。

従って、「眞」を避けない補版は、「眞」の末二画を削る処理よりも後に、欠筆を重く見ない別人の手で行われたのではあるまいか。となれば、雍正年間の欠筆処理の後にも更に補版が行われた通修本ということになる。なお、静嘉堂蔵本では「眞」は欠筆していない。

さて、それなら筆者所見の十行二十二字本は全て同版かということではなく、これら六本は二版に分類することが出来る。片方は印刷の早い順にXD七三一・静嘉堂蔵本・無窮会蔵本「通修」の三本。もう片方は印刷の順序は判定し難いが、XD五五一九・上海図書館蔵本・傅斯年図書館蔵本の三本である。これを甲乙で呼び分けては太田氏の分類と紛らわしくなってしまうので、ここでは前者をA本、後者をB本と呼ぶことにしよう。

A本とB本の序・目・本文は、互いに覆刻の関係にある。本文や眉批を比べてみると、A本が元でB本が覆刻らしい。二例のみ挙げれば、第六回第十五葉裏第一行の回末総評において、A本では「其點查李虎張龍等一段」とする箇所を、B本では「其點查李虎張龍等一投」に誤刻している。また、第九回第四葉表第三行では、A本が

「報入龍宮」とする箇所を、B本では「報人龍宮」と誤刻している。

更に、第一章表5を使ってもう一例を挙げれば、聖僧歴難簿の第七十四難を、A本は正しく「會慶釘鉈七十四難」とするが、B本では一つ左の行の同じ高さの「佗英洞受苦七十六難」に移りしたように、「佗慶釘鉈七十四難」に誤っている。これだけではB本の誤りをA本が修正した可能性もあるように思えるかもしれないが、先述の二例と併せて考えればB本の覆刻の際の誤りと見るのが自然だし、そもそもこの誤りを直すのは難しいことだったらしい。というのも、上海古籍出版社蔵本（『古本小説集成』影印本）は「佗慶釘鉈七十四難」をそのまま引き継いでいるし、劉一明解本と張含章註本では「妖慶釘鉈七十四難」という元とは異なる形に変わっているといった具合に、後続の版本や別系統にまで尾を引いているからだ（第一章表5参照）。なお、これを踏まえると上海古籍出版社蔵本はB本の系統に連なる翻刻本ということになるが、「佗慶釘鉈七十四難」という誤りは、それ以降の版本にも多く踏襲されている。

さて、これでA本とB本の関係は判明したとして、これら（特に先行する版であるA本）は、本当に陳士斌詮解本の初期版本と看做して良いのだろうか。筆者は問題ないと考える。

一つめの理由は、太田氏の指摘された「眞詮自序」の存在である。これを存するのはA本では静嘉堂蔵本、B本では傳斯年図書館蔵本

のみであるが（なお、ともに尤侗序も持つ。また、XD五五一九と上海図書館蔵本は尤侗序のみを存する）、太田氏の説く通り、陳士斌詮解本系に属する他の版本に付いているのは見たことがない<sup>15</sup>、もちろん別系統の版本にもこの序は見えない。内容的にも特に疑わしい点はないので、この陳士斌自序を持たない版本よりも、これを有するA本・B本が初刻本に近いということは確かであろう。

二つめの理由は、第一回の回末総評の末尾の処理である。「悟一子曰」に始まる陳士斌詮解本系の第一回総評は、どの版本でも「請具一圖、聊示印證」と結ばれている。しかし、殆どの版本にはこれに対応する図が無い。これに対応する図を持つのは、管見の限りB本の上海図書館蔵本と傳斯年図書館蔵本だけなのだ。両者は第一回第十六葉表の全面を使って中央に太極図を配した八卦図を載せており、どちらも版心の折り目のところまでで紙が切り取られ、第十六葉裏は残っていない。悟一子（陳士斌）が評において図で示す云々と言っている以上、それに対応する図がある版本の方が、無い版本よりも初刻本に近いと認められるであろう。なお、これについてはA本にもこの図は見えないという点が問題となるが、現存の三本のA本の状況を仔細に見れば、最も刷りが早いXD七三一には第一回が残らず、静嘉堂蔵本はそれに比べてかなりの後印で、無窮会蔵本となると前述の通り雍正以降の通修本である。そこで、筆者としては、

X D 七三一のような早印のA本にはこの図があったが、後印本では版本に問題が生じたか、或いは料紙の節約を意図したかによって刷られなくなってしまったのだと考えたい。

右の二つの根拠を併せて考えれば、A本・B本は、現在知られている陳士斌詮解本系に属する他の全ての版本よりも初刻本に近いことは間違いないと認められるであろう。A本が初刻本そのものであるのもおかしくはあるまい。

なお、A本・B本にはそれぞれ一本ずつ封面を存する伝本があるので、それを確認しておこう。A本では静嘉堂蔵本で、太田氏も著録している通り、左右三欄で左右に大字で「悟一子叅解／西遊真詮」、中央に「丘長春真人原本證道書」と刻し、左下に陰刻正方「贈言／堂／發兌」朱印が捺されている。B本では傳斯年図書館蔵本で、天頭に横書きで「長春真人原本」、無界の枠内に「悟一子叅解證道書／（大字）繡像西遊記／（大字）真詮（小字）本衙藏板」とある。してみれば、封面で「證道書」であることを標榜するのは、陳士斌詮解本系においては早くから行われていたようだ。

## （2）十行二十二字A・B本の図と李卓吾評甲本

ところで、太田氏所見の二本はいずれも図を欠いていたため、太田氏は十行二十二字諸本は刊行時から無図であったと判断されていた。しかし、A本はX D 七三一の各回本文前に一葉二幅ずつ、B

本は三本全てで冒頭にまとめて配する形で、いずれも図が残っている。そして、この図が複雑にして大変興味深い問題を孕んでいる。

前述の通り、A本とB本の序・目・本文は覆刻の関係で異版なのだが、実は両者は図だけは同じ版木を使っている。そして、その版木とは、第四章でも簡単に触れておいたが、何と李卓吾評甲本の図と同じものなのだ。特にB本については、現存の三本全てが同じ図を持っている以上、収蔵段階で李卓吾評甲本の図だけをB本の本文に補配したという可能性は皆無であり、印刷時点でB本の本文の版木と李卓吾評甲本の版木が組み合わされていたと考えるよりない。

A本についても図と本文で紙質が変わらないので同様だったと思いが、まずは分かり易いB本の図から詳細を述べよう。

B本の百葉二百幅の図のうち、第六十九回の一葉二幅のみが李卓吾評甲本と異版で、他の九十九葉百九十八幅は全てそれと同版である。李卓吾評甲本の後修本である奥野李本と比べても明らかに版木の損傷が進んでいるほか、人物の顔や輪郭などに補修が施されている葉が少なくない。李卓吾評甲本の図に見えた刻工名は全て同じ位置に残っているが、第七回図裏の「君裕刻」は版木の摩耗で潰れており、単独での判読は不可能な域に達している。

B本の印行が尤侗序の年次である康熙三十五年より前ということはありませんから、崇禎年間の李卓吾評甲本刊行からはどんなに少

なく見積もっても五十年は経過している（B本がA本の覆刻であることを踏まえれば、実際はより長い時間であつたろう）。それでも補版葉に変わっているのは一葉分だけであることや、その一方で部分的な修版はかなり多く施されていることなどは、通俗小説の図の版本の寿命を考える上での貴重な資料となろう。

A本の図はXD七三一一に第五〜十二回の計八回分が残るのみだが、その中で李卓吾評甲本の図と同版なのは第五・六・七・八・十二回の計五回分のみである。この五葉十幅の図は、奥野李本よりはかなり後刷りだが、B本に見られる修版はまだ施されていないし、第七回図裏には「君裕刻」がまだはつきりと読み取れる。この点からも、A本がB本に先行すると考えて良いだろう。

XD七三一一の残る第九・十・十一回の図は、それぞれ版心に「西遊真銓 第九回像 陳光蔭赴任逢災 江流僧復仇報本」「西遊真銓 第十回像 老龍王拙計犯 魏丞相遺書托」

天條「西遊真銓 第十一回像 遊地府太宗還魂 進瓜果劉全續配」とある、他に見られない

独自の半葉全面式の三葉六幅となっている。この第九・十・十一回とは、ちょうど江流和尚故事の挿入によって李卓吾評本と陳士斌詮解本で内容にずれが生じている回である。従って、A本は話の身と図とを全ての回できちんと対応させるために、わざわざこの三回分では李卓吾評甲本の図を使わず、独自に図を新刻したようだ。しかし、B本ではその三回分も李卓吾評甲本と同版の図になってい

る。新刻の三回分の図は康熙年間の図としてはかなり出来が良いのだが、小説挿画の版刻技術が頂点を極めた時期の代表的作品と言うべき李卓吾評甲本の精緻な図の方が、いかに版木が傷んでいようと顧客に歓迎されたということであろうか。

基本的に覆刻の關係にありながら、なまじ図だけが同版だけに、A本とB本の關係は今一つ分かりにくい面もある。考えられる可能性は、李卓吾評甲本の版木を所有し続けた同じ書坊がA本・B本を両方とも刊行したのか、或いは別の書坊に図の版木だけが移譲されて、その書坊がA本の図以外の部分を覆刻したのがB本なのか、はたまたもしかすると筆者が見落としているだけでB本は実は図以外にもA本と同版の箇所がある後修本なのか、といったところであろうか。いずれにしてもA本がB本に先行することだけは確かであるから、現存の陳士斌詮解本系諸本の中で最も初刻本に近く、そして初刻本そのものである可能性もあるのは、太田氏が着目していた十行二十二字A本である、という結論には影響は無いであろう。

### 三、張書紳註本系

所謂新説西遊記で、この系統は清代に編まれた唯一の文繁本として知られる。文繁本でありながら第九回は江流和尚故事とし、第十〜十二回は清本の他の系統と同じ切れ目で文繁本の文章を切るとい

う処理をしている。その際に貞観十三年の十八年後がまた貞観十三年になる矛盾が生じてしまったことは、序章において孫楷第氏や太田辰夫氏の言説を引いて確認した通りである。

この系統は初期の版本の状況が複雑なようで、『古本小説集成』所収影印本の蕭相愷「前言」は、早期の版本として「乾隆十三年晋省書業公記藏板本」と「乾隆己巳（十四年）其有堂刊本」とを挙げるが、それぞれの所蔵元や両者の関係には触れず、影印したのも両者と版式が同じ上海古籍出版社所蔵の別の早期刻本だという。

曹炳建注1書第十章は、封面天頭に横書きで「第一奇書」、枠内に「三晉張南薫註／新説西遊記／晋省書業公記藏版」とあるという晋省書業公記本（筆者未見、所在も不明）を最古の版本と看做すが、「西遊記總論」末の「乾隆戊辰年（十三年）秋七月晋西川張書紳題」という書名を根拠に乾隆十三年の刊行だろうと推定しているに過ぎず、その翌年の刊本として挙げられている、封面左欄に「乾隆己巳莫春其有堂梓」、右欄下には「述古堂藏板」とある其有堂刊本（北京大学図書館蔵）よりも先行するという根拠は特に示されていない。

本論第一章表4で底本としたのは東京大学漢籍コーナー蔵本で、『古本小説集成』影印の底本と同版である。其有堂刊本と覆刻の関係にあると思しき封面の左に「乾隆己巳莫春書業公藏板」、右下は空白となっている。左欄の「書業」は不自然に大きく、改刻が疑われ

る。書業公藏板とありながら、曹氏の著録する晋省書業公記本の封面よりも、却って其有堂刊本の封面に似ているという複雑な状況となっている。なお、「西遊記總論」末の「乾隆戊辰年（十三年）秋七月晋西川張書紳題」は東大漢籍蔵本にも見えるので、もし曹氏が見えることだけを根拠に晋省書業公記本を最古の版本と判断されたのであれば、それには再考の余地があろう。但し、筆者にはいまこの問題を論じる用意は整っていない。

東大漢籍蔵本の特色としては、全二十四冊が原装で残り、全四帙の最初の冊（六冊ごと。なお、帙は新しいものに変わっている）の前表紙左肩に上層に横書きで「書業公」、下層に「新説西遊記（空三格）」とする双边二層の刷題簽が貼付されている点が挙げられる。刷題簽下方の空欄には元亨利貞の帙号を朱戳で捺し、その下に陽刻双边長方「書業公自在江／浙蘇閩揀選古／今書籍發兌（陽刻正方「印」篆書刻印）」朱戳が捺されているので、封面に蔵板者として見える書業公自身による発兌であったことが分かる。

また、東大漢籍蔵本の同版本には、封面のみ異版で「三晉張南薫先生批點／西遊正旨／善成堂藏板」とする中国国家図書館普通古籍館蔵本もある。西遊正旨とは本来は張含章註本の書名なのだが、これまでにも類例を多く見て来た通り、清代の百回本は封面題や巻首題に別系統のものを使うことが日常茶飯事であったようだ。

この系統には他にも封面中央を「新註西遊記」とする伝本（北京大学図書館蔵）や、数種の石印本などがあり、流通量は決して少なくなかったようである。

この系統の本文の底本は李卓吾評本だというのが定説で（曹炳建注1書参照）、第一章表4に掲げた聖僧歴難簿も李本型であった。但し、「折從落坑第六難」については、李本型ではなく華本型と一致している。もしかすると、何らかの華陽洞天主人校本も対校に用いていたのであろうか？ また、聖僧歴難簿末尾二句の第一句を「路經十萬八千里」としているが、この二字目は他系統に属する版本では「逢」か「過」であって、この系統に独自の特色となっている<sup>16</sup>。

#### 四、劉一明解系

##### 五、張含章註本系

##### 六、含晶子評註本

この三系統の版本については、目下のところ先行研究の域を出る知見は持っていない。第一章表5で底本としたのは、劉一明解本は二層の封面上層に横書きで「嘉慶二十四年重刊」、三欄に分かつ同下層に「長春邱真君著／西遊原旨／素樸劉一明解（隔三格）」湖南常德府護國菴藏板とある『古本小説集成』影印本『西遊原旨』（底本は甘肅圖書館蔵）、張含章註本は封面天頭に「□□己亥花朝新□」、枠内に「天□□□□□

邱真人著／□□西遊正旨／校正無訛 眉山城南德聲堂何氏藏板」とあり序末に「崑道光歲次己亥（十九年）孟夏既望／記于眉山書舍／受業何廷椿謹識」と署名する『通易西遊正旨分章註釋』（北京大学図書館蔵）、含晶子評註本は封面に「壬辰年（光緒十八年）開鐫／西游記評注／翻刻必究」とある『邱真人西遊記』（慶應義塾図書館蔵「奥野信太郎氏旧蔵」）である。いずれも陳本型の聖僧歴難簿を持つており（第一章表5参照）、陳士斌詮解本を底本とする新たな評注本であることが窺える。

#### 小結

以上、百回本『西遊記』の清本諸系統について概観した。『三国演义』や『水滸伝』では清初に現れた毛宗崗本や金聖歎本に変わる新たな評注本の作成の動きは清代中期以降には見られないのだが、『西遊記』は康熙初年の汪象旭箋評本・康熙中期の陳士斌詮解本・乾隆前期の張書紳註本・嘉慶間の劉一明解本・道光間の張含章註本・光緒間の含晶子評註本と、新たな評注本が定期的に刊行されているのが特色と言えよう。明代には金陵・建陽・蘇州といった当時における商業出版の中心地に偏っていた刊行地も、杭州・晋・湖南・眉山と大きく広がりを見せている。

<sup>1</sup> 太田辰夫「清刊本西遊記考」(『神戸外大論叢』第二十二卷第四号、一九七二)、黄永年「前言」(『黄周星定本西遊証道書 西遊記』所収、中華書局、一九九三)、曹炳建『《西遊記》版本源流考』(人民出版社、二〇一三)第八章等参照。

<sup>2</sup> 太田注1論文、Ellen Widmer “Hsi-yu Cheng-tao Shu in the Context of Wang Chi's Publishing Enterprise” (『漢学研究』第六卷第一期、一九八八)、陳恩虎「刻書家汪洪生平考」(『文獻』二〇〇五年第三期)、文革紅「汪洪『蝸寄』及其所刻書籍考」(『文獻』二〇〇六年第三期)等参照。

<sup>3</sup> 汪象旭(汪洪)の生平や刻書活動に関しては注2に挙げた諸論文を参照。

<sup>4</sup> 太田注1論文、磯部彰『元本西遊記』をめぐる問題——『西遊証道書』所載虞集撰「原序」と丘処機の伝記——(『文化』第四十二号第三・四号、一九七九)、太田辰夫『西遊記』雑考(『神戸外大論叢』第三十二卷第三号、一九八一)、磯部彰『西遊記』形成史の研究(創文社、一九九三)第六章「元本西遊記」と虞集撰「西遊記原序」——丘処機の事跡をめぐって——(前掲論文の改訂版)。

<sup>5</sup> 吳聖昔『《西遊証道書》“原序”是虞集所撰吗——虞集《西遊記序》真偽探考』(『明清小説研究』一九九一年第三期)、曹炳建注1書等参照。

<sup>6</sup> 吳聖昔『《証道書》白文是《西遊記》祖本吗——与王輝斌《《西遊記》祖本新探》商榷』(『寧夏大学学报(社会科学版)』第十七卷第二期、一九九五)。

<sup>7</sup> 実際に、(こ)は故宮世本や李卓吾評丙本でも「那三十年」だが、唐僧本と楊閻斎刊本では「那十三年」となっている、唐僧本でも独自に訂正していたと思われる。

<sup>8</sup> 田中巖「西遊記の伝本」(『横浜大学論叢・人文科学系列』第八卷第三号、一九五七)。

<sup>9</sup> パリ蔵本は原本未見、所蔵館ウェブサイトからダウンロードした白黒画像による。なお、他に大連図書館(懷徳堂刊本と著録)や九州大学図書館(九如堂刊本と著録)などにも同名書が所蔵されるようだが、いずれも未見。

<sup>10</sup> 曹炳建注1書二五三頁は「文盛堂刻本」「懷徳堂刻本」「懷新樓刻本」「九如堂刻本」がそれぞれ証道大奇書本の別版であるかのよう著録するが、実態はこのような状況であるから、曹氏が浙江図書館蔵本しか調査に及んでいないための誤解である。なお、曹氏がこの系統だと推測する『孫目』のいう懷新樓刊本とはおそらく後述の羊頭狗肉十卷本のことで、証道大奇書本ではないだろう。

<sup>11</sup> 世徳堂という名で刻書を行った版元には、唐氏世徳堂の他に、嘉靖間に活動した顧氏世徳堂や、康熙年間に活動した王氏世徳堂なども知られている(瞿冕良『中国古籍版刻辞典(増訂本)』(蘇州大学出版社、二〇〇九)参照)。もちろん他にもあった可能性は十分にあり、北京大学図書館蔵本と王氏世徳堂との関係の有無も未詳。

<sup>12</sup> 寧稼雨「塵故庵藏《西遊記》版本述略」(『淮海工学院学报』二〇〇七年第二期)参照。

<sup>13</sup> 何故かと言えば、一名称一版種で対応させておけば、例えばある伝本が「甲本の後修本」であるとか、乙本は「甲本の覆刻本」であるとか言った形で伝本間の関係を明確に示すことが出来る。対して、甲本の中にも複数の版があるとなってしまうと、各伝本の関係が同版の後修本・通修本なのか、それとも異版の覆刻本・翻刻本なのか非常に分かりづらくなってしまうためである。

<sup>14</sup> 例えば、中国国家図書館普通古籍館所蔵の請求記号一・二・三・五八は、封面右欄に「悟一子批評」、中央欄に「金聖歎加評西遊真詮(小字)文奎堂梓」、左欄に「長春真人證道書」(正は孔子の諱を避けた丘の欠筆字体)とある十行二十四字の巾箱本だが、本文も批評も明らかに陳士斌詮解本系で、汪象旭箋評本系の特徴は

見られない。

<sup>15</sup> なお、整理が付いていないが、所見の陳士斌詮解本系に属する  
版本は十版は超えている。

<sup>16</sup> なお、本論文を通してこの句の二字目をたびたび本文系統の継  
承関係を見る上での指標として用いて来たが、何故このようなこ  
く細かいところが三種類に分かれているのであろうか。「逢」「過」  
「經」は全て平声に読めるので平仄の都合ではないだろうし、意  
味はどれでも通り、わざわざ改めるほどの違いがあるとは思えな  
い。些か想像を逞しくすれば、盗版された際に確かかつ迅速にそ  
れと分かるようにするために、このような読者にとってはどう  
でも良いようなところを敢えて変えていたというようなことはあ  
り得ないだろうか。このようなリストの細部に版本間で些細な相  
違があるという現象は、百回本『水滸伝』の第七十一回に見える  
梁山泊百八星を席次の順に並べる石碣天書のリストにおいても、  
地煞星七十二員の下位の好漢の配列順序及び星名が、文簡事繁本  
系統の第六十六回の同リストでは異なるという形で確認出来る。  
或いはこれも右で推測したような意図での並べ替えが行われたの  
かもしれない。こちらは聖僧歴難簿のように古い設定の反映と見  
ることも出来るかもしれないが、その場合とて、新しい設定を考  
えた者があまり意味のあるとも思えないようなリストの些細な改  
変を行ったことには変わりはない。



## 第七章 明末の商業出版における異姓書坊間の広域的連携の存在について

### はじめに

前章までに、唐氏世徳堂、周氏大業堂、熊氏宏遠堂、汪氏蝸寄還読齋など、百回本『西遊記』に関わる書坊について様々なことを見て来た。その中で、世徳堂から大業堂への版木の移譲や、金陵唐氏・周氏刊本の建陽での覆刻の事例が複数確認された。また、熊雲瀆覆世徳堂刊本について、熊雲瀆が盗版をした訳ではなく、世徳堂から版權を譲り受けて開版したものではないかという磯部彰氏の推測もあった(第二章参照)。そこで本章では、当時そのような異姓書坊間の広域的連携が存在し得たのかどうかを考察してみたい。

それに関して、大木康「中国 明末の出版事情」(中野三敏監修『江戸の出版』所収「近代諸外国出版事情【三】」、ぺりかん社、二〇〇五)に、次のような一節がある(三五三頁)。

坊刻は、いわゆる書坊、すなわち書店による出版である。明末における出版の隆盛の原因の一つには、この坊刻の書物が増えたことがある。しかし、そうした書店同士の横の連絡については、すでに述べたようによくわからない。

ただ、書店によつては、たとえば先に名を挙げた余象斗らの福建の余氏のように、一族で代々出版業にたずさわっているという場合もあった。清代の小説『儒林外史』の中には、選文家(科挙の八股文の文例集を作る、現在なら受験参考書作りの名人)馬二先生が、嘉興の翰海楼での選文を終えて杭州へ赴く時に、一族の文瀚楼への紹介状をもって訪ねてゆく場面がある(第十四回)。また馮夢龍も、葉昆池、葉啓元、葉敬溪、葉敬池など、同族と見られる蘇州の葉姓のいくつかの書店から書物を刊行している。中国で書店同士の連絡があったと知られるのは、いずれも一族でやっている書店の場合に限られるのである。

確かに、本屋仲間の活動記録が豊富に残る江戸時代の日本では、江戸・京・大坂の三都に散らばる血縁関係の無い書坊の間でも、地域を超えた版木の売買はもとより、新刊本の共同出版さえも行われていたことが周知されているのに比べれば、同時期の中国におけるそのような事例はあまり知られてはいない。しかし、中国でも異姓書坊間に横の連絡があった可能性は、一九八〇年代から散発的に指摘されている。

例えば、王重民『中国善本書提要』（上海古籍出版社、一九八三）は、アメリカ国会図書館所蔵の金陵万卷楼周如泉崇禎元年序刊本『圖像本草蒙筌』十二卷首一卷の項（二五八頁）で、同書の増補を務めた劉孔敦が建陽の書坊喬山堂の主人劉龍田の子か姪だと推定した上で、孔敦の兄孔教が既に進士となっていたこの時期には喬山堂はもう刻書業を営んではおらず、それで周氏の刻書を手伝ったのではないかとの推測を示している。第五章で見た通り、現在では、劉孔敦（字若樸）は喬山堂の歴代主人の一人劉大易（字龍田）の三男で、孔敦の長兄が天啓五年の進士劉孔敬（字若臨）であると判明している<sup>1</sup>。王氏の推測通りだとすれば活動中の書坊同士の共同事業の例にはならないが、それでも建陽で書坊を営んでいた人物の息子が金陵の書坊を手伝った事例なのは確かである。また、喬山堂がこの時期には既に刻書業を離れていたという確証は示されていないので、現役で活動中の書坊同士の連携だった可能性もある。

また、王氏前掲書のアメリカ国会図書館蔵『萬用正宗不求人全編』三十五卷の項（三八二頁）では、同書が大尾に「萬曆歲次丁未（三十五年）／潭陽余文台梓」の蓮牌木記を持つ一方、卷十六末には「萬曆新歲穀旦喬／山堂劉少崗繡梓」（但し王氏の引用は後者の「梓」を脱字している）の蓮牌木記があることを指摘した上で、卷十六は元々は劉氏喬山堂が万曆初年に刊行した『書法叢珠』二巻で、それを余

文台が『萬用正宗不求人全編』に丸ごと採り入れたが、その際たまたま喬山堂の蓮牌木記を削り忘れたのだと推測している。王氏の推測通りであれば版木の所有権の移動があったというだけの話で、同族でない書坊同士の横の繋がりの例とまでは言い難いだろうが、この事例については別の見解も提示されている。即ち、方彦寿『建陽劉氏刻書考（下）』（『文献』一九八八年第三期）二一九～二二〇頁が、まず族譜の記載から前述の喬山堂主人劉大易の妻が余氏であることを指摘した上で、劉少崗＝劉大易が自家の版木を姻戚の余文台ことを余象斗<sup>2</sup>に譲渡し、余象斗は意図的に劉氏の名を残しつつ自分の刊本に組み込んだのではないかと推定している。もし方氏の推定が正しいければ、同じ建陽の姓を異にする書坊同士が、姻戚関係を結んだ上で業務上の連携を持っていた事例となろう。

更に、大塚秀高「嘉靖定本から万曆新本へ——熊大木と英烈・忠義を端緒として——」（『東洋文化研究所紀要』第二百二十四冊、一九九四）は、余象斗が建陽で営む書坊が、万曆前期の一時期、周氏万卷楼や唐氏世徳堂といった金陵（南京）の書坊と共同事業を行った可能性を指摘している（詳細後述）。

これらの指摘は、大部の善本提要の中の一節であったり、別の大きな問題を論じる中での副次的な指摘であったりしたため、多くの研究者の目には留まりにくく、結果として「一族でやっている書店」

以外の間の横の連絡は「知られていない」という認識が長らく一般的に通用していたのであろう。

しかし、筆者が唐氏世徳堂と周氏万卷楼の歴代主人の出版活動の状況に関して研究を進める中で、いずれも江西撫州府金谿県（別称繡谷）の出身者が嘉靖末か隆慶年間に金陵で創業した世徳堂<sup>3</sup>と万卷楼<sup>4</sup>とが、万暦十年代半ばから二十年代前半にかけて少なくとも三回の共同出版を行っていたことが判明した（本論第三章参照）。つまり、明末の中国における異姓書坊間の横の繋がりの実例がはっきり確かめられたのである。それを念頭に置けば、万卷楼仁寿堂と世徳堂とが万暦十年代末から二十年代半ばにかけていずれも上元王氏一族の画工を起用して互いに重複しないように章回小説を陸続と刊行していたり<sup>5</sup>、万卷楼の後身である周氏大業堂（本論第五章参照）が世徳堂刊本の版本による後印本を複数出售していたりする。というのも、唐氏の書坊と周氏の書坊の間に密接にして継続的な協力関係が築かれていて、それを背景にした共同企画や版權の譲渡であったと理解すべきであろう。

その後更に調査を進めたところ、建陽余氏も同じ建陽の複数の異姓書坊と横の繋がりを持っていた可能性が高いことが分かって来た。また、これまで研究の過程で、唐氏や周氏の金陵刊本が、余象斗（字仰止、号文台）とその弟及び子孫筋が営む双峰堂三台館や、余象斗

の堂兄余彰徳（字以誠、号泗泉）及びその子孫筋が営む萃慶堂<sup>7</sup>といった建陽余氏の書坊の手で重刊（覆刻または翻刻）されている例が少なからず見つかっており、その一部には前掲諸拙稿の中で言及した。

本章では、それらの事例を改めて体系的に紹介しながら、万暦以降の明末には、異なる地域で活動する異姓の書坊の間の横の繋がりが幾らかは存在しており、それに基づいて重刊本が刊行されるケースが間々あったことを明らかにしたい。

### 一、建陽余氏の書坊と建陽の異姓書坊の繋がり

まずは、共に金陵を拠点とする唐氏と周氏の書坊の間に提携があったのと同じように、余氏もまた同じ建陽で活動する異姓の書坊と横の繋がりを持っていたことから確かめよう。

#### （1）文台余象斗と發吾楊鳴鵠

『新鐫纂補名公四書披雲新説』六卷（国会図書館蔵）は、卷一首に「書林 余象斗重梓」、卷二首に「書林 楊鳴鵠 重梓」、卷四首に「書林（隔四格） 余象斗 重梓」、卷三・五・六首に「書林（隔四格） 余象斗 重梓」とあり、大尾には「萬曆癸巳（二十一年）季冬／余文台 楊發吾 全梓行」

の蓮牌木記を持つ。前述の通り文台は余象斗の号なので、この本は明らかに文台余象斗と發吾楊鳴鵠の両者が共同で何らかの先行版本

を重刊したものである。

また、国立公文書館内閣文庫が同版の三本を蔵する〔万暦間重刊〕本『卓氏藻林』八巻のうち、高野山釈迦文院旧蔵本に左右に「新鐫官板／卓氏藻林」、中央に「潭城書林楊發吾  
余文台梓」と記す封面が残る。これも共同刊行に相違あるまい。

二回の共同刊行が確認出来る以上、余象斗と楊鳴鶴の間には、それが継続的なものであったかどうかはともかく、一定の提携があった時期があることは認めるべきであろう。

## (2) 建陽余氏の書坊と建陽劉氏の書坊

また、余氏の書坊は建陽劉氏の書坊とも連携を持っていた。それを明示するのが、大尾に「萬曆歲次丁酉（二十五年）孟秋月／書林安正堂劉雙松梓」の蓮牌木記を持つ『明朝張柱國發刻駱會魁家傳葩經金石節奏』四巻首一卷（内閣文庫蔵）だ。同書の封面は、上層に横書きで「永慶堂」とあり、三欄に区切った下層の左右に「新鐫駱台晉著／詩經金石節奏」と大書し、下層中央は更に上下に分けて、上に「安正堂書林／劉雙松移記」の陽刻長方朱印を捺し、下に「丁酉秋月余成章言」と結ぶ四行分の告白を載せている。

この余成章は余象斗の属する世系の嫡流を継いだ人物で（余彰徳の兄福海の長子）、永慶堂は余成章の書坊である（注7拙稿参照）。従って、同書は劉双松安正堂の製作した版本による印本を、余成章

永慶堂が発兌したものと見るよりほかない。余成章永慶堂の名を刻した封面に劉双松安正堂の印が捺してある以上、それが両者の合意の上で行われたことに疑念の余地はあるまい<sup>8</sup>。万暦十三年に没した成章の先妻の姓は劉であったから（注7拙稿参照）、これは姻戚関係を背景とした連携であったかもしれない。なお、この劉氏安正堂と前出の劉氏喬山堂とは、十世代以上前に分岐はしているが、共に建陽劉氏西族北派貞房に属する同族である<sup>9</sup>。

この例を踏まえれば、先に引いた『萬用正宗不求人全編』の事例も、概ね方彦寿氏の推測通りであった可能性が高まる。劉少崗と劉大易（龍田）が同一人物だという推定には根拠が示されておらず疑問があるし、大易の妻の余氏が余象斗の近親者だという点にも確証は得られないが、そうした細かい点はともかくとして、余象斗の方も祖父と父が二代続けて劉氏を妻としているから<sup>10</sup>、「余象斗と劉氏喬山堂の間に姻戚関係があり、それを背景として版本の譲渡が行われた」という点については、相当に蓋然性が高いと言って良いのではあるまいか。

更に、文台余象斗双峰堂万暦二十年刊本『音釋補遺按鑑演義全像批評三國志傳』二十巻存十四巻（建仁寺両足院など五箇所に残本が散在）の序の上層に記される「三國辯」と題する文章は、同書に先行した『三國演義』の全像本四種を列挙して短評を加えているのだ

が、そのうち鄭氏宗文堂刊本・熊氏種徳堂刊本・黄氏仁和堂刊本の三種が軒並み酷評されている中で、劉氏愛日堂刊本だけは、優れた版本であったが今では版木が摩滅して見辛くなってしまった<sup>11</sup>、という非常に肯定的な評価をされている。これもまた、余象斗が劉氏愛日堂と近しい姻戚であったがための鼻肩目だったのではなからうか<sup>12</sup>。

### (3) 建陽における異姓書坊間の通婚の可能性

このように、余象斗は楊鳴鶴の書坊とは確実に提携していたし、喬山堂や愛日堂といった劉氏の書坊とも(恐らく姻戚関係を背景に)ある程度の繋がりを持っていたと考えられる。

更に、本家筋の余成章永慶堂にも劉氏安正堂との連携が確認出来るので、余象斗だけが異姓書坊との関係構築に熱心だった訳ではなく、注7拙稿において余象斗の双峰堂系・余成章の永慶堂系・余彰徳の萃慶堂系・歴代主人の名が族譜に見えず前三者との血縁関係が不明な自新齋系という四系統に大別した明末清初の余氏の書坊は、どの系統も異姓書坊と姻戚となつて事業の上でも提携を持つことに積極的だったのではないだろうか。現に、注7拙稿で既に指摘した通り、余氏の族譜に載る人物の妻には、劉・熊・葉・鄭といった建陽で代々続く書坊の姓を持つ者が数多く認められるのだ<sup>13</sup>。

更に、いずれも余氏との連携が認められる劉氏安正堂と劉氏喬山

堂が同族ながらかなり血筋が遠いことを踏まえれば、劉氏の側にも同じことが言えはしまいか。してみれば、余氏と劉氏の間のみに止まらず、楊氏・熊氏・鄭氏・葉氏・黄氏といった建陽の老舗書坊を営む一族同士が、互いに累代の通婚関係で結ばれていたということも十分に考えられよう。

もちろん、姻戚関係にあったとしても常に協力しあったとは限らず、商売敵として利害がぶつかりあうことも多々あったであろう。しかし、金陵でも建陽でも、姓を異にする書坊同士が常に対立関係にあった訳ではなく、時には共同出版まで行い得るだけの横の繋がりも持っていたということは認めねばなるまい。続いて次節では、遠く離れた金陵と建陽の姓を異にする書坊の間にも繋がりをもつべき事例を示したい。

## 二、余象斗と金陵の唐氏・周氏の書坊の提携関係

### (1) 大塚説とその問題点

前述の通り、金陵の唐氏・周氏の書坊と建陽の余氏の書坊の間に連携があった可能性は、大塚秀高氏によつて指摘されたことがある。大塚氏は前掲論文の中で、上元王氏の画工王少淮(注5拙稿参照)の双面連式挿画を持ち、一部の葉の版心下部に「仁壽堂刊」と見え、卷二・七の巻頭第三行に「書林 萬卷樓 刊行」とあるが、その行

が卷一・三・六・八では「書林 雙峰堂 刊行」、附録の卷九・十では「書林 余氏 雙峯堂 刊行」となっている『新刊大宋中興通俗演義』八卷附録二卷（内閣文庫、日光輪王寺慈眼堂天海藏蔵）を、周氏万卷楼仁寿堂と余象斗双峰堂三台館が「おそらく共同で」刊行したもので、「最初から配分の比率を決めた共同出版であったことも考えられよう」とした上で（一〇四頁）、同様に王少淮画の双面連式挿画が附されるが余氏三台館の封面を持つ『新刻皇明開運輯略武功名世英烈傳』六卷（内閣文庫等蔵）にも「三台館と南京の周氏なし唐氏の共同出版だった可能性」を指摘して、「共同出版に参加した書肆には出資高に応じた製品（書物）の分配があり、それに各書肆が趣向を凝らした？封面をつけ、それぞれの縄張りでそれを販売した可能性を示唆しておきたい。こうした協力は南京と福建といった離れた地域の書肆の間でこそ可能だったのではあるまいか」（一一五頁）と述べている。

しかし、同論文には「木版本は一時に大部数は刷れないし、増刷にも限界があった。加えて当時のごとき交通事情にあつては、高価かつ少部数の需要しか見込めぬ書物は別として、ある程度以上の需要が見込める小説のごとき作品については、需要が見込める地域ごとに板木をそなえ、その地の需要に応じて増刷する方が経済の原則に適合していたはずである。それゆえ、上記の条件をそなえた地域

（南京、蘇州、杭州、福建など）では、それぞれに趣向をこらした小説の版本が、まるで妍を競うかのごとく刊行されることになったのである」（二〇三頁）とも見える。これは非常に的確な指摘であろう。

ならば、金陵周氏万卷楼仁寿堂と建陽余氏双峰堂三台館が共同出資して『新刊大宋中興通俗演義』の版木を一組だけ作り、それで刷った五百葉強に及ぶ嵩の張る本を、南京で周氏が売る以外に余氏も建陽で販売したという大塚説には、印刷後の輸送コストを計算に入っていないという致命的な欠点があると言わざるを得まい。大塚説には見直しの余地がある。

## （2）大塚説への修正案

筆者は注6拙稿において、『新刊大宋中興通俗演義』は大塚氏の右の推測とは異なり、まず「周曰校」万卷楼仁寿堂が単独で「万暦前期」に金陵で刊行しており、それを「余象斗」双峰堂が建陽で覆刻したのが前述の内閣文庫等の蔵本であることを明らかにした<sup>14</sup>。

また、注6拙稿では、余象斗双峰堂が、やはり王少淮の双面連式挿画を持つ「唐廷仁」世徳堂「万暦二十一年」癸巳序刊本『新刊出像補訂叅采史鑑南宋志傳通俗演義題評』十卷北宋十卷（本論第二・三章でも扱った『南北両宋志伝題評』。内閣文庫、韓国明珠古版画博物館「存南宋卷六至八」<sup>15</sup>蔵）も覆刻していることも示した。大尾

に「書林雙峰堂／文台余氏梓」の蓮牌木記を持つこの覆刻本（北京大學圖書館藏）は、底本である世徳堂刊本が『南宋志伝』と『北宋志伝』でそれぞれ別々に数えていた巻数を南北通しに改めているが、各巻の巻頭第三行に記す刊行者名は、巻五・七・九で「文台余氏雙峰堂校梓」に変えているのを除き、他の十七巻では全て底本と同じ「繡谷唐氏世徳堂校訂（または梓）」となっている。

先行研究では、覆刻本というところには無許可の海賊版だと決めつけられがちであった。だが、海賊版であれば、自らの手による新刊を装うべく刊行者名を全て自分の名に改めるか、或いは刊行者名も全て底本通りに覆刻して底本そのものであることを装うか、そのいずれかを選ぶのが自然であろう。

ところが、余象斗双峰堂による『新刊大宋中興通俗演義』や『新刊出像補訂叅采史鑑南宋志傳通俗義題評』の覆刻本は、いずれも新たに版木を起こしているというのに、余象斗は自らの書坊名を刻む他に、わざわざ底本を刊行した書坊の名を複数の巻の巻頭に残している。しかも、前者では一部の葉で版心の「仁壽堂刊」まで底本通りに覆刻しているし、後者に至っては、巻頭に双峰堂の名が見える巻よりも、世徳堂の名が見える巻の方が圧倒的に多いのである。もしこれらが海賊版であれば、余象斗は犯行を自白しているようなもので、幾ら何でも間が抜け過ぎているだろう。

となれば、この二点はいずれも世徳堂や万巻楼に話を通した上で正規の覆刻本であり、余象斗はその事実を示すべく意図的に自らの名と底本の刊行者の名とを両方とも明記したと見るべきではあるまいか。言い換えれば、これらは前述の『萬用正宗不求人全編』に劉氏喬山堂と文台余象斗の蓮牌木記が両方とも見えることに對する方彦寿氏の見解、そして何よりも本論第二章で見た熊雲濱覆世徳堂刊本に對する磯部彰氏の見解<sup>16</sup>と同様に、異姓書坊間の連携の痕跡として捉えるべき事例なのではないだろうか。

この推測を裏付ける例がある。世徳堂の同族の唐富春（字子和、号対溪、金陵富春堂主人。第三章参照）が万曆十五年に、画工の署名こそ無いものの明らかに上元王氏の画風の双面連式挿画を持つ『新鐫増補全像評林古今列女傳』八卷（蓬左文庫、中国国家圖書館藏）を刊行している。各巻巻頭第八行に「（低九格）對溪書坊 唐富春 梓」と記すほか、蓬左文庫蔵本には封面も残り、左右に「鐫増補全像評／林古今列女傳」、中央上層に「萬曆丁亥（十五年）春」、同下層に「漢光祿大夫劉 向撰／明金陵書坊唐對溪梓」とある。これをやはり余象斗が覆刻しているのだが（龍谷大學圖書館、哈佛燕京圖書館等藏）、大尾の蓮牌木記に「萬曆辛卯歲（十九年）秋／月余文台重梓」と記すこの覆刻本の各巻巻頭は、巻一だけは底本そのまま余象斗の名は見えないが、巻二以降の全巻では、第八行の唐富

春の名を底本そのままに残しつつ、底本では「(低一格)××傳」という形で篇目だけを記していた第九行を、「(低一格)××傳(隔五格)文台書林 余象斗 重」という形に改めている。つまり、余象斗は自分の名を篇目と同じ行の下方という変則的な位置に追い込んでまで、「對溪書坊 唐富春 梓」と「文台書林 余象斗 重」とを隣り合う行に同じ高さで併記するようにしているのだ。こうなると、同書が唐富春刊本を底本とした余象斗による重刊本だという事実を、当の余象斗自身が明確に示そうとしていたとしか考えようがあるまい。もしこれが無許可の海賊版なら、ここまで堂々と重刊たることを明示は出来ないであろう。

余象斗が万暦前期に複数の金陵刊本を重刊しており、その事実を隠すつもりが全く無かったことは、大尾に「萬曆丁酉歲(二十五年)孟春／月余氏文台梓行」の蓮牌木記を持つ『新録朱狀元芸窓彙輯百大家評註史記品粹』十卷(上海図書館等蔵)の冒頭に附される双峰堂の刊行した挙業書の書目(末尾に「雙峯堂余象斗謹識」と署名する)の最後に「上記以外の、金陵等での刊本を重刻したものや、子部や史部の書物のうち科挙受験に関係の無いものは、割愛して載せなかった」(傍点筆者)<sup>17</sup>という小字双行注があることから窺える。

これらの諸例を踏まえれば、前節で挙げた大塚説は、「余象斗は金

陵の唐氏や周氏の書坊に幾らかのロイヤリティを支払って彼らの金陵刊本を建陽で覆刻し、金陵では唐氏や周氏が自身の刊本、建陽では余氏がその覆刻本を各自販売していた」と修正出来るのではないだろうか。これならば金陵にも建陽にも版木が備わるため印刷後の長距離輸送のコストは不要で、大塚説の欠点は克服されている。それぞれの販売地域は遠く離れているから、互いの売り上げを食い合う恐れも左程あるまい。それどころか、各地の需要に応じてそれぞれ随意に増刷が可能だし、金陵の唐氏や周氏は自らの刊本の流通圏から外れる建陽の市場からも覆刻権のロイヤリティという形で若干の利益を得ることが出来、建陽の余氏は版下の作成コストを最小限に抑えた上で新商品を発売することが出来る訳であるから、完全なウイン＝ウインの理想的関係となっている<sup>18</sup>。

そして、余象斗が覆刻の際にいつも唐氏や周氏の名をそのまま残す箇所を設けていたのは、無論覆刻を認めてくれた唐氏や周氏に対して筋を通すためでもあったろうが、建陽刊本よりも遥かに良質だと見られていた金陵刊本<sup>19</sup>の正式な覆刻本であることを積極的に宣伝して売り上げに繋げようとの商売上の意図もあつてのことだったのではないだろうか。

また、底本の刊行から四年後に覆刻された『新鐫増補全像評林古今列女傳』は違うだろうが、覆刻年が不明な『新刊大宋中興通俗演



義』や『新刊出像補訂叅采史鑑南宋志傳通俗演義題評』については、周氏や唐氏の金陵刊本の刊行自体が、大塚氏が想定した形とは少々異なるものの、唐氏・周氏と余象斗との共同企画だった可能性もありそうだ。なんとなれば、大塚氏の指摘通り両作品は共に嘉靖年間に建陽の熊大木（号鍾谷）が編集したもので、金陵の唐氏・周氏が何らかのルートで嘉靖間の建陽刊本を手に入れて底本としていたことは間違いない。してみれば、そのルートが余象斗を通じてであり、唐氏・周氏の金陵での新版刊行は、最初からそれを余象斗が建陽で覆刻することまで織り込み済みの企画であつた、というのも十分に考えられることだからだ。但し、第二章で見た通り〔唐廷仁〕世徳堂〔萬曆二十年〕壬辰序刊本『新刻出像官板大字西遊記』二十卷（浅野世本）を熊大木と同族の宏遠堂主人熊体忠（字爾報、号雲濱）<sup>20</sup>が覆刻している（故宮世本・日光世本・天理世本）<sup>21</sup>から、唐氏は建陽余氏の書坊だけではなく、磯部氏の推定された通り建陽熊氏の書坊とも繋がりがあつたと見るべきだろう。よって、唐氏・周氏に嘉靖間建陽刊本を提供したのは余象斗だとは限らない。この問題は後考に俟ちたい。

なお、大塚氏が前掲論文で三台館と唐氏または周氏の共同刊行の可能性がある事例としてもう一つ挙げていた『新刻皇明開運輯略武功名世英烈傳』にも、前述の内閣文庫蔵本とは全葉が異版の刊本が

別に存在することを確認済みで（中国国家図書館蔵）、これも余氏三台館が金陵刊本を覆刻した事例と見られる<sup>22</sup>。

### 三、建陽の余氏の書坊と金陵の唐氏・周氏の書坊

#### （1）余彰徳萃慶堂による周曰校刊本の重刊の事例

金陵の唐氏・周氏の書坊と繋がりを持っていた建陽余氏の書坊は、文台余象斗の双峰堂三台館ばかりではない。余象斗の堂兄で萃慶堂を創業した泗泉余彰徳も、唐氏や周氏の刊本を多数重刊している。特に対峰周曰校万巻楼仁寿堂刊本を重刊した事例が多いので、まずはその具体例を示そう。

#### A・『新鐫雲林神穀』四巻

周氏万巻楼は創業当初から医書を数多く刊行しており、中でも特に同郷かつ姻戚の儒医龔廷賢（字子才、号雲林）が書き下ろした医書を主力商品としていた（本論第五章参照）。

『新鐫雲林神穀』四巻もその一つで、半葉十二行二十字の慶長八年古活字本（宮内庁書陵部蔵）と半葉十一行二十一字の元和六年二條梅寿重刊古活字本（国会図書館等蔵）が、いずれも左右五欄に分けた封面の中央に「萬曆庚寅歲（十八年）秋月吉旦周對峰刊行」、大尾の長方木記に「萬曆辛卯歲（十九年）書／林周對峰鐫行」、各巻巻頭第五行には「金陵書林周曰校刊行」とある。かつ「崑萬曆辛卯春

月上吉歸安鹿門山人茅坤譔」と末尾に署名する「雲林神穀序」に、同書は龔廷賢の著作をその姻戚の周曰校が刊行するものだとのが記されている<sup>23</sup>。よって、これらの古活字本の底本は万曆十九年対峰周曰校刊本であり、それがこの書物の初刻本だと考えられる。

万曆十九年刊本と著録される伝本を複数調査したが、どれも古活字本に見える大尾の長方木記を備えておらず、封面があっても周曰校のものではないので、いずれも重刊本と思われる<sup>24</sup>。そのうち内閣文庫蔵本は、半葉十行二十字で、左右五欄に分けた封面の中央に「萬曆辛卯歲（十九年）冬月吉旦余泗泉刊行」とあるので<sup>25</sup>、泗泉余彰徳による重刊本と知れる。大尾の長方木記は原欠で、茅坤序も無いが（原欠かこの伝本のみの欠かは不明）、卷二・三の卷頭第五行には古活字本二種と同様に「金陵書林周曰校刊行」とある。卷一・四の卷頭には刊行者名を記さず、余彰徳の名は封面にしか見えない。

#### B. 『新刊官板批評正百將傳』十卷続四卷

内閣文庫が同名の三本を蔵し、紅葉山文庫旧蔵本が「明萬曆周曰校刊」、林羅山旧蔵本が「明萬曆二十一年余氏萃慶堂刊」、高野山釈迦文院旧蔵本が「明刊」と著録されている。

紅葉山旧蔵本は半葉九行二十字で封面欠、「萬曆己丑歲（十七年）孟秋吉旦東浙古虞趙光裕書於英武堂」と結ぶ「批評正續百將傳序」に周氏の書坊が刊行するとの旨が見え<sup>26</sup>、各卷卷頭第四行に正伝の

十卷は「金陵 周曰校 應賢甫刊」、続伝の四卷も「金陵 周曰校 刊行」とあるので、この本だけを見た場合、確かに周曰校刊本と著録することになる。

林羅山旧蔵本はこれと同版だが、一部の版木を彫り直した後修本である。序や各卷卷頭の記載は紅葉山旧蔵本と同じだが、左右三欄に分かつ封面があり、中央に「萬曆癸巳歲（二十一年）孟夏書林萃慶堂余泗泉梓」とある。

すると、周曰校刊本の版木を泗泉余彰徳萃慶堂が手に入れ、一部の版木（封面を含む）を差し替えて印行した後修本が林羅山旧蔵本なのであろうか。どうもそうではないようだ。同名同卷数の中国国家図書館蔵本は、半葉十行二十字で、封面は欠く。行款が異なる以上当然ながら、右の二者とは全葉が異版である。しかし、やはり「批評正續百將傳序」に「坊間周氏請刊木、以廣其傳」と見え（序末の半葉が欠葉で署名と年次は確認不能）、各卷卷頭第四行も同じく「金陵 周曰校 應賢甫刊」である。そして、多くの葉の版心下部に「仁壽堂刊」とあるが、これは前述の内閣文庫蔵の二本には一切無い。

仁壽堂は周氏万巻楼グループの書坊で、対峰周曰校も仁壽堂主人として活動している（本論第五章参照）。となれば、この『新刊官板批評正百將傳』正統は、周曰校と仁壽堂の名が両方見える中国国家

図書館蔵本こそが本物の周曰校刊本で、仁寿堂の名が見えず余泗泉萃慶堂の封面を持つ林羅山旧蔵本や、その同版先刷りの紅葉山旧蔵本は、泗泉余彰徳が周曰校刊本を翻刻したものと見るべきであろう。字様は似せてあり、もし行款が同じであれば本論での定義において覆刻と称し得る範囲である<sup>27</sup>。

また、国会図書館にも林羅山旧蔵本と近い時期に刷られた同版本があり、こちらは正傳の封面は欠くが、続伝には左右三欄の中央に「萬曆甲午歲（二十二年）孟夏書林萃慶堂余泗泉梓」とある封面が残る。林羅山旧蔵本の正傳の封面と一年の相違があるが、まず正伝から翻刻作業を始め、それが終わってから続伝の翻刻に取り掛かったであろう。

なお、内閣文庫の三本のうち、残る高野山釈迦文院旧蔵本は、ごく一部の葉は林羅山旧蔵本と同版だが、大多数の葉はそれを行款は変えずに崇禎康熙間の字様で翻刻した通修本で、巻頭第四行を正伝は「潭陽 余元長 仁公甫訂」、続伝は「潭陽 余元長 訂刊」に改める。これと同版のアメリカ国会図書館蔵本が白紙紅印で左右三欄の封面を存し、中央下方に「萃慶堂余仁公重訂梓」と刻し、同上方に「煙□主人識」と結ぶ五行の告白を記した木戳を捺す。余元長は余彰徳の曾孫で、明末清初の萃慶堂主人である（注7拙稿参照）<sup>28</sup>。

#### C・『昭代典則』二十八卷

まず広島市立中央図書館浅野文庫蔵本を見ると、封面上層に「皇明十二朝正史」と横書きし、下層を三欄に分けて「萬曆庚子歲（二十八年）／昭代典則／萬卷樓刊行」（中央大字）と記し、各巻巻頭第四行が「金陵周曰校刊行」で、「崑萬曆庚子歲中秋日（官職略）豫章祝世祿撰」と結ぶ「昭代典則序」が、刊行者である同郷の周氏から入づてに序を請われた旨を記す<sup>29</sup>。以上より、これは周曰校万巻樓万曆二十八年刊本と判断される。同版本が多く残り、台湾中央研究院傅斯年圖書館（二本、一本は封面鈔補）、台湾国家圖書館（二本、共に封面欠）、哈佛燕京圖書館（封面・序・卷一欠）等が所蔵する。

一方、それらと同名同巻数同版式の東京大学東洋文化研究所蔵本の封面は、上層と下層中央の文字は変わらないが、下層右は「萬曆□丑歲」、同左は「萃慶堂刊行」となっている。そして、序や本文を浅野文庫蔵本と比べると、行款も字様も序文や各巻巻頭の記載も全て同じではあるが、仔細に見ると全葉異版である。封面下層右の「□」は横画三本の左端だけを残して破損しているが、「丑」と組み合わさる十干で左端がこの形になる文字は「辛」しかあり得ない。よって、東文研蔵本は、周曰校万巻樓万曆二十八年刊本を、萃慶堂が翌万曆二十九年辛丑に覆刻したものと結論付けられる<sup>30</sup>。

万曆三十年代には余彰徳とその長男余応良（字真如、号継泉、別名道綱）とが共に萃慶堂名義で刻書活動を行っているが（注7拙稿

参照)、この覆刻本は万曆二十九年刊であるから、刊行者は余彰徳であつた可能性の方が高いだろう。

## (2) 余彰徳萃慶堂と金陵の周氏・唐氏の書坊の提携関係

A・B・Cそれぞれの萃慶堂重刊本は、いずれも各巻巻頭には周曰校の名だけを記し、萃慶堂や泗泉余彰徳の名は封面にしか見えない。余彰徳の名前の出し方は前章で見た余象斗の覆唐氏・周氏刊本よりも一層控えめなので、これらもやはり周曰校万巻楼の同意を得た上での翻刻と見るべきであろう。

萃慶堂重刊本の刊行時期は、Cが周曰校刊本の翌年、Aに至つては同年の冬(大尾の木記や序と比べた場合。封面同士で比べると翌年)という驚くべき早さであり、周氏と余氏の連絡の緊密さが窺える。なお、Cは刊年が分かる周曰校刊本の中で最も刊行が遅いものであり、周曰校は万曆三十年には引退または死去していたようなので(本論第五章参照)、周曰校はその刻書活動の最後まで萃慶堂との提携を保っていた可能性が高い。

また、余彰徳萃慶堂は唐氏世徳堂刊本も重刊している。上層に「京陵原板」と横書きし下層に「壬寅歲(萬曆三十年)夏月吉旦/耳譚/書林余泗泉梓行」(中央大字)と記す封面を持ち、各巻巻頭第四行に「建邑書坊萃慶堂梓」とあつて、大尾に「萬曆壬寅夏月/余氏泗泉梓行」の連牌木記を持つ『新刻耳談』十五卷(内閣文庫蔵「二本」)

で、いずれも後印本だが、刊行者名に改刻の痕跡は見られない。同書の底本は、左右三欄に分かつ封面の左右に大字で「重刻北京/原板耳譚」、中央に「金陵世徳堂梓」とあり、各巻巻頭第四行を「金陵書坊世徳堂梓」とする(「万曆」刊本『新刻耳談』(十五卷存)五卷(台灣故宮博物院蔵)である。世徳堂刊本は半葉十二行二十四字だが、萃慶堂重刊本は半葉十一行二十四字で、Bの例と同様に、半葉当たりの行数を減らして同じ字様で翻刻している。

この余彰徳による『新刻耳談』の翻刻本は、これまでの例と違つて底本の刊行者たる世徳堂の名はどこにも記されないが、「京陵原板」であることは示している。周氏万巻楼と唐氏世徳堂の密接な提携関係や、先に見た余氏萃慶堂と周氏万巻楼の緊密な連絡ぶりを踏まえば、これも海賊版ではなく、筋を通した上での翻刻であつた可能性が高からう。世徳堂の名を残していないのは、世徳堂は万巻楼にやや先立つて万曆二十五、二十七年の間に創業者の唐廷仁から次世代の唐晟・唐景兄弟ら日冠一字名輩の共同経営へと代替わりしているので(本論第三章参照)、まだ若く経験も浅かつた唐氏の第二世代の経営者たちと、既に三十年近く刻書業に携わつていた余彰徳との力関係が影響してのことであつたかもしれない。

## (3) 次世代以降の周氏書坊と余氏書坊の関係

また、貞享二年洛陽青堂淺野久兵衛重惟和刻本『新鐫註釋画像皇

明千家詩』四卷（内閣文庫、京都大学人文科学研究所等蔵）は、各卷巻頭第三行に「南雍周文卿以忠父 校梓」と見え、底本のものを覆刻したと思しき左右三欄の封面中央の下寄りに「萃慶堂刊」とある。対して、哈佛燕京図書館蔵の「萬曆」刊本は、同名同巻数同版式で、各巻巻頭の署名も和刻本と同じだが、封面には「光霽堂刊」とあるという（筆者未見）<sup>31</sup>。

周文卿（字以忠、号蓋印）は万巻楼の創業者の一人と目される周庭槐の子で、万暦後期に光霽堂主人として金陵で刻書を行っている（本論第五章参照）。してみれば、和刻本の底本は萃慶堂覆周文卿光霽堂刊本であったと見て良からう。周曰校の後に万巻楼名義で刻書を行った周文煥（号玉印）と周文燿（字汝映、号如泉）、及びその二人の同母兄で万巻楼に代わって周氏の書坊のメインブランドとなる大業堂名義での刻書を始めた周文煒（字赤之、号如山）らは、周文卿の異母弟である（本論第五章参照）。つまり、余氏萃慶堂との提携は周曰校一代限りではなく、次世代にも引き継がれていたのだ。

また、中国国家図書館普通古籍館所蔵の『新刻全像皇明諸司廉明奇判公案』四卷（欠卷二・四）は、巻一卷頭第二・三行に「三台山人 仰止 余象斗 集／金陵書坊 周氏 大業堂 梓」とある。刊年不詳だが、本文中の十数半葉おきに半葉全面形式の挿画が配されていて、画風は万暦半ば過ぎから清初にかけて大流行した徽派のも

のである。この本は翻刻本で、底本は各巻首第二・三行に「三台山人 仰止 余象斗 集／建邑書林 余氏 建泉堂 刊」（巻三のみ「建泉」が「雙峰」とあり、大尾に「萬曆戊戌歲（二十六年）仲夏／月余氏文台堂梓」の蓮牌木記を持つ上図下文の『新刊皇明諸司廉明奇判公案』四卷（中国国家図書館蔵））と思しい。この例から、大業堂も余象斗との提携を引き継いでいたことが窺い知れる。また、余氏が一方的に金陵刊本を重刊していた訳ではなく、金陵側が余氏刊本を翻刻する場合もあったことも分かる<sup>32</sup>。

このように、金谿周氏が金陵で営む万巻楼グループと、建陽余氏が地元で営む萃慶堂や双峰堂三台館の間には、周氏と唐氏の間と同様に、累代の提携関係が存在していたのである。

してみれば、本章「はじめに」で挙げた如泉周（文燿）万巻楼崇禎元年序刊本『圖像本草蒙筌』の増補を喬山堂主人劉大易の子が手掛けた事例も、余氏と劉氏の姻戚関係と、余氏と周氏の累代の提携とが背景にあつてのことだったのではないだろうか。そうであれば、少なくとも崇禎初期までは、金陵の周氏と建陽の余氏との間に、一定の交流が続いていたことになる<sup>33</sup>。

#### 四、『万病回春』に見る各地の書坊間の関係

##### （1）『万病回春』の周氏刊本と余氏刊本

『新刊萬病回春』八卷は龔廷賢の医書の中でも最も広く流通したもので、内閣文庫が周文憲・周文煥・周文燿万暦三十年重刊本を所蔵するが、未発見の初刻本は周曰校万暦十六年序刊本と推定され、他に周曰校自身による万暦二十五年重刊本（これも未発見）もあったらしい（本論第五章参照）。

周氏が初版から僅か十五年の間に二度も重刊している同書は、余氏萃慶堂によっても繰り返し刊印されている。

まず、左右五欄に分かつ封面の中央に「萬曆己丑歲（十七年）夏月書林萃慶堂余泗泉刊」、各巻巻頭第七行に「書林萃慶堂 余泗泉梓行」と記す『重刊増補萬病回春』八卷（研医会図書館蔵）がある<sup>34</sup>。

書名に「増補」とあり、各巻巻頭第六行には「書林 後學 余一貫増補」という周氏刊本には見えない署名が加わっているが、実際に各巻末に若干の処方箋が増補されている。それ以外は、正字を略字に変える等の省略や単純な誤字も間々見られるものの、半葉十三行二十四字の周氏の万暦三十年重刊本を、ほぼそのまま半葉十二行二十四字に置き換えたような形となっている<sup>35</sup>。恐らく対峰周曰校の万暦十六年初刻本も半葉十三行二十四字で、周氏の万暦三十年重刊本はそれを覆刻し、泗泉余彰徳萃慶堂の万暦十七年刊本は行款を変えて翻刻したのであろう。後者の序跋は茅坤序と舒化序を周氏刊本から引き継ぎ、どちらも年次を万暦己丑夏に改めているが、茅坤序

の対峰周君に序を請われたとの記述はそのまま残る。底本が周氏刊本であることを示す箇所はそこだけだが、一応痕跡が残されているとは言えよう。

更に、この泗泉余彰徳万暦十七年刊本の後修本が早稲田大学図書館に所蔵されている。封面と序は全て欠き、目録の第一・二葉や巻一の第十九・二十葉など一部の葉は万暦十七年刊本と同じ版本によるが、大半の葉はそれを覆刻した補版葉に差し替えられており<sup>36</sup>、大尾に「萬曆乙巳（三十三年）夏月／余氏泗泉梓行」の蓮牌木記がある。各巻巻頭の署名は余彰徳万暦十七年刊本と変わっていない。

そして、萃慶堂は同書を更に翻刻している。天頭に「五刻新板」と横書きした左右五欄の封面中央に「崇禎甲戌歲（七年）春月書林萃慶堂余繼泉刊」とあり、大尾に上梓外に「五刻」と横書きする「崇禎甲戌歲春月新刻／萬病回春萃慶堂刊行」との長方木記を持つ『五刻増補萬病回春』八卷（東北大学附属図書館蔵）である。序跋は万暦十七年萃慶堂刊本のそれと同年次の二つのみで、本文の字様と行款は変更されている。奇数巻の各巻頭第六・七行に「書林後學余一貫増補／閩萃慶堂余昌宗校梓」とあり（余昌宗は繼泉余応良の子。注7拙稿参照）、偶数巻は巻首題のみで第二行から本文に入るが、巻八のみ首題を「四刻増補萬病回春」とする<sup>37</sup>。「五刻」と言うからには、前述の万暦十七年余彰徳刊本が初刻、万暦三十三年余彰徳後

修本が二刻に当たり、三刻と四刻も通修本か重刊本かは不明ながら、萃慶堂が印行していたのであろう。

## (2) 蘇州葉氏や杭州汪氏と周氏の関係

一方、清初の康熙七年には、周文煒の長男で崇禎十三年の進士の周亮工が、周氏大業堂名義で『万病回春』の重刊本を刊行した(原本未発見)。本論第五章に全文を引いたその重刊本の周亮工序は、近年虎林(杭州)で「善本」との角書を加えて内容も改竄した海賊版が出たことを述べ、口を極めてそれを罵った上で、粗悪本を駆逐すべく自ら校訂して原本に忠実な決定版を重刊することにしたとの経緯を記している。

本論第五章で述べた通り、周亮工が罵っている杭州刊本は、汪淇輯寄還読齋康熙元年序刊本『増定便攷萬病回春善本』八卷(内閣文庫蔵「欠巻七」と見て間違いない。周氏の万暦三十年重刊本と比べると、汪淇刊本は処方箋に示す原料の排列順を変えていることが多く、分量に関して「二」を「一」に誤るなどの重大な誤刻も確かに間々認められる。

しかし、周氏の万暦三十年重刊本にも誤刻と思われる箇所はあるし、前述の余氏による翻刻本各種ともなれば、誤刻の程度は汪淇刊本と大差なさそうだ。また、同書には閩門(蘇州)の葉龍溪が「明末」に刊行した重刊本もあるのだが(本論第五章参照)、周亮工は杭

州刊本だけを非難しており、建陽の余氏刊本や蘇州の葉氏刊本には何一つ言及していない。

本論第五章では、独り汪淇刊本だけが非難されている点に疑義を呈して考察を保留しておいた。しかし、本章での考察を踏まえれば、少なくとも余氏の翻刻本は、元々周氏に話を通した正規の翻刻本だったと考えて良からう。周亮工もそのことを知っており、それ故に非難しなかったのではなからうか<sup>38</sup>。

対して、汪淇刊本が周氏に無断で出版された海賊版だったことは疑いない。本論第五章で既述の通り、内閣文庫蔵の汪淇刊本は、王宇泰先生重訂と偽っていたのが露見した後に龔廷賢の作であることを明記して刷り続けたと周亮工が言う後修本に当たる。周亮工はそれに怒って前述の序文をものして自ら重刊本を刊行した訳であるが、汪淇はそれでも懲りなかったようだ。というのも、汪淇刊本には書名を再度改竄した通修本があるのだ(京都府立総合資料館蔵)。この通修本は、各巻首題を『増定便攷醫學善本』に改刻し、版心上方の「萬病回春善本」を全葉から削り取っている。但し、この書名改竄は不徹底で、汪淇「萬病回春例言」はそのままの題名で冒頭に置かれているし、殆どの巻の尾題にも「萬病回春善本」の文字が残っている。汪淇刊本が専ら利益を追求する海賊版であったことは、このなんとも姑息な小手先の処理によって販売を続けていた点からも窺

えよう。

一方、周亮工が非難していないということは、蘇州の葉龍溪刊本も正規の翻刻だったのかもしれない。蘇州の葉氏と周氏万卷樓の繋がりを明示する例は残念ながら発見出来ないが、周氏刊本の版木が姓が不明な蘇州の書坊の手に渡った事例は確認出来る。即ち、周日校・周宗孔・周庭槐万卷樓万曆五年序刊本『新刊古今醫鑑』八卷（内閣文庫、京都府立総合資料館蔵）に、「萬曆戊子年（十六年）姑／蘇會文堂刊行」の蓮牌木記を加え、それ以外は周氏の名を元通り残した後修本（内閣文庫蔵）があるのだ（本論第五章の注21参照）。

また、世徳堂主人唐廷仁と葉氏の書坊の繋がりを示す事例も存在する。それは、各巻巻頭第四行に「繡谷 後學 唐廷仁 校梓」とあるが、大尾に「萬曆丙戌（十四年）葉任宇翻刻」との単行刊記を持つ、『新鐫國朝名儒文選百家評林』十二卷（内閣文庫、中国国家図書館蔵<sup>39</sup>）である。葉氏の書坊は建陽と金陵にも知られ、葉任宇（他に活動が確認出来ない）が蘇州の葉氏だという確証は無い。しかし、金陵刊本の正規の重刊本を異姓書坊が同じ金陵で出すとは考えにくいし、唐氏刊本の翻刻・覆刻は建陽では余氏や熊氏が手掛けているので、葉任宇は蘇州葉氏の可能性が高いのではないだろうか。

屋上屋を重ねる憶測ではあるが、こうした状況証拠から、金陵の周氏・唐氏の書坊は、万曆前期から蘇州の葉氏の書坊とも繋がりを

持っていた可能性があると言えまいか。

## 小結

本章では、従来あまり知られていなかった前近代の中国における異姓書坊間の横の繋がりが、明代万曆前期から、金陵の唐氏と周氏の間、建陽の余氏と楊氏の間、建陽の余氏と劉氏の間、そして金陵の唐氏・周氏と建陽の余氏の間などに、時には二世代以上に渡って認められることを示した。章回小説・通俗医書・日用類書・挙業書といった各種の通俗書が明末清初に様々な地域で陸續と刊行された背景は、これまで専ら各地の書坊間の競争の結果と理解されて来たが、今後は各地の書坊間の提携という側面にも目を向ける必要があるだろう。

百回本『西遊記』について言えば、熊雲濱覆世徳堂刊本は、確かに本論第二章で見た磯部彰氏の推定の通り、唐氏世徳堂の正式の認可を受けて建陽で覆刻されたものだったと考えて良さそうだ。そして、それは百回本『西遊記』に限った話ではなく、世徳堂や万卷樓が万曆二十年前後に刊行した章回小説としては、むしろ当たり前の扱われ方だったのであろう。

一方で、海賊版を巡る諍いも確かにあったことも、清代康熙初年の周亮工大業堂と汪淇蝸寄還読齋の『万病回春』を巡ってのいたち



ごっこによって確認した。江戸期の日本に見られる異姓書坊間の広域的な連携や対立が、明末清初の中国にも存在していたことを、ごく限られた一端とはいえ示せたであろう。

ところで、本論第五章・第六章でも触れた通り、この汪淇とは、かの百回本『西遊記』の汪象旭箋評本の評者である汪象旭その人に他ならない。江流和尚説話の増補を行い、虞集のものと称する序を附して百回本『西遊記』が長春真人の撰であることを喧伝した汪象旭は、その汪氏蝸寄刊本『鐫像古本西遊證道書』を刊行したのちようど同じ時期に、周氏刊本『万病回春』を盗版して争議を呼んでいたのである。本論第三章・第五章で述べて来た通り大業堂は世徳堂と密接な関係を持っていた万巻楼の後身であるし、これより前にか後にかは不明だが、李卓吾評乙本を印行した書坊でもある。ともすれば、汪氏蝸寄刊本『鐫像古本西遊證道書』も、『増定便攷萬病回春善本』と同じように、版權者に無断で勝手に翻刻したものだったのではないだろうか。周亮工の怒りは、『万病回春』だけではなく、他の本——例えば、周氏万巻楼の提携書坊だった唐氏世徳堂が元々刊行したものである百回本『西遊記』——も汪淇（汪象旭）に盗版されていると認識していたからなのかもしれない。

また、周亮工によれば『増定便攷萬病回春善本』の前段階では汪淇は撰者を偽っていたというし、件の周亮工序における抗議を受け

た後には書名を変えてまで印刷を続けていたから、汪氏蝸寄刊本の序跋の信憑性は、全般的に眉に唾を付けて見た方が良いのではないか。汪氏蝸寄がこんな書坊だとなれば、『鐫像古本西遊證道書』の虞集序の真偽については、やはり偽作である可能性が極めて高からう。

しかし、『鐫像古本西遊證道書』については、汪象旭が新たな評注を附したり、本文を全体的に節略したり、従前の百回本の本文には見えなかった江流和尚故事を増補したりしているのは事実なので、単なる機械的な盗版という訳ではなかった。つまるところ、百回本『西遊記』の展開史上で最も大きな変化であった第九回の江流和尚故事への改変は、商売敵の関係にある書坊間の鞘当ての産物だったと言えるのではあるまいか。

<sup>1</sup> 方彦寿『建陽刻書史』（中国社会科学出版社、二〇〇三）三一九～三二五頁参照。なお、本論第五章でも述べたが、劉孔教は方彦寿『福建刻書論稿』（花木蘭文化出版社、二〇一一）四五頁所掲の系図によれば大易の次男であり、進士及第の事実を確認出来ない。王氏前掲書の「兄孔教」は、恐らく「兄孔敬」の誤字であろう。

<sup>2</sup> 文台は余象斗の号。本論第五章の注13と注70参照。

<sup>3</sup> 本論第三章参照。

<sup>4</sup> 本論第五章参照。

<sup>5</sup> 拙稿「金陵唐氏世徳堂刊本講史小説三種と上元王氏の双面連式挿画について」（瀧本弘之編『中国古典文学挿画集成（九）・小説集（三）』所収、遊子館、二〇一四）参照。

<sup>6</sup> 拙稿「唐氏世徳堂と周曰校万巻楼仁寿堂の章回小説刊本の覆刻及び後印の事例について」『中国古典小説研究』第十六号、二〇一一、及び注5拙稿参照。

<sup>7</sup> 萃慶堂とその歴代主人については、拙稿「萃慶堂の歴代主人について——建陽余氏刻書活動研究(1)——」附『書林余氏重修宗譜』『書坊文興公派下世系』第37世までの翻刻と校訂(『中国古典小説研究』第十九号、二〇一六)参照。

<sup>8</sup> 余成章の告白に「本堂斯講、則出台晉駱先生家傳子弟者」とあるので(傍点筆者)、或いは版木の製作段階から永慶堂も関わっての共同刊行だったのかもしれない。なお、同書は各巻巻頭第四行に「座師太學士 洪陽 張 位發刊」、同第七行に「潭城書林雙松 劉朝瑄領刺」とあるので、形式的には刊行者は張位(号洪陽、隆慶二年の進士)で、劉朝瑄(号双松)が実際の刊刻作業を請け負ったという体裁を採っている。

<sup>9</sup> 方彦寿前掲論文、同氏注1書二種、及び Lucille Chia “Printing for Profit — The Commercial Publishers of Jianyang, Fujian(11th-17th Centuries)”(Harvard University Asia Center, 2002) 八三頁参照。方氏作の系図と Chia 氏作の系図には小異があるが、どちらが正しいかは不明。

<sup>10</sup> 注7拙稿参照。なお、余象斗の妻の姓は不明。

<sup>11</sup> 原文「惟愛日堂者、其板雖無差訛、士子觀之樂、然今板已朦、不便其覽矣」。

<sup>12</sup> 余象斗の次弟象箕と三弟象聖の妻はいずれも鄭氏だが(注7拙稿参照)、宗文堂とは左程近縁ではなかったものか? なお、愛日堂が喬山堂や安正堂といかなる血縁関係にあったかは未詳。

<sup>13</sup> 楊氏を妻とする余氏の刻書家は所見の族譜には見えないが、この族譜は清末に復元されたもので、漏れも多い(注7拙稿参照)。また、余氏の女性が楊氏に嫁いだ可能性もある。

<sup>14</sup> 万巻楼仁寿堂刊本は、注6拙稿で紹介した序目と巻一のみの残本(中国国家図書館蔵)の他に、附録の二巻(巻九・十)と跋の一部のみの残本も見つかった(台湾中央研究院傅斯年圖書館蔵。各巻頭第三行は「書林 周氏 萬巻樓 刊行」となっている)。

<sup>15</sup> この残本は注6拙稿発表時や本章初出時には未発見だったものである。

<sup>16</sup> 磯部彰『西遊記』資料の研究(東北大学出版会、二〇〇七)二〇九頁。

<sup>17</sup> 原文「餘重刻金陵等板及諸書雜傳／無関于卒業者不敢贅録」。

<sup>18</sup> なお、大塚氏は「白話小説の版画をめぐる二、三のことども」『集刊東洋学』第一一一号、二〇一四年)八四〇八七頁で、注5・6各拙稿や本論第三章・第五章の各初出論文を踏まえて、唐氏・周氏の章回小説刊本を余象斗が相次いで覆刻したことから、余氏三台館がその後また同じ作品群の上図下文本を刊行したことの背景を再考されている。大塚氏は江戸時代の三都の間に見られる類版を巡る争いを念頭に、①余象斗が無断で覆刻を行ったので唐氏・周氏と争いが起こった、②当初は何らかの了解の上で覆刻が行われたが、ライセンス契約による出版が契約更改をめぐってこじれた、等の可能性を提示している。いずれも覆刻本の出版からほどなく唐氏・周氏と余氏との間に軋轢が生じ、そのために覆刻本の販売を続けられなくなった余象斗が上図下文本を刊行した、との認識に基づく仮説である。しかし、本章第三節で見える通り、万曆半ば以降も余氏は唐氏・周氏刊本を多数重刊しているし、逆に余象斗刊本を周氏が翻刻した例もあるので、そのような軋轢が生じていたとは考え難い。よって、①②はどちらも当たらず、余氏が上図下文本を改めて刊行した理由は別に求めるべきである。これについてはいずれ別稿で考察したい。

<sup>19</sup> 胡応麟『経籍会通』巻四に「余所見當今刻本、蘇常爲上、金陵

次之、杭又次之。(中略) 閩本最下」とある。

<sup>20</sup> 但し、Chia 注9書九四〇九五頁所掲系図によれば、熊体忠と熊大木との共通祖先は、体忠の十二世代前まで遡る。

<sup>21</sup> 第二章で詳しく見た通り、これも熊雲濱の名は卷十六にしか見えず、他の巻頭の刊工者名は底本通りである。しかも、後修本である天理図書館蔵本だけに残る封面も、「金陵唐氏世德堂校梓」と唐氏の書坊名のみを記している。

<sup>22</sup> 拙稿『大宋中興演義』と『皇明英烈伝』の王少淮双面連式挿画本をめぐって(瀧本弘之編『中国古典文学挿画集成(十)・小説集(四)』所収、遊子館、二〇一七刊行予定) 参照。

<sup>23</sup> 原文「其姻對峯周君、圖付剗刷」。

<sup>24</sup> 台湾国家図書館蔵本は九行二十字、各巻巻頭の記載は後述の内閣文庫蔵本と全く同じで、全葉の版心下部に「積慶堂」とあり、封面中央の空欄に陽刻長方「怡怡堂」紅印を捺す。字様から見て明末清初の翻刻と思しい。プリンストン大学東亜図書館蔵本はその同版先刷りで、封面を欠く。また、十行二十字で封面欠の上海図書館蔵本は、卷二・三の巻頭第五行を「閩汀書林居仁齋刊行」とするが、プリンストン大学東亜図書館が別に所蔵する黄紙墨印の封面に「同治丁卯(六年)重鐫」「蘊經堂發兌」「經濟堂藏板」と見える本と同版で、清版である。

<sup>25</sup> 他の四欄の文字は古活字本二種に同じ。

<sup>26</sup> 原文「坊間周氏請刊木、以廣其傳」。

<sup>27</sup> 半葉当たりの行数を減らしての翻刻は、単純な覆刻に比べて作業手順も版木や紙の枚数も増えてコスト高になりそうだが、一般に万暦期の建陽刊本は同時期の金陵刊本に比べて横幅が狭い傾向があるので(匡郭横の内寸が、建陽は一一・〇cm弱、金陵は一二・五cm前後のことが多い)、もしかすると建陽で手に入れやすい版木や紙の規格に合わせる処理だった(その方が却ってコストを抑えられた)のかも知れない。

<sup>28</sup> なお、半葉十行二十五字で、巻頭第四行の刊行者名を卷六のみ「金陵 周曰校 應賢甫刊」とするが、他の巻では「晋江(隔七格)甫刊」「書林(隔七格)甫刊」「書林(以下空白)」等と刊行者名を削去し、封面中央欄や大尾の蓮牌木記も文字を全て削り取っている『新刊京板批評百將傳』十卷(蓬左文庫蔵)という、萃慶堂翻周曰校刊本とは別の翻周曰校刊本も存在する。晋江とあるので、泉州の書坊が関与した翻刻であろうか。他にも各巻巻頭には刊行者名を記さず、凡例末に「天啓四年甲子孟冬／武林趙秀堂刻發行」の長方木記を置く半葉十行二十三字の『新刻批評百將傳』正集十巻続集四巻附録一卷(東京大学総合図書館、蓬左文庫蔵)があるが、いずれも序の「坊間周氏請刊木、以廣其傳」はそのままである。

<sup>29</sup> 原文「吾郷周氏、見而悅焉、屬之剗刷。介武車駕・朱職方問序不佞」。

<sup>30</sup> 京都大学人文科学研究所と上海図書館が同版本を蔵するが、いずれも封面を欠くため、周曰校万暦二十八年序刊本と著録されてしまっている。また、コロンビア大学図書館蔵本(原本未見)の書影を同館OPACで巻一首の半葉のみ閲覧出来るが、周曰校刊本とも萃慶堂覆周曰校刊本とも異版である。どちらかの後修本か、或いは全く別の第二の覆刻本か、待考。

<sup>31</sup> 『美國哈佛大學哈佛燕京圖書館藏中文善本書志』(広西師範大学出版社、二〇一一年)二一九頁の著録による。

<sup>32</sup> 余氏が金陵刊本を重刊する際は、行数こそ時に減らせど、字様や挿画は大半が底本に倣う。一方、唐氏・周氏が建陽刊本を重刊する場合、この例も熊大木の講史小説の翻嘉靖間楊氏清江堂刊本も、行款・字様・挿画を一新している。注19の認識に関わろう。<sup>33</sup> なお、本論第三章で見た通り、唐氏世德堂は活動自体が天啓までしか確認出来ない。

<sup>34</sup> 卷一首題を「□刊増補萬病回春」（傍点筆者）に誤る。

<sup>35</sup> なお、萃慶堂万曆十七年刊本の卷八末には「龔氏家訓」が附されるが、周氏の万曆三十年重刊本や、万曆二十五年周曰校重刊本を底本とする和刻本では、これは目録には載るが本文には見えない。周曰校万曆十六年刊本にはあったものか。

<sup>36</sup> 補版の卷一首題は「重刊増補萬病回春」になっている。

<sup>37</sup> 更に、東邦大学額田文庫医学メディアセンターが同書の後修本を蔵する。封面や長方木記は東北大蔵本と同版で文字もそのままだが、舒化序を欠き、補版の卷一首題が「三刻増補萬病回春」、同じく補版の卷八首題が「五刻増補萬病回春」にそれぞれ変わっている。

<sup>38</sup> 周亮工は順治年間に福建按察使・福建右布政使・福建左布政使を歴任して省内各地に滞在しているので、彼がそもそも建陽刊本の存在自体を知らなかったという可能性は低かろう。

<sup>39</sup> 両者は同版だが、中国国家図書館蔵本は葉任宇の刊記がある葉を欠いており、唐廷仁刊本と著録されてしまっている。

## 終章

### はじめに

本論文では、百回本『西遊記』がいつどのようなようにして成立し（成立）、それがどのように広まっていった多様な版本が出版されるに至ったのか（展開）、という問題の解明を目指して、序章から第七章までに渡って、幾つかの系統に分類されている百回本『西遊記』の諸版本の特徴や相互の関係を把握する作業、百回本『西遊記』の出版に携わった書坊の活動状況を把握する作業、そして陳元之「刊西遊記序」と盛於斯『休庵影語』『西遊記誤』条という百回本成立史を語った二つの資料に名が見える人物について解明する作業を進めて来た。この終章では、それらの成果を総合して、陳元之「刊西遊記序」と盛於斯『休庵影語』『西遊記誤』条に対する新しい解釈を提示し、万暦二十年序刊の金陵唐氏世德堂初刻本こそが初めて編まれた百回本『西遊記』に他ならなかったことを示し、世德堂本の本文が先行テキストに対してどのような改変を加えて成立したものなのかを解き明かした上で、百回本成立後の展開についても各章の成果を踏まえて簡単にまとめておきたい。

### 一、百回本の成立をめぐる

#### （1）陳元之序

序章や第三章で触れた通り、熊雲瀟覆世德堂刊本によって見ることが出来る陳元之序には、世德堂初刻本の刊行の経緯が述べられている。この陳元之という人物は、金陵唐氏世德堂が刊行した多くの小説・戯曲の校訂者・評釈者として名を残す陳氏尺蠖齋と同一人物である可能性が極めて高く（第三章参照）、世德堂の事情に通じていたものと思われ、その内容には一定の信頼を置いて良いであろう。

その前提の上で、序章に全文を引いた熊雲瀟覆世德堂刊本の台湾故宮博物院蔵本（故宮世本）の陳元之序から、世德堂初刻本の刊行に関する要点を再確認してみよう。

まず、陳元之は「西遊一書、不知其何人所為。或曰出今天潢何侯王之國、或曰出八公之徒、或曰出王自製」と述べて、『西遊記』の作者の名は当時知られておらず、さる藩王の王府で作られた（出今天潢何侯王之國）とか、王侯の食客の作品である（出八公之徒）とか、藩王自身の手になる（出王自製）とかいった噂があったことを伝えている。しかし、陳元之はそれがどの王府であったのかには全く触

れていなかった。そのため、序章でも述べた通り、『(天啓) 淮安府志』三十二卷(台湾故宮博物院蔵)の卷十九「藝文志一」の「吳承恩・射陽集四冊 卷、春秋列傳序、西遊記」という著録<sup>1</sup>を根拠に章回小説『西遊記』の作者を吳承恩と看做す立場から吳承恩が荊王府の紀善を務めたことと関連があるとする説<sup>2</sup>、周弘祖『古今書刻』に著録される魯府刊本『西遊記』と登州府刊本『西遊記』とに結び付ける説<sup>3</sup>、後述の盛於斯『休庵影語』「西遊記誤」条に引く周如山の証言に見える「周邸」と結び付ける説<sup>4</sup>などが入り乱れており、百回本『西遊記』の成立史を検討する上での大きな争点となっている。

陳元之序でもう一つ注目すべき箇所は、世徳堂初刻本そのものの刊行の経緯を伝える、「唐光祿既購是書、奇之、益俾好事者為之訂校、秩其卷目梓之、凡二十卷數十萬言有餘、而充叙於余」というくだりである。この唐光祿なる人物が何者であるかについては従来様々な説があつたが、本論第三章において、これは金陵唐氏世徳堂の主人であつた唐廷仁(字国寿、号龍泉)であることを論証した。してみれば、このくだりは、世徳堂主人たる唐廷仁が世徳堂刊本の祖本を購入して、「訂校」した上で「卷目を帙」して刊行したという意味に他ならないことが分かる。もちろん「訂校」や「卷目を帙」すという作業を実際に唐廷仁自身が行つたとは限らず、お抱えの校訂者

にやらせたということかもしれないが、ともかく唐廷仁の意向と指示でそれが行われたことは確かであろう。問題は、その「訂校」や「卷目を帙」すというのが、果たしてどの程度の規模の作業だったのかである。

## (2) 『休庵影語』

ここでいったん陳元之序を離れ、盛於斯『休庵影語』「西遊記誤」条に目を向けてみよう。百回本の成立史に関わるのは

余幼時讀『西遊記』、至「清風嶺唐僧遇怪 木棉菴三藏談詩」、心識爲其後人之偽筆、遂抹殺之。

後十餘年、會周如山云、「此様抄本、初出自周邸、及授梓時訂書、以其數不滿百、遂増入一回、先生疑者、得毋是乎？」

というくだりであつた。序章でも触れたが、これは

・盛於斯は幼い頃に『西遊記』を読んだ際、「木棉菴談詩」の話(現存のどの百回本にもこれと同じ回目は見えないが、第六十四回の木仙菴で植物の精たちに囲まれて詩を詠む話に当たると思われる。なお、異体字の相違を除けば、どの百回本も第六十四回の回目は「荊棘嶺悟能努力 木仙菴三藏談詩」となっている)を後人の偽作と受け止めた。

・後に周如山から『西遊記』はもともと「周邸」から抄本が出たのですが、それを刊行するに当たって校訂した際に、全百

回に達していなかったのです、(全百回とするために)一回分の話を増やしたということです。あなたが偽作だと疑っている話こそが、まさにその追加された回なのではないでしょうか？」と聞いた。

ということであろう。盛於斯の疑問と周如山の証言は分けて考えるべきで、第六十四回を偽作だと断じているのは盛於斯だけであり、周如山は「周邸」から出た抄本を元に刊本を出す際に校訂が施され、全百回にするために一回が補われたということを述べた上で、「あなたの言う第六十四回こそがそれなのではないか」との推測を示しているに過ぎない。つまり、周如山はどの回が刊行時に増やされた一回なのかまでは知らなかったということになる。

第五章で明らかにしたように、周如山は確かに金陵の書坊周氏大業堂の主人周文煒(字赤之、号如山、如山は時に字としても用いた)であり、かつ盛於斯の親友たる周亮工の父でもあった。周氏大業堂は周氏万卷楼の実質的な後継書坊であったが、万卷楼は「萬曆十六年歲次戊子孟秋／之吉／(一行空白)／周藩海陽王崑湖勤煇撰」の跋を持つ『新刊萬病回春』八巻を万曆十六年・二十五年・三十年と三度も刊行しているなど、周藩と繋がりのある書坊であった。その上、如山周文煒の妻は周藩の分家たる胙城王の娘であり、彼自身も周藩のある河南祥符で出生し、籍も生涯そこに置いていた。

となれば、その周如山が「周邸」、つまり周王府(周藩)から『西遊記』の抄本が出たと証言しているのは、決して根も葉もない妄言などではなく、何らかの根拠があつての発言に違いない。周藩から抄本が出たという周如山の証言には、大いに信を置くべきではあるまいか。

更に、本論第三章・第五章・第七章で見たように、周氏万卷楼は唐氏世徳堂と同郷の江西金谿出身者が営む書坊であり、両者の間には万曆前期から一貫して密接な業務提携があつたと認められる。この二つの書坊が同じ王少淮という画工を起用した双面連式挿画を持つ章回小説刊本を互いに重複することなく陸続と刊行し続けていたのは、まさに世徳堂刊本『西遊記』が出版された万曆二十年前後のことであつた。また、書坊名として使うのは如山周文煒に始まつたと思しき大業堂も、その時期に世徳堂が刊行した『唐書志伝題評』や『東西両晋志伝題評』の版木を後に継承し、後印本を印行しているという縁がある。

つまり、周如山は世徳堂刊本『西遊記』の刊行事情を耳にし得る立場だったと考えて良いのではないだろうか。ということは、周如山の言う「及授梓時訂書」というのは、まさに陳元之が言う「益俾好事者為之訂校、秩其卷目梓之、凡二十卷數十萬言有」と同じことを指しているのではあるまいか<sup>5)</sup>。

そう考えてみると、陳元之序がどこかの王府の関与をほのめかしているのと、周如山が「此様抄本、初出自周邸」と断言しているのも、やはり同じことを指しているのではあるまいか。陳元之はどこの藩府かまでは知らなかったか、或いは知っていてもぼかしていたけれども、世徳堂の提携書坊の主人にして周藩の姻戚でもある周如山は、息子の親友に自分の知る真相を伝えたのではないか。但し、第五章で確認した生年によれば、如山周文煒は万暦二十年にはまだ十一歳であった。よって、世徳堂刊本『西遊記』の刊行当時はまだ本格的に家業に携わっていた訳では無く、それ故にどの回が増補されたかのような詳細までは知らなかったのであろう。『休庵影語』に引かれる証言も、或いは周氏の第一世代なり唐氏なりの誰かから後から聞いたことであつたかもしれない。

なお、前述の通り、陳元之序のほのめかすどこかの王府については、『古今書刻』に「西遊記」の刊行元として見える魯王府や、呉承恩が紀善として仕えた荊王府と看做す説も唱えられている。

しかし、魯王府について言えば、丘処機が登州の人であることを挙げて『長春真人西遊記』のことと見る呉聖昔氏の見解<sup>6</sup>が最も説得力があるように感じられる。また、第五章で見た通り周氏万卷楼は魯王府の官刻本たる『新刊魯府禁方』四巻の刊行作業を万暦二十二年に請け負っていたから、如山周文煒は魯王府の出版事情にもある

程度は通じていたのではないだろうか。もし世徳堂刊本の基づいた王府本が魯王府から出たものなのであれば、それを世徳堂の筋からも魯王府の筋からも知り得る立場の周如山は、「周邸」とは言わずに「魯邸」と言うはずであろう。

また、荊王府説については、そもそも呉承恩作者説自体が根拠薄弱なものであつた。そして、それを否定する側からの有力な根拠となつているのが、黄虞稷（一六二九～一六九一）『千頃堂書目』に「呉承恩西遊記」が史部地理類の書として著録されているという事実である。呉承恩作者説を堅持する立場からは、これを黄虞稷の誤りだとか勘違いだとかして処理するよりあるまい。しかし、第五章で見たように、黄虞稷は周如山の息子周亮工の門人で、しかも亮工の息子在浚と共著で『徵刻唐宋秘本書目』一巻を編んでいる人物であり、『千頃堂書目』には周如山の父の蔵書目録である「周廷槐『大業堂書目』二巻」まで著録されていた。これほどまでに周氏大業堂一族と関わりの深い黄虞稷であるから、大業堂が李卓吾評乙本を印行したこともある<sup>7</sup>章回小説『西遊記』を、よりにもよって史部地理類の書と勘違いするようなことはまずあり得ないのではあるまいか。

以上のように、尺蠖齋陳元之と如山周文煒はいずれも世徳堂刊本の刊行の経緯を伝えており、両者の言わんとするところは同じであったと見るべきである。となれば、陳元之が言う世徳堂刊本刊行時



の「益俾好事者為之訂校、秩其卷目梓之、凡二十卷數十萬言有」という作業は、周如山の言う「以其數不滿百、遂増入一回」に当たる作業だったということになる<sup>8</sup>。そうすると、必然的に世徳堂刊本こそが初めての百回本だったということにならざるを得ない。

### (3) 聖僧歴難簿と「遂増入一回」

これが確かだとすると、世徳堂刊本で増補された一回とは、一体どの回なのであろうか。盛於斯が疑っている第六十四回は、太田辰夫氏が指摘しているように比較的来歴の古い話なので、世徳堂刊本刊行時の増補とは考えにくい<sup>9</sup>。

そこで、今一度華陽洞天主人校本型の聖僧歴難簿によつてこの問題を考えてみよう。世徳堂本そのものにおいて話柄の再編が行われたとなれば、華本型歴難簿は周藩から出た抄本（或いはその更なる祖本）の話柄の配列順序を伝えるものということになろう。そして、世徳堂本において新たに一回分が増補されたのであれば、その増補された回に対応する難は、華本型歴難簿には見えないはずだ。つまり、華本型聖難簿に対応する難が無い回こそ、世徳堂刊本において増補された一回だということになる。

そこで、第一章表2を仔細に見ると、第十三回の長安出立から第九十八回の天竺到着までの唐三藏西天取經の道のりを描く中でちょうど一回だけ、華本型はおろか李本型でも陳本型でも、要するにあ

らゆる版本の聖僧歴難簿において、難が一つも配当されていない回があることが分かる。それは第三十六回「心猿正處諸緣伏 劈破傍門見月明」（回目は故宮世本文による）だ<sup>10</sup>。

この第三十六回は三藏一行がやたらに詩を詠みながら勅賜宝林寺に到着し、寺の僧たちをちよつとおどかした上で投宿することになり、一行が庭で月を見上げてまた詩のやりとりをして終わる、という内容的にも異色の回で、この回の出来事は確かに八十一難に入るには無理があろう。中野美代子氏は、六の二乗数を掲げるこの回で「何の難も起こらない」こと自体に意味があると解釈している<sup>11</sup>。

そして、この宝林寺では、次の第三十七回の冒頭で三藏の夢に国王の霊が出るという事件が起こる。分則本の陽至和編本や朱鼎臣編本では、百回本の冗長な詩のやりとりなどなく、寺に着くや直ちにその事件が起こるし、序章に挙げた百回本以前の物語を伝えると考えられている諸資料の中で、この第三十六回の話を持つものは一つしかない。その一つとは『玄奘三藏渡天由来縁起』なのだが、この資料は序章でも触れた通り清代の百回本を底本とする邦訳を明らかに参考に行っていることを田中智行氏が指摘しているものだから<sup>12</sup>、世徳堂本以前にこの話があったことの証左とするには足りない。

以上の考察により、万曆二十年序刊の金陵唐氏世徳堂刊本『新刻出像官板大字西遊記』<sup>13</sup>二十卷百回とは、周邸から出た抄本に校訂

を加え、話柄の配列順序を改めつつ、第三十六回を新たに作り出して加えることで成立した、史上初の百回本『西遊記』であったということを、百回本成立史についての本論における結論としたい。

## 二、百回本の展開をめぐる

そうすると、百回本『西遊記』とは、万暦二十年になって初めて現れたものということになる。だが、本論第二章や第四章で見た通り、それからものの二十年と経たないうちに熊雲瀆覆世徳堂刊本・『唐僧西遊記』・楊閩齋刊本・李卓吾評初刻本（後修が施される前の丙本）等の百回本が陸續と刊行されており、万暦四十年頃には李卓吾評本が錢希言によって『水滸伝』と併称されるほどになっていた。百回本『西遊記』は成立から極めて迅速に普及していたのである。

これほどまでに迅速な展開がなされた背景には、従来の章回小説の版本研究において常に言われて来た各地の書坊間の競争の結果という一面も当然あったであろうが、そればかりではなく、本論第七章で確認した、金陵唐氏世徳堂や周氏万巻楼が持っていた他地域（特に建陽）の異姓書坊との広域的連携が大きく作用したのではないだろうか。初の百回本『西遊記』であった金陵唐氏世徳堂刊本は、その建陽の書坊との連携を背景として、刊行からほどなく熊雲瀆によ

り覆刻されたと考えられる。金陵と建陽という当時の商業出版の中心地で殆ど間を置かずに刊行されたからこそ、生まれたばかりの百回本がたちまちのうちに多数の読者を獲得し、評判が評判を呼んで短期間で多くの版本が生み出されることに繋がったのであろう。

もちろん、第七章の小結で汪象旭箋評本の誕生の背景を確認した通り、百回本『西遊記』の展開には対立関係にあった書坊間の競争が大きく作用した事例も確かめられる。このような各地の書坊間の連携と対立とがどちらもあつてこそ、万暦二十年になってようやく成立した百回本『西遊記』は、嘉靖年間には既に現行の形がほぼ固まっていたと考えられる『三国演義』や『水滸伝』と並ぶ四大奇書の一角を占めるまでの急展開を遂げることが出来たのであろう。

また、本論においては扱いを保留した分則本も、清末まで陽至和編本の刊行が続いていたことが分かっている。つまり、万暦年間に百回本が成立し、それが急速に普及したからといって、それだけが章回小説『西遊記』の全てとなった訳ではない。分則本を百回本に対してどのように位置づけるべきかについては、今後の課題として別途考察したいと考えている。

<sup>1</sup> 『（康熙）淮安府志』十三卷首一卷（国立公文書館内閣文庫、東洋文庫等蔵）の巻十二「藝文志」にも同文が見える。一方、黄虞

稷『千頃堂書目』卷八「地理類下」にも「吳承恩『西遊記』」が著録されており、吳承恩作者否定説の立場からは重視されている。

2 曹炳建『《西遊記》世德堂本研究二題』(『東南大学学報(哲学社会科学版)』第十一卷第二期、二〇〇九)等。

3 太田辰夫「魯府本西遊記と『西遊記』」(同氏『西遊記の研究』(研文出版、一九八四)第十三章)、黄永年「前言」(『黄周星定本西遊証道書 西遊記』所収、中華書局、一九九三)等。

4 曹炳建『《西遊記》版本源流考』(人民出版社、二〇一二)第三章第三節(同氏注2論文とは若干見解が変わった点がある)等。

5 吳聖昔「論《西遊記》魯本和周本信息的異同性」(『上海大学学报(社会科学版)』第七卷第二期)が、筆者の結論と同様に、陳元之序と周如山の証言は同じ時のことを指していると理解すべきだとする。但し、吳氏は周如山が大業堂主人であった可能性までは視野に入れていても、大業堂と世德堂が提携関係にあったことにはまでは念頭に置かれていないため、両者が指しているのが世德堂刊本の刊行時の事情であった「可能性もある」としているのみで、まさに世德堂刊本の刊行時の出来事そのものを伝えていると見る筆者の結論とは、意味合いが些か異なる。

6 吳聖昔『《西遊記》府本揭秘——兼談登州府本之真相』(『明清小說研究』二〇〇〇年第二期)。

7 大業堂が李卓吾評乙本の版木を所有していた時期は不明だが、大業堂の封面を持つパリ李本は、現存の乙本の中でも刷りが早い方であったから(本論第四章参照)、『千頃堂書目』が編まれる頃には、既に大業堂は李卓吾乙本を印行したことがあったのではないだろうか。また、仮にパリ李本が『千頃堂書目』成立後であったとしても、周如山の証言や『休庵影語』の成立が『千頃堂書目』に先行することは疑い無い。黄虞稷と周亮工・周在浚の関わりの深さを思えば、黄虞稷が何らかの形で周如山のこの話を知っていた可能性も十分にある。よって、黄虞稷が章回小説『西遊記』

を史部地理類の書と勘違いするような人物だったとは考えにくいのではあるまいか。

8 江流和尚故事を韻文で略述するのみとする処理がこの際に行われたもののなか、それとも唐廷仁が入手した抄本の時点で既になされていたのか大きな問題として残るが、分則本との関係を視野に入れて考察する必要がある。本論文では検討を保留する。

9 太田注3書二一八頁。

10 なお、華本型歴難簿では他に第十七回にも難が配当されていないと解釈することも可能だが、第一章でも確認した通り、第十七回は第十六回で登場した黒大王と戦って決着を着ける話が繰り広げられるというもので、内容的に欠かせない回である。従って、こちらが世德堂本における増補回だとは到底考えられない。

11 中野美代子『西遊記——トリック・ワールド探訪——』(岩波新書、二〇〇〇)七九〜八〇頁。

12 田中智行「龍谷大学図書館蔵『玄奘三蔵渡天由来縁起』翻刻(一) 附解題」(『徳島大学国語国文学』第二十二号、二〇〇九)参照。

13 巻首題の「官板」という角書も、或いは周王府から出た抄本によるという意味合いで理解することが可能かもしれない。但し、「官板」という角書は、周氏万巻楼刊本や建陽余氏刊本を含む同時期の坊刻本にしばしば見られるもので(特に周日校刊本に多い)、「官板」の意味するところはそうした書物の実態と併せて考察する必要がある。今後の課題としたい。また、唐廷仁が周王府由来の抄本を購入するに当たっては、既に『万病回春』の万曆十六年初刻本において周藩と繋がりを持っていた周氏万巻楼が一役買っていた可能性も考えられる。